留々女遺跡
（ど ど め い せき）

2003年3月

長野県飯田市教育委員会

留々女遺跡
（ど ど め い せき）

2003年3月

長野県飯田市教育委員会

巻頭写真

天竜川氾濫原及び留々女遺跡全景

序

飯田市川路地区は飯田市の南部にあり、伊那盆地の最南端に位置します。現在ＪＲ飯田線や国道151号が通過しており、伊那谷の南玄関口ともいえる場所です。諏訪湖に源を発し伊那谷を南下してきた天竜川は、川路地区の下流、名勝天竜峡の峡谷によって急激に川幅を狭められます。そのため、天竜川はたびたび氾濫を起こし、川路地区はその度に大きな被害を受けてきました。川路地区の歴史は、まさに天竜川との闘いの歴史ともいえます。今でも「三六災」と言い伝えられる昭和36年の被害は特に大きく、当時の川路地区の中心街がほとんど水没し、住民は高台への移住を余儀なくされました。

今次発掘調査の原因となりました治水対策事業は、被害の大きかった昭和36年の災害で水没した低地に盛土をし、再び洪水の被害を受けることがないよう工事を行うものです。天竜川の治水対策は、幾たびも洪水に見舞われて田畑や財産を失ったり、あるいは生命の危機に見舞われたりした当地域住民にとっては大きな課題でした。しかしながら、川路地区の低地には埋蔵文化財包蔵地が幾つも分布しており、盛土区域における埋蔵文化財をどのように扱うべきか大きな問題となりました。そこで、関係する機関と協議を続け、県教育委員会・文化庁の指導を受け、この度の発掘調査を実施することとなりました。

今日まで伝わる多くの文化財は、先人たちの絶え間ない歩みを私たちに伝える様々な証であり、私たちの大切な共有財産です。そのため、私たちはこれら文化財をできる限り、そのままの姿で後世に伝える責任を負っています。現在、飯田市では治水対策事業のみならず、道路の新設・改良または大型店舗進出などといった埋蔵文化財に重大な影響を及ぼす開発も少なくありません。しかし、誰もが安全に、より便利に暮らしていく権利を有しており、私たちはその対応にいつも苦慮しているところです。幸い今日、地域による社会教育事業の取り組みの中で発掘調査により得られた資料が公開される機会も増え、埋蔵文化財に対する関心や理解が深まってきております。発掘調査による記録保存という方法は文化財保護の立場からは最善の策といえませんが、私たちはその資料を広く市民の皆さんに還元する中で、更なる文化財保護の取り組みを進めて参りたいと思います。

最後になりましたが、平成９年度より始まりました治水対策事業に先立つ川路地区の発掘調査も５年を経過し、本年が最終年度となりました。その間、文化財保護の本旨をご理解いただき、多大なご協力を賜りました関係機関ならびに地元住民の皆様に深く感謝申し上げ、刊行の辞とさせていただきます。

平成15年 3 月

長野県飯田市教育委員会

教育長　冨　田　恭　啓

例　　言

1．本書は治水対策事業（川路地区）に先立ち実施された、飯田市川路地区所在の埋蔵文化財包蔵地留々女遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は飯田市治水対策部からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。

3．本遺跡の調査は平成10・11年度に現地作業を、12・13・14年度に整理作業を行った。

4．発掘作業・整理作業の図面類及び遺物の注記には、遺跡を示す略号としてＤＤＭを、遺構を示す略号として次のものを用いた。
住居址・方形竪穴―ＳＢ　　建物址―ＳＴ　　土坑―ＳＫ

5．留々女遺跡における発掘調査位置は国土基本図の区画ＭＣ－04（社団法人日本測量協会　1969「国土基本図図式　同適用規定」参照）に位置し、グリット設定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュに基づいて、株式会社ジャステックに委託した。

6．本書は時代ごとＳＢ・ＳＴ・ＳＫの順に記載した。また、遺構図・遺物図・写真は文末に一括編集した。

7．土層観察については小山正忠・竹原秀男1996『新版標準土色帳』を用いている。

8．石器実測図の表現については、「Ｔ」は刃潰し加工・「Ｋ」は敲打・「Ｓ」は研磨を示す。

9．本書に関わる図面の整理は担当調査員・整理作業員の協力により伊藤尚志が行った。

10．現場での遺構写真は調査担当者が行い、遺物写真は西大寺フォト　杉本和樹氏に、遺跡の空中写真は株式会社ジャステックにそれぞれ委託した。

11．本書は調査員協議のうえ伊藤が執筆し、小林正春が総括した。

12．本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

目　　次

本文目次

巻頭写真

序

例　言

目　次

第Ⅰ章　経　過

第1節　調査に至るまでの経過 …… 1

第2節　調査の経過 …… 2

第3節　調査組織 …… 3

第Ⅱ章　遺跡の環境

第1節　自然環境 …… 5

第2節　歴史的環境 …… 8

第3節　基本層序 …… 9

第Ⅲ章　調査結果

第1節　調査の概要 …… 10

（1）　調査区の設定 …… 10

（2）　調査範囲 …… 10

（3）　遺　構 …… 10

（4）　遺　物 …… 10

第2節　古墳時代の遺構 …… 15

（1）　住居址 …… 15

（2）　土　坑 …… 25

第3節　奈良・平安時代の遺構 …… 27

（1）　住居址 …… 27

（2）　土　坑 …… 30

第4節　中世の遺構 …… 31

（1）　方形竪穴 …… 31

（3）　掘立柱建物址柱 …… 31

（4）　土　坑 …… 33

第5節　時期不明の遺構 …… 33

（1）　住居址 …… 33

（2）　土　坑 …… 37

第Ⅳ章　まとめ

挿図目次

挿図1　留々女遺跡位置図 …… 6

挿図2　周辺遺跡図 …… 7

挿図3　基本層序 …… 9

挿図4　基準メッシュ調査位置 …… 11

挿図5　調査位置図 …… 12

挿図6　留々女遺跡全体図 …… 13

図版目次

図版1　ＳＢ01 …… 41

図版2　ＳＢ02・ＳＢ03 …… 42

図版3　ＳＢ04・ＳＢ05 …… 43

図版4　ＳＢ06 …… 44

図版5　ＳＢ07 …… 45

図版6　ＳＢ09・ＳＢ10 …… 46

図版7　ＳＢ11・ＳＢ12 …… 47

図版8　ＳＢ13・ＳＢ14・ＳＢ15・ＳＢ16 …… 48

図版9　ＳＢ17・ＳＢ18 …… 49

図版10　ＳＢ19・ＳＢ20・ＳＢ21 …… 50

図版11　ＳＢ22・ＳＢ24 …… 51

図版12　ＳＢ23 …… 52

図版13　ＳＢ25・ＳＢ26 …… 53

図版14　ＳＢ27・ＳＢ28・ＳＢ29 …… 54

図版15　ＳＢ30・ＳＢ31・ＳＢ32・ＳＢ33 …… 55

図版16　ＳＢ34・ＳＢ35 …… 56

図版17　ＳＢ36・ＳＢ37・ＳＢ38・ＳＢ39 …… 57

図版18　ＳＢ40・ＳＢ41・ＳＢ42 …… 58

図版19　ＳＢ43・ＳＢ44 …… 59

図版20　ＳＢ45・ＳＢ46・ＳＢ47・ＳＢ48 …… 60

図版21　ＳＢ49・ＳＢ50 …… 61

図版22　ＳＢ51 …… 62

図版23　ＳＢ52・ＳＢ53・ＳＢ54 …… 63

図版24　ＳＢ55・ＳＢ56・ＳＢ57・ＳＢ58 …… 64

図版25　ＳＢ59・ＳＴ01 …… 65
図版26　ＳＴ02・ＳＴ03 …… 66
図版27　ＳＴ04・ＳＴ05・ＳＴ06・ＳＴ07 …… 67
図版28　ＳＴ08・ＳＴ09・ＳＫ01～ＳＫ04 …… 68
図版29　ＳＫ05～ＳＫ12 …… 69
図版30　ＳＫ13～ＳＫ21 …… 70
図版31　ＳＫ22～ＳＫ27 …… 71
図版32　周辺ピット図１ …… 72
図版33　周辺ピット割付図 …… 73
図版34　周辺ピット図２ …… 75
図版35　周辺ピット図３ …… 76
図版36　周辺ピット図４ …… 77
図版37　周辺ピット図５ …… 78
図版38　周辺ピット図６ …… 79
図版39　周辺ピット図７ …… 80
図版40　周辺ピット図８ …… 81
図版41　周辺ピット図９ …… 82
図版42　周辺ピット図10 …… 83
図版43　ＳＢ01出土遺物 …… 84
図版44　ＳＢ01・ＳＢ02出土遺物 …… 85
図版45　ＳＢ03・ＳＢ04・ＳＢ05出土遺物 …… 86
図版46　ＳＢ05・ＳＢ06出土遺物 …… 87
図版47　ＳＢ06・ＳＢ07出土遺物 …… 88
図版48　ＳＢ08・ＳＢ10出土遺物 …… 89
図版49　ＳＢ10出土遺物 …… 90
図版50　ＳＢ10・ＳＢ11出土遺物 …… 91
図版51　ＳＢ11・ＳＢ12出土遺物 …… 92
図版52　ＳＢ12・ＳＢ13出土遺物 …… 93
図版53　ＳＢ16～ＳＢ22出土遺物 …… 94
図版54　ＳＢ22出土遺物 …… 95
図版55　ＳＢ22・ＳＢ23出土遺物 …… 96
図版56　ＳＢ23出土遺物 …… 97
図版57　ＳＢ23出土遺物 …… 98
図版58　ＳＢ23出土遺物 …… 99
図版59　ＳＢ23出土遺物 …… 100
図版60　ＳＢ24・ＳＢ25・ＳＢ26出土遺物 …… 101
図版61　ＳＢ26～ＳＢ29出土遺物 …… 102
図版62　ＳＢ30・ＳＢ31・ＳＢ34出土遺物 …… 103
図版63　ＳＢ35～ＳＢ41出土遺物 …… 104
図版64　ＳＢ42出土遺物 …… 105
図版65　ＳＢ42・ＳＢ43・ＳＢ44出土遺物 …… 106
図版66　ＳＢ44・ＳＢ46出土遺物 …… 107
図版67　ＳＢ46出土遺物 …… 108
図版68　ＳＢ46・ＳＢ49・ＳＢ50出土遺物 …… 109
図版69　ＳＢ50・ＳＢ51出土遺物 …… 110
図版70　ＳＢ51・ＳＢ52出土遺物 …… 111
図版71　ＳＢ52・ＳＢ53・ＳＢ54出土遺物 …… 112
図版72　ＳＢ54・ＳＢ55出土遺物 …… 113
図版73　ＳＢ56～ＳＢ58出土遺物 …… 114
図版74　ＳＢ58・ＳＢ59出土遺物 …… 115
図版75　ＳＫ01～ＳＫ05出土遺物 …… 116
図版76　ＳＫ05～ＳＫ15出土遺物 …… 117
図版77　ＳＫ26・ＳＫ27遺構外出土遺物 …… 118
図版78　遺構外出土遺物 …… 119
図版79　ＳＢ01～ＳＢ18出土石器 …… 120
図版80　ＳＢ23～ＳＢ44出土石器 …… 121
図版81　ＳＢ48～ＳＢ58・遺構外出土石器 …… 122
図版82　遺構外出土石器 …… 123
図版83　遺構外出土石器 …… 124
図版84　遺構外出土石器 …… 125
図版85　石鏃・剥片石器類・その他石製品 …… 126
図版86　鉄製品 …… 127

写真図版目次

図版１　留々女遺跡全景 …… 131
図版２　ＳＢ01・ＳＢ02 …… 132
図版３　ＳＢ03・ＳＢ04 …… 133
図版４　ＳＢ05・ＳＢ06 …… 134
図版５　ＳＢ07・ＳＢ10 …… 135
図版６　ＳＢ11・ＳＢ12・ＳＢ13 …… 136
図版７　ＳＢ14・ＳＢ16・ＳＢ17 …… 137
図版８　ＳＢ22 …… 138
図版９　ＳＢ23 …… 139
図版10　ＳＢ24・ＳＢ25・ＳＢ26 …… 140

図版11　ＳＢ27・ＳＢ28・ＳＢ29 …… 141
図版12　ＳＢ31・ＳＢ33・ＳＢ36 …… 142
図版13　ＳＢ39・ＳＢ41・ＳＢ42 …… 143
図版14　ＳＢ44 …… 144
図版15　ＳＢ46・ＳＢ47・ＳＢ50 …… 145
図版16　ＳＢ51 …… 146
図版17　ＳＢ52・ＳＢ53 …… 147
図版18　ＳＢ54・ＳＢ55・ＳＢ58 …… 148
図版19　ＳＴ01・ＳＴ02・ＳＴ03 …… 149
図版20　ＳＫ01～ＳＫ11 …… 150
図版21　ＳＫ14～ＳＫ27 …… 151
図版22　調査区スナップ …… 152
図版23　調査区スナップ …… 153
図版24　作業風景 …… 154
図版25　留々女遺跡現況 …… 155
図版26　ＳＢ23出土遺物 …… 156
図版27　ＳＢ23出土遺物 …… 157
図版28　ＳＢ01・ＳＢ10出土遺物 …… 158
図版29　ＳＢ22・ＳＢ42出土遺物 …… 159
図版30　ＳＢ44・ＳＢ54出土遺物 …… 160
図版31　ＳＢ55・ＳＢ58出土遺物 …… 161
図版32　ＳＢ02・03・04・06出土遺物 …… 162
図版33　ＳＢ07～13出土遺物 …… 163
図版34　ＳＢ17～27出土遺物 …… 164
図版35　ＳＢ28～35出土遺物 …… 165
図版36　ＳＢ37～49出土遺物 …… 166
図版37　ＳＢ50～54出土遺物 …… 167
図版38　ＳＢ57・59　ＳＫ01～08出土遺物 …… 168
図版39　ＳＫ14～27　遺構外出土遺物 …… 169
図版40　小型器台・紡錘車・土製玉 …… 170
図版41　石　器 …… 171
図版42　石製模造品・薄玉・鉄製品 …… 172

第Ⅰ章　経　　過

第1節　調査に至るまでの経過

飯田市川路地区は伊那盆地の最南端、天竜川右岸に位置し、下流には名勝「天竜峡」が所在する。伊那盆地中央を南流してきた天竜川は、この天竜峡の渓谷で急激に川幅を狭め、時として上流の川路・竜丘・龍江地区の天竜川氾濫原や低位段丘面に土砂を大量に含む洪水を引き起こし、甚大な被害をもたらしてきた。特に、昭和36年の災害（三六災）は、川路地区の中心部が水没する大災害となった。こうした点から、当地区では天竜川の治水対策が大きな課題となっていた。

そこで、川路・竜丘・龍江地区において昭和36年の水害の被害状況を勘案して「天竜川治水対策事業」を行うこととなった。この事業は昭和36年の災害時に浸水した高さまで盛り土をおこなうものであるが、盛り土対象地や盛り土採取地には多くの埋蔵文化財包蔵地が存在する。このため、昭和61年10月16日にその保護について長野県教育委員会文化課・飯田市治水対策部・飯田市教育委員会の三者による最初の保護協議が実施された。以後数回にわたる協議を経て、平成４年度に龍江地区において事業地内の遺跡の状況を把握するための試掘調査が行われた。

その後、平成５年３月９日に行われた保護協議時の指導及び同年５月６日付け文化庁の指導を受け、平成５年５月19日付け５教文第７-21号による県教委からの回答で、同事業に関わる埋蔵文化財の保護について下記の原則が示された。

○原則として試掘調査により把握された遺構確認面及び遺物包含層から２ｍを越える盛り土の範囲は発掘調査を行い、記録保存を図る。

○２ｍ以下の盛り土の範囲についてはトレンチによる確認調査を実施し、遺跡の状況を把握し、地下遺構の保存を講ずると共に、その判断された内容を記録保存し、後世に伝える。

これに基づき、まず天竜川左岸の龍江地区から試掘調査及び発掘調査が行われることとなり、平成５年12月15日から平成７年９月11日まで龍江城遺跡・龍江阿高遺跡・田中下遺跡・細新遺跡の４遺跡で発掘調査が実施された。

天竜川右岸の竜丘・川路地区については、平成７年10月に飯田市治水対策部と飯田市教育委員会の間で協議が行われ、平成８年１月から島・金山・久保田・留々女・殿村・富岡（井戸下）の６遺跡で試掘調査が実施された。このうち金山・富岡遺跡では中・近世の水田址の存在が明らかにされた。試掘調査の結果に基づき、平成９年４月１日付けで富岡遺跡（井戸下遺跡）・幾島城址（月の木古墳群・月の木遺跡）・久保田遺跡の発掘調査について飯田市治水対策部との間で協定を締結し、同年６月より井戸下遺跡、９月より久保田遺跡、12月より月の木古墳群・月の木遺跡の本調査に着手した。なお、留々女遺跡・殿村遺跡については他遺跡の調査の進捗状況を見ながら、平成10年度以降に本調査に着手することとした。

第2節　調査の経過

平成10年4月1日付けで飯田市治水対策部との間に協定を締結し、同年6月に当遺跡調査範囲の状況を確認するために試掘調査を行った。この試掘により相沢川から留々女沢川までの広範囲を占めると考えられた留々女遺跡は中央に小さな谷が入り、それにより遺跡が分断されていることが確認された。この結果に基づき、谷の北側の包蔵地をその場所の小字名を用いて「辻前遺跡」として、当「留々女遺跡」から分離させて調査を実施することとした。

平成10年9月28日に当遺跡の表土剥ぎに着手した。耕土を調査予定範囲外へ搬出した後、検出面まで重機により掘り下げた。その後（株）ジャステックに委託して基準点測量を行い、11月16日より作業員を入れて調査を開始した。まず検出作業を行い、確認された遺構については掘り下げ作業・写真撮影・実測を随時行った。平成11年1月13日に平成10年度分の発掘調査を終了し、調査した遺構にシートをかけるなどの養生をして、現場を一旦撤収した。

平成11年4月1日付けで、飯田市治水対策部と改めて平成11年度発掘調査の協定を結び、5月10日に調査を再開した。前年度の続きの作業を行いながら、5月20日には平成10年度調査区の南に重機を入れ、表土剥ぎを始め、5月28日から同所に作業員を入れて調査に取り掛かった。さらに6月28日からは、平成10年度調査で排土置き場になっていた部分の表土を重機により剥いだところ、拡張した調査区全体に中世の柱穴が多数分布し、その多くが古墳時代から平安時代の住居址と重複していた。そのため、この柱穴を先行して掘り上げることとし、8月5日に掘り上げた柱穴の測量を委託して実施した。その後、竪穴住居址や土坑などの調査を行い、9月3日にこれまでに調査した範囲の空中写真撮影を（株）ジャステックに委託して実施した。9月6日から重機で調査の終了した場所へ未調査部分の排土及び表土を移動し、9月10日に基準点測量を委託実施して残り部分の調査に取りかかった。平成11年12月22日に遺構写真撮影・遺構実測も含めて、全ての現場作業を終了した。

本報告書作成のため、整理作業を平成12年度から平成14年度にかけて実施した。平成12年度は主に出土遺物の水洗作業・現場で作成した図面類の整理・調査範囲の全体図作成・遺構図の第二次原図作成を行った。平成13年度はジェットマーカーを使用して遺物への注記作業・土器の接合及び復元作業・遺構の第二次原図作成及び遺構図のトレースを行った。平成14年度は前年度に引き続き土器接合及び復元作業を行い、遺物の実測及び遺物実測図のトレースを行った。その後、完成した遺構図及び遺物図の版組みを行った。また、原稿執筆は平成13・14年度に各整理作業と併行して行った。

なお、出土した鉄製品については平成13年度に（株）吉田生物研究所に委託をして保存処理を行った。また、遺物の写真撮影は西大寺フォト　杉本和樹氏に委託をして平成14年度に行った。

第3節　調査組織

1）調 査 団

調査主体者　飯田市教育委員会　教育長　小林恭之助（平成11年12月24日まで）
冨田　恭啓（平成11年12月25日から）

調査担当者　伊藤　尚志　佐々木嘉和
西山　克己（長野県埋蔵文化財センター派遣職員　平成10年度）
藤原　直人（長野県埋蔵文化財センター派遣職員　平成11・12年度）

調　査　員　坂井　勇雄　澁谷恵美子　下平　博行　羽生　俊郎　馬場　保之　福澤　好晃
山下　誠一　吉川　金利　吉川　豊

発掘作業員　市瀬　長年　伊藤　和恵　伊東　裕子　尾曽ちぶき　北川　彰　北沢　一嘉
北澤　兼男　吉地　武虎　榊山　修三　塩沢　澄子　清水　恒子　林　悟史
藤本　宏　森山　昭吉　吉澤佐紀子

整理作業員　新井　幸子　新井ゆり子　池田　幸子　片山　祐介　金井　照子　金子　裕子
唐沢古千代　木下　早苗　木下　玲子　小池千津子　小平　晴美　小平まなみ
小林　千枝　小林　理恵　斉藤　徳子　佐々木真奈美　佐々木美千枝　佐藤知代子
関島真由美　高木　純子　高橋　恭子　竹本　常子　橘　千賀子　田中　薫
筒井千恵子　中沢　温子　田中　恵　中平けい子　中村地香子　林　勢紀子
林　ひとみ　原　昭子　樋本　宣子　平栗　陽子　福沢　育子　福沢　幸子
牧内喜久子　牧内　八代　松下　博子　松島　直美　松本　恭子　三浦　厚子
南井　規子　宮内真理子　森藤美知子　森山　律子　吉川　悦子　吉川紀美子

2）指　　導

長野県教育委員会文化財・生涯学習課

3）事 務 局

飯田市教育委員会
（平成12年度まで）
教育次長　関口　和雄（～平成11年度）
久保田裕久（平成12年度～）

博物館課長　　小畑伊之助（～平成11年度）
　　米山　照美（平成12年度）
埋蔵文化財係長　小林　正春
埋蔵文化財係　　伊藤　尚志　下平　博行　馬場　保之　福澤　好晃　吉川　金利
　　坂井　勇雄（平成11年度～）　澁谷恵美子（平成11年度～）
　　山下　誠一（～平成10年度）　吉川　　豊（～平成10年度）
庶務係長　　麦島　博晴（平成11年度）　今村　　進（平成12年度）
庶 務 係　　牧内　　功（平成11年度）　松山登代子（平成12年度）

（平成13年度から）
教育次長　　久保田裕久
生涯学習課長　中島　　修
文化財保護係長　小林　正春
文化財保護係　　伊藤　尚志　坂井　勇雄　澁谷恵美子　羽生　俊郎　馬場　保之　吉川　金利
　　下平　博行（平成13年度）
学校教育課長　　鈴木　邦幸（平成13年度）
　　伊藤　昌治（平成14年度）
総務係長　　高田　　清
総 務 係　　宮田　和久　福沢　恵子（平成13年度）

第Ⅱ章　遺跡の環境

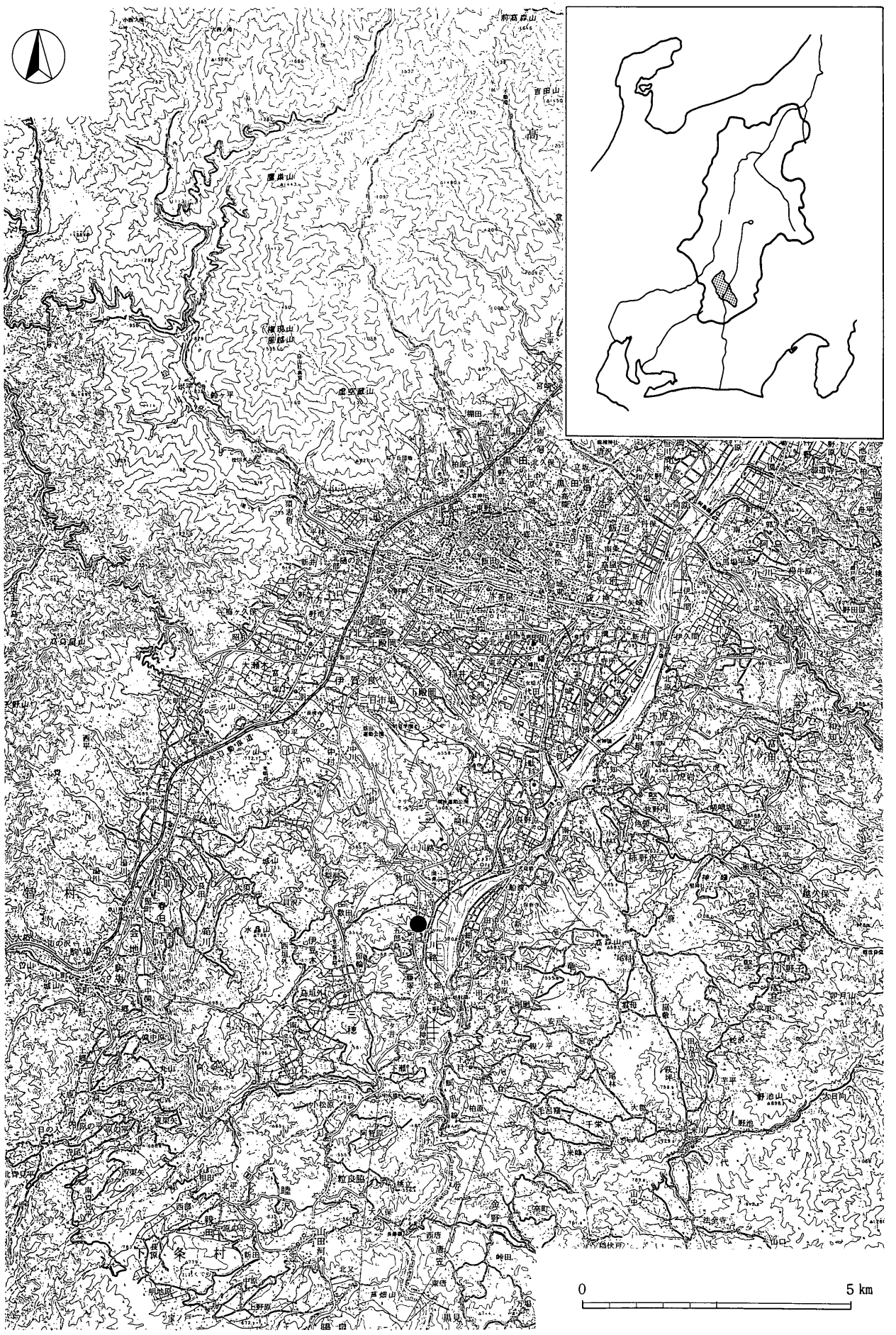
第１節　自然環境

留々女遺跡の所在する飯田市川路地区は、長野県南部を南北に併走する伊那山脈と木曽山脈の間に広がる伊那盆地の最南端にあたり、飯田市街地から南に約８㎞の天竜川右岸に位置する。天竜川は峡谷部である天竜峡によりその流れを阻まれ、川路地区で大きく氾濫原を形成する。川路地区はこの天竜川と木曽山脈前山を源とし西から天竜川へと注ぐ久米川、南の弟川に挟まれた面積6.16㎢の地域である。

川路地区は天竜川の氾濫原が大半を占め、周囲を標高450ｍ～550ｍの低い丘陵に囲まれている。そして、天竜川に沿うように発達した段丘崖により、数段の段丘面に分けることができる。標高380ｍ前後の低位段丘面は久保田・辻前・留々女・殿村・富岡から月の木へ続く。今でこそ度重なる氾濫堆積により天竜川氾濫原とは明確に判別できないが、かつては1.8ｍ程の小段丘崖があり、さらにもう一段小段丘を経て天竜川氾濫原に続いていた。中位段丘面は標高400ｍ前後の段丘面で、花御所から現在国道151号の通過する今洞・御射山・坊垣外・道上と狭い平坦面を経て、大野・大畑へと続く。国道より西側は比高差30ｍ前後で川路地区の上位段丘面となる。『下伊那の地質解説』による低位段丘面の桐林面あるいは伊久間面に相当する段丘面で、琴原・藤治ヶ峰・上平・祢宜屋原・初ノ免・藤塚・大明神原と続く。これらの段丘面を分断するように、北から久米川・相沢川・留々女沢川・南沢川・祢宜屋沢・観音沢・大畑沢・初沢・弟川の小河川が天竜川に注ぎ、削られた段丘はＶ字状の谷や洞地形を形成している。

川路地区の地形は天竜川の流路と共に大きく変化をしている。天竜峡の渓谷部により急激に川幅を狭められた天竜川は洪水を引き起こす度に、上流の竜丘・川路・龍江地区で東西に迂回を繰り返してきたと推定されている。『川路村誌』では伝承・絵図を基に天竜川の変遷が推定されている。これによれば16世紀代の天竜川は竜丘　時又島地籍で２本に分流し、本流は旧ＪＲ飯田線に似たような経路で西側に迂回し、天竜峡手前で合流して天竜峡の渓谷部に流れ込んでいた。17世紀初頭になると本流は久米川合流地点から東に折れて天伯岩に向かって流れるようになり、中州部分の面積は半分程度になる。17世紀中頃にはこの中州部分を農地として利用するために河川改修が行われ、天竜川は時又から天竜峡まで天伯岩の東をほぼ一直線に流れ抜けるようになる。その後の天竜川は川路側、龍江側と蛇行を繰り返し現在に至る。

留々女遺跡は竜丘地区時又から川路地区に跨る広大な氾濫原に接する低位段丘面のほぼ中央に位置し、川路地区中位段丘面から天竜川氾濫原にかけてほぼ東向きに傾く緩やかな傾斜地に立地する。南は留々女沢川により殿村遺跡と隔てられ、北は湿地帯が西方向に切れ込んでいるため遺跡の幅は徐々に狭められ、やがて辻前遺跡と分断される。遺跡内は周囲より僅かに高く地表面は比較的乾燥しているが、遺跡の周辺は段丘崖から湧き出す地下水が豊富で、治水対策事業実施前は多くの土地が水田として利用されていた。



挿図１　留々女遺跡位置図

琴原遺跡
今洞遺跡
438.9
372.6
371.0
久保田遺跡
御射山原遺跡
辻前遺跡
藤治ケ峯遺跡
坊垣外遺跡
留々女遺跡
404.5
殿村遺跡
川路上平遺跡
468.0
372.4
細新遺跡
393.8
富岡遺跡
弥宜屋平遺跡
道上遺跡
梶垣外遺跡
井戸下遺跡
更生下遺跡
初ノ免遺跡
月の木遺跡
398.7
太田下遺跡
藤塚原遺跡
川路大野遺跡
379.6
姑射橋
大畑山遺跡
天竜峡駅
天竜峡公園
川路大畑遺跡
433.3
川路大明神原遺跡
415.0
東原遺跡
0
500 m

挿図２　周辺遺跡図

第2節　歴史的環境

川路地区ではこれまでに大掛かりな発掘調査は行われておらず、考古資料は断片的なものに限られ、古代の様相はあまり窺い知るととができなかった。しかし、近年は治水対策事業あるいは三遠南信自動車道川路インター建設と大規模な開発が行われており、それに先立つ発掘調査によって部分的にではあるが、昔の人々の暮らしぶりが明らかになってきている。

これまでのところ、川路地区で人々が生活をした痕跡を確認できるのは縄文時代からである。本遺跡と同様に治水対策事業に先立ち実施された月の木遺跡の発掘調査において縄文時代前期の住居址が1軒確認されている。ほかにも今洞遺跡で前期後半の住居址が確認されているが、両遺跡とも調査面積に限りがあり、大規模な集落の確認には至っていない。縄文時代中期になると、三遠南信自動車道川路インター建設に先立つ大明神原遺跡の発掘調査で中期初頭から後葉にかけての30軒を越す集落が確認されており、拠点的な大規模集落が川路地区上位段丘面上に形成されていたことが窺える。そのほか、同一段丘面の初ノ免遺跡・藤塚原遺跡でも縄文時代中期と考えられる遺物が表採されている。縄文時代後期・晩期は生活の舞台としての川路は不明瞭であり、遺跡数も少なく断片的な資料のみである。今洞遺跡からは浮線網状文の施された氷Ⅰ式土器が出土しているが、当該期の遺構等は確認されていない。川路地区では縄文時代全般を通じ遺跡の立地が段丘上に多く見られるものの、全国的な傾向として縄文時代後期・晩期は遺跡が水場に近い低地に進出し、河川を積極的に利用していることから、不明瞭な最低位段丘面に同時期の遺跡が存在する可能性が高い。

弥生時代については、これまでに上位段丘の東原遺跡で住居址が1軒確認されているが、その他の資料は乏しく、集落の存在も不明瞭であった。しかし、平成9年度に調査が行われた天竜川氾濫原に接する最低位段丘面の井戸下遺跡で、弥生時代中期・阿島式期の住居址および弥生時代後期の住居址が確認されており、調査区周辺の最低位段丘面上に弥生時代中期から後期にかけての集落が多数存在する可能性を示している。

古墳時代にはいると地区内に多くの古墳が築造される。飯田市内で最も低位の段丘上に立地する前方後円墳である久保田1号古墳（正清寺古墳）をはじめ、地区内には48基の古墳が確認されている。古墳は低位段丘面から中位段丘面にかけての花御所地籍・久保田1号古墳周辺・月の木地籍に集中しており、それぞれに古墳群を形成している。こうした古墳の多くは既に破壊を受けており、地区内に多くの出土品が伝えられている。川路地区最大の古墳である久保田1号古墳は、全長約60mの前方後円墳で後円部に横穴式石室を持つが、ここからは五鈴鏡・玉類・馬具・武具類が出土したと伝えられている。平成11年度の治水対策事業に伴う発掘調査で、同古墳は二重の周溝・造出しを有し、周溝部分が一度修復されていることが判明した。また、周溝内からは多数の埴輪・須恵器・土師器類が出土し、築造時期は5世紀末～6世紀と推定されている。川路地区北西の山麓にある花御所1号古墳は金銅装の馬具類・玉類等の豊富な出土品あることで知られている。また、下辻古墳は全長8.8mの横穴式石室を有し、馬具類・玉類等の出土品がある。他にも本遺跡と留々女沢川を隔てて接する殿村遺跡に存在する殿村1号古墳からは四獣鏡・素文鏡が出土している。

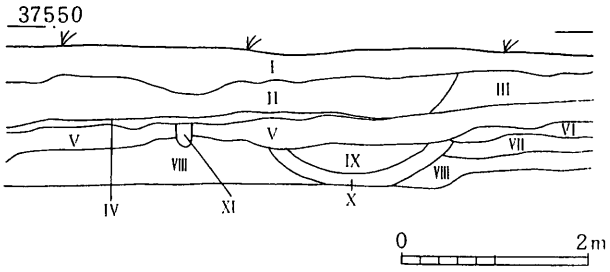
一方、古墳時代の集落は、治水対策事業に伴う発掘調査で、井戸下遺跡・留々女遺跡・辻前遺跡・久保田遺跡で大規模な集落が確認されている。このうち井戸下遺跡（飯田市教育委員会　2001）では古墳時代中期を中心とする30軒の住居址が確認されており、天竜川を挟んで東側に位置する細新遺跡（飯田市教育委員会　1998）と集落の消長が同様の傾向を示していることが指摘されている。

奈良・平安時代においても断片的な資料のみで詳細は不明であったが、治水対策事業に先立つ発掘調査で本遺跡と北隣の辻前遺跡で平安時代の住居址などが確認されている。一方、分布調査では川路地区中位段丘面の花御所遺跡や今洞遺跡で当該時期の遺物が採取されており、当地区では中位の段丘面から下位の段丘面にかけて集落が広がっていたと考えられる。また井戸下遺跡では奈良時代から平安時代と推定される水田址・溝址が確認されており、他の遺跡では確認できなかったものの、低位段丘面一帯に水田が営まれていたと推定される。地区は異なるが、久米川の対岸・竜丘上川路の上川路廃寺では奈良時代と推定される布目瓦等が出土しており、周辺に寺院が存在していたことが窺われる。

川路地区が文献上に現れるのは貞和２年（1346年）の三浦和田文書中の７月19日室町幕府下知状案である。これは当時、伊賀良庄地頭であった江間氏の族人江間尼浄元が庄内の中村・河路の２郷を開禅寺（開善寺）に寄進し、それを新給人が了承した旨の記載がある。また、織田氏の信濃攻略により開善寺から持ち出された梵鐘（現高遠町桂泉院に存在）には文和４年（1355年）の銘があり、その文中に伊賀良庄上河路郷の記載がある。こうした史料から室町時代には川路地区が上河路郷・下河路郷にわかれ、伊賀良庄に含まれていたことが窺われる。また、康永３年（1344年）小笠原貞宗譲状の中に伊賀良庄が記載されており、室町時代には小笠原氏が川路地区を領有していたことがわかる。その後、武田氏の伊那侵攻後、天正７年（1579）の上諏訪造営帳に伊賀良庄内の役銭納入状況が記されており、その中に上河路郷・下河路郷等の記載が見られる。このように川路地区は伊賀良庄の一郷として文献に記されている。河路郷の詳細は不明であるが、井戸下遺跡からは14世紀代から15世紀代にかけての屋敷跡が確認されており、留々女遺跡でも同時期の掘立柱建物址群が検出されている。こうした成果から中世河路郷の集落のも天竜川氾濫原に接する低位段丘上に営まれていたことが推測される。集落の他に今次調査地点北西側の城山には、尾根を利用した山城が所在する。伝承等も無く詳細は不明な点が多いが、戦国期の山城と推定されている。

第３節　基本層序

今次調査の基本層序はＡＭ－47からＡＭ－48グリットの土層を用いた。検出面は調査範囲の北側から西側にかけては礫層（第Ⅵ層）で、東側から南側かけては水成堆積の褐色シルト層（第Ⅷ層）である。



Ⅰ　耕土
Ⅱ　造成土
Ⅲ　10YR4／2（灰褐色）SiL
Ⅳ　10YR5／6（黄褐）SiL
Ⅴ　10YR3／1（黒褐）SiL
Ⅵ　10YR4／3（鈍い黄褐）SiL
Ⅶ　10YR4／4（褐）SiL　小礫含む
Ⅷ　10YR4／6（褐）SiL
Ⅸ　10YR4／4（褐）SiL　小礫含む
Ⅹ　10YR3／4（黒褐）SiL
（Ⅸ・Ⅹ層は風倒木痕）
Ⅺ　10YR4／2（灰黄褐）SiL（中世柱穴）

挿図３　基本層序

第Ⅲ章　調 査 結 果

第１節　調査の概要

（１）調査区の設定

調査区の設定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、株式会社ジャステックに委託し、設定した。（設定方法については、飯田市教育委員会　1998『美女遺跡』他参照）今次調査地点はＭＣ04　８－19・８－20・８－27・８－28内に位置する。

（２）調査範囲

本調査範囲は治水対策事業で盛土工事が行われる部分を対象とした。北側は留々女遺跡の隅までを調査範囲とすることが出来た。東側は調査前に試掘調査を実施したところ耕作土を除いたところで天竜川の氾濫堆積によると思われる砂の層になり、遺構は確認できなかった。従って、これより低い部分は本調査範囲から除外することとした。南東側については更に遺構が続く可能性があったが、調査可能な範囲が狭い上に検出面まで深く、十分な調査ができないと考えられたため調査実施を断念した。

（３）遺　　構

今次調査で確認された遺構は次の通りである。

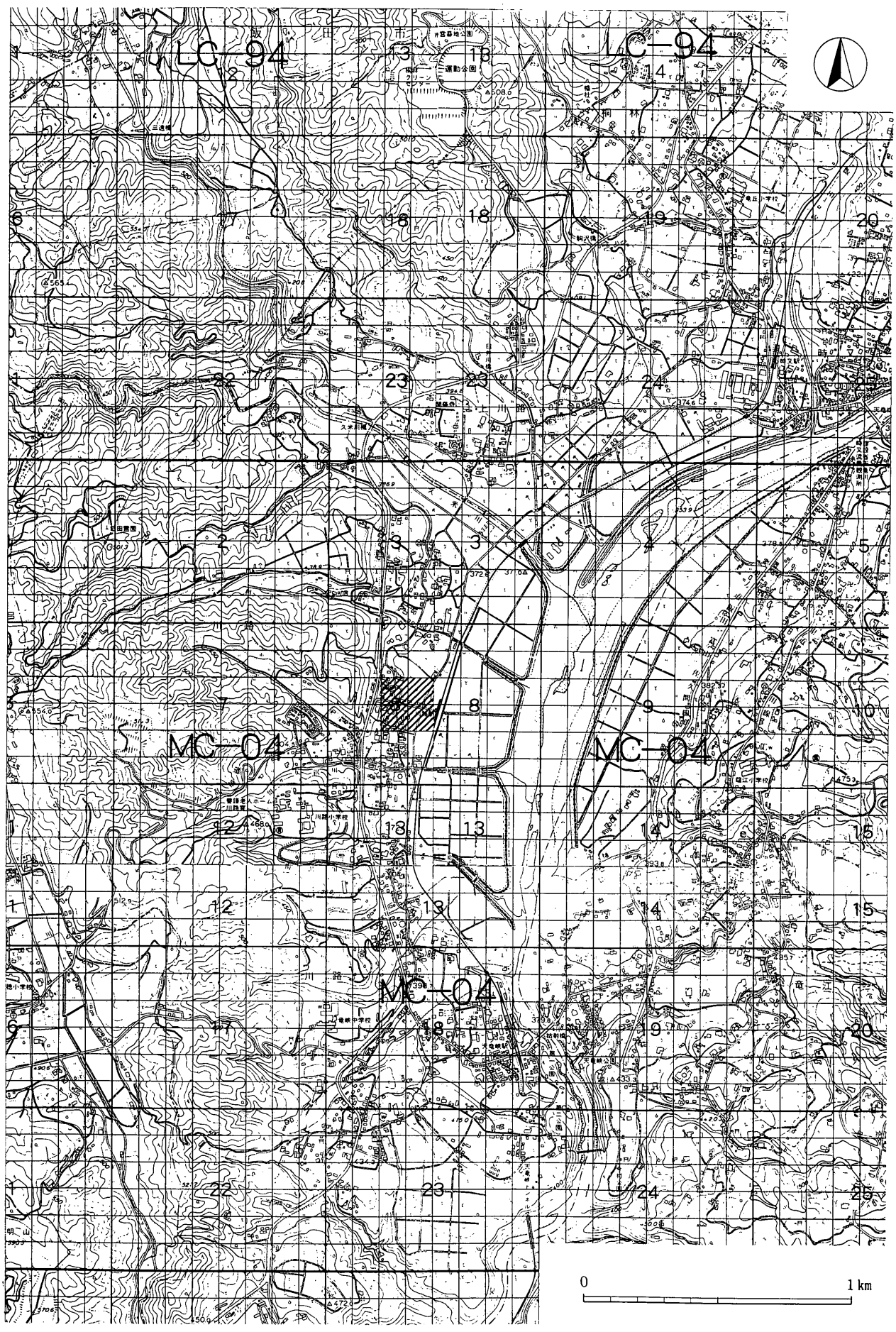
古墳時代から平安時代の竪穴住居址	58軒
中世の方形竪穴	１基
中世以降の掘立柱建物址	８棟
土　坑	27基
ピット	多数

（４）遺　　物

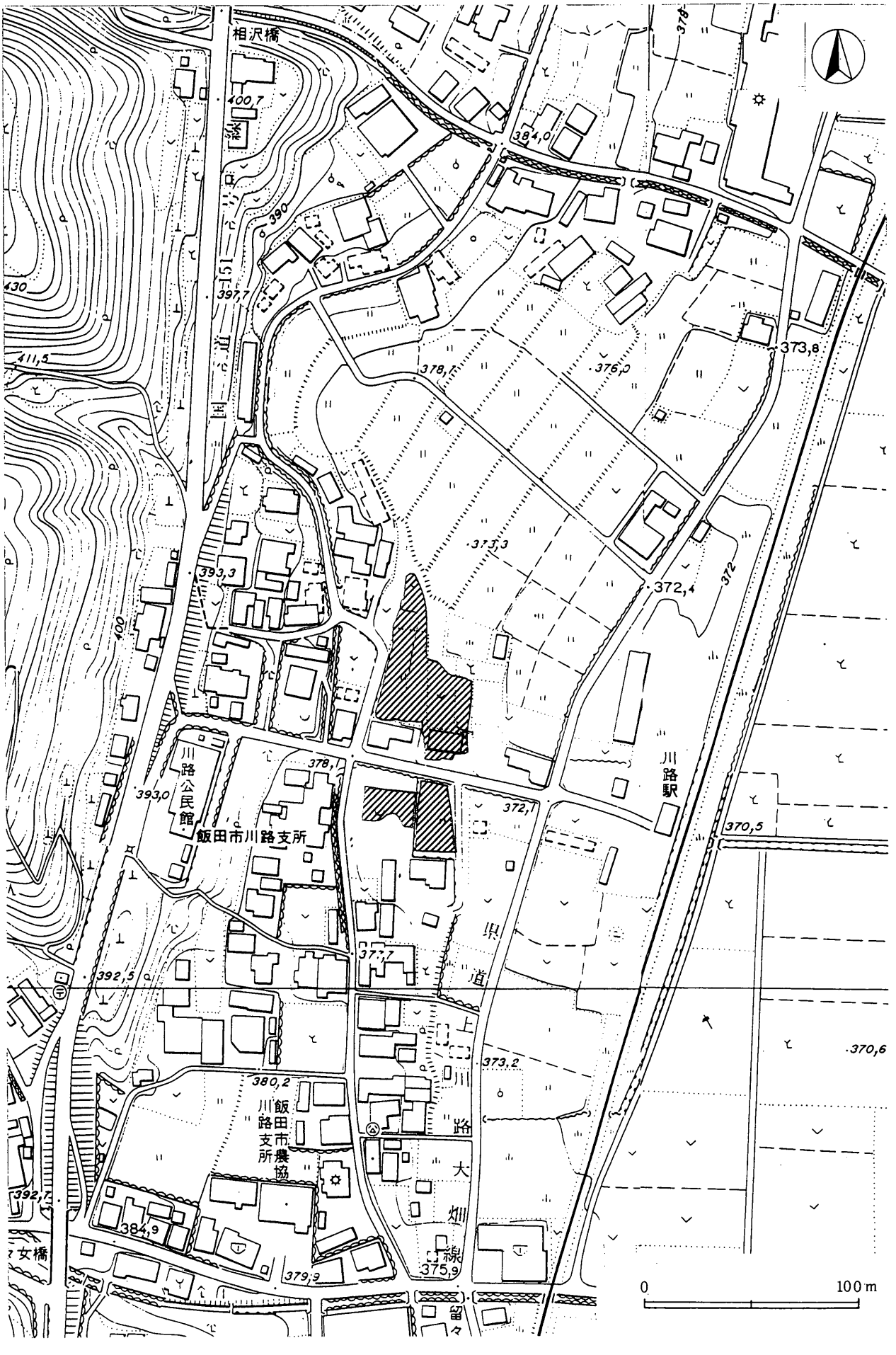
今次調査の出土品の中心は古墳時代から平安時代のものであり、弥生土器は数点確認されただけで、縄文時代土器にいたっては遺構外からもまったく確認されなかった。石器は住居址内からも打製石斧等が出土しているが、そのほとんどは住居址と比べ時代差が見られる。

古墳時代の遺物は土師器および須恵器が、平安時代の遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器等がある。また、鉄製品で平安時代の住居址から鎌が、遺構には結びつかないが帯金具が出土している。

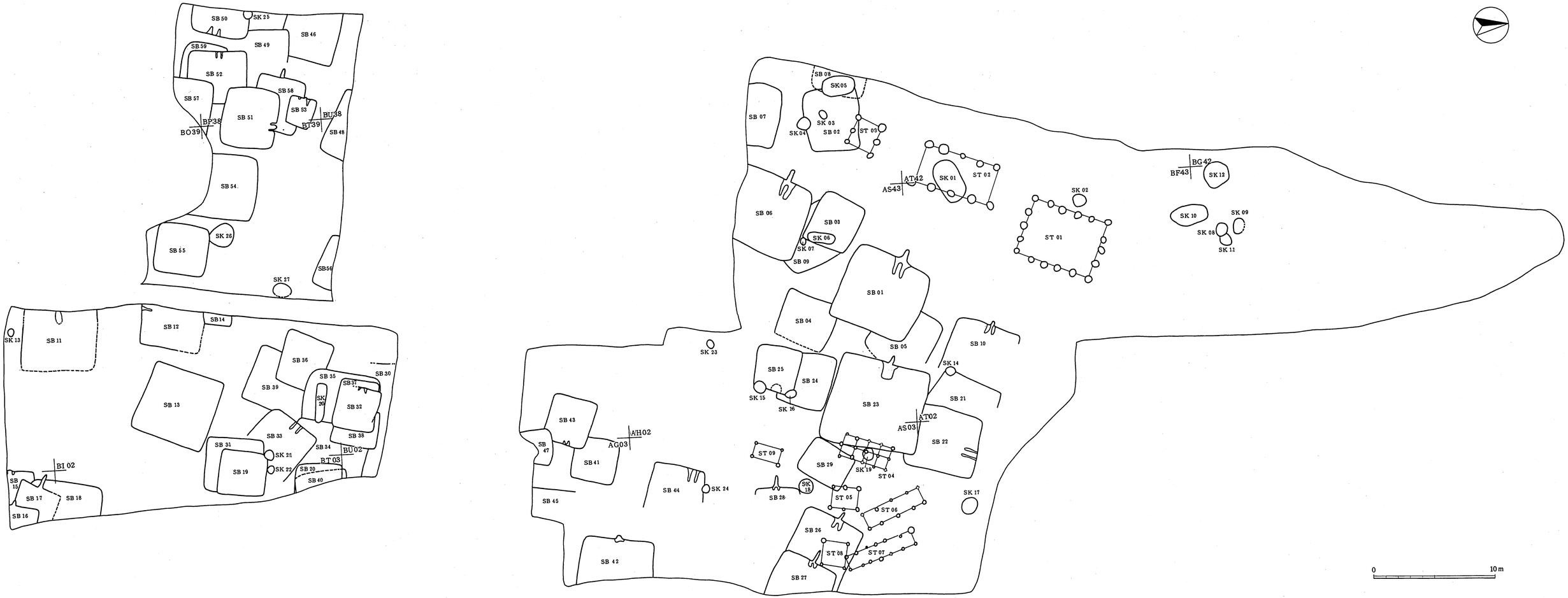
中世以降においては遺物が少なく、遺構に伴う遺物は方形竪穴から天目茶碗の破片が、土坑から内耳の破片が出土しただけである。その他遺構外からは刀子・雁股鏃・たがねなどの鉄製品のほか、陶磁器類の破片が僅かに出土している。



挿図４　基準メッシュ調査位置図


相沢橋
400,7
384,0
390
151
430
397,7
411,5
378,7
376,0
373,8
373,3
393,3
372,4
372
400
川路駅
川路公民館
393,0
378,1
372,1
飯田市川路支所
370,5
県
道
上
川
路
大
畑
線
392,5
373,2
370,6
380,2
飯田市農協
川路支所
392,7
384,9
375,9
379,9
女橋
0
100m

挿図5　調査位置図



挿図6　留々女遺跡全体図

第2節　古墳時代の遺構

（1）住居址

①　ＳＢ０１（図版１）

ＡＳ－47 グリットを中心に検出した。出土遺物から５世紀末～６世紀前半の住居址と考えられる。住居址の北東隅に撹乱が入っていたが、ほぼ全周を確認できた。ＳＢ04・ＳＢ05を切る。主軸はN65°Ｗを指し、主軸方向6.35ｍ×直行方向6.95ｍの隅丸方形の住居址である。残存する壁の高さは斜面の上側で64cm、下側で10cmあり、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は黄褐色土で全体に堅固であり、３個の主柱穴（Ｐ1・Ｐ3・Ｐ4）及び住居址西側で周溝を半周ほど確認した。また、住居址の西壁際でカマドを確認した。長さ245cm×幅102cmの石芯粘土カマドであり、カマド中央で支脚石を確認した。

出土遺物は土師器の坏・高坏・甕・小型甕・甑・小型甑がある。主に住居址南壁際及びカマドに向かって右側から多く出土している。また、カマドの内部からも土師器の甕、甑が潰れた状態で出土した。

②　ＳＢ０２（図版２）

ＡＱ－40 グリットを中心に検出した。出土遺物から５世紀末～６世紀前半の住居址と考えられる。検出面から床面まで浅く残り状態はあまり良いとはいえないが、全周を確認できた。ＳＢ08・ＳＴ03・ＳＫ03・ＳＫ04・ＳＫ05に切られる。主軸はＮ３°Ｗを指し、主軸方向4.5ｍ×直行方向5.2ｍの隅丸方形の住居址である。残存する壁の高さは24cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は黒褐色土で部分的に堅固であり、４個の主柱穴（Ｐ1～Ｐ4）を確認した。住居址の北側で炉を確認した。規模87cm×62cmの地床炉であり、焼土が確認できた。

出土遺物は土師器の坏・器台・甕・小型甕・甑がある。

③　ＳＢ０３（図版２）

ＡＱ－43 グリットを中心に検出した。出土遺物から４世紀後半の住居址と考えられる。全周を確認できた。ＳＢ09を切り、ＳＫ06に切られる。主軸はN32°Ｅを指し、主軸方向3.85ｍ×直行方向4.45ｍの方形の住居址である。残存する壁の高さは46cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は黒褐色土で部分的に堅固であり、４個の主柱穴（Ｐ1～Ｐ4）を確認した。また、住居址の中央からやや北東寄りで炉を確認した。規模67cm×60cmの、拳大の石を炉縁石に用いた石囲炉であり、炉の底部で若干の焼土が確認できた。

出土遺物は土師器の高坏坏部・甕がある。また、混入遺物に弥生土器片がある。

④　ＳＢ０４（図版３）

ＡＮ－48 グリットを中心に検出した。出土遺物から４世紀後半の住居址と考えられる。住居址の南東

側壁は削られ確認できなかった。ＳＢ01に切られる。主軸はN72°Ｅを指し、主軸方向4.55ｍ×直行方向は推定4.2ｍの方形の住居址である。残存する壁の高さは48㎝で、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は黒褐色土で全体的に堅固であったが、主柱穴は確認できなかった。一方、住居址のほぼ中央で炉を確認した。規模48㎝×32㎝の地床炉であり、炉の底部で厚さ６㎝程の焼土層が確認できた。

出土遺物は土師器の器台・高坏坏部・甕がある。

⑤　ＳＢ０５（図版３）

ＡＳ－48 グリットを中心に検出した。出土遺物から４世紀後半の住居址と考えられる。覆土は小礫を多く含む黒褐色シルト質壌土単層であり、住居址の東側壁は撹乱や住居址の切り合いのため確認できなかった。ＳＢ01・ＳＢ23に切られる。主軸の方向は不明であるが、長軸推定5.2ｍ×短軸5.1ｍの隅丸方形の住居址である。残存する壁の高さは67㎝で、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は黒褐色土で全体的に堅固であり、４個の主柱穴（Ｐ1～Ｐ4）を確認したが、炉・カマド等施設は確認できなかった。

出土遺物は少なく、土師器の甕が２個体分出土している。

⑥　ＳＢ０６（図版４）

ＡＮ－44 グリットを中心に検出した。出土遺物から５世紀末～６世紀前半の住居址と思われる。住居址の南西側は調査範囲の外に続いており全体を調査できなかった。ＳＢ09を切る。主軸はN65°Ｗを指し、主軸方向は6.35ｍの隅丸方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは67㎝で、やや緩やかに立ち上がる。

床面は暗褐色土で全体的に軟弱であった。床面で３個の主柱穴（Ｐ1～Ｐ3）と住居址の南西壁際でカマド及び周溝を確認した。長さ262㎝×幅78㎝の石芯粘土カマドである。天井石はカマド焚き口に転落した状態で確認された。また、当住居址のカマド支脚は円筒形の土製品であった。

出土遺物は土師器の高坏・甕・甑がある。主にカマドの周辺と住居址南側角付近で固まって出土している。また、覆土上層から平安時代の土師器甕及び須恵器坏が、覆土中から弥生土器片が出土している。

⑦　ＳＢ０７（図版５）

ＡＮ－39 グリットを中心に検出した。出土遺物からの５世紀末～６世紀前半住居址と思われる。住居址の南側は調査範囲の外に続いていたため、全体を調査できなかった。遺構の重複は無く、単独で検出した。主軸はN13°Ｅを指し、主軸方向の規模は不明であるが直行方向5.25ｍの方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは37㎝で、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は暗褐色土で軟弱であった。住居址の北側で２個の主柱穴（Ｐ1・Ｐ2）及び焼土を確認した。規模72㎝×48㎝の地床炉と判断したが、住居址の時代からカマドの痕跡とも考えられる。なお、床面下から周溝及びピット４個が検出された。

出土遺物は土師器の高坏脚部・甕の破片等がある。また、覆土上部から平安時代の須恵器坏が出土して

おり、当住居址から前述のＳＢ06の上部に平安時代の住居址があったことが予想される。

⑧　ＳＢ１０（図版６）

ＡＶ－49 グリットを中心に検出した。出土遺物から５世紀末～６世紀前半の住居址と思われる。覆土は小礫を多く含む黒褐色シルト質壌土単層である。住居址の北及び東側の２方向の壁は削られ不明である。ＳＢ21・ＳＫ14と重複すると思われるが、新旧関係は判断できなかった。主軸はＮ66°Ｗを指し、主軸方向は5.45ｍの方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは18㎝で、やや緩やかに立ち上がる。

床面は暗褐色土で確認できた部分は堅固であった。主柱穴は確認できなかったが、住居址の北西壁際でカマドを確認した。長さ152㎝×幅74㎝の粘土カマドである。残り状態があまり良くないので判断できないが、石を芯材に用いた石芯粘土カマドの可能性もある。カマドの焚き口付近で焼土が僅かに確認できたほか、支脚石はカマド中央に埋まったままで、天井石は焚き口付近に転落した状態で確認できた。

出土遺物は多く、カマドに向かって右側の住居址壁際から土師器の坏・高坏・小型甕・甕・小型甑・甑が出土している。

⑨　ＳＢ１１（図版７）

ＢＩ－47 グリットを中心に検出した。出土遺物から５世紀後半の住居址と考えられる。覆土は暗褐色シルト質埴土単層である。住居址の西側が調査範囲外にかかり、北から東にかけては削られていたため全体を調査できなかった。遺構の重複はなく、単独で検出した。主軸はＮ82°Ｗを指し、主軸方向の規模は不明であるが、直行方向6.2ｍの方形または隅丸方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは28㎝で、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は褐色土で部分的に堅固であった。４個の主柱穴（Ｐ1～Ｐ4）及び住居址の西壁際でカマドを確認した。残り状態が悪く正確とはいえないが、幅82㎝の石芯粘土カマドである。

出土遺物は土師器の坏・高坏・小型甕・甕がある。

⑩　ＳＢ１２（図版７）

ＢＮ－47 グリットを中心に検出した。出土遺物から６世紀後半の住居址と考えられる。覆土は暗褐色シルト質埴土単層である。住居址の西半分は用地境の石積みにより破壊を受け全体を調査できなかった。ＳＢ14に切られる。主軸はＮ190°Ｗを指し、主軸方向5.45ｍの方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは29㎝で、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は褐色土で堅固であった。主柱穴は検出できなかったが、カマドの袖を片方確認した。幅は不明であるが、長さ95㎝の石芯粘土カマドである。火床は良く焼き締まっており、支脚はカマド中央に埋まっていた甕の破片を取り除いたところで確認できた。

出土遺物は土師器の坏・高坏・甕・甑がある。甑はカマド内部から、その他はカマドに向かって左脇からそれぞれ出土した。

⑪　ＳＢ１３（図版８）

ＢＭ－00 グリットを中心に検出した。出土遺物から５世紀後半の住居址と考えられる。覆土は暗褐色シルト質埴壌土単層である。住居址の北側・南側角は撹乱のため確認できなかった。遺構の重複はなく、単独で検出した。主軸の方向は不明であるが、長軸6.3ｍ×短軸6.05ｍの方形の住居址である。残存する壁の高さは33㎝で、やや緩やかに立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。主柱穴、炉・カマド等施設は確認できなかった。

出土遺物は土師器の坏・高坏・甕がある。また、時期は異なるが黒色土器坏、須恵器坏、灰釉陶器の皿が覆土上層から出土している。

⑫　ＳＢ１５（図版８）

ＢＧ－03 グリットを中心に検出した。検出状況から古墳時代の住居址と考えられる。覆土は黒褐色シルト質壌土単層である。住居址の南側は調査範囲外にかかり、北側・東側は遺構の重複により部分的にしか調査できなかった。ＳＢ16・ＳＢ17・ＳＢ18に切られる。主軸はN85°Ｗを指す。規模は不明であるが、方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは11㎝で、緩やかに立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。主柱穴は確認できなかったが、カマド及び周溝の一部を確認した。カマドは確認できた範囲では長さ65㎝×幅50㎝の粘土カマドである。カマドの残り状態はあまり良くないが、火床部分は硬く焼き締まり、明確に判断できた。なお、当住居址に伴うと判断できる遺物はなかった。

⑬　ＳＢ１６（図版８）

ＢＧ－04 グリットを中心に検出した。出土遺物、切り合い関係から７世紀代の住居址と考えられる。覆土は黒褐色シルト質壌土単層である。調査区の隅で検出したため、全体を調査できなかった。ＳＢ15・ＳＢ17・ＳＢ18を切る。主軸はN75°Ｗを指す。規模は不明であるが、方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは19㎝で、緩やかに立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。主柱穴は確認できなかったが、調査区の南東隅でカマドを確認した。袖の部分は覆土と区別が出来ず掘り下げてしまったが、床面の状況から長さ110㎝×幅60㎝の粘土カマドと推測される。火床部分は硬く焼き締まっており、比較的判断しやすかった。

出土遺物で明確に当住居址のものと判断できたものは、土師器の高坏頸部・甕の底部がある。

⑭　ＳＢ１７（図版９）

ＢＨ－03 グリットを中心に検出した。切り合い関係から６世紀後半の住居址と考えられる。覆土は黒褐色シルト質壌土単層である。遺構の重複が激しく壁は南側の一部しか確認できなかったが、床面の状況などで切り合いを判断した。ＳＢ15・ＳＢ18を切り、ＳＢ16に切られる。主軸はN65°Ｗを指す。規模は不明であるが、方形と考えられる住居址である。残存する壁の高さは18㎝で、やや緩やかに立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。主柱穴は確認できなかったが、住居址北西壁際でカマドを確認した。長さ222㎝×幅76㎝の石芯粘土カマドである。焚き口付近に天井石が２つに割れた状態で落ち込んでおり、

その下で厚さ6㎝ほどの焼土層を確認した。

出土遺物は少なく、土師器の高坏脚部・甕・小型甑がある。また、土製の紡錘車が1点出土している。

⑮　ＳＢ１８（図版９）

ＢＩ－04 グリットを中心に検出した。出土遺物から5世紀後半の住居址と考えられる。覆土は黒褐色シルト質壌土単層である。調査区外にかかり、全体を調査できなかった。ＳＢ15を切り、ＳＢ16・ＳＢ17に切られる。主軸の方向・規模は不明であるが、方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは39㎝で、ほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴、炉・カマド等施設は確認できなかった。

出土遺物は少なかったが、土師器の坏が2個体図示できた。

⑯　ＳＢ２２（図版11）

ＡＵ－04 グリットを中心に検出した。出土遺物から6世紀後半の住居址と考えられる。覆土は小礫を多く含む暗褐色壌土単層である。南側が他の住居址と重複していたが、全体を調査できた。ＳＢ23を切る。図版ではＳＢ23に切られるようになっているが遺物を検討した結果、現場での新旧判断が誤っていたと考えられる。ＳＢ21とも重複するが新旧関係は不明である。主軸はＮ17°Ｅを指し、主軸方向5.9ｍ×直行方向5.35ｍの方形の住居址である。残存する壁の高さは33㎝で、やや緩やかに立ち上がる。

床面は褐色土で、軟弱であった。主柱穴は確認できなかったが、カマドと住居址の北および西壁で周溝を確認した。長さ136㎝×幅94㎝の、袖部分では石を心材として使用する粘土カマドである。支脚石はカマド中央から焚き口に寄った方で確認された。カマドの内面は赤く、かなり焼き締まっていた。

出土遺物は土師器の坏・高坏坏部・甕・小型甕・長胴甕がある。多くはカマド内部及びカマドに向かって左側から出土している。

⑰　ＳＢ２３（図版12）

ＡＱ－02 グリットを中心に検出した。出土遺物から6世紀前半の住居址と考えられる。覆土は小礫を多く含む黒褐色壌土単層である。遺構の重複はあったが、全周を調査できた。ＳＢ05を切り、ＳＢ22・ＳＴ04に切られる。（ＳＢ22との新旧関係は前述のとおり）主軸はＮ73°Ｗを指し、主軸方向7.9ｍ×直行方向7.4ｍの若干不整ではあるが方形の住居址である。残存する壁の高さは63㎝で、やや緩やかに立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。主柱穴4個（Ｐ1～Ｐ4）・貯蔵穴と思われる穴1基（Ｐ5）及び周溝を全周確認したほか、住居址西側壁中央でカマドを確認した。長さ206㎝×幅86㎝の石芯粘土カマドである。カマド内に土師器の甕が潰れて残っており、それを取り除くと支脚石があり、赤く焼き締まった火床が確認できた。また、天井石はカマドの袖石に乗った状態で確認された。

出土遺物は多く、須恵器蓋を模倣した土師器坏、ほか土師器の坏・鉢・高坏・甕・小型甕・小型甑・甑、須恵器の蓋・坏がある。これらは主にカマドに向かって右の壁際から出土している。その他混入品として、8世紀前半と考えられる土師器甕・黒色土器坏、須恵器坏、灰釉陶器がある。

⑱　ＳＢ２６（図版13）

ＡＯ－08 グリットを中心に検出した。出土遺物から５世紀後半の住居址と考えられる。覆土は黒褐色土シルト質埴土単層である。南東側壁は遺構の重複により確認できなかった。ＳＢ27・ＳＴ07・ＳＴ08に切られる。主軸はN60°Ｗを指し、主軸方向の規模は不明であるが、直行方向5.2ｍの長方形の住居址である。残存する壁の高さは44cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。主柱穴２個（Ｐ1・Ｐ2）と周溝及び住居址西側壁でカマドを確認した。残り状態があまり良くないので正確ではないが、長さ160cm×幅76cmの粘土カマドである。

出土遺物は土師器の高坏・甕・小型甕・甑・ミニチュア土器、須恵器甕の口縁部がある。

⑲　ＳＢ２７（図版14）

ＡＮ－09 グリットを中心に検出した。出土遺物から７世紀の住居址と考えられる。覆土は黒褐色土シルト質埴土単層である。南東側壁は削られており確認できなかった。ＳＢ26を切る。主軸はN65°Ｗを指し、直行方向の規模は不明であるが、主軸方向5.25ｍの方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは31cmで、やや緩やかに立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。主柱穴は確認できなかったが、住居址の西側壁際でカマドの一部を確認した。焚き口部分は壊れており正確ではないが、焼土の範囲から推測すると長さ186cm×幅74cmの石芯粘土カマドである。

出土遺物は、土師器の坏・高坏・小型甕、須恵器の蓋がある。

⑳　ＳＢ２８（図版14）

ＡＭ－05 グリットを中心に検出した。出土遺物から６世紀前半の住居址と考えられる。覆土は暗褐色シルト質埴土単層である。住居址の大部分が削られており、西側壁付近しか調査できなかった。確認できた範囲では他の遺構と重複しない、単独の住居址である。主軸はN85°Ｗを指し、主軸方向の規模は不明であるが直行方向3.65ｍの方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは13cmで、緩やかに立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。主柱穴は確認できなかったが、住居址の西側壁際でカマドの痕跡と煙道を確認した。心材として用いていた石の抜取痕と考えられる小さな窪みと、僅かに焼土の残る火床を確認した。長さ185cm×幅65cmの石芯カマドと推測される。

出土遺物は土師器の鉢・甕・甑、須恵器の蓋がある。完全な形を留めたものはないが、カマドの周辺からほとんどが出土している。

㉑　ＳＢ３０（図版15）

ＢＷ－49 グリットを中心に検出した。検出の状況から６世紀後半の住居址と考えられる。覆土は暗褐色シルト質埴壌土単層である。削平や遺構の重複により、住居址の西側壁の一部しか確認できなかった。ＳＢ37と重複するが、新旧関係は不明である。住居址の規模・方向・プラン等まったく不明であり、検出した住居址の西壁際には焼土があったが、カマドの痕跡かは判断できなかった。

当住居址に伴う遺物は少なく、土師器の甕の破片・高坏の坏部等が出土しただけである。

㉒　ＳＢ３４（図版16）

ＢＳ－01 グリットを中心に検出した。出土遺物・遺構の重複状態から６世紀後半の住居址と考えられるが、詳細時期は不明である。覆土は黒褐色シルト質埴壌土単層である。遺構の重複により壁はほとんど残っておらず、床面の状況で住居址範囲を確認した。ＳＢ20・ＳＢ33・ＳＢ37・ＳＢ38に切られる。その他ＳＢ20・ＳＢ35・ＳＢ40とも重複するが、新旧関係は不明である。主軸の方向は不明であるが、南北方向6.45ｍ×東西方向4.9ｍの長方形の住居址である。残存する壁の高さは５㎝で、立ち上がりの様子は不明である。

床面は褐色土で、中央部分のみ堅固であった。主柱穴、炉・カマド等住居内施設は確認できなかった。住居址北側壁際の東寄り部分では掘り方が確認されたが、床面より30㎝程深く掘り込まれていた。

出土遺物は少ないが土師器の小型甕・甕の上部がある。また、住居址中央の床面から石製模造品が出土している。

㉓　ＳＢ３５（図版16）

ＢＳ－00 グリットを中心に検出した。出土遺物から６世紀後半～７世紀代の住居址と考えられる。覆土は暗褐色シルト質埴壌土単層である。遺構の重複により住居址東側の範囲は判断できなかった。ＳＢ36を切り、ＳＢ32・ＳＢ37・ＳＢ38に切られる。主軸の方向は不明であるが、南北方向6.2ｍの隅丸方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは15㎝で、緩やかに立ち上がる。床面は褐色砂質土で、不明確であった。主柱穴、炉・カマド等住居内施設は確認できなかった。

出土遺物は土師器の小型甕１点が図示できたが、その他は土師器の小破片ばかりで時期を明確に判断できるものは無かった。

㉔　ＳＢ３６（図版17）

ＢＳ－49 グリットを中心に検出した。出土遺物から５世紀後半の住居址と考えられる。覆土は暗褐色シルト質埴壌土単層である。住居址の西側には撹乱が入っており、壁や床面は部分的にしか確認できなかった。ＳＢ39を切り、ＳＢ36に切られる。主軸はN63°Ｗを指し、主軸方向4.35ｍ×直行方向4.05ｍの方形の住居址である。残存する壁の高さは15㎝で、緩やかに立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。主柱穴・カマド等住居内施設は確認できなかった。しかし、住居址西側で撹乱の土を取り除いたところ、赤く焼き締まった面が確認されたので、これをカマドの痕跡と判断した。

出土遺物はあまり多くはなかったが、土師器の高坏・小型の甕・壷の口縁がある。

㉕　ＳＢ３７（図版17）

ＢＵ－00 グリットを中心に検出した。出土遺物から６世紀後半の住居址と考えられる。覆土は暗褐色シルト質埴壌土単層である。遺構の重複が激しかったが、全周を確認できた。ＳＢ34・ＳＢ35・ＳＢ38を

切り、ＳＢ32に切られる。主軸の方向は不明であるが、南北方向3.4ｍ×東西方向4.2ｍの隅丸長方形の住居址である。残存する壁の高さは26㎝で、緩やかに立ち上がる。床面は暗褐色土で、一部堅固であった。主柱穴・カマド等住居内施設は確認できなかった。

出土遺物は土師器の鉢・甕がある。須恵器の無高台坏も出土しているが、これは混入品と考えられる。

㉖　ＳＢ３８（図版17）

ＢＵ－02 グリットを中心に検出した。出土遺物から６世紀後半の住居址と考えられる。覆土は暗褐色シルト質埴壌土単層である。遺構の重複が激しかったが、全周を確認できた。ＳＢ34・ＳＢ35を切り、ＳＢ32・ＳＢ37に切られる。主軸の方向は不明であるが、南北方向3.65ｍ×直行方向3.15ｍの方形の住居址である。残存する壁の高さは13㎝で、緩やかに立ち上がる。床面は暗褐色土で、不明確であった。主柱穴・カマド等住居内施設は確認できなかった。

当住居址に伴う遺物は少なく、土師器の小型甕の他に器種は分からないが土師器の小破片がある。

㉗　ＳＢ４１（図版18）

ＢＦ－03 グリットを中心に検出した。出土遺物から５世紀末～６世紀前半の住居址と考えられる。覆土は小礫を多く含む暗褐色シルト質壌土単層である。撹乱により南側の壁は確認できなかった。ＳＢ43に切られる。主軸はＮ78°Ｗを指し、主軸方向3.75ｍ×直行方向推定3.75ｍの隅丸方形の住居址である。残存する壁の高さは20㎝で緩やかに立ち上がる。

床面は暗褐色土で、堅固であった。主柱穴を３個（Ｐ1～Ｐ2）を確認した。袖石および焼土は確認できなかったが、住居址の西側壁際でカマドの痕跡を確認した。推定で長さ72㎝×幅82㎝の粘土カマドである。

出土遺物は土師器高坏の坏部・小型甕・がある。

㉘　ＳＢ４２（図版18）

ＡＧ－08 グリットを中心に検出した。出土遺物から５世紀後半の住居址と考えられる。覆土は小礫を多く含む黒褐色シルト質埴壌土単層である。調査範囲外にかかり東側は確認できなかった。遺構の重複は無く単独で検出した。主軸はＮ82°Ｗを指し、主軸方向の規模は不明であるが直行方向6.25ｍの隅丸方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは32㎝でやや緩やかに立ち上がる。

床面は暗褐色土で、堅固であった。主柱穴を２個（Ｐ1・Ｐ2）また、住居址の南側及び西側で周溝を確認した。カマドは既に破壊を受けており、芯材として使用された石の抜き取り痕及び火床を確認した。推定で長さ166㎝×幅62㎝の石芯粘土カマドである。

出土遺物は土師器の坏・高坏の坏部・甕・小型甕・壷がある。また、カマド火床上より臼玉２点が出土している。

㉙　ＳＢ４４（図版19）

ＡＩ－05 グリットを中心に検出した。出土遺物から６世紀後半の住居址と考えられる。覆土は小礫を

多く含む黒褐色シルト質埴壌土単層である。住居址東側は撹乱のため確認できなかった。ＳＫ24に切られる。主軸はN76° Wを指し、主軸方向の規模は不明であるが直行方向4.45ｍの方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは33cmでやや緩やかに立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。住居址西壁でカマドを確認した。長さ120cm×幅86cmの石芯粘土カマドである。芯材として使用された石は比較的大きさの揃ったものが整然と並べられており、カマド本体は非常に丁寧に作られていたことが窺える。

出土遺物は、土師器の坏・甕・長胴甕・小型甕がある。また土製紡錘車が床面より３個体出土している。

㉚　ＳＢ４６（図版20）

ＢＵ－35 グリットを中心に検出した。出土遺物から５世紀後半の住居址と考えられる。覆土は暗褐色シルト質埴土単層である。部分的に撹乱が見られたものの、住居址東側半分程度を調査できた。ＳＢ49に切られる。主軸は不明であるが、南北方向4.75ｍの方形の住居址である。残存する壁は31cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は暗褐色で、堅固であった。しかし、住居址内でカマド等の施設は確認出来なかった。

出土遺物は土師器の坏・高坏脚部・小型甕・甕がある。他に平安時代の土師器甕、須恵器坏など時期外の遺物が若干混じる。

㉛　ＳＢ４８（図版20）

ＢＵ－39 グリットを中心に検出した。出土遺物から古墳時代の住居址と考えられる。覆土は小礫混じりの暗褐色シルト質埴壌土単層である。調査範囲外にかかり、住居址南側の一部しか調査できなかった。調査できた範囲では、遺構の重複は無かった。主軸は不明であるが、東西方向5.65ｍの方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは51cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は褐色土で、堅固であった。しかし、住居址内でカマド等の施設は確認出来なかった。

出土遺物は土師器の小片が数点あるが、器種・詳細時期は判断できなかった。

㉜　ＳＢ４９（図版21）

ＢＲ－35 グリットを中心に検出した。出土遺物から古墳時代後期の住居址と考えられる。覆土は暗褐色シルト質埴土単層である。住居址南及び東側壁は削平により確認できなかった。ＳＢ50に切られる。また、ＳＢ52とも重複するが、新旧関係は不明である。主軸方向・規模は不明であるが、方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは15cmで、やや緩やかに立ち上がる。床面は褐色土で、堅固であった。住居内の施設については特に確認できなかった。

出土遺物は土師器の甕のみ図示できた。その他に土師器の高坏脚部・甕破片等が出土しているが、何れも小破片である。

㉝　ＳＢ５１（図版22）

ＢＲ－39 グリットを中心に検出した。出土遺物から６世紀後半と考えられる。覆土は暗褐色シルト質

埴土単層である。他の住居址と重複していたが全周を確認できた。ＳＢ52・ＳＢ58を切る。主軸はN12°Ｅを指し、主軸方向4.65×直行方向5.1ｍの隅丸方形の住居址である。残存する壁の高さは31㎝で、やや緩やかに立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。主柱穴は住居址北側で２個（Ｐ7・Ｐ4）及びカマドを住居址北側壁で確認した。カマドは長さ102㎝×86㎝の石芯粘土カマドである。焚き口部分は硬く焼き締まっていた。

出土遺物は土師器の鉢・甕・小型甕・長胴甕・壷、須恵器蓋坏がある。

㉞　ＳＢ５２（図版23）

ＢＰ－36 グリットを中心に確認した。出土遺物から５世紀後半～６世紀前半の住居址と考えられが、時期を断定するには出土資料が乏しい。覆土はシルト質壌土単層である。遺構の重複が激しく壁は全体的に不明確であった。ＳＢ59を切り、ＳＢ51・ＳＢ57に切られる。また、ＳＢ49とも重複するが、新旧関係は不明である。主軸はN83°Ｗを指し、主軸方向4.35ｍ×直行方向4.85ｍの方形の住居址である。残存する壁の高さは49㎝で、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。主柱穴は分からなかったが、住居址西側壁中央でカマドを確認した。長さ80㎝×幅70㎝の、焚き口部分のみに石を入れる石芯粘土カマドである。火床及び袖部で硬く焼き締まった部分を確認できた。

出土遺物は土師器の坏・甕、小型壷などがある。

㉟　ＳＢ５４（図版23）

ＢＰ－41 グリットを中心に検出した。出土遺物から７世紀の住居址と考えられる。覆土は黒褐色シルト質埴土単層である。住居址の南側壁は範囲外にかかり確認できなかった。他の遺構との重複はなく、単独で検出した。主軸方向は不明であるが、東西方向5.55ｍの方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは52㎝で、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。主柱穴２個（Ｐ1・Ｐ2）及び周溝を確認したが、炉・カマドは確認できなかった。

出土遺物は土師器の坏・高坏・小型鉢・甕、須恵器蓋坏・鬼がある。また、土製の紡錘車も出土している。

㊱　ＳＢ５７（図版24）

ＢＰ－37 グリットを中心に検出した。出土遺物から５世紀末～６世紀前半の住居址と考えられる。覆土は暗褐色シルト質埴土単層である。遺構の重複があったり南側が調査範囲外にかかったりしたため、床面に達するまでプランを確認できなかった。ＳＢ52・ＳＢ59を切る。主軸はN85°Ｗを指し、正確な規模は不明であるが東西方向で4.3ｍの方形と推測される住居址である。床面は部分的に堅固であったが、北側は軟弱で不明瞭であり、掘り方まで掘り上げた。

出土遺物は土師器の坏・甕ほか須恵器の蓋坏・甕などがあるが、図示できたものは土師器坏１点と混入品の須恵器蓋だけである。

㊲　ＳＢ５８（図版24）

ＢＳ－38 グリットを中心に検出した。出土遺物から５世紀後半の住居址と考えられる。覆土は暗褐色シルト質埴土単層である。遺構の重複はあったものの、全周を確認できた。ＳＢ51・ＳＢ53に切られる。主軸はN70°Ｗを指し、主軸方向4.35ｍ×直行方向4.15ｍの方形の住居址である。残存する壁の高さは55㎝で、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。主柱穴４個（Ｐ1～Ｐ4）及び周溝を全周確認できた。カマドは残っていなかったが、芯材として用いた石の抜き取り痕及び火床部分は確認できた。長さ190㎝×幅70㎝の石芯粘土カマドと推測される。

出土遺物は多く、土師器の坏・高坏・小型甕・甕、完形ではないが土製紡錘車などがある。

㊳　ＳＢ５９（図版25）

ＢＰ－36 グリットを中心に検出した。出土遺物から５世紀後半～６世紀前半の住居址と考えられるが、時期を判断するには出土資料が乏しい。覆土は暗褐色シルト質埴土単層である。遺構の重複により西側から南側の一部しか確認できなかった。ＳＢ52に切られる。主軸・規模は不明である。残存する壁の高さは44㎝で、やや緩やかに立ち上がる。床面はＳＢ52と重複していたためほとんど残っておらず、住居内施設も確認できなかった。

出土遺物はあまり多くないが、土師器の坏・高坏の坏部・甕がある。

（２）　土　坑

①　ＳＫ０５（図版29）

ＡＱ－38 グリットで検出した。出土遺物から６世紀前半の土坑と考えられる。ＳＢ03を切り、ＳＢ05に切られる。長軸283㎝×短軸176㎝×深さ46㎝の平面形態は楕円形の土坑である。土坑内から土師器高坏・小型甕・甕など遺物が大量に出土している。

②　ＳＫ０８（図版29）

ＢＨ－45 グリットで検出した。出土遺物から古墳時代後期と考えられる。ＳＫ11との新旧関係は覆土の差からＳＫ08の方が切っていると判断した。長軸108㎝×短軸90㎝×深さ35㎝の平面形態は円形の土坑である。土師器の小型甕ほか土師器の坏・甕の小破片が出土している。

③　ＳＫ０９（図版29）

ＢＨ－45 グリットで検出した。出土遺物から古墳時代後期と考えられる。他の遺構と重複は無く単独で検出した。長軸128㎝×短軸80㎝×深さ28㎝の平面形態は長方形の土坑である。出土遺物は土師器坏がある。

④　ＳＫ１１（図版29）

ＢＨ－46 グリットで検出した。出土遺物から古墳時代後期と考えられる。ＳＫ08に切られる。新旧関

係は覆土の差で判断した。長軸103cm×短軸100cm×深さ28cmの平面形態は円形の土坑である。土師器の坏など土師器の破片が僅かに出土している。

⑤　ＳＫ１４（図版30）

ＡＵ－00 グリットで検出した。出土遺物から古墳時代後期の土坑と考えられる。ＳＢ21を切る。長軸80cm×短軸70cm×深さ49cmの平面形態は円形の土坑である。土坑内から土師器の甕１個体が出土している。

⑥　ＳＫ２３（図版31）

ＡＫ－49 グリットで検出した。出土遺物から古墳時代後期の土坑と考えられる。他の遺構と重複は無く、単独で検出した。長軸78cm×短軸60cm×深さ23cmの平面形態は円形の土坑である。土坑内から土師器の甕胴部の破片が出土している。

⑦　ＳＫ２４（図版31）

ＡＫ－05 グリットで検出した。出土遺物から古墳時代後期の土坑と考えられる。ＳＢ44を切る。長軸68cm×短軸58cm×深さ55cmの平面形態は円形の土坑である。土坑内から土師器の甕の口縁部・胴部の破片が出土している。

⑧　ＳＫ２５（図版31）

ＢＲ－34 グリットで検出した。出土遺物及び遺構の重複関係から古墳時代後期の土坑と考えられる。ＳＢ50に切られる。規模は不正確であるが、直径75cm前後で深さ23cmの円形と推定される土坑である。土坑内から土師器の小破片が数点出土している。

⑨　ＳＫ２６（図版31）

ＢＰ－43 グリットで検出した。出土遺物から古墳時代の土坑と考えられる。ＳＢ55と接する。長軸203cm×短軸202cm×深さ17cmの平面形態は円形の土坑である。土坑内から土師器高坏のほか土師器の小破片が多数出土している。また、弥生土器の口縁部が１点確認されている。

第3節　奈良・平安時代の遺構

（1）住居址

① ＳＢ０８（図版なし）

ＡＱ－38 グリットを中心に検出した。出土遺物から９世紀後半の住居址と思われる。ＳＢ01・ＳＫ05を切る。床面を部分的に確認できただけであり、住居址の形・規模・住居内施設等まったく不明である。

出土遺物は重複するＳＢ01の中で時期外のものを当住居址の遺物と判断した。土師器の甕、須恵器の坏・壷の頸部、灰釉陶器の椀・皿などがある。

② ＳＢ１９（図版10）

ＢＰ－02 グリットを中心に検出した。出土遺物から９世紀中頃～後半の住居址と考えられる。覆土は褐色シルト質埴壌土単層である。プランは分かりにくかったが、床面の炭の広がりで把握した。出土遺物からＳＢ31・ＳＢ33より新しいと考えられる。ＳＫ21に切られる。主軸の方向は不明であるが、南北方向3.85ｍ×東西方向3.65ｍの方形の住居址である。残存する壁の高さは12㎝で、緩やかに立ち上がる。床面には全体に炭が薄く広がっており、堅固であった。主柱穴、炉・カマド等施設は確認できなかった。

出土遺物は須恵器の蓋・坏・蓋、灰釉陶器の皿がある。灰釉陶器の皿は住居址の検出作業の段階で東側壁付近から出土しており、確実に住居に付随するものかは不安な面もあるが遺構の重複関係とは矛盾しないので、当住居址の遺物と判断した。

③ ＳＢ２４（図版11）

ＡＯ－01 グリットを中心に検出した。出土遺物から９世紀中頃～後半の住居址と考えられる。覆土は小礫を多く含む暗褐色壌土単層である。遺構の重複はあったが、全周を調査できた。ＳＢ25・ＳＫ16に切られる。主軸はＮ107°Ｅを指し、主軸方向4.6ｍ×直行方向4.3ｍの方形の住居址である。残存する壁の高さは29㎝で、やや緩やかに立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。主柱穴１個（Ｐ1）及び貯蔵穴と思われる穴１基（Ｐ1）を確認した。カマド本体は確認できなかったが、東側壁際に赤く焼き締まった部分がありこれをカマドの痕跡と判断した。

出土遺物は須恵器坏がある。

④ ＳＢ２５（図版13）

ＡＮ－00 グリットを中心に検出した。出土遺物から９世紀中頃～後半の住居址と考えられる。覆土は暗褐色シルト質埴壌土単層である。遺構の重複により住居址角の内２方向は確認できなかったが、ほぼ全周を調査した。ＳＫ15・ＳＫ16に切られる。主軸はＮ60°Ｅを指し、主軸方向3.8ｍ×直行方向3.65ｍの若干不正ではあるが隅丸方形の住居址である。

床面は褐色土で堅固であったが、主柱穴は確認できなかった。住居址東側壁際でカマドの痕跡を確認した。粘土部分は既に残っておらず、正確な規模は不明であるが長さ65cm×幅70cmの石芯粘土カマドである。カマドの内部で若干の焼土を確認した。

出土遺物は黒色土器坏、須恵器坏・壷底部、軟質須恵器坏がある。また、刀子と思われる鉄製品が覆土中より出土している。

⑤　ＳＢ２９（図版14）

ＡＰ－04 グリットを中心に検出した。出土遺物から９世紀後半の住居址と考えられる。覆土は黒暗褐色シルト質埴土単層である。住居址の全周を確認できた。ＳＴ04・ＳＴ05に切られる。主軸はN53°Ｗを指し、主軸方向3.3ｍ×直行方向4.0ｍの方形の住居址である。残存する壁の高さは31cmで、緩やかに立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。住居内南隅で柱穴を１個検出したが、その性格は不明である。また、住居址の中央付近で炉を確認した。規模48cm×38cmの地床炉である。炉の南東側及び炉の底部で赤く焼き締まった面を確認できた。

出土遺物は図化できたものは無いが、土師器甕底部、須恵器の坏底部・甕破片、軟質須恵器坏底部がある。住居址の形態から鍛冶遺構の可能性も考えられるが、それを裏付けるような遺物は出土しなかった。

⑥　ＳＢ３１（図版15）

ＢＰ－03 グリットを中心に検出した。出土遺物から８世紀末～９世紀初頭の住居址と考えられる。覆土は暗褐色シルト質埴壌土単層である。撹乱により一部壊されていたが、全周を調査できた。ＳＢ33を切り、ＳＢ19に切られる。主軸はＮ６°Ｅを指し、主軸方向4.6ｍ×直行方向4.3ｍの隅丸方形の住居址である。残存する壁の高さは40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。主柱穴、炉・カマド等住居内施設は確認できなかったが、住居址北側壁際に焼土が散らばっており、これをカマドの痕跡と判断した。

出土遺物は須恵器坏・甕の頸部がある。

⑦　ＳＢ３２（図版15）

ＢＵ－00 グリットを中心に検出した。出土遺物から平安時代の住居址と考えられる。覆土は暗褐色シルト質埴壌土単層である。撹乱などにより住居址北東側角しか確認できなかった。ＳＢ35・ＳＢ37・ＳＢ38を切る。主軸はN75°Ｗを指し、規模は不明であるが方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは12cmで、緩やかに立ち上がる。

床面は暗褐色土で不明確であった。主柱穴は確認できなかったが、住居址の西方向の撹乱際でカマドを確認した。カマドの焚き口部分は壊れており正確ではないが、推定で長さ100cm×幅81cmの粘土カマドである。カマド内部の小さな穴は支脚石の抜けた痕と考えられる。この小さな穴付近で焼土を確認した。

出土遺物は土師器甕の破片、須恵器坏の破片などがあるが、図示できるものはなかった。

⑧　ＳＢ３３（図版15）

ＢＲ－02 グリットを中心に検出した。出土遺物から８世紀末～９世紀初頭の住居址と考えられる。覆土は暗褐色シルト質埴壌土単層である。住居址の南側角は削れており確認できなかった。ＳＢ31を切り、ＳＢ19に切られる。主軸はＮ48°Ｗを指し、主軸方向4.85ｍ×直行方向4.7ｍの隅丸方形の住居址である。残存する壁の高さは21㎝で、緩やかに立ち上がる。

床面は褐色土で堅固であった。主柱穴は確認できなかったが、西側壁中央付近でカマドを確認した。長さ90㎝×幅91㎝の焚き口部分のみ石を用いる粘土カマドである。カマドの焚き口で焼土が確認された。

出土遺物には土師器甕の口縁部、須恵器の蓋・坏がある。また、住居址覆土の中から鎌が、カマドの焚き口付近からは天井石の代わりとして用いられたと思われる直方体の土製品が出土している。

⑨　ＳＢ４７（図版20）

ＡＤ－02 グリットを中心に検出した。遺構の重複関係、住居址の形状から平安時代の住居址と考えられる。覆土は黒褐色シルト質埴土単層である。南側は調査範囲外にかかり、調査できなかった。ＳＢ43を切る。主軸はＮ92°Ｅを指し、主軸方向2.95ｍの南側に向かいやや狭まり不整であるが隅丸方形の住居址である。残存する壁の高さは17㎝でやや緩やかに立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。住居址東壁際の床面が赤く焼けており、この部分にカマドがあったと判断した。

出土遺物は土師器の小片が数点あるが、器種・時期等は判断できなかった。

⑩　ＳＢ５０（図版21）

ＢＰ－34 グリットを中心に検出した。出土遺物から９世紀中頃～後半の住居址と考えられる。覆土は暗褐色シルト質埴土単層である。住居址西側は調査区外にかかり調査できなかった。ＳＢ49・ＳＫ25を切る。ＳＫ25との切り合いが判断できず同時に掘り下げたため、図面上で新旧が逆転してしまっている。主軸はＮ106°Ｅを指し、主軸方向の規模は不明であるが直行方向4.8ｍの方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは45㎝で、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。主柱穴２個（Ｐ1・Ｐ2）およびカマドを確認した。カマドはすでに破壊をうけており、袖石はほとんど抜き取られていた。焼土の範囲から推測すると、長さ100㎝×幅104㎝の石芯粘土カマドである。

出土遺物は土師器の甕破片・小型壷、須恵器の椀蓋・坏・壷の底部がある。

⑪　ＳＢ５３（図版23）

ＢＴ－38 グリットを中心に検出した。出土遺物から９世紀後半の住居址と考えられる。覆土は暗褐色シルト質埴土単層である。他の遺構と重複していたが、全周を確認できた。ＳＢ58を切る。主軸はＮ69°Ｗを指し、主軸方向2.4ｍ×直行方向2.2ｍのやや不整ではあるが、方形の住居址である。残存する壁の高さは14㎝で緩やかに立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。住居址西側で貯蔵穴１基（Ｐ1）及びカマドを確認した。左側袖は壊れていたが、長さ75cm×幅77cmの石芯粘土カマドである。カマド中央の小穴は支脚の抜き取り痕と思われる。

出土遺物は土師器甕の破片、須恵器坏、灰釉陶器片がある。

⑫　ＳＢ５５（図版24）

ＢＯ－44 グリットを中心に検出した。出土遺物から８世紀末～９世紀初頭の住居址と考えられる。覆土は黒褐色シルト質埴土単層である。他の遺構との重複はなく、単独で検出した。主軸はN12°Ｅを指し、主軸方向4.4ｍ×直行方向4.1ｍの方形の住居址である。残存する壁の高さは29cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は褐色土で、堅固であった。カマドは確認できなかったが住居址北壁際に焼土が散らばっており、これをカマドの痕跡と判断した。

出土遺物は土師器甕、須恵器坏・蓋がある。

⑬　ＳＢ５６（図版24）

ＢＴ－45 グリットを中心に検出した。出土遺物から９世紀代の住居址と考えられるが、詳細時期は不明である。覆土は小礫混じりの暗褐色シルト質埴壌土単層である。住居址北側は調査範囲外にかかり、部分的にしか調査できなかった。他の遺構と重複は無く単独で検出した。主軸は不明であるが、東西方向4.55ｍの方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは57cmで、やや緩やかに立ち上がる。

床面は褐色土で、軟弱であった。主柱穴ほか住居内施設は確認できなかった。

出土遺物は少なく、図示できたものは須恵器坏がある。

（２）土　　坑

①　ＳＫ０１（図版28）

ＡＶ－42 グリットで検出した。出土遺物から平安時代の土坑と考えられる。ＳＴ01に切られる。長軸360cm×短軸203cm×深さ６cmの平面形態は不整楕円形の土坑である。遺物は須恵器蓋がある。

②　ＳＫ０４（図版28）

ＡＯ－40 グリットで検出した。出土遺物から８世紀中頃の土坑と考えられる。ＳＢ02を切る。長軸106cm×短軸102cm×深さ36cmの平面形態は円形の土坑である。土坑内から土師器甕の破片及び須恵器坏、カマドの芯材として使用されたと思われる直径20cmほどの石が拳大の小石と共に出土している。

③　ＳＫ０７（図版29）

ＡＮ－44 グリットで検出した。出土遺物から平安時代の土坑と考えられる。ＳＢ09を切る。長軸60cm×短軸48cm×深さ33cmの平面形態は円形の土坑である。出土遺物は土師器甕の底部、須恵器坏がある。

④　ＳＫ１０（図版29）

ＢＦ－44 グリットにおいて他の遺構と重複は無く単独で検出した。出土遺物から平安時代の土坑と考えられる。長軸340㎝×短軸180㎝×深さ78㎝の平面形態は不整形の土坑である。複数のピットが重なったもののようにも思えたが、一つの土坑として判断した。土坑内から土師器の破片、須恵器坏破片、灰釉陶器破片が出土している。

⑤　ＳＫ１２（図版29）

ＢＧ－43 グリットにおいて、他の遺構と重複は無く単独で検出した。出土遺物から平安時代の土坑と考えられる。長軸210㎝×短軸208㎝×深さ45㎝の平面形態は円形の土坑である。土坑内から須恵器甕の破片が多数と灰釉陶器の破片が僅かに出土している。

⑥　ＳＫ１５（図版30）

ＡＭ－01 グリットで検出した。出土遺物から平安時代の土坑と考えられる。ＳＢ25を切る。長軸103㎝×短軸90㎝×深さ28㎝の平面形態は円形の土坑である。土坑内からは土師器甕の破片、黒色土器坏、須恵器坏及び直径20㎝ほどの平らな石が出土している。

⑦　ＳＫ１６（図版30）

ＡＮ－01 グリットで検出した。出土遺物と遺構の重複関係から平安時代の土坑と考えられる。ＳＢ25を切る。長軸82㎝×短軸62㎝×深さ24㎝の平面形態は円形の土坑である。土坑内からは土師器の小破片、須恵器の破片が出土している。

第４節　中世の遺構

（１）方形竪穴

①　ＳＢ１４（図版８）

ＢＰ－47 グリットを中心に検出した。形態から中世の方形竪穴と考えられる。覆土は黒褐色土シルト質埴壌土単層であり、底部には炭化した米と炭が厚く堆積していた。用地境にかかっていたため、西側の壁は確認できなかった。主軸の方向は不明であるが、南北方向2.26ｍの方形または長方形の竪穴遺構である。残存する壁の高さは78㎝で、垂直に立ち上がる。床面は褐色土で堅固であったが、柱穴等は確認できなかった。

出土遺物は床面から出土した炭化米のほかは、覆土中から天目茶碗の破片が出土した。

（２）建物址

今次調査では直径30㎝前後のものを中心に相当数のピットが確認されている。その内の多くは当時期の掘立柱建物を構成するものと考えられるが、現場での観察及び図面上での検討においても建物址として把

握できるものは少なかった。以下はその中で建物址として把握できたものを上げておく。

① ＳＴ０１（図版25）

ＡＡ－45 グリットを中心に検出した。遺物は無く時期は断定できないが、形態から中世の建物址と考えられる。規模は梁行6.4ｍ×桁行5.0ｍ、柱間は梁行1.5～1.0ｍ、桁行1.5～0.9ｍの５間×４間の掘立柱建物址である。棟方向はＮ22° Ｅを指す。

② ＳＴ０２（図版26）

ＡＶ－42 グリットを中心に検出した。遺物は無く時期は断定できないが、形態から中世の建物址と考えられる。規模は梁行6.9ｍ×桁行3.4ｍ、柱間は梁行2.0～1.3ｍ、桁行3.4ｍの４間×１間の掘立柱建物址である。棟方向はＮ21° Ｅを指す。

③ ＳＴ０３（図版26）

ＡＲ－40 グリットを中心に検出した。遺物は無く時期は断定できないが、形態から中世の建物址と考えられる。規模は梁行2.5ｍ×桁行2.2ｍ、柱間は梁行1.3～1.0ｍ、桁行2.2ｍの２間×２間の掘立柱建物址である。棟方向はＮ65° Ｗを指す。

④ ＳＴ０４（図版27）

ＡＲ－40 グリットを中心に図面上で把握した。形態から中世の建物址と考えられる。規模は梁行4.1ｍ×桁行2.0ｍ、柱間は梁行1.2～0.9ｍ、桁行1.0～0.7ｍの４間×２間の掘立柱建物址である。棟方向はＮ24° Ｅを指す。未確認の柱穴があり形は整っていないが、一連の建物址と判断した。

⑤ ＳＴ０５（図版27）

ＡＰ－05 グリット中心に図面上で把握した。形態から中世の建物址と考えられる。規模は梁行2.3ｍ×桁行1.8ｍ、柱間は梁行1.2～1.0ｍ、桁行1.8～1.7ｍの２間×１間の掘立柱建物址である。棟方向はＮ７° Ｅを指す。

⑥ ＳＴ０６（図版27）

ＡＲ－06 グリット中心に図面上で把握した。形態から中世の建物址と考えられる。規模は梁行5.2ｍ×桁行1.5ｍ、柱間は梁行1.6～1.0ｍ、桁行1.5～1.2ｍの４間×１間の掘立柱建物址である。棟方向はＮ22° Ｗを指す。未確認の柱穴があり形は整っていないが、長方形の建物址と判断した。

⑦ ＳＴ０７（図版27）

ＡＱ－08 グリット中心に図面上で把握した。形態から中世の建物址と考えられる。規模は梁行5.9ｍ×桁行1.2ｍ、柱間は梁行1.3～0.7ｍ、桁行1.2～1.0ｍの６間×１間の掘立柱建物址である。棟方向はＮ19°

Wを指す。ピットの形は揃っていないが、一連の建物址と判断した。

⑧　ＳＴ０８（図版28）

ＡＰ－08 グリット中心に図面上で把握した。形態から中世の建物址と考えられる。規模は梁行2.1ｍ×桁行2.0ｍ、柱間は梁行2.1ｍ、桁行2.0ｍの１間×１間の掘立柱建物址である。棟方向はN12°Ｅを指す。

⑨　ＳＴ０９（図版28）

ＡＭ－03 グリット中心に図面上で把握した。形態から中世の建物址と考えられる。規模は梁行2.3ｍ×桁行1.3ｍ、柱間は梁行2.2ｍ、桁行1.1ｍの１間×１間の掘立柱建物址である。棟方向はN12°Ｅを指す。

（3）土　坑

①　ＳＫ２７（図版31）

ＢＲ－45 グリットで検出した。出土遺物から中世の土坑と考えられる。他の遺構と重複は無く、単独で検出した。長軸150cm×短軸は推定85cm×深さ21cmの平面形態は楕円形の土坑である。土坑内から内耳の破片が出土している。

第５節　時期不明の遺構

（1）住居址

①　ＳＢ０９（図版６）

ＡＯ－45 グリットを中心に検出した。切り合い関係から４世紀後半以前の住居址と考えられるが、詳細は不明である。覆土は小礫を多く含む黒褐色シルト質壌土単層である。ＳＢ03・ＳＢ06・ＳＫ06・ＳＫ07に切られる。主軸方向は不明であるが、一辺4.8ｍ前後の隅丸方形の住居址と思われる。残存する壁の高さは60cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は暗褐色土で確認できた部分は堅固であった。主柱穴、炉・カマド等施設は確認できなかった。

出土遺物は覆土中から土師器の小破片が僅かに出土しているが、時代の判断材料としては不確実である。

②　ＳＢ２０（図版10）

ＢＴ－03 グリットを中心に検出したが、住居址の時代は判断できなかった。覆土は暗褐色シルト質埴土単層である。調査区外にかかり、東側半分程度しか調査できなかった。ＳＢ34・ＳＢ40を切る。主軸の方向は不明であるが、南北方向3.95ｍの方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは24cmで、やや緩やかに立ち上がる。床面は褐色土で、軟弱であった。主柱穴、炉・カマド等施設は確認できなかった。

出土遺物は土師器の小破片が数点出ただけで、器形・時期等は判断できなかった。

③　ＳＢ２１（図版10）

ＡＵ－01 グリットを中心に検出したが、住居址の時代は判断できなかった。覆土は小礫を多く含む暗褐色壌土単層である。東側は削られ確認できなかった。ＳＫ14に切られる。ＳＢ10・ＳＢ22・ＳＢ23と重複するが、新旧関係は不明である。主軸の方向、東西方向の規模は不明であるが、南北方向は5.45ｍのやや歪んではいるが方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは21㎝で、やや緩やかに立ち上がる。褐色土の面を床面としたが、不明確であった。主柱穴、炉・カマド・その他の施設は確認できなかった。

④　ＳＢ３９（図版17）

ＢＲ－00 グリットを中心に検出した。遺構の重複関係から古墳時代以前の住居址と判断できるが、詳細時期は不明である。覆土は暗褐色シルト質埴土単層である。遺構の重複などにより壁はほとんど確認できなかったが、床面の広がりで判断した。ＳＢ33・ＳＢ35・ＳＢ36に切られる。主軸の方向、南北方向の規模は不明であるが東西方向4.75ｍの方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは、残りの良いところでも６㎝ほどである。床面は褐色土で、堅固であった。主柱穴・カマド等住居内施設は確認できなかった。

出土遺物は器種・器形が分かるものはまったく無く、時代も判断できなかった。

⑤　ＳＢ４０（図版18）

ＢＴ－30 グリットを中心に検出したが、住居址の時代は判断できなかった。覆土は暗褐色シルト質埴土単層である。ＳＢ20を調査するうちに、床面の高さが違ってきたため別の住居址と判断して遺構番号をつけた。ＳＢ20に切られる。主軸の方向、東西方向の規模は不明であるが、南北方向4.35ｍの方形と推測される住居址である。残存する壁の高さは21㎝で、緩やかに立ち上がる。床面は褐色土で、堅固であった。主柱穴・カマド等住居内施設は確認できなかった。

出土遺物は土師器の小破片があっただけで、器種・時期等は判断できなかった。

⑥　ＳＢ４３（図版19）

ＡＦ－01 グリットを中心に検出した。出土遺物から古墳時代後期～平安時代と思われるが、詳細時期は不明である。覆土は小礫を多く含む黒褐色シルト質埴壌土単層である。撹乱で一部壊されているものの、ほぼ全周を確認できた。ＳＢ41を切り、ＳＢ47に切られる。主軸はＮ110°Ｅを指し、主軸方向40.5ｍ×直行方向3.7ｍの方形の住居址である。残存する壁の高さは13㎝でやや緩やかに立ち上がる。
床面は褐色土で、堅固であった。カマドは殆ど残っておらず、確認できた袖部分は長さ45㎝×幅57㎝であり、粘土カマドと推測される。残った袖の部分では赤く焼き締まったところも確認できた。

出土遺物は少ない。土師器の小破片と須恵器の有高台坏の底部があるが、時期を判断できなかった。

⑦　ＳＢ４５（図版20）

ＡＤ－05 グリットを中心に検出したが、住居址の時代は判断できなかった。覆土は暗褐色シルト質埴

土単層である。確認できた範囲では遺構の重複は無かった。撹乱等により住居址西側壁の一部しか確認できなかった。残存する壁の高さは20cmで、緩やかに立ち上がる。床面は褐色土で、堅固であった。

当住居址に伴う遺物は確認されなかった。

（2）土　坑

① ＳＫ０２（図版28）

ＢＢ－44 グリットで検出した。他の遺構と重複無く単独で検出したが、遺物は無く時期は不明である。長軸106cm×短軸103cm×深さ40cmの平面形態は円形の土坑である。覆土内より土器は出土しなかったが、土坑底部には炭が散らばり、石がまとまって埋まっていた。

② ＳＫ０３（図版28）

ＡＰ－39 グリットで検出した。ＳＢ02を切っていたが、遺物は無く時期は不明である。長軸80cm×短軸58cm×深さ40cmの平面形態は円形の土坑である。

③ ＳＫ０６（図版29）

ＡＰ－45 グリットで検出した。ＳＢ03を切っていたが、遺物は無く時期は不明である。長軸224cm×短軸83cm×深さ46cmの平面形態は長方形の土坑である。

④ ＳＫ１３（図版30）

ＢＧ－46 グリットで検出した。他の遺構と重複は無く単独で検出したが、遺物は無く時期は不明である。長軸58cm×短軸46cm×深さ29cmの平面形態は円形の土坑である。底部は水平でなく、更に東側は壁より若干奥に入りこんでいた。

⑤ ＳＫ１７（図版30）

ＡＶ－17 グリットで検出した。他の遺構と重複は無く単独で検出したが、遺物は無く時期は不明である。長軸146cm×短軸124cm×深さ28cmの平面形態は円形の土坑である。

⑥ ＳＫ１８（図版30）

ＡＯ－05 グリットで検出した。他の遺構と重複は無く単独で検出したが、遺物は無く時期は不明である。長軸124cm×短軸114cm×深さ23cmの平面形態は円形の土坑である。

⑦ ＳＫ１９（図版30）

ＡＱ－04 グリットで検出した。ＳＴ04に切られるが、遺物は無く時期は不明である。長軸103cm×短軸80cm×深さ24cmの平面形態は方形の土坑である。

⑧　ＳＫ２０（図版30）

ＢＴ－00 グリットで検出した。ＳＢ34・ＳＢ35を切るが、遺物は無く時期は不明である。長軸325cm×短軸80cm×深さ21cmの平面形態は長方形の土坑である。

⑨　ＳＫ２１

ＢＱ－02 グリットで検出した。ＳＢ19・ＳＢ33を切る。遺物は無く詳細時期は不明であるが、比較的新しい土坑と思われる。長軸82cm×短軸70cm×深さ13cmの平面形態は円形の土坑であり、土坑覆土には多量の焼土が確認された。

⑩　ＳＫ２２（図版30）

ＢＱ－03 グリットで検出した。ＳＢ33を切ると思われる。遺物は無く時期は不明であるが、ＳＫ21と同様比較的新しい土坑と思われる。長軸68cm×短軸52cm×深さ７cmの平面形態は円形の土坑である。底部は赤く焼き締まっていた。

第Ⅳ章　まとめ

今次調査の結果は前述のとおりである。しかし、今次調査地点のすぐ東側低地まで天竜川の流路の移動や氾濫の影響を大きく受けており、当地区の天竜川最低位段丘の様相は依然不明のままである。また、限られた時間内での作業であり十分な検証が行えたとはいえないが、本遺跡集落の変遷と周辺遺跡の状況を時代ごとに述べて、まとめとしたい。

1．縄文時代・弥生時代

本遺跡では縄文時代の住居址は確認されていない。今次調査では土器もまったく確認されておらず、縄文時代においては居住域とならなかったようである。

弥生時代においても住居址は確認されていない。今次調査時に確認された弥生時代後期の土器については出土資料が少なく判断は難しいが、後に触れる古墳時代前期の住居址との関係をもう少し検討する必要があろう。北隣の辻前遺跡でも住居址は確認されていないものの、弥生時代後期の土器が確認されている。このことから、本遺跡の上段、あるいは天竜川の氾濫により痕跡を留めていない下段に当該時代の集落が存在した可能性も否定はできない。

川路地区の最低位段丘では、井戸下遺跡で弥生時代中期の集落が確認されている。この遺跡は留々女遺跡で確認された天竜川の氾濫原より標高で３ｍ程低い場所であるが、この地は背後に固い岩盤地帯の峡谷部を控えており天竜川が氾濫しても土砂ごと押し流されることが無く、当時の集落址が堆積土の下に残ったものと考えられる。この遺跡の調査結果により、川路地区最低位段丘における有史以前の集落の状況を、僅かではあるが窺うことができる。

2．古墳時代

本遺跡の中心をなす時代であり、38軒を確認した。他住居址との重複や出土資料が十分でない等で若干の混乱はあると思われるが、詳細な時期を検討すると次のようになる。

4世紀後半……ＳＢ03・ＳＢ04・ＳＢ05

5世紀後半……ＳＢ11・ＳＢ13・ＳＢ18・ＳＢ26・ＳＢ36・ＳＢ42・ＳＢ46・ＳＢ58

6世紀前半……ＳＢ01・ＳＢ02・ＳＢ06・ＳＢ07・ＳＢ10・ＳＢ23・ＳＢ28・ＳＢ41・ＳＢ57

6世紀後半……ＳＢ12・ＳＢ17・ＳＢ22・ＳＢ30・ＳＢ34・ＳＢ37・ＳＢ38・ＳＢ44・ＳＢ51

7世紀……ＳＢ16・ＳＢ27・ＳＢ54

留々女遺跡の集落の出現は４世紀後半になる。この時期の住居址は遺跡内北側に固まっており、試掘調査では確認できなかったが、北隣の湿地を生産基盤にしていた可能性が高い。しかし、5世紀前半には集落は断絶する。これは周辺の遺跡でも同じような状況であり、川路地区下段や天竜川対岸の龍江地区では弥生時代後期の集落が確認されて以後、３世紀後半から５世紀前半にかけての集落が確認できない。飯田

市内に於いても同様の傾向があり、当該期の集落の確認は恒川遺跡群の他はそれほど多くない。

5世紀後半になると当遺跡内で再び集落が営まれるようになる。住居址は調査範囲全体に広がり、当遺跡の範囲から推測するとかなり大規模な集落が営まれていたものと推測される。6世紀になっても当遺跡内では大規模な集落が営まれる。

古墳時代について特筆されるのは、ＳＢ23の出土遺物量の豊富さと器種・器形の多様さである。現場において住居址の切り合い関係の判断を誤ったことや上層にあったであろう平安時代の住居址を把握できなかったことなどから、若干の時期外遺物の混入を認めざるを得ないが、6世紀前半の基準資料の一つとなると期待される。当住居址は本遺跡内の住居址の中でも特別大きく、当遺跡集落の中では比較的力を持ったものの住居址と推測される。

留々女遺跡や川路地区下段に見られるような5世紀後半以降の集落の繁栄は、当地区における古墳の構築と合致する。依然詳細時期が不明な古墳は多いものの、当地区の古墳は5世紀後半から6世紀のものと考えられる。留々女遺跡内に古墳は確認されていないが、隣接する殿村遺跡・辻前遺跡には複数の古墳が存在する。さらに北の久保田遺跡には二重周溝を持つ大型の前方後円墳である久保田1号古墳も存在しており、これら遺跡内の集落と当地域の古墳は密接な関係にあったといえる。

3．奈良・平安時代

7世紀になると再び当遺跡内の集落は衰退する。このことについても飯田市全域の見られる傾向で、7世紀から8世紀末まで集落は減少する。特に7世紀末～8世紀前半の集落は、市内ではこれまで座光寺恒川遺跡群・上郷　堂垣外遺跡・松尾　田圃遺跡・竜丘　安宅遺跡など低位段丘面の限られた遺跡でしか確認されていない。そして、8世紀前半から小規模ではあるが集落は増加し、8世紀末頃になると本遺跡も含めた市内全域で確認されるようになる。この時期の集落の消長は政治的要因も大きいとされるが、明確な証拠はない。

留々女遺跡では古墳時代と年代幅を異にするが、平安時代住居址について3時期に亘り10軒の詳細時期の判断ができた。状況は次の通りである。

8世紀末～9世紀初頭…… ＳＢ31・ＳＢ33・ＳＢ55

9世紀中頃～9世紀後半…… ＳＢ19・ＳＢ24・ＳＢ25・ＳＢ50

9世紀後半…… ＳＢ08・ＳＢ29・ＳＢ53

本遺跡の平安時代住居址も古墳時代中・後期同様に調査区全域で確認できる。また、今次調査範囲の北西、当川路地区の中位段丘面寄りで、遺構に伴わない当該期の遺物が特に多いことから平安時代の集落は更に北西側の傾斜地に展開していたものと推測される。周辺の遺跡では、これほど多数の平安時代の住居址は確認されておらず、当地域の中心的集落であったと考えられる。

平安時代における留々女遺跡集落は前述のとおり8世紀末～9世紀初頭に出現し、9世紀後半をもって消滅する。その他の川路地区低位段丘に立地する同時期の集落は、久保田遺跡では留々女遺跡に若干先行する8世紀後半のみのしか確認できない。辻前遺跡では確認された住居址は少なく資料は断片的であるが、調査時に確認された遺構外遺物まで含めて見ると、8世紀後半から9世紀後半までの集落が存在していた

と推測される。井戸下遺跡では集落が確認されていないものの９世紀後半から10世紀後半の遺物が確認されており、周辺に同時期の集落が存在したことが推測されている。また、調査で確認された水田址は同遺跡集落の断絶する古墳時代後期から９世紀後半以前のものと推定されている。このような留々女遺跡を含めた集落の消長を検討することにより、平安時代における天竜川最下段の生産域の様相と集落移動の状況を窺い知ることができといえる。

一方、天竜川対岸を見ると、細新遺跡では古墳時代末期に集落が消滅し、８世紀後半から８世紀末にかけて再出現している。そして、途中不明瞭な時期があるものの11世紀中頃まで継続する。また、細新遺跡の北、龍江城遺跡・龍江阿高遺跡からも集落は不明であるが、８世紀後半から９世紀後半までの遺物が多数出土している。

４．中　　世

今次調査では１基の方形竪穴と７基の掘立柱建物址柱を確認した。ただ、遺跡全体に分布する小柱穴は現地調査及び図上復元でも建物址として把握できなかったが、ほとんどがこの時期の建物址のものと考えられ、実際の建物数はもっと多かったと思われる。

川路地区では、井戸下遺跡で周囲を堀（溝）に囲まれた、14世紀から15世紀後半の豪農的な有力者の館跡が確認されている。一方、留々女遺跡では出土遺物の時代・産地について検討ができなかったため、暴論といえなくも無いが、確認された中世遺構は井戸下遺跡の中世遺構と比較すると柱穴以外に特別な遺構を伴っておらず、一箇所に集中して幾度となく建て替えられた様子も無い。従って、本遺跡の中世遺構は14世紀以降の文献等に見られる河路郷（下河路郷）の一般集落と推測される。

留々女遺跡の集落の変遷はこれまでに述べてきたとおりである。本遺跡を含め、川路地区下段及び最下段おける集落の消長は、市内全域に見られる集落の消長と特別な差があるとはいえない。しかし、当地域の集落の推移を詳細に検証していくことで、天竜川下流域に暮らす人々が天竜川の氾濫により居住地の移動を余儀なくされながらも、逞しく暮らしていた様子を窺うことができるのではないかと思われる。これは、当地域に暮らす人々が天竜川の氾濫によりもたらされる肥沃な土を利用して農耕を営むことで、幾たびも洪水に見舞われながらも天竜川の傍から離れることができなかった証といえよう。

【参考文献】

飯田市教育委員会　1986 『恒川遺跡群』遺物編

飯田市教育委員会　1988 『細新遺跡』

飯田市教育委員会　1997 『龍江城・龍江阿高遺跡』

飯田市教育委員会　2001 『井戸下遺跡』

飯田市教育委員会　2002 『久保田遺跡・久保田１号古墳・燄魔王塚古墳　その１』

長野県史刊行会　1988 『長野県史』考古資料編　全１巻（四）遺構・遺物

下伊那教育会考古学委員会 1999「飯伊地方の古墳時代の集落と古墳について」『伊那』第47-4号

小平　和夫　1990 「古代の土器」『総論編』（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書４

齊藤　孝正・後藤　建一　1995 『須恵器集成図録』　第３巻

花岡　弘・西山　克己　1995 「信州の６世紀・７世紀の土器様相―現時点での概略として―」

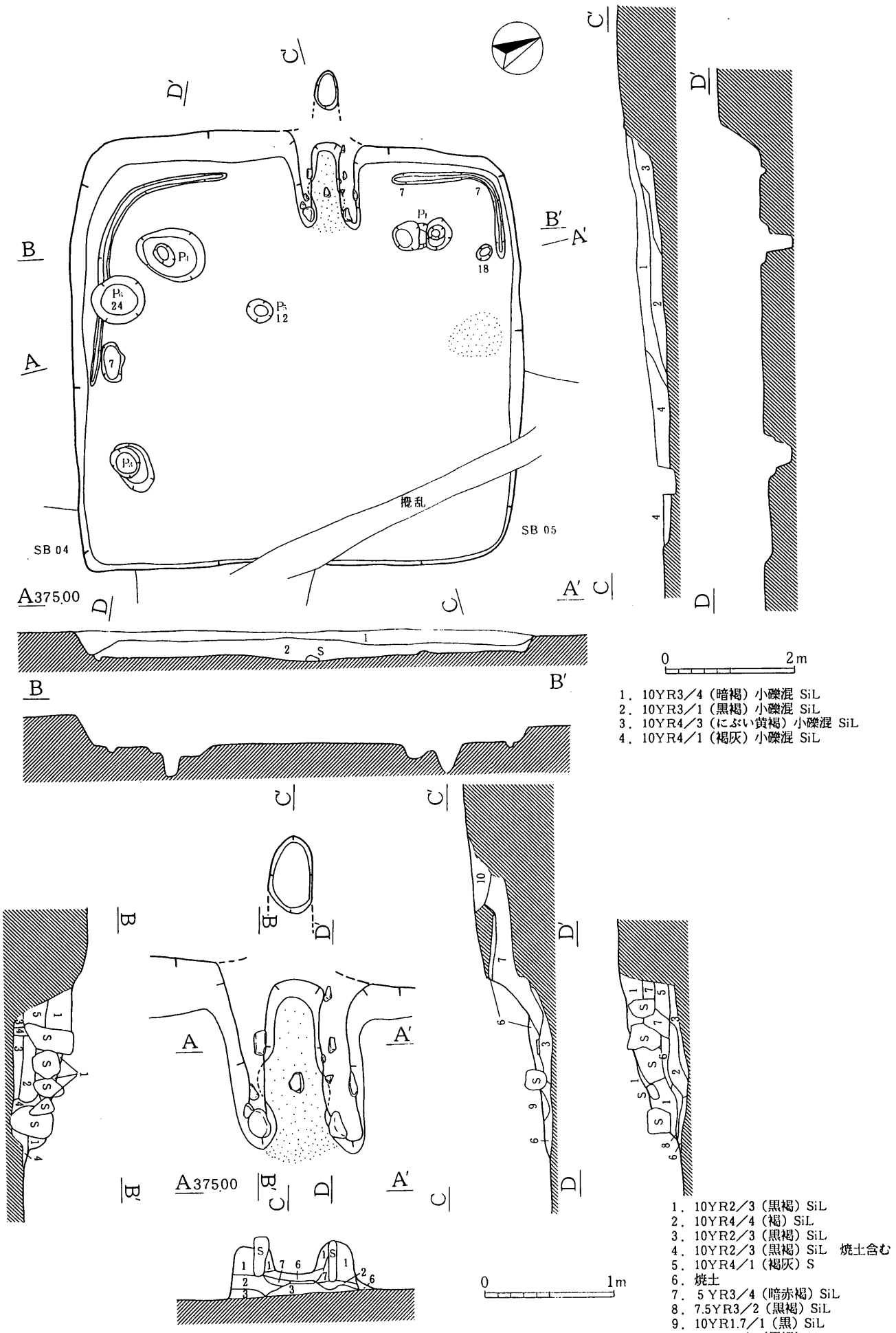
広田　和穂　1999 「土器」『榎田遺跡』長野県埋蔵文化センター発掘調査報告書37

西山　克己　1999 「下伊那の古墳時代における新来文化の受容」『伊那』第47-4号

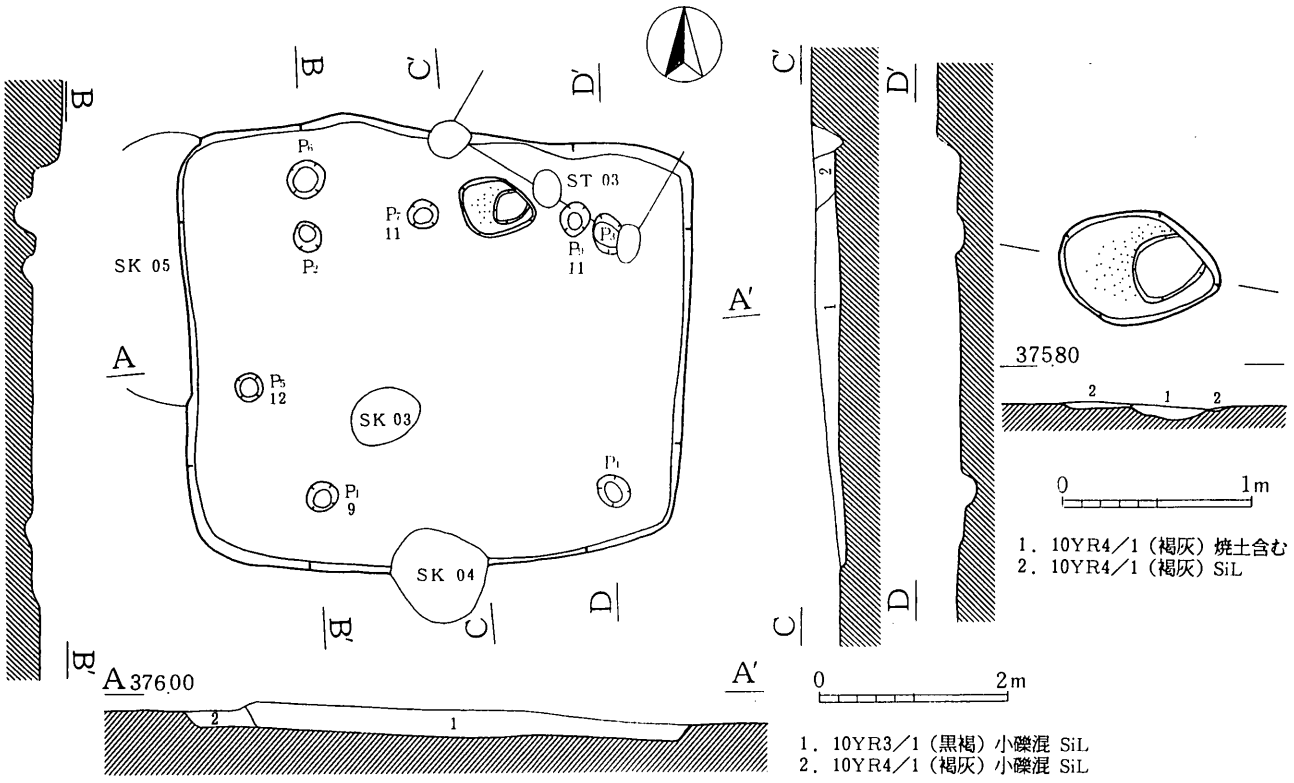
山下　誠一ほか　1999 「長野県における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究』５号

小平　和夫　2003 「飯田盆地における古代集落の展開」『信濃』第55-2号

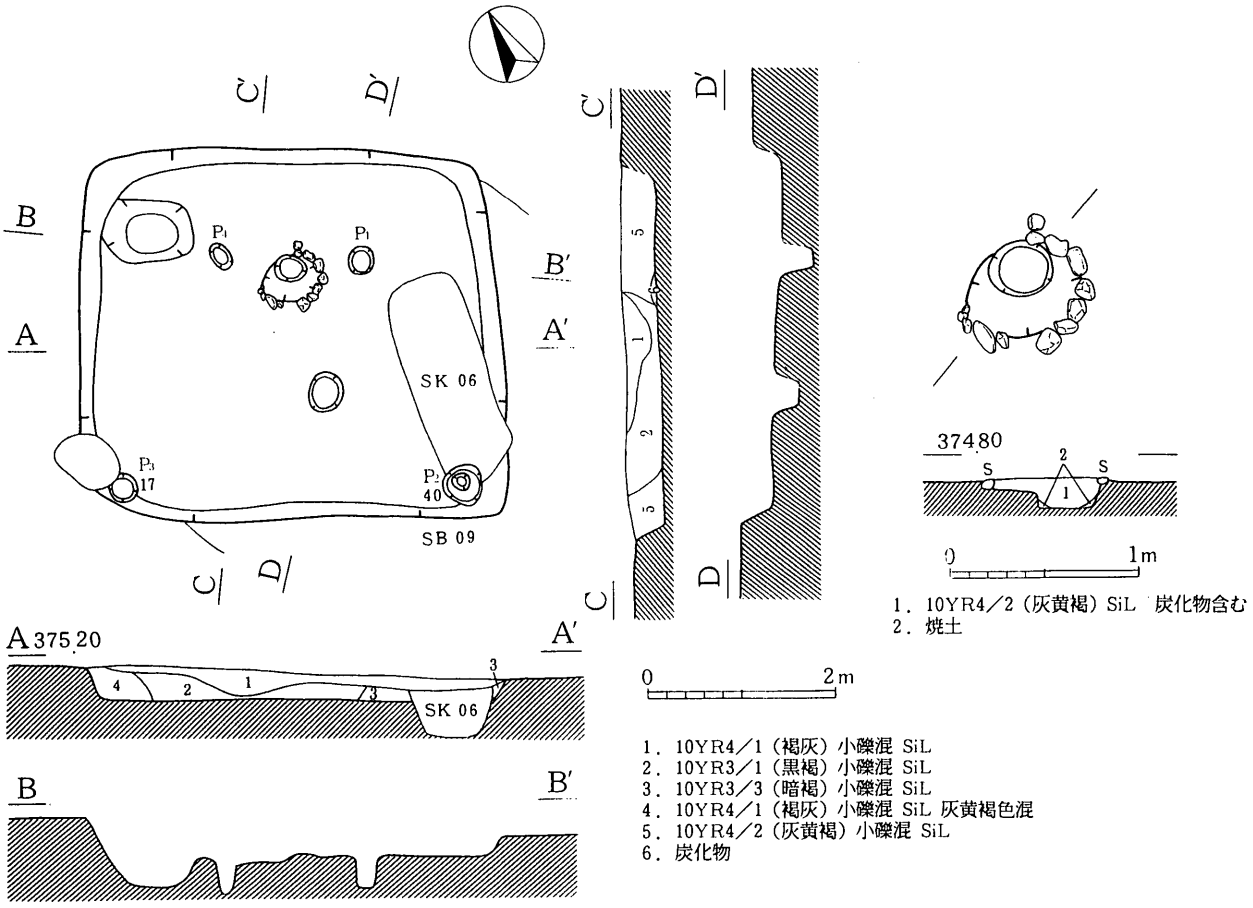
注：飯田市内の奈良・平安時代集落の消長については上記参考文献の他に、『飯田市誌』編さん委員会「奈良平安時代班」収集の飯田市内の古代集落資料を参考にした。


SB 04
SB 05
撹乱
A375.00
0 2m
1. 10YR3／4（暗褐）小礫混 SiL
2. 10YR3／1（黒褐）小礫混 SiL
3. 10YR4／3（にぶい黄褐）小礫混 SiL
4. 10YR4／1（褐灰）小礫混 SiL
0 1m
1. 10YR2／3（黒褐）SiL
2. 10YR4／4（褐）SiL
3. 10YR2／3（黒褐）SiL
4. 10YR2／3（黒褐）SiL 焼土含む
5. 10YR4／1（褐灰）S
6. 焼土
7. 5YR3／4（暗赤褐）SiL
8. 7.5YR3／2（黒褐）SiL
9. 10YR1.7／1（黒）SiL
10. 10YR3／1（黒褐）SiL

図版1　SB01

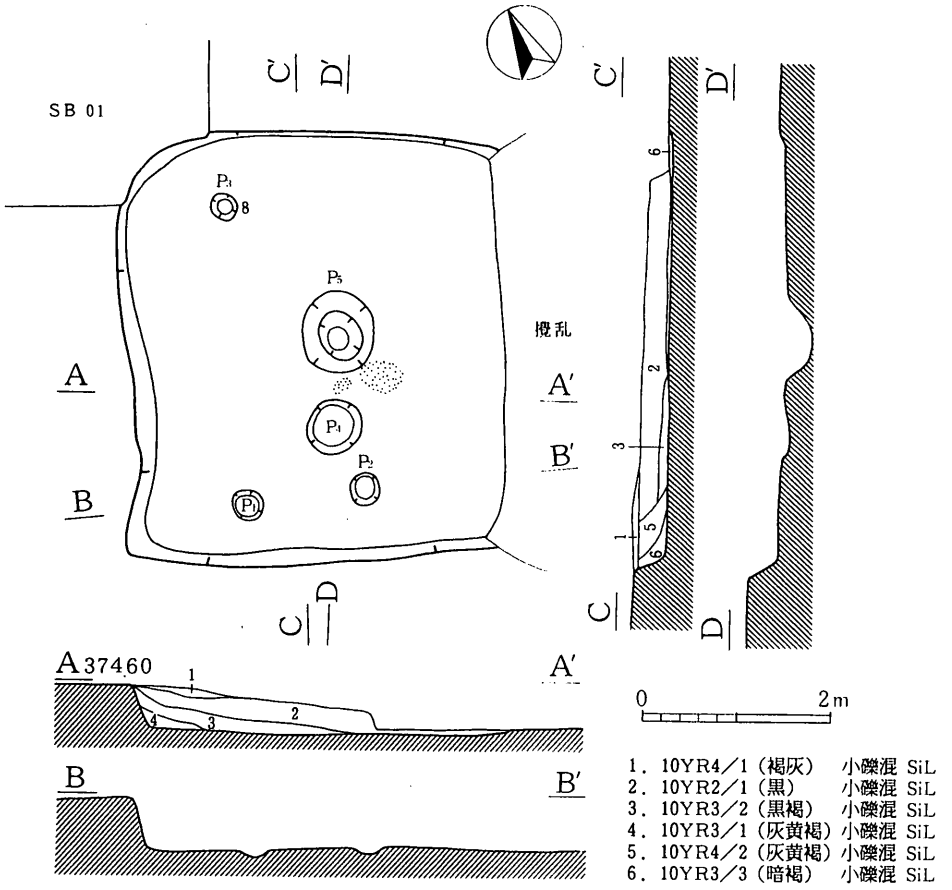


SB 02

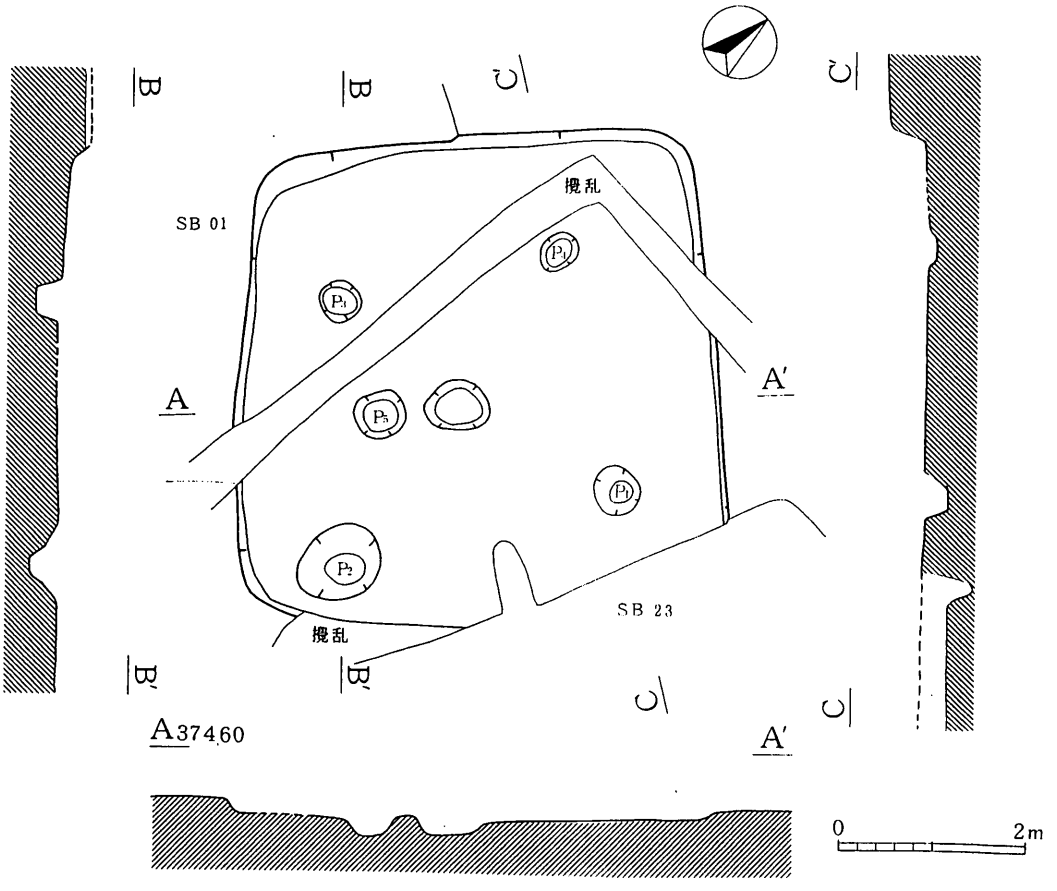


SB 03

図版 2　SB02・SB03

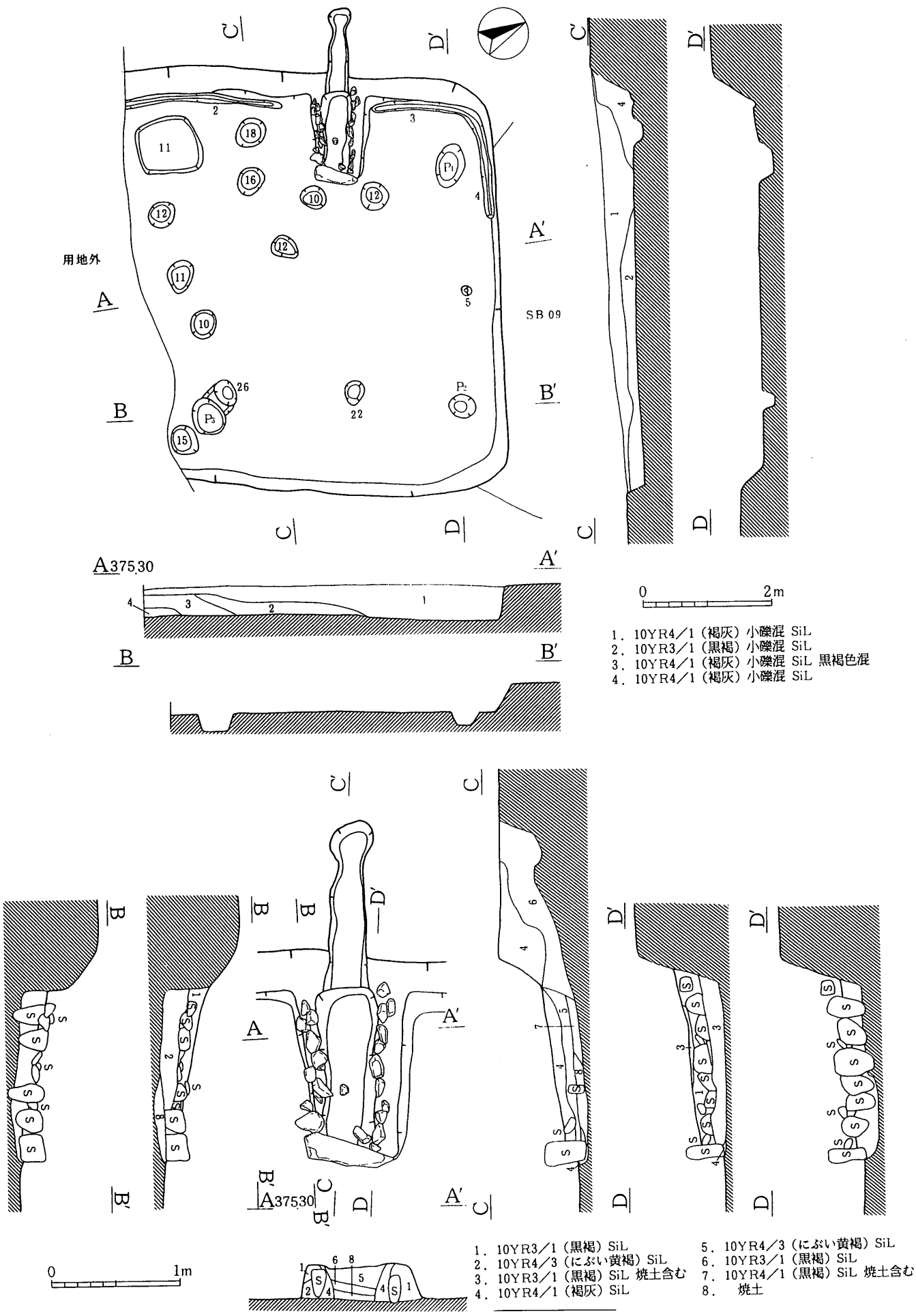


SB 04

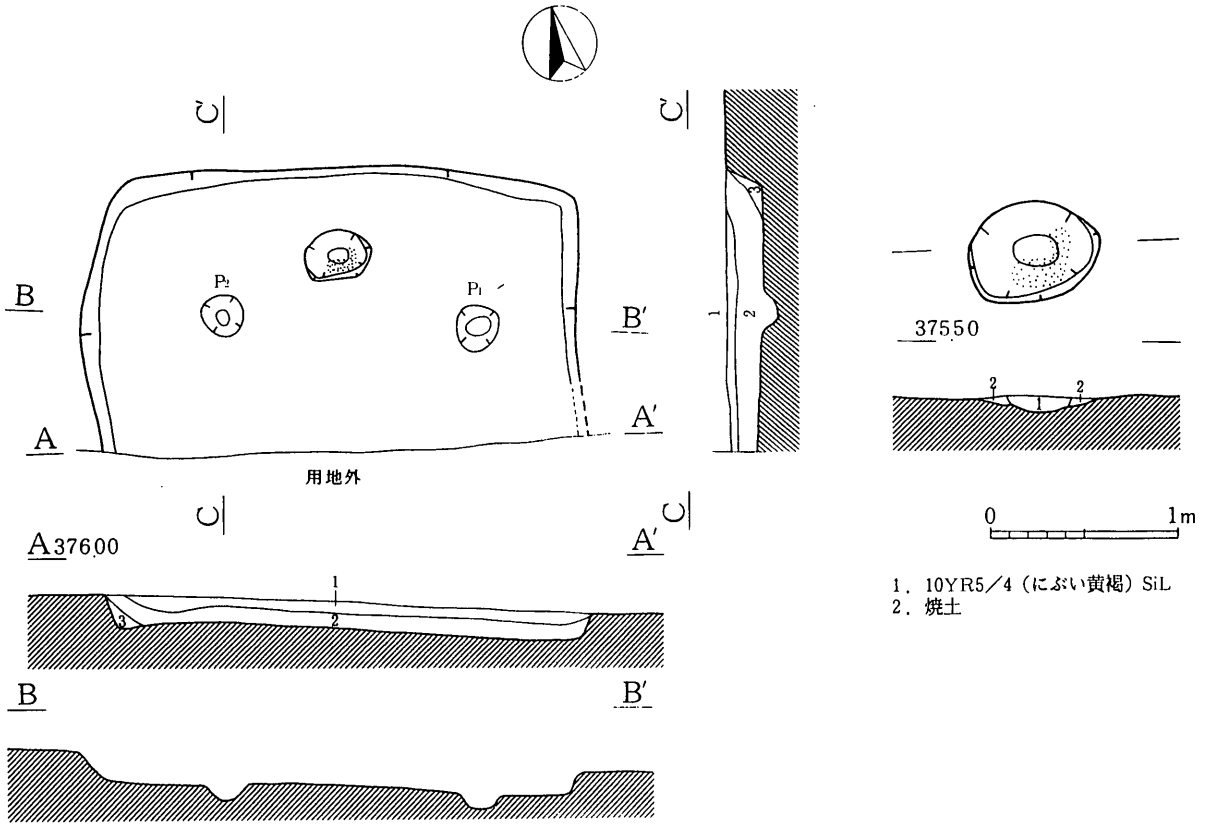


SB 05

図版3　SB04・SB05

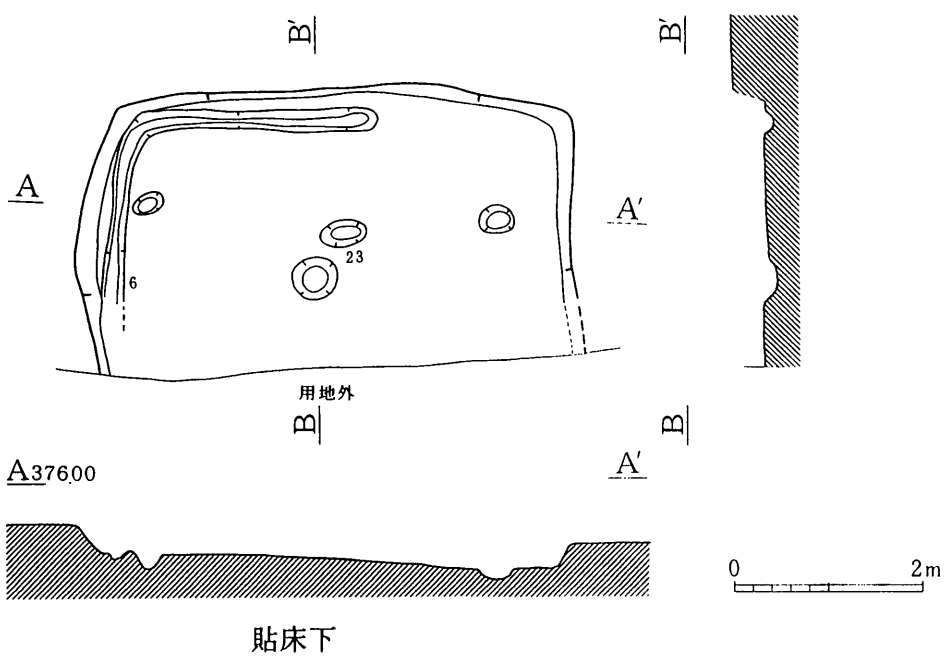

用地外
SB 09
A375.30
0 2m
1. 10YR4／1（褐灰）小礫混 SiL
2. 10YR3／1（黒褐）小礫混 SiL
3. 10YR4／1（褐灰）小礫混 SiL 黒褐色混
4. 10YR4／1（褐灰）小礫混 SiL
0 1m
1. 10YR3／1（黒褐）SiL
2. 10YR4／3（にぶい黄褐）SiL
3. 10YR3／1（黒褐）SiL 焼土含む
4. 10YR4／1（褐灰）SiL
5. 10YR4／3（にぶい黄褐）SiL
6. 10YR3／1（黒褐）SiL
7. 10YR4／1（黒褐）SiL 焼土含む
8. 焼土

図版4　SB06



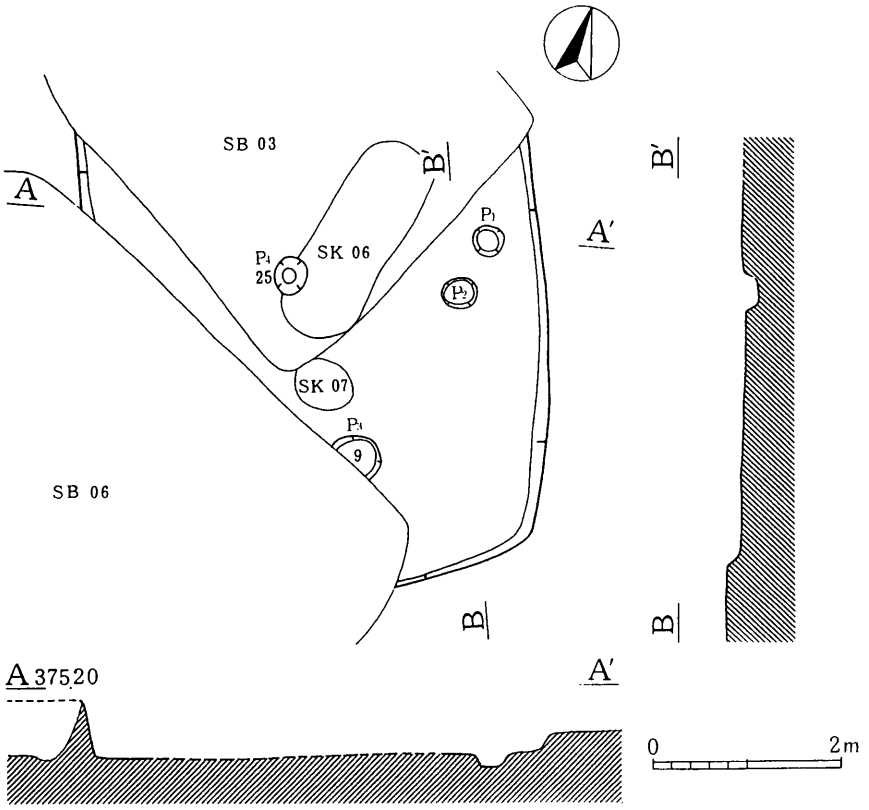
1．10YR5／4（にぶい黄褐）SiL
2．焼土

1．10YR3／1（黒褐）SiL
2．10YR4／1（褐灰）SiL
3．10YR4／3（にぶい黄褐）SiL

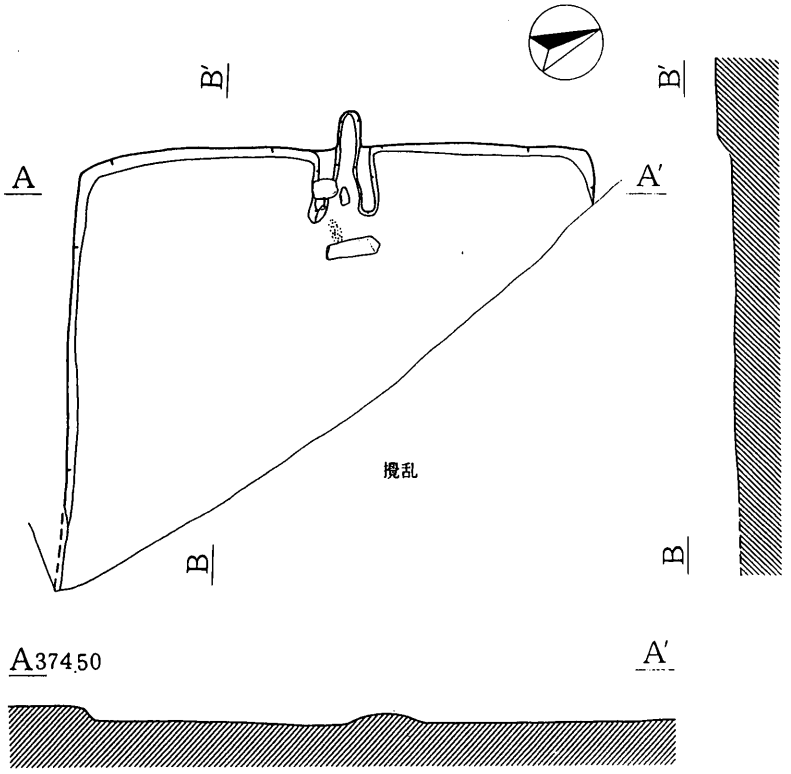


貼床下

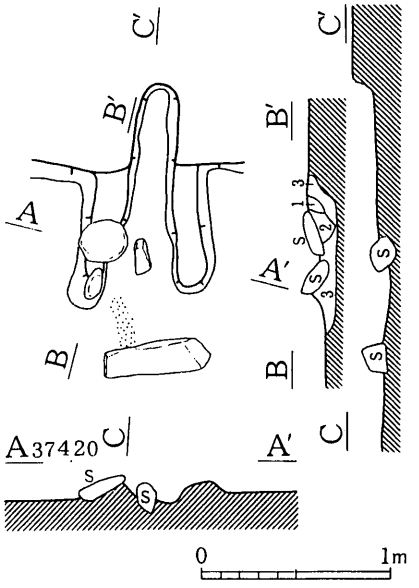
図版5　SB07



SB 09

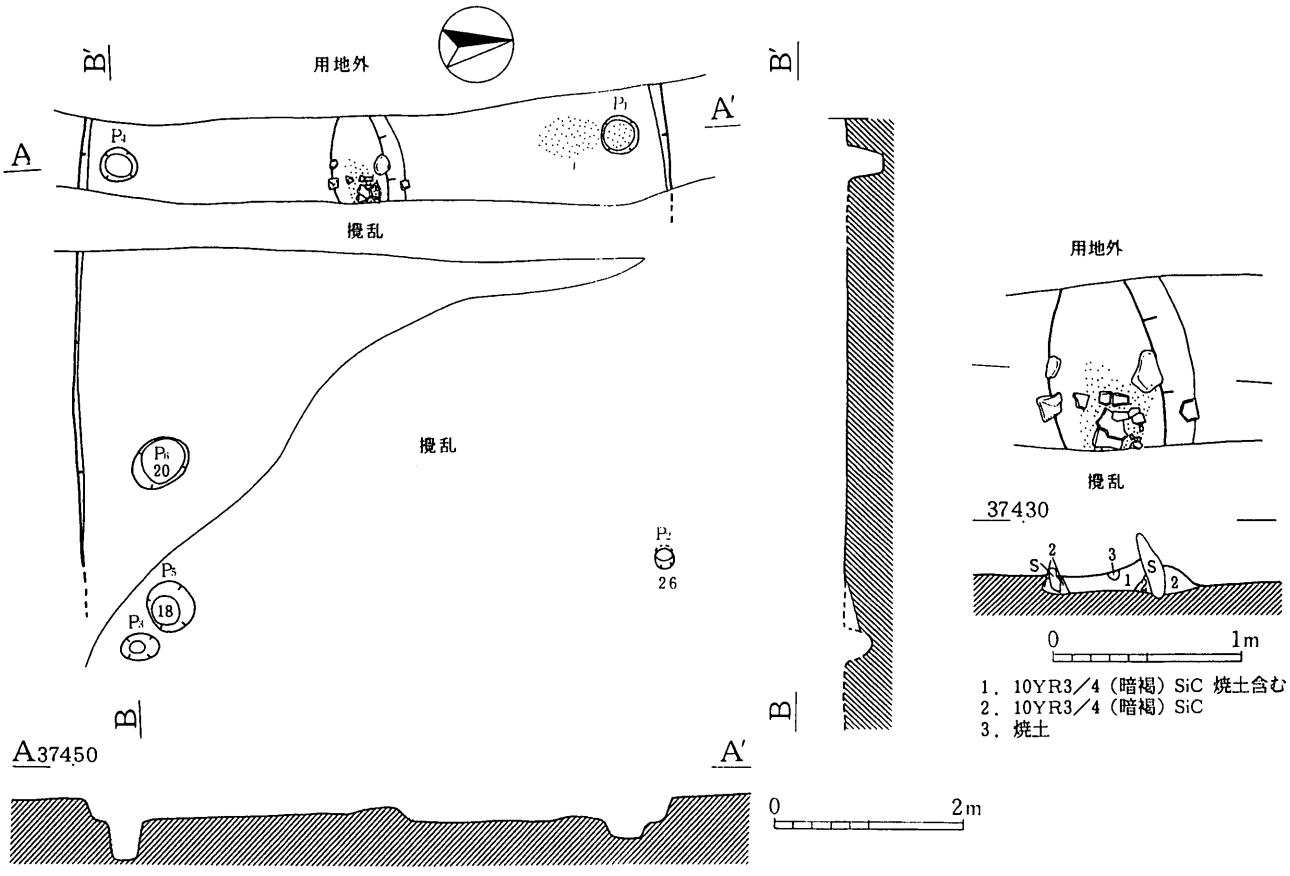


SB 10

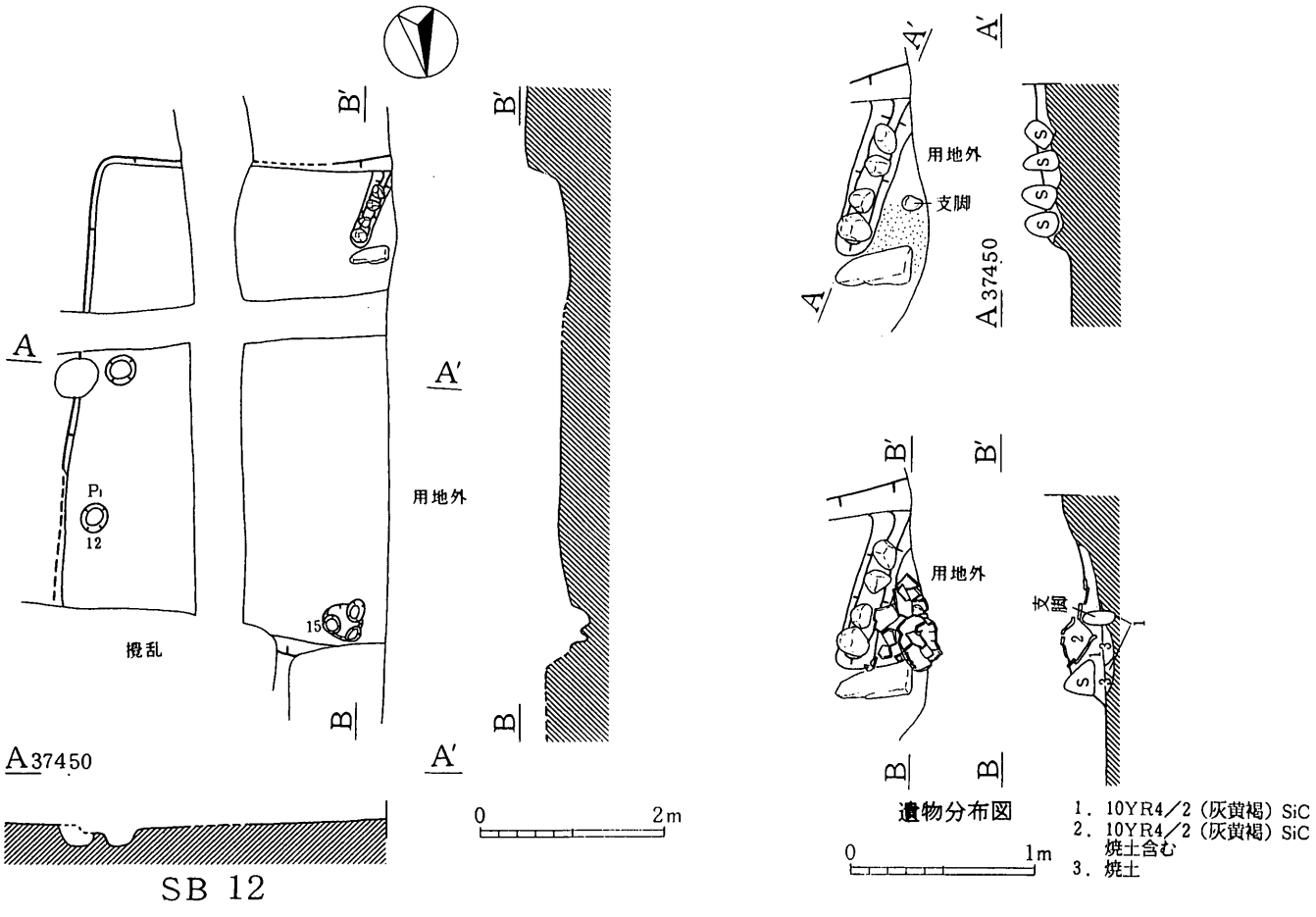


1. 10YR3/3（暗褐）SiCL
2. 10YR4/4（褐）SiCL 若干焼土含む
3. 10YR4/6（褐）SiCL

図版6　SB09・SB10

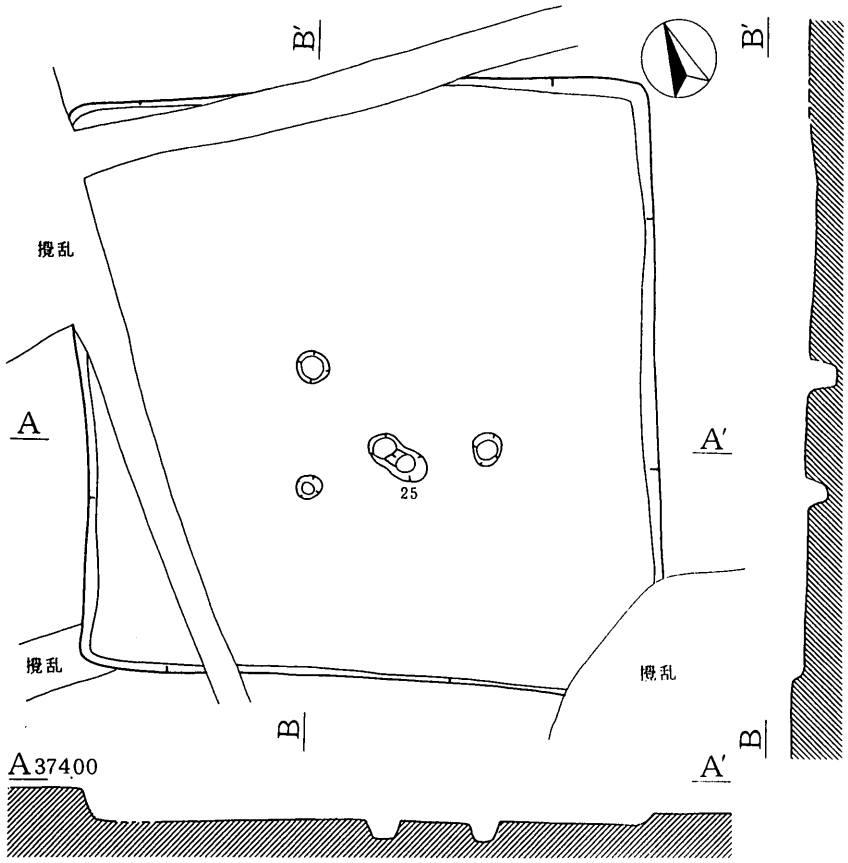


SB 11

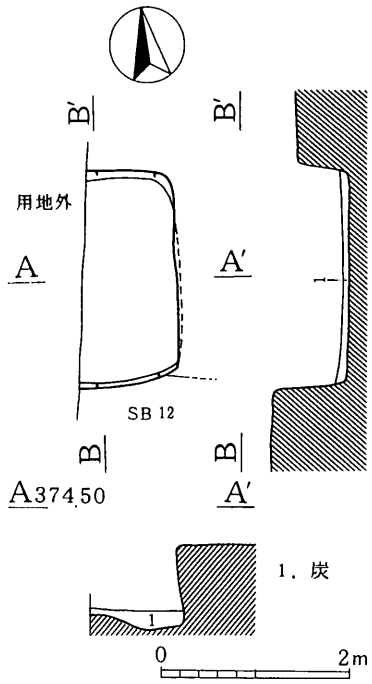


SB 12

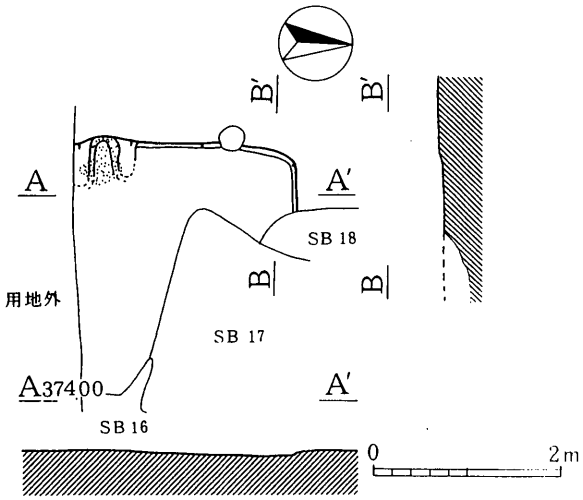
図版7　SB11・SB12



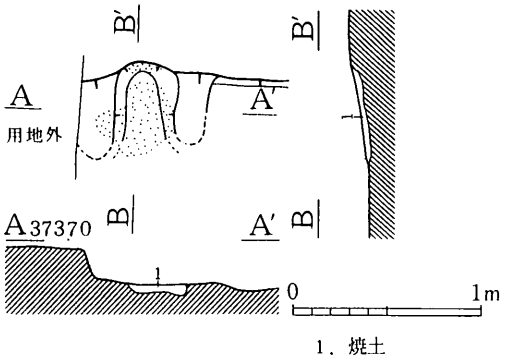
SB 13

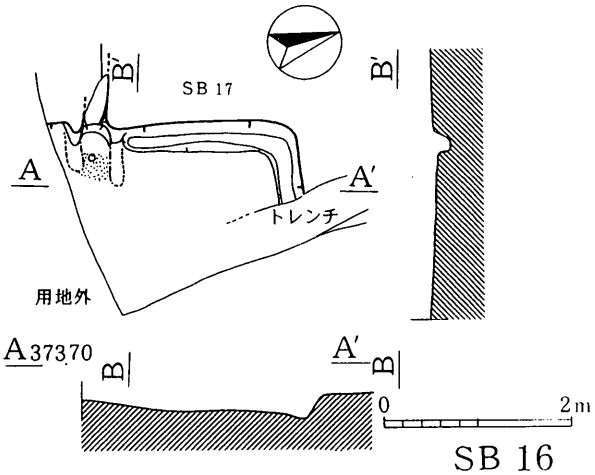


SB 14

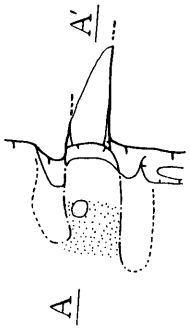


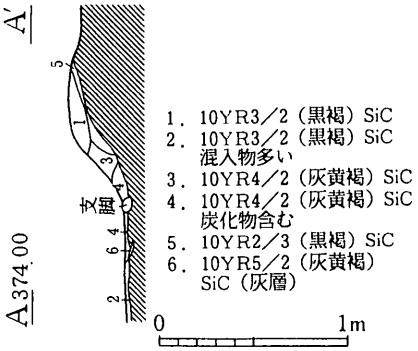
SB 15



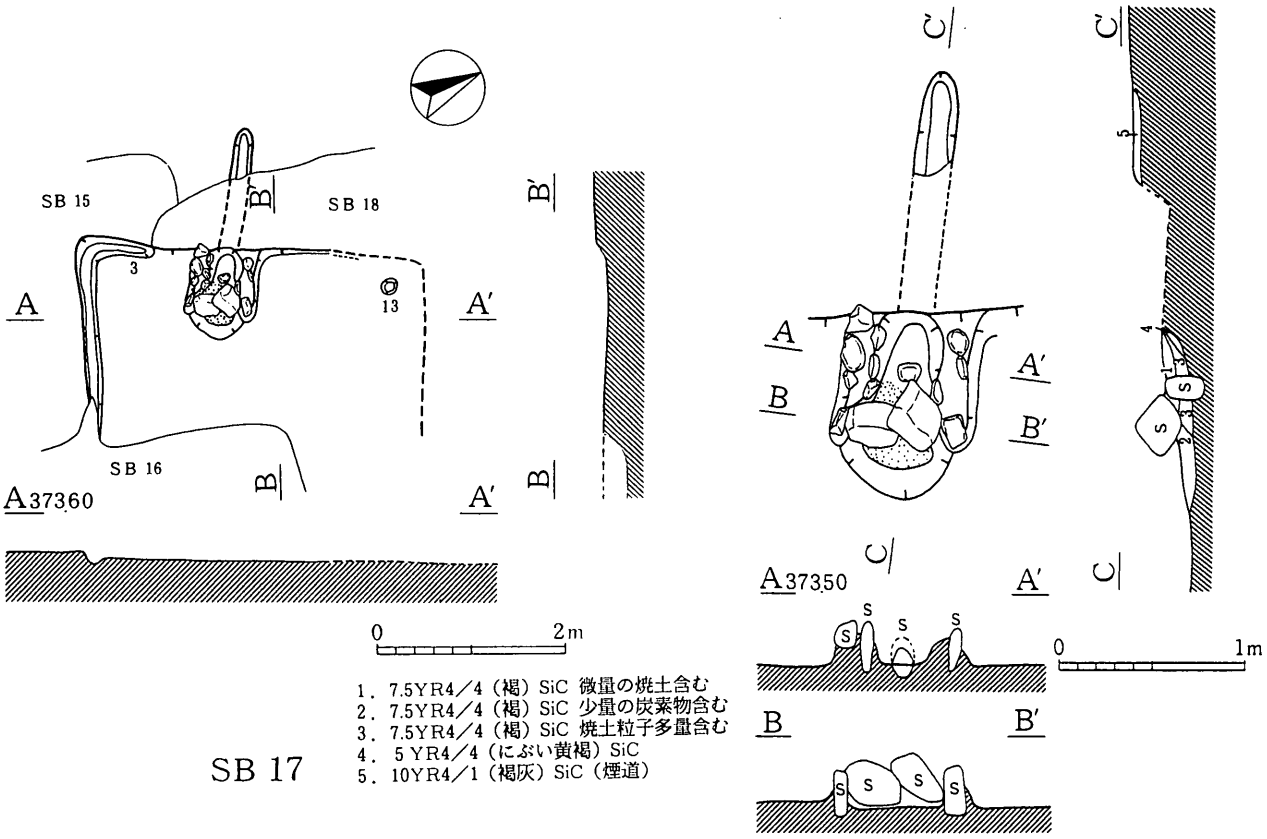


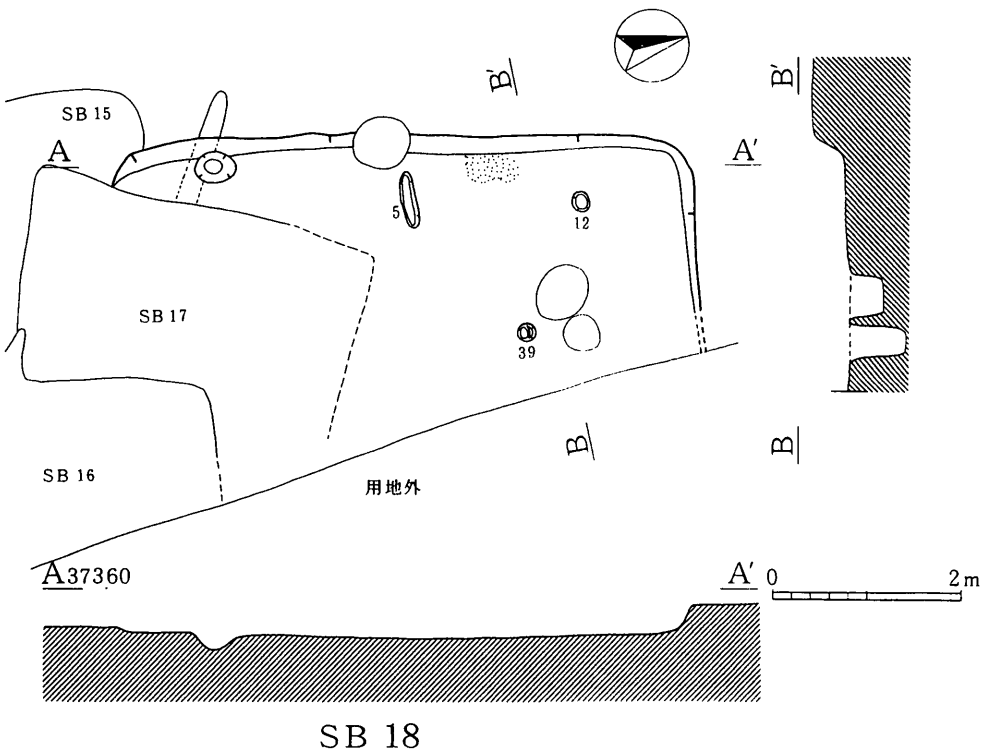
SB 16



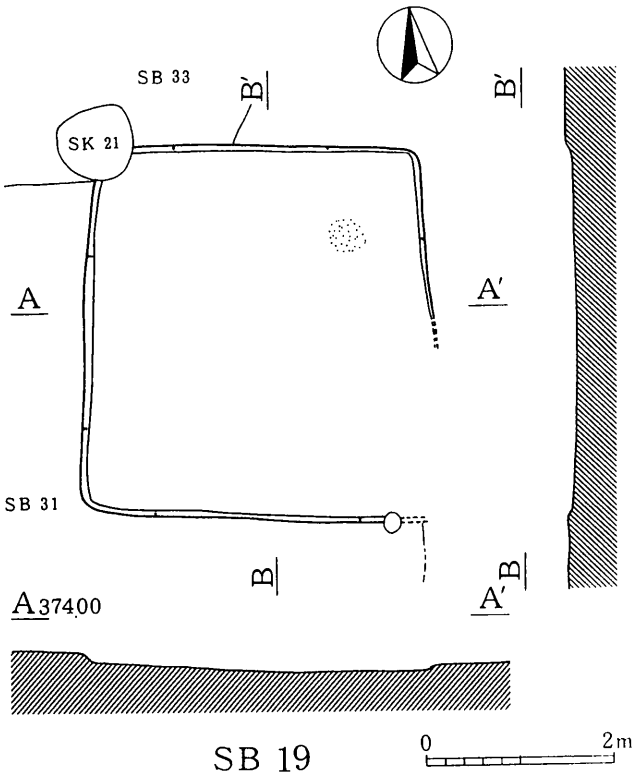


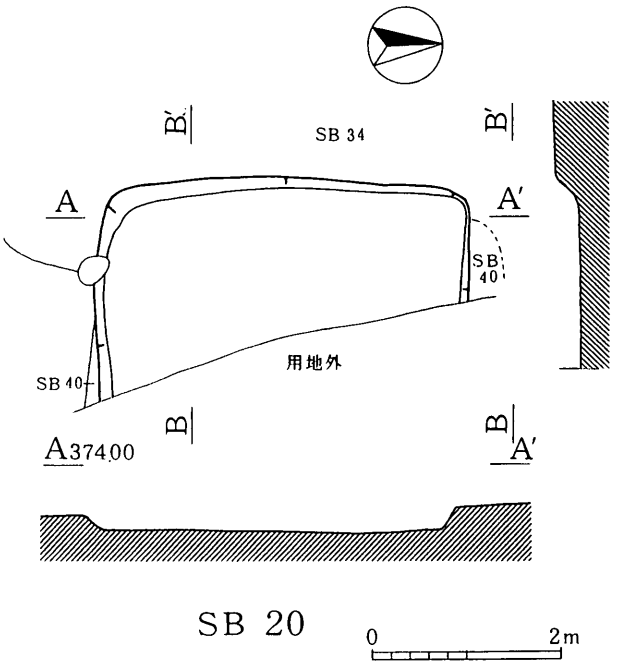
図版8　SB13・SB14・SB15・SB16

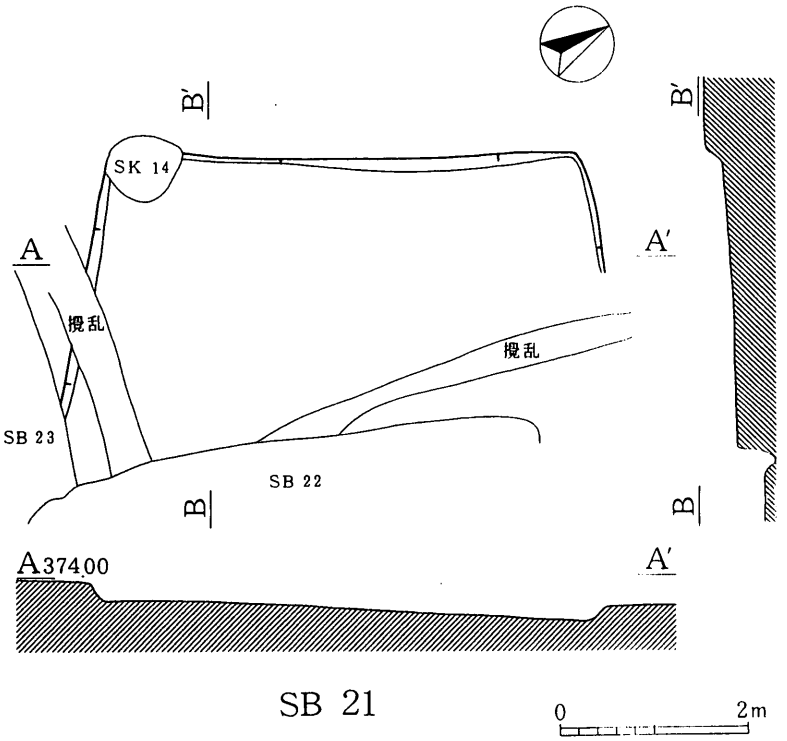




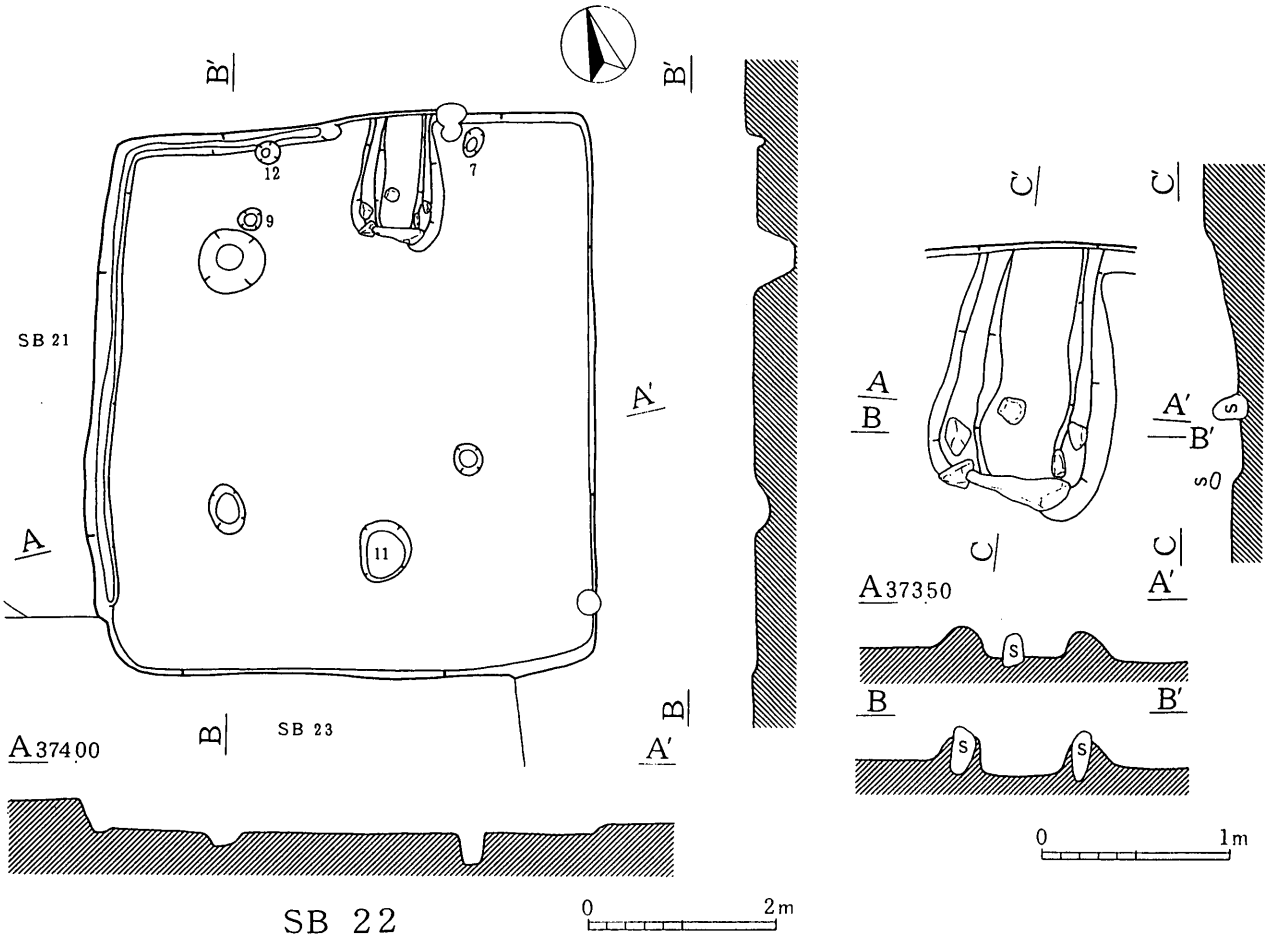
図版9　SB17・SB18

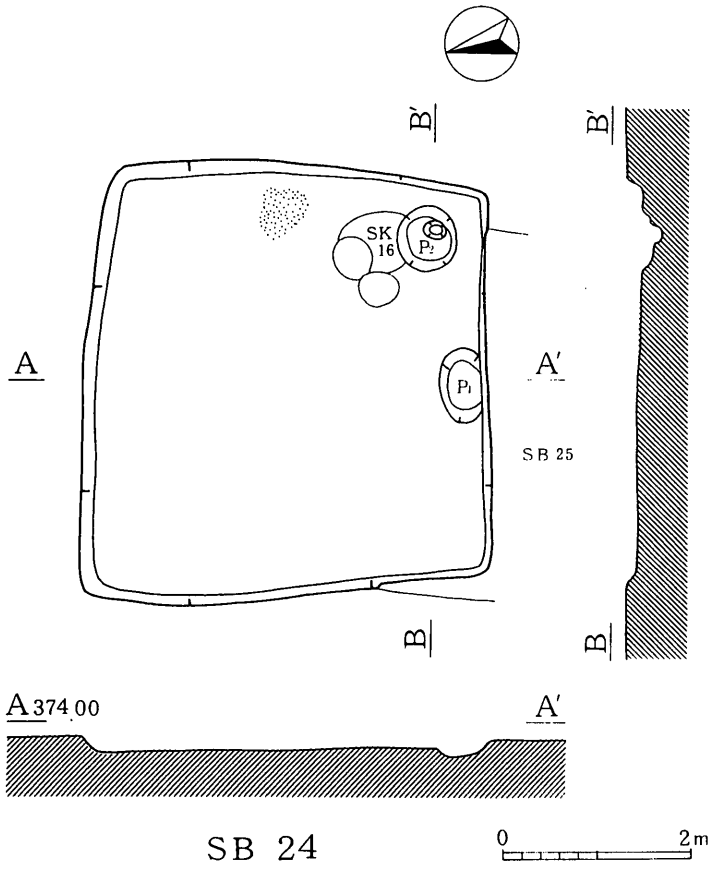




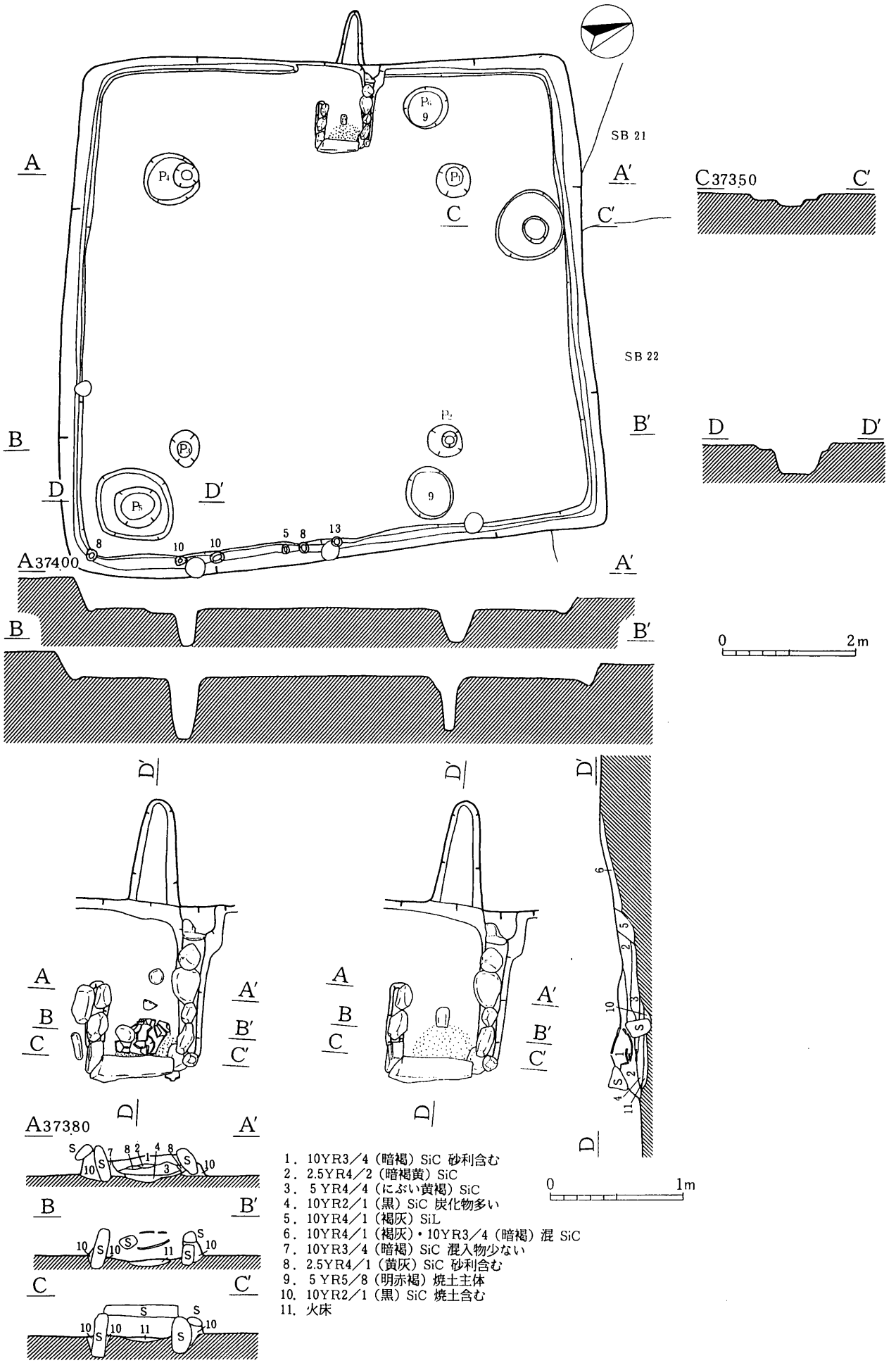


図版10　SB19・SB20・SB21

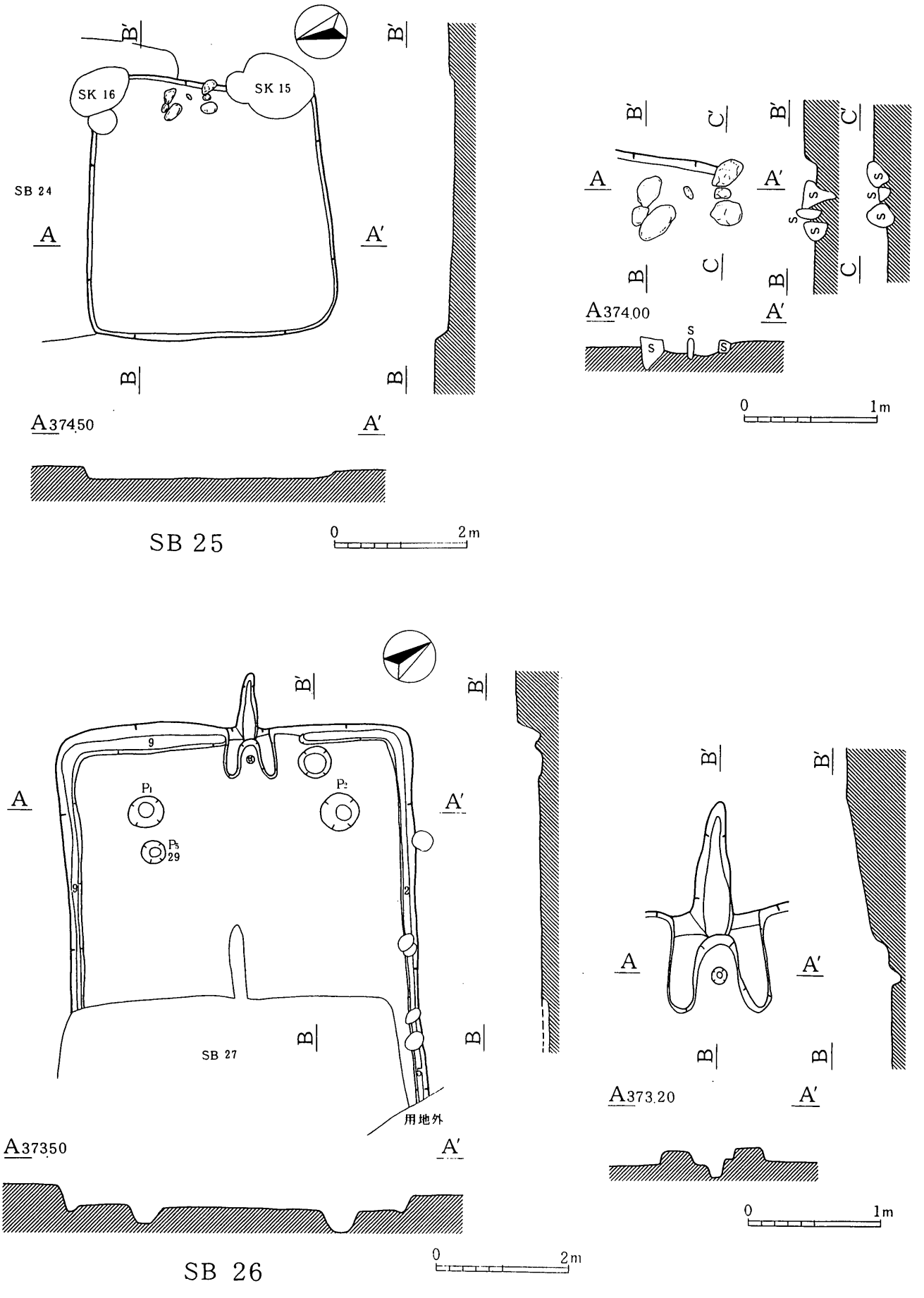




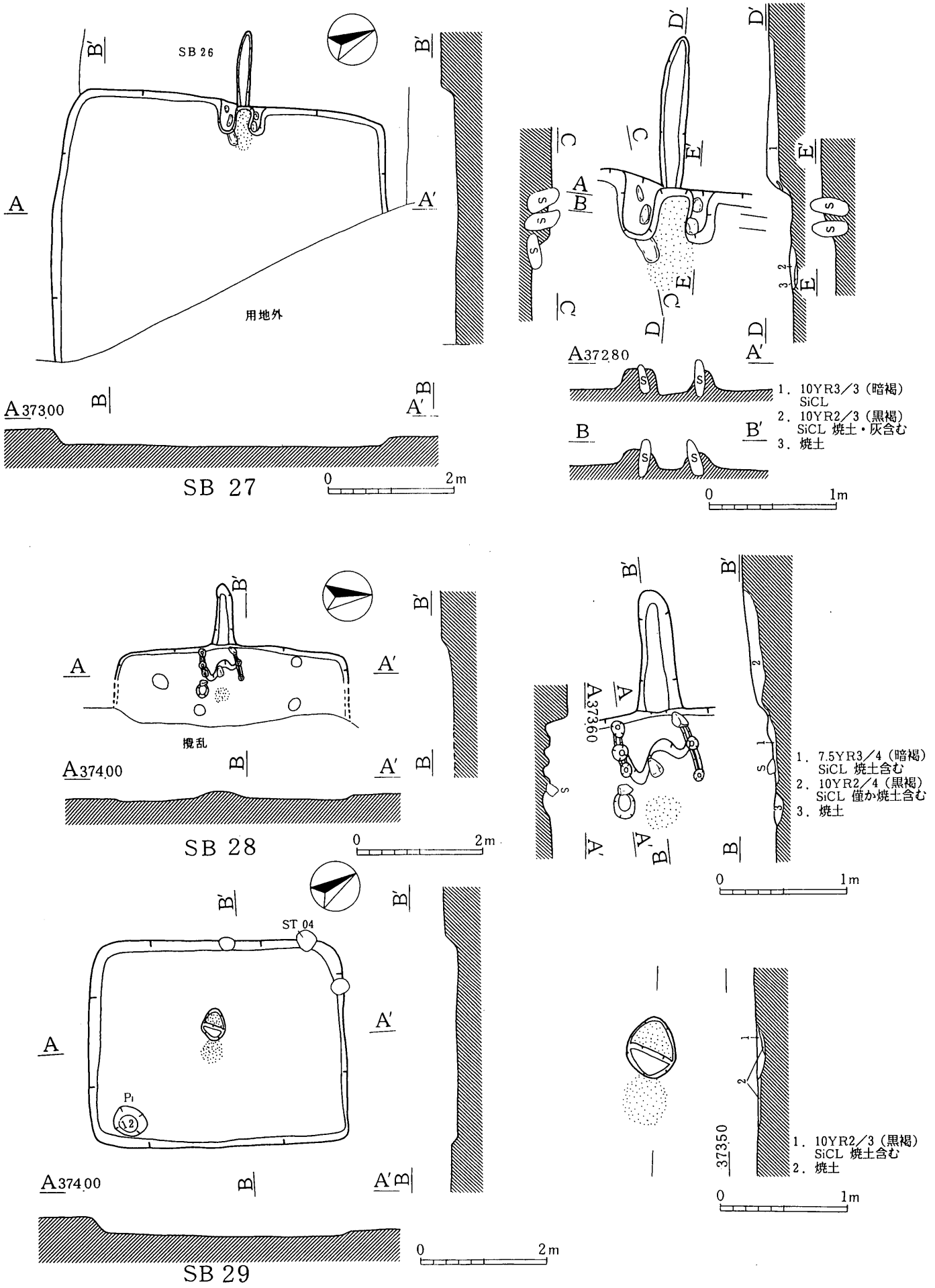
図版11　SB22・SB24


SB 21
SB 22
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
C37350
A37400
A37380
0
2m
1m
1．10YR3／4（暗褐）SiC 砂利含む
2．2.5YR4／2（暗褐黄）SiC
3．5YR4／4（にぶい黄褐）SiC
4．10YR2／1（黒）SiC 炭化物多い
5．10YR4／1（褐灰）SiL
6．10YR4／1（褐灰）・10YR3／4（暗褐）混 SiC
7．10YR3／4（暗褐）SiC 混入物少ない
8．2.5YR4／1（黄灰）SiC 砂利含む
9．5YR5／8（明赤褐）焼土主体
10．10YR2／1（黒）SiC 焼土含む
11．火床

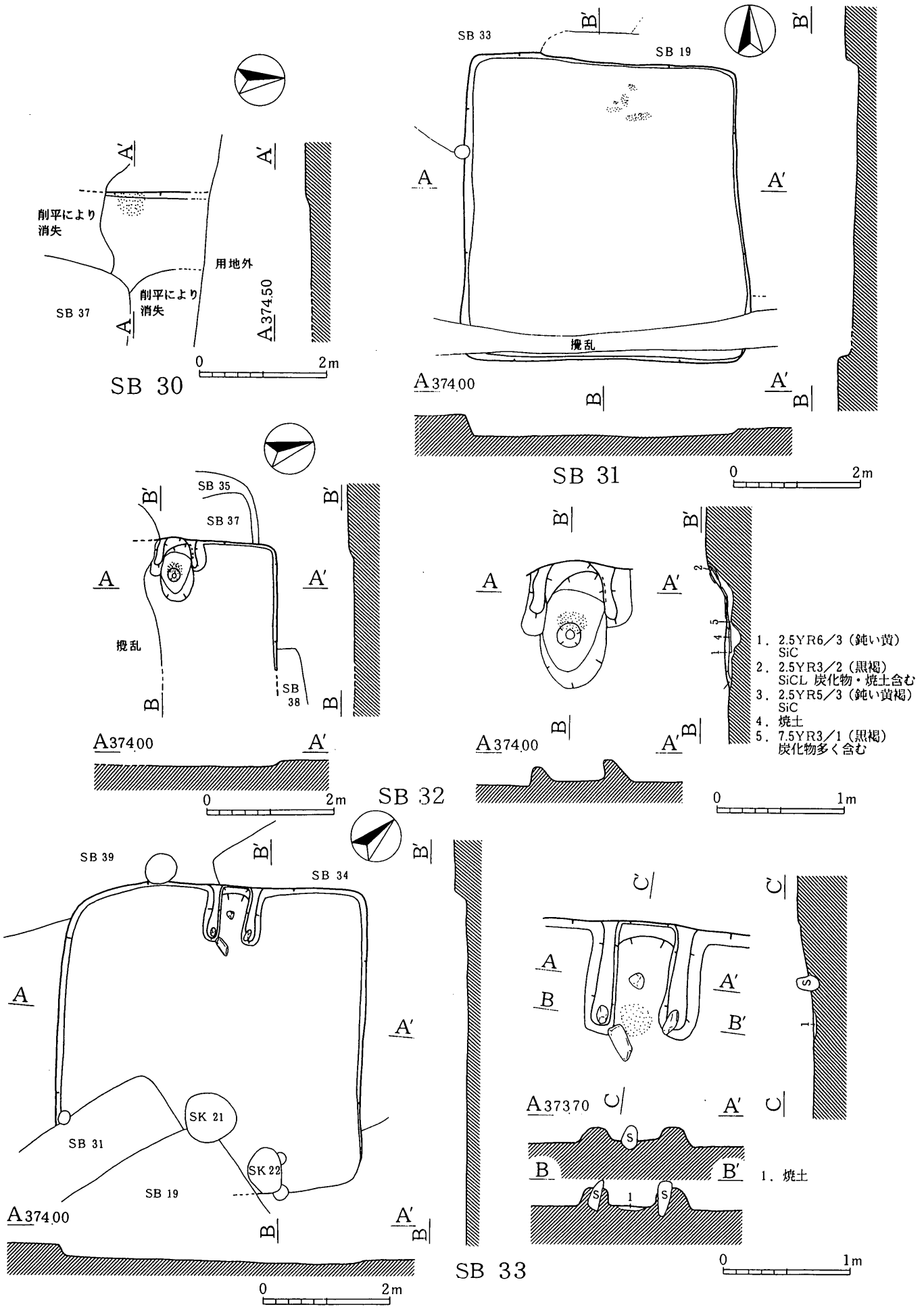
図版12　SB23



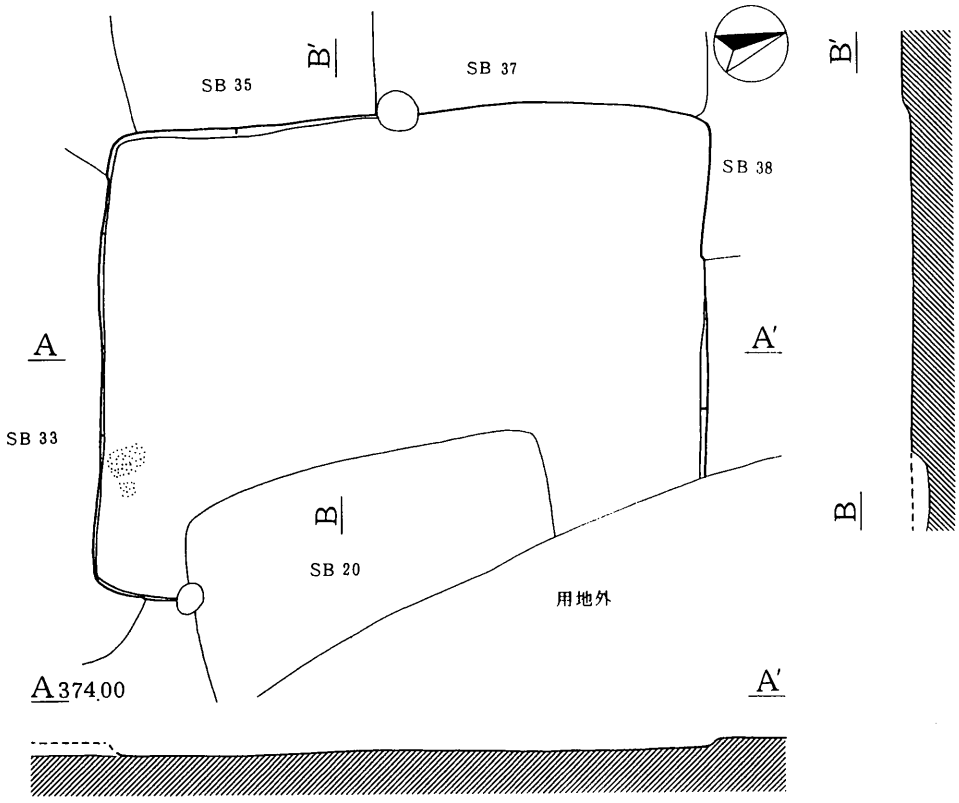
図版13　SB25・SB26



図版14　SB27・SB28・SB29

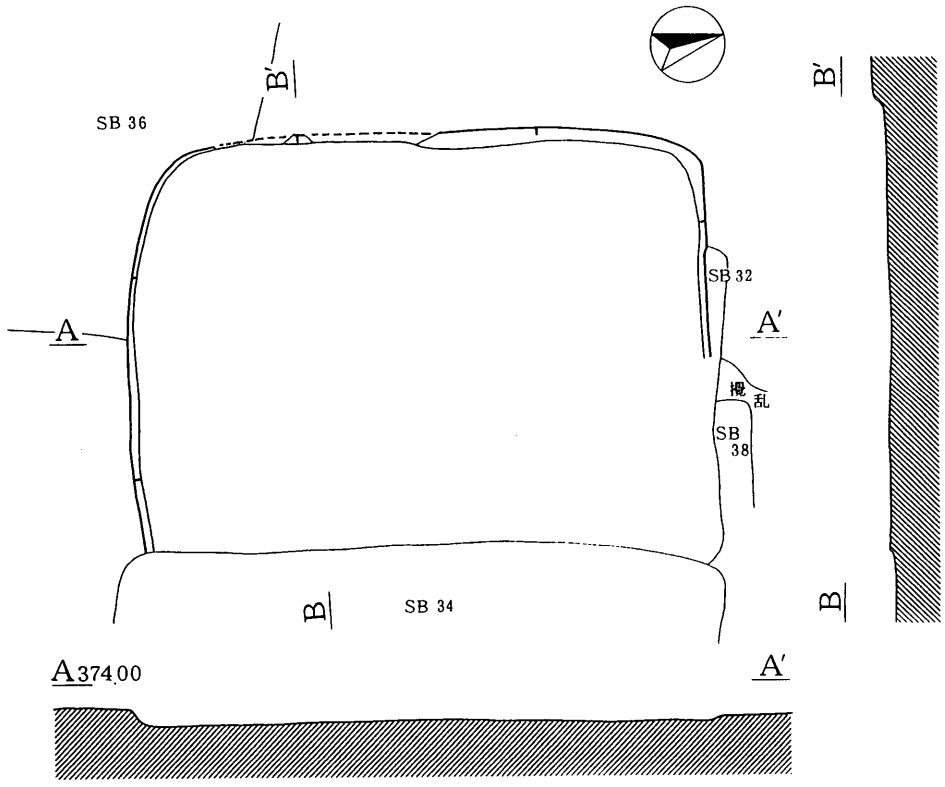


図版15　SB30・SB31・SB32・SB33



SB 34

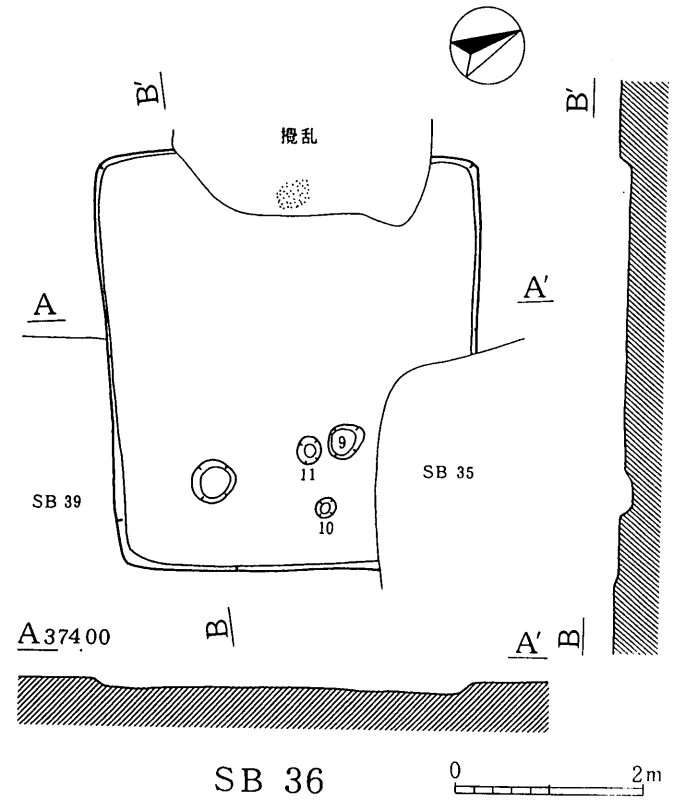
0 2m

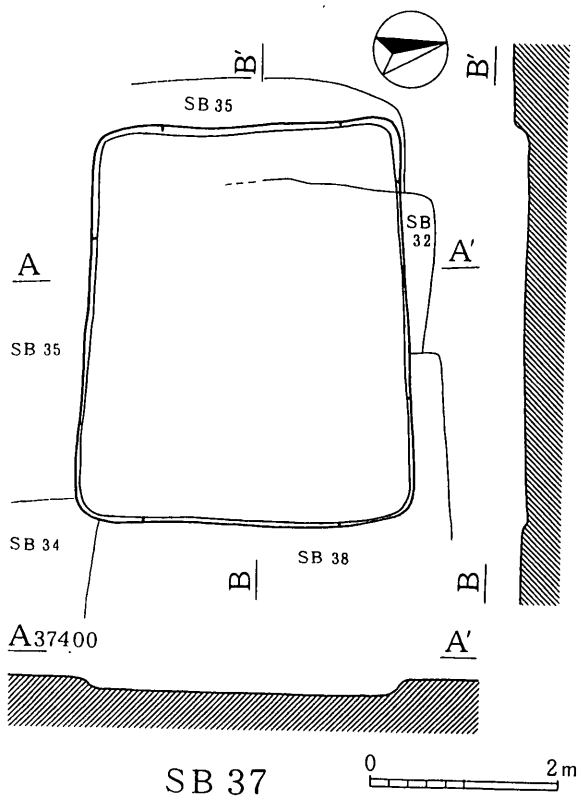


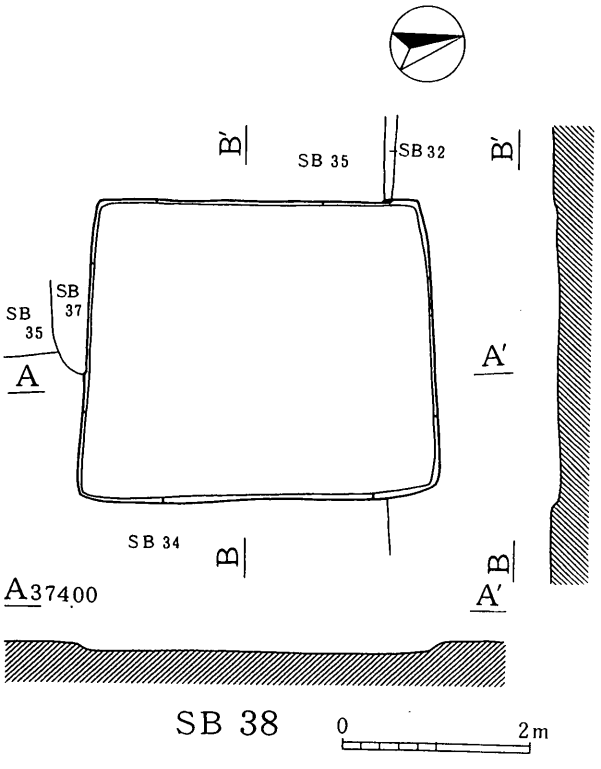
SB 35

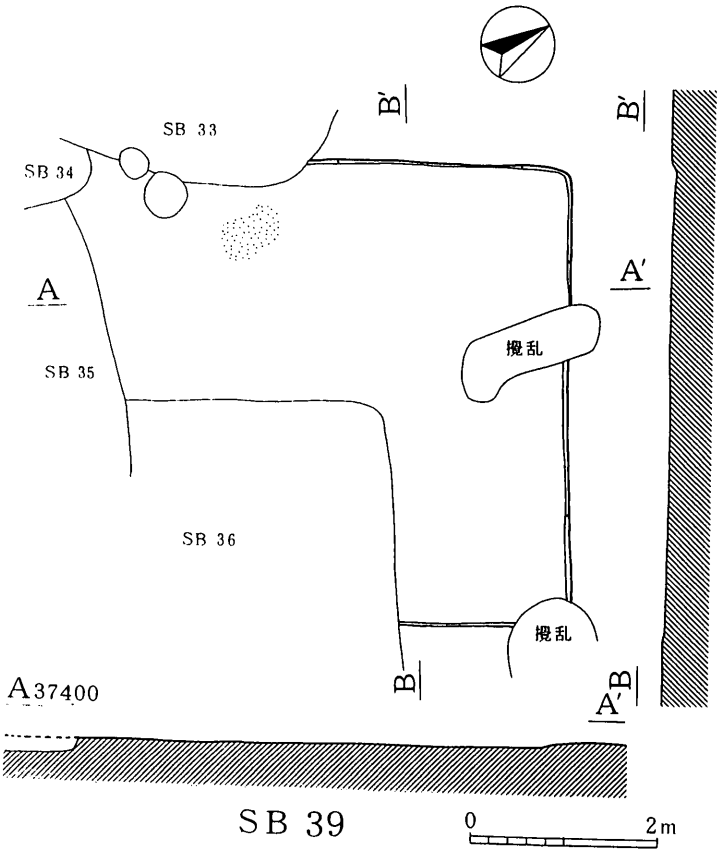
0 2m

図版16　SB34・SB35

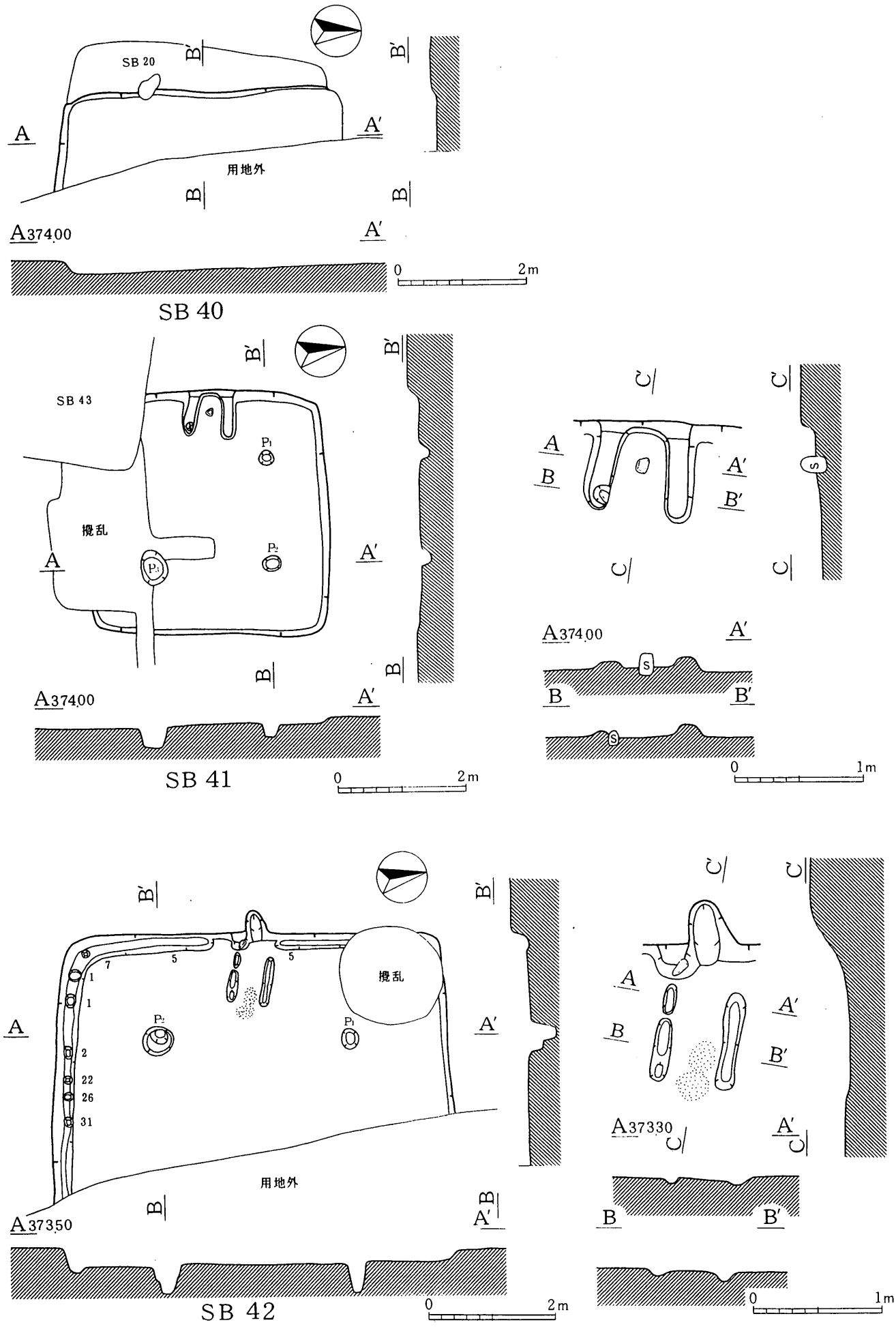




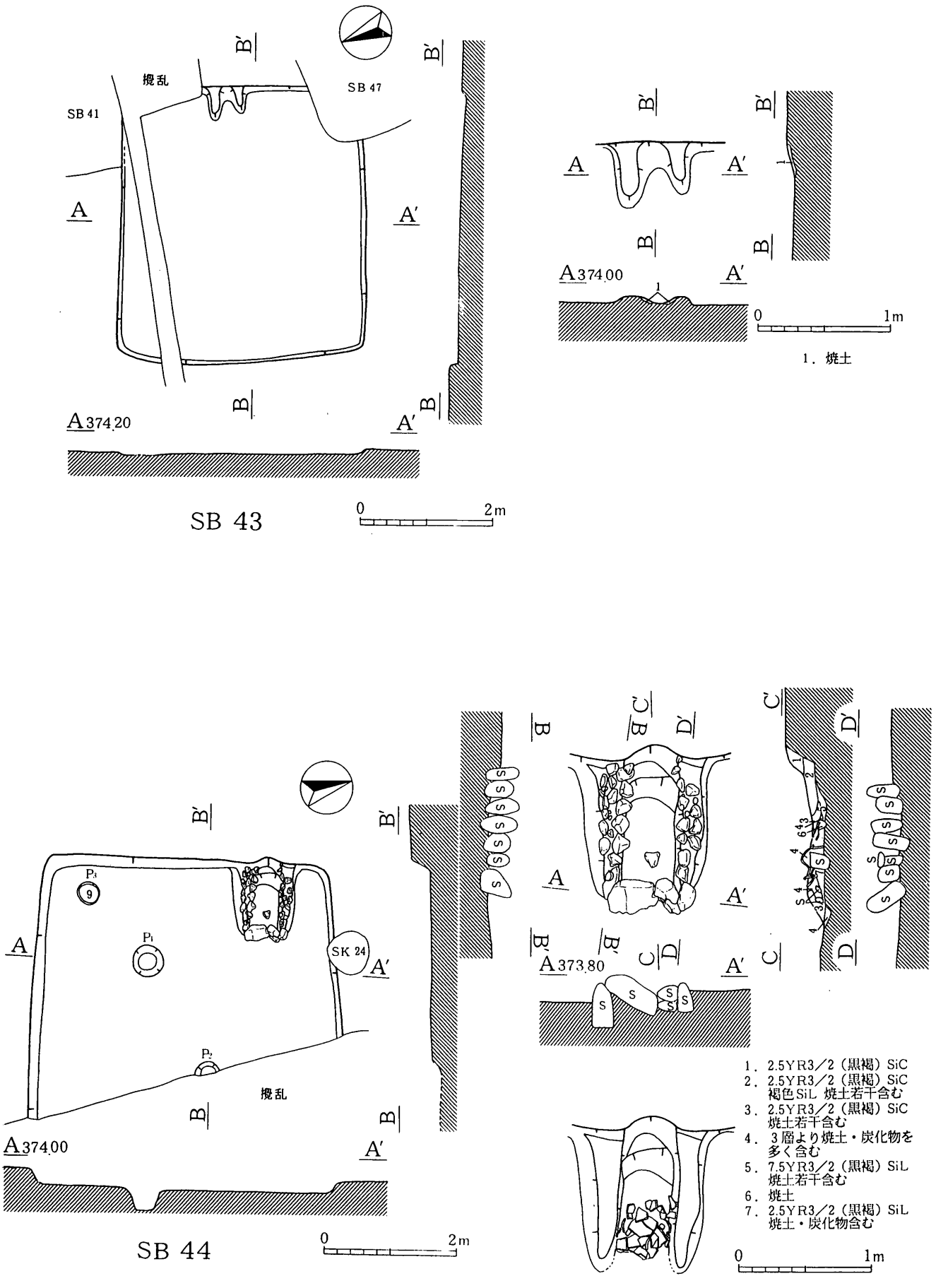




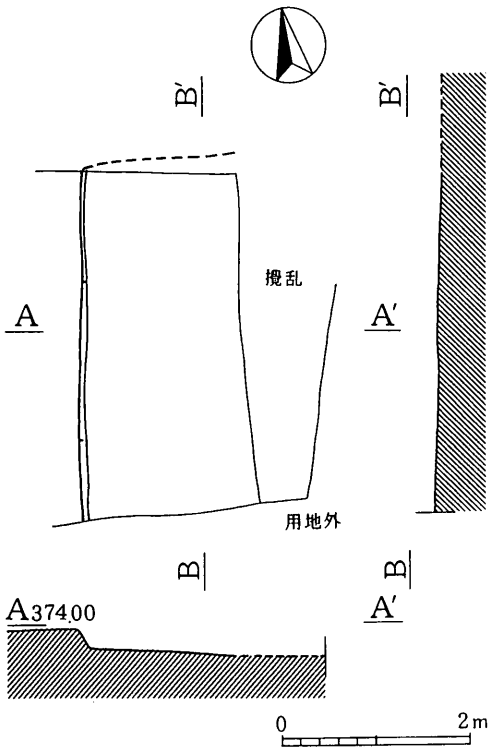
図版17　SB36・SB37・SB38・SB39



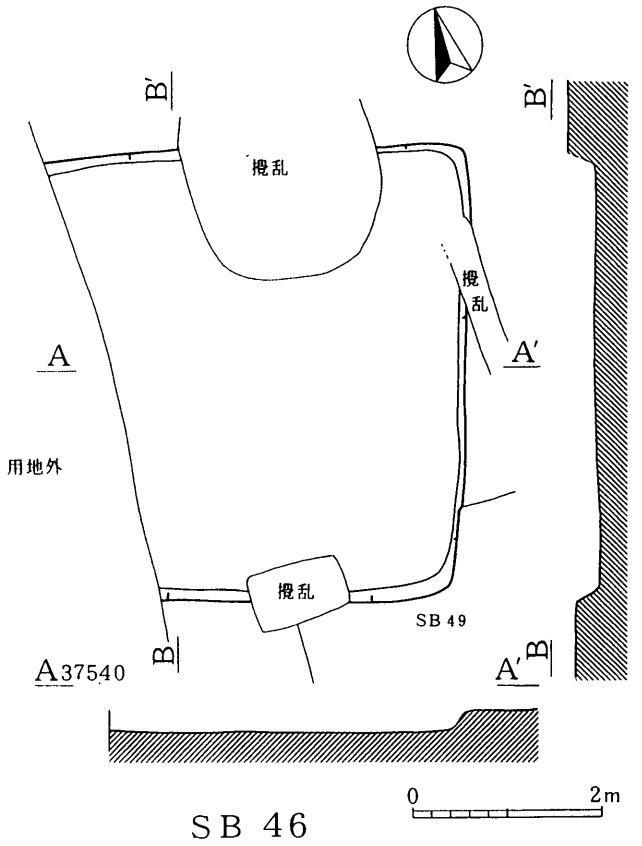
図版18　SB40・SB41・SB42



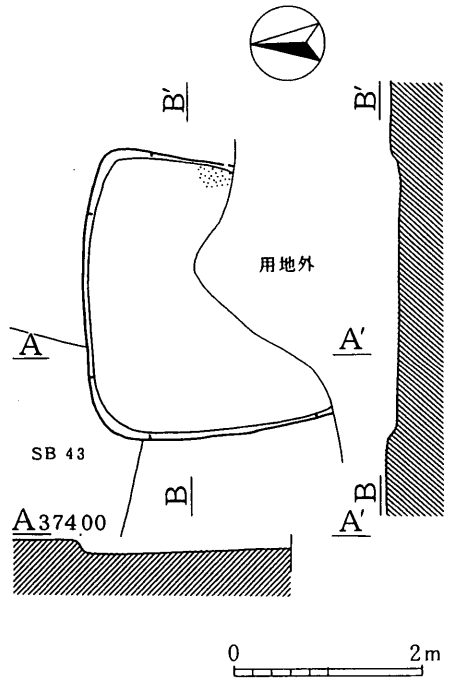
図版19　SB43・SB44



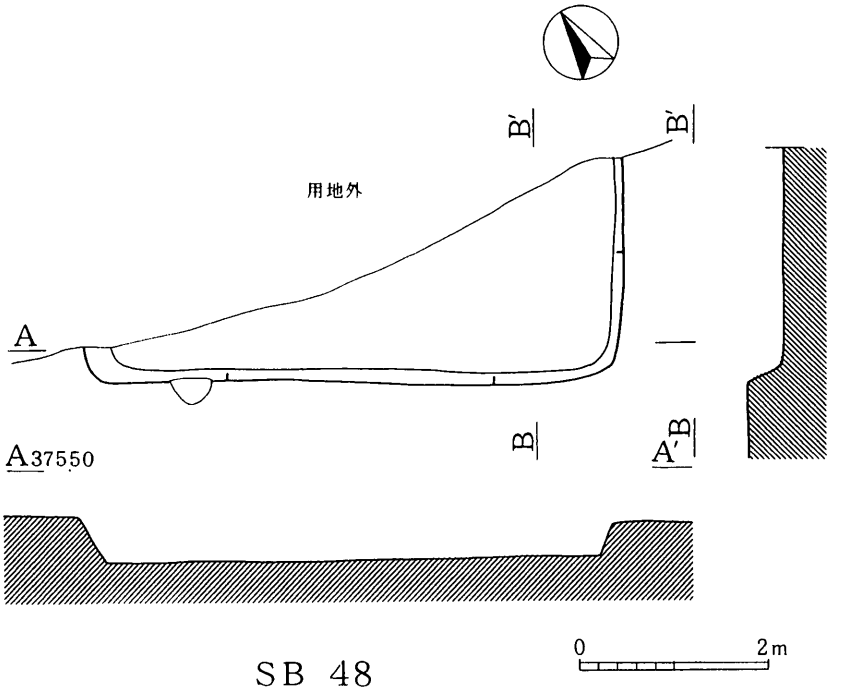
SB 45



SB 46

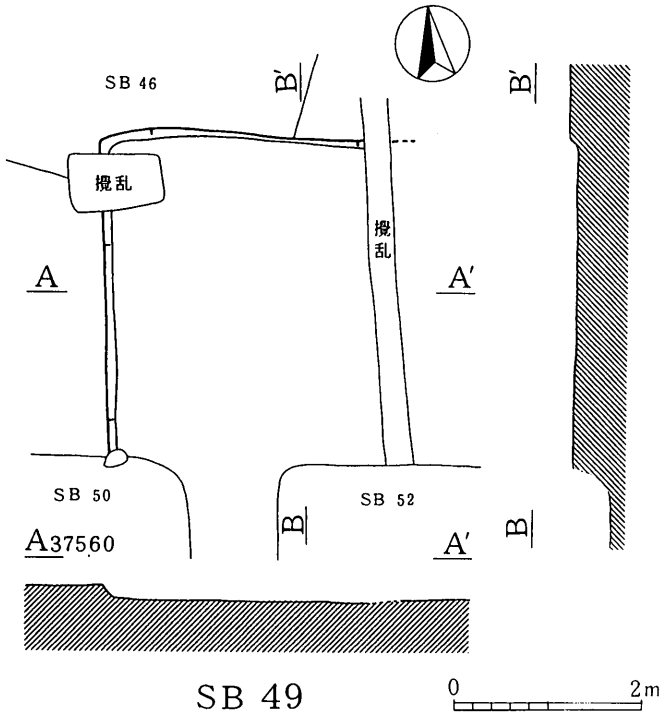


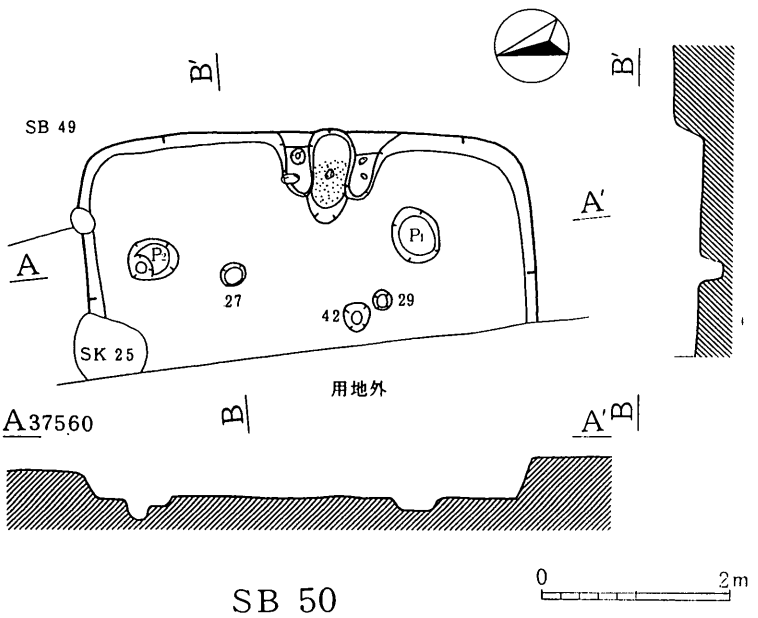
SB 47

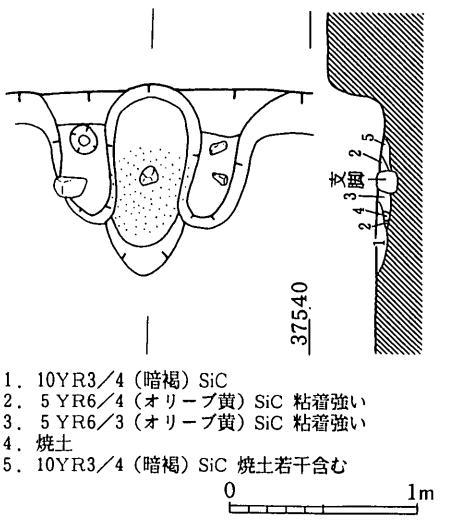


SB 48

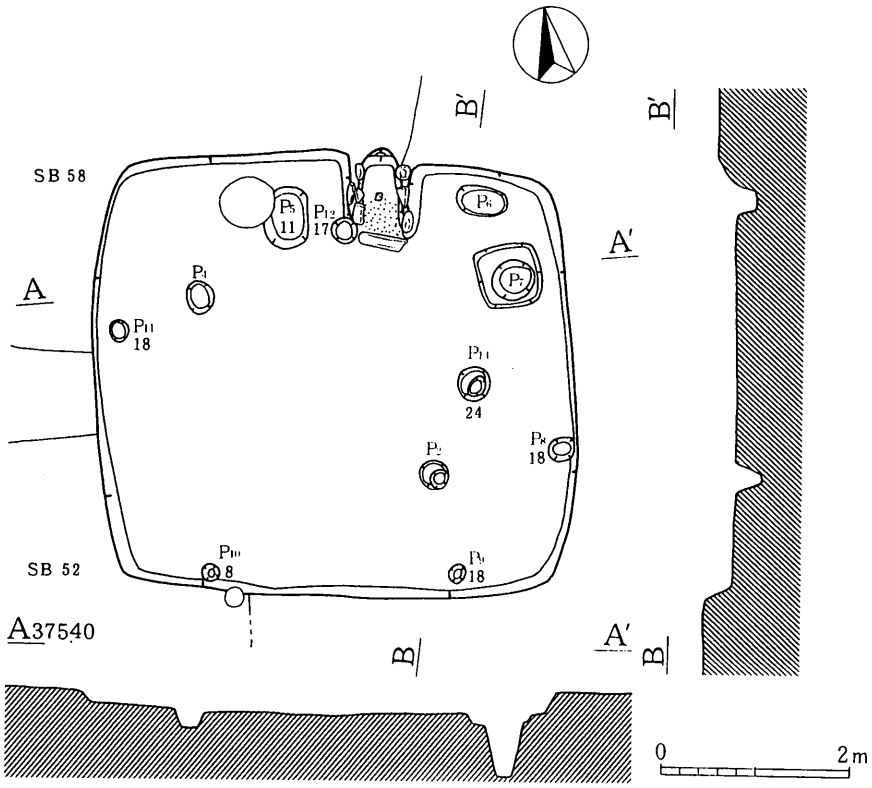
図版20　SB45・SB46・SB47・SB48

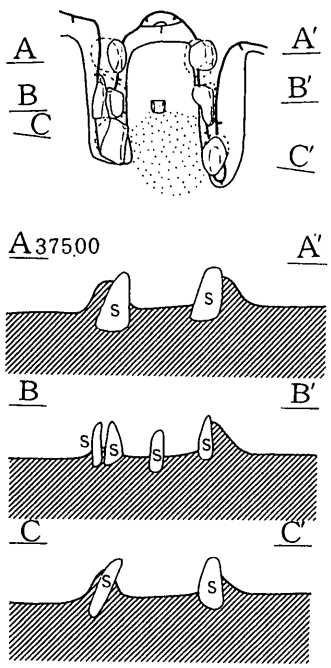


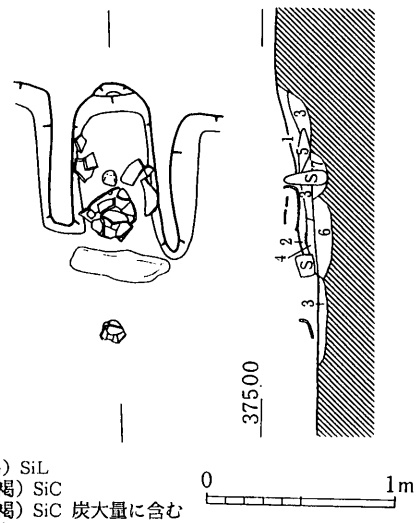




図版21　SB49・SB50

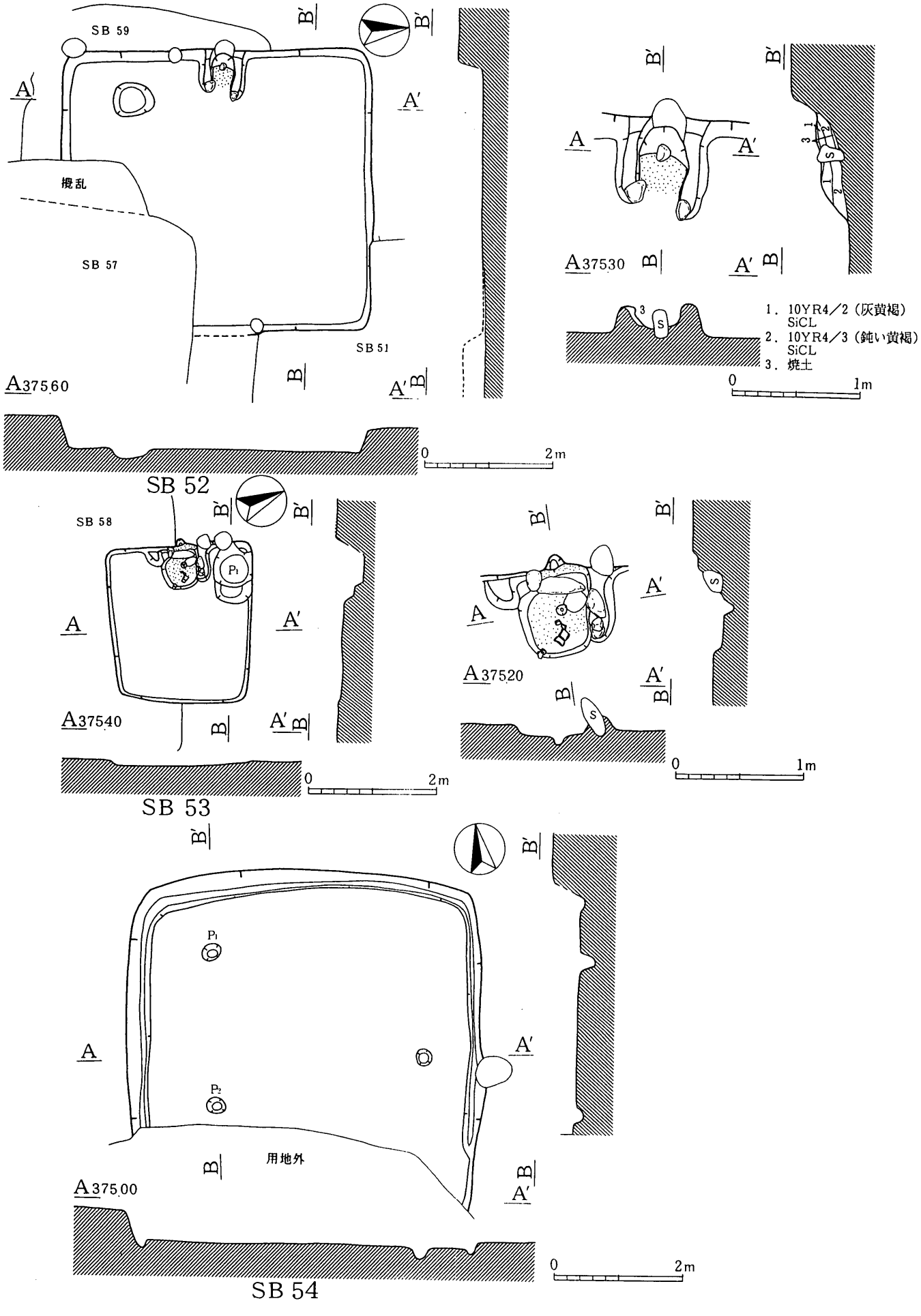




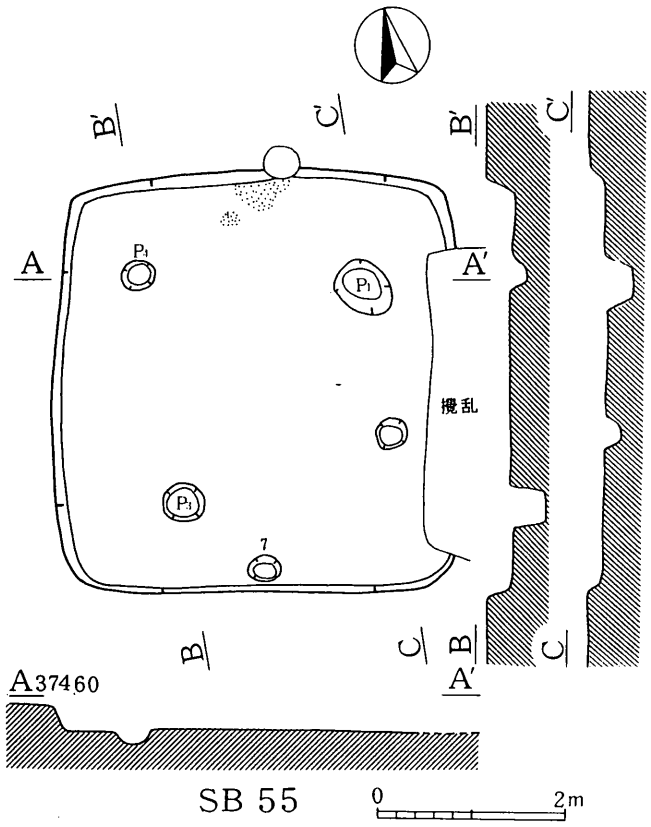


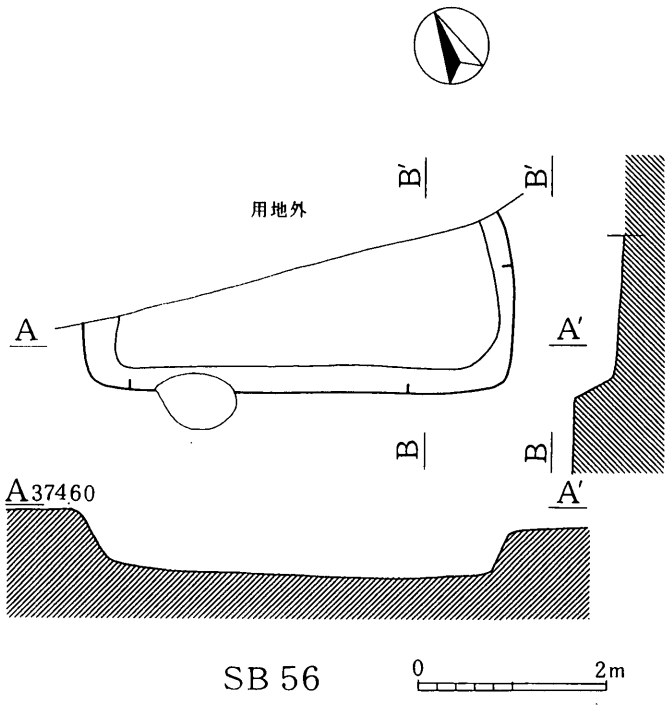
1．7.5YR4／3（褐）SiL
2．10YR3／4（暗褐）SiC
3．10YR3／4（暗褐）SiC 炭大量に含む
4．7.5YR4／4（褐）SiC
5．焼土
6．2.5YR3／4（暗褐）SiC 火床下部
7．掘り方

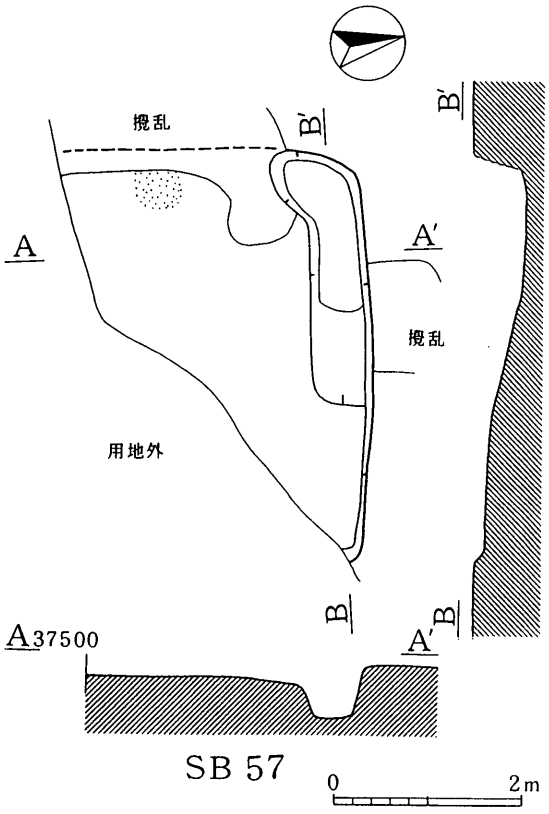
図版22　SB51

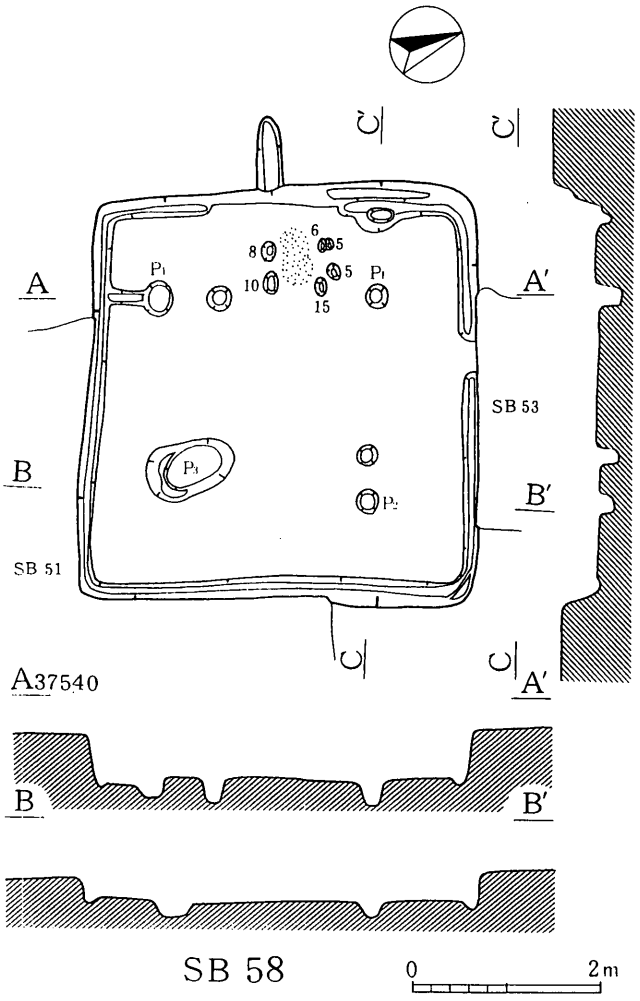


図版23　SB52・SB53・SB54

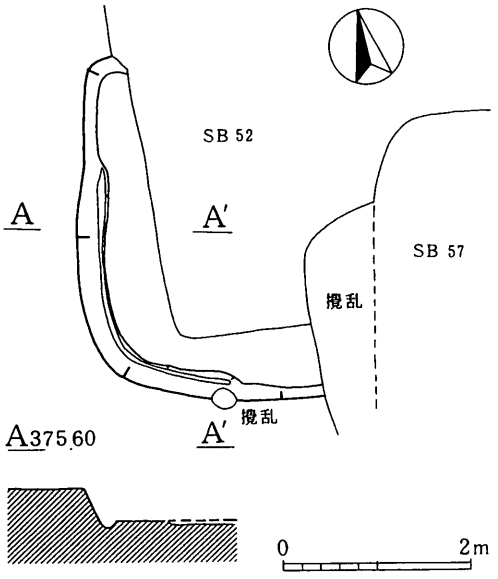




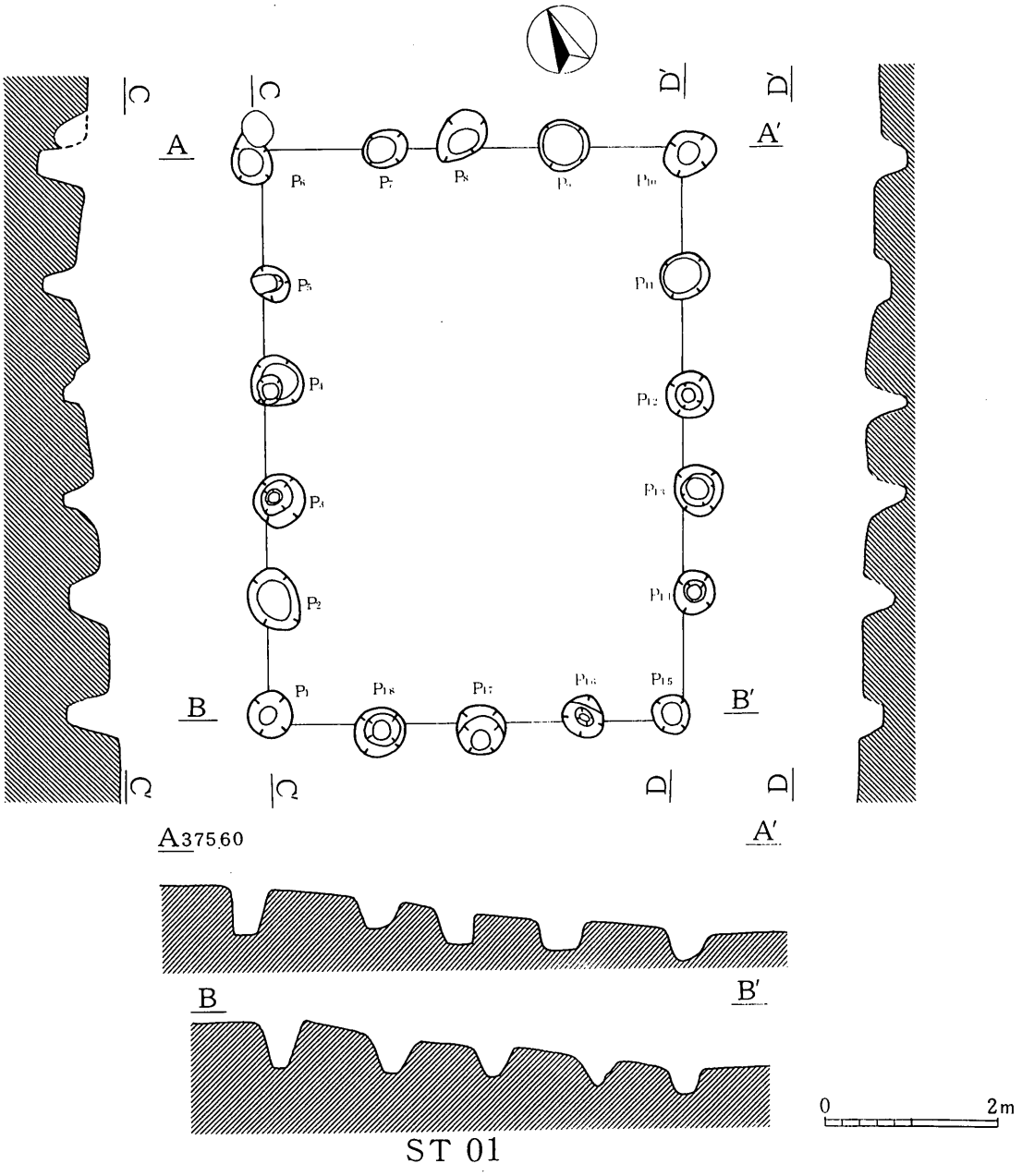




図版24　SB55・SB56・SB57・SB58

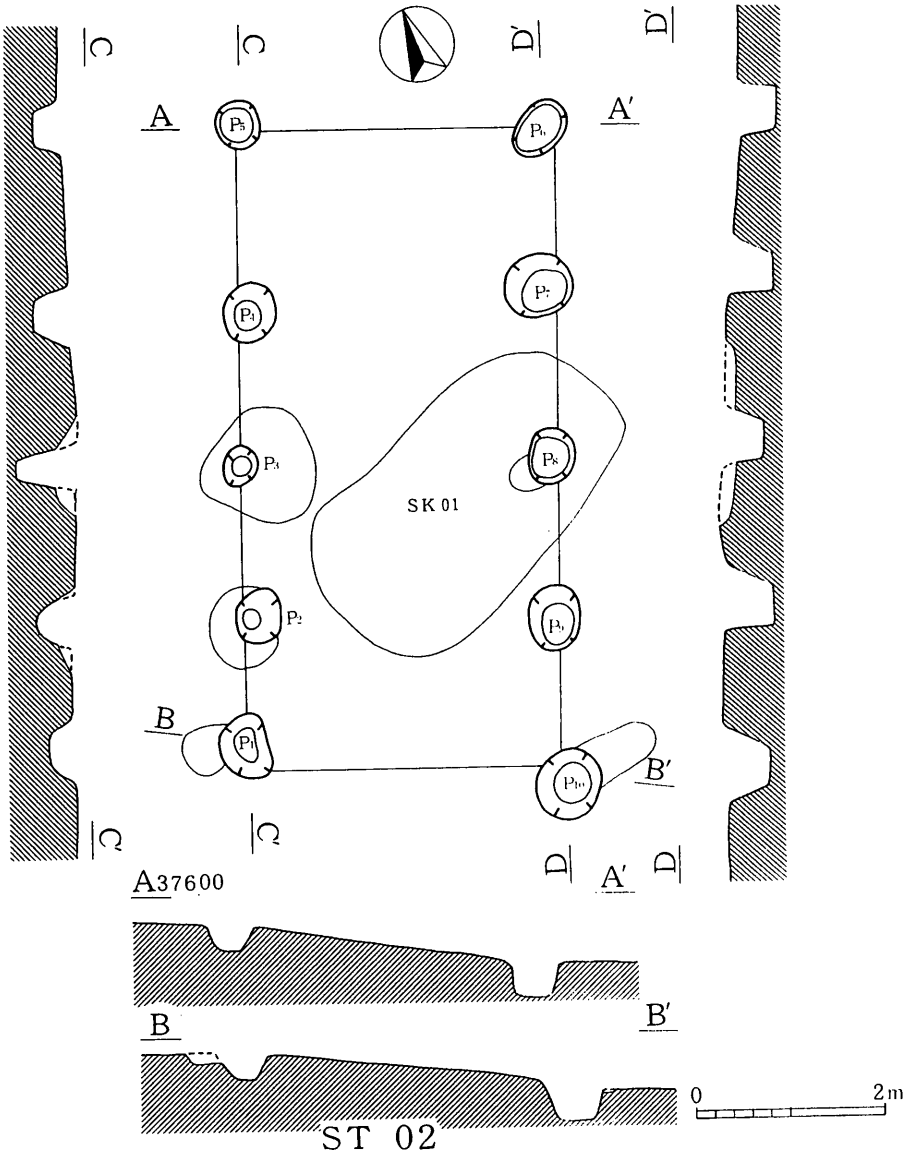


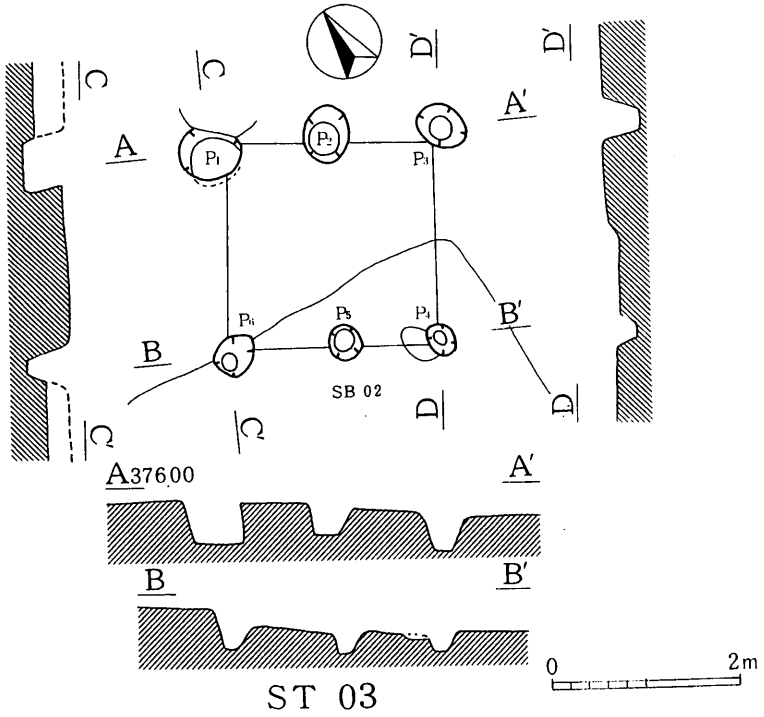
SB 59



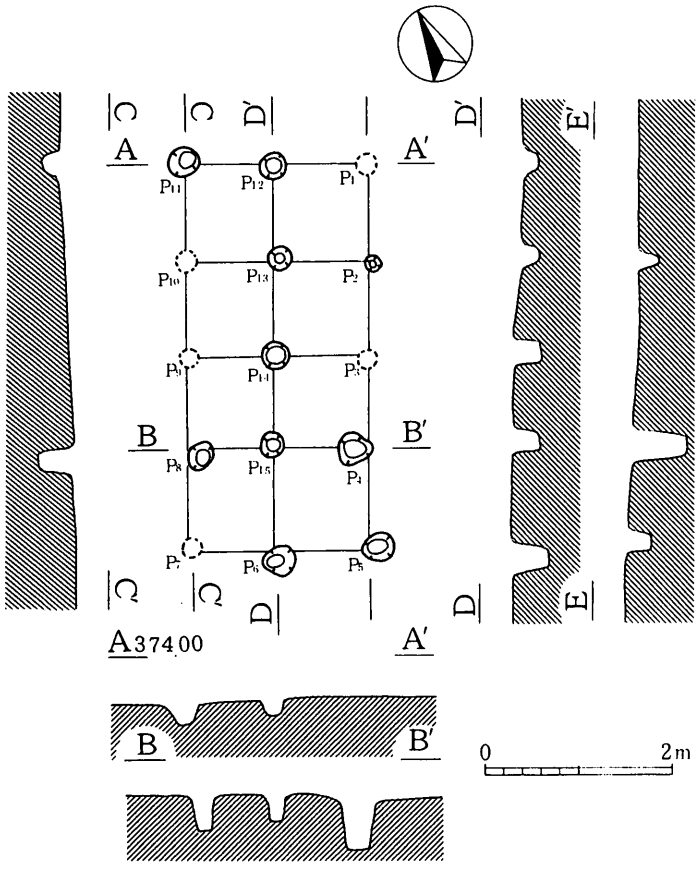
ST 01

図版25　SB59・ST01

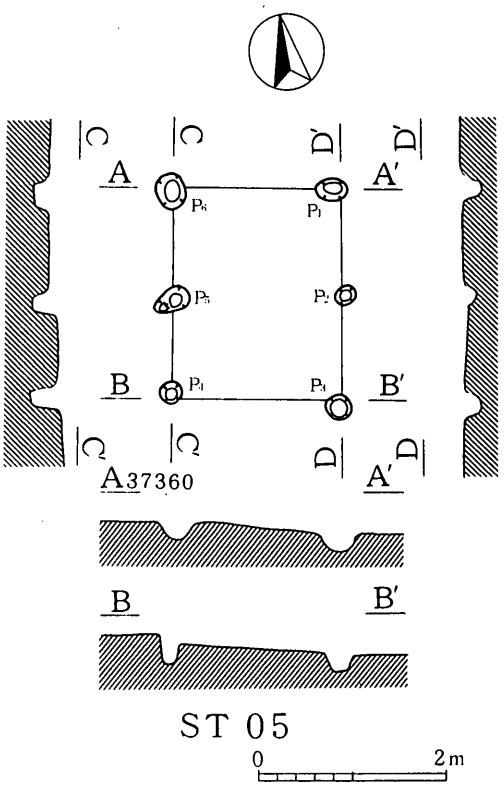




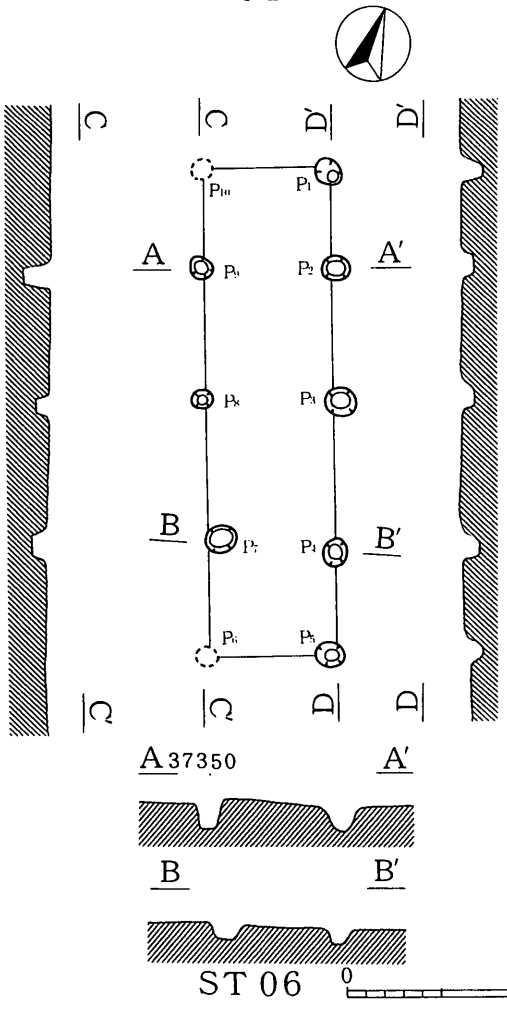
図版26　ST02・ST03



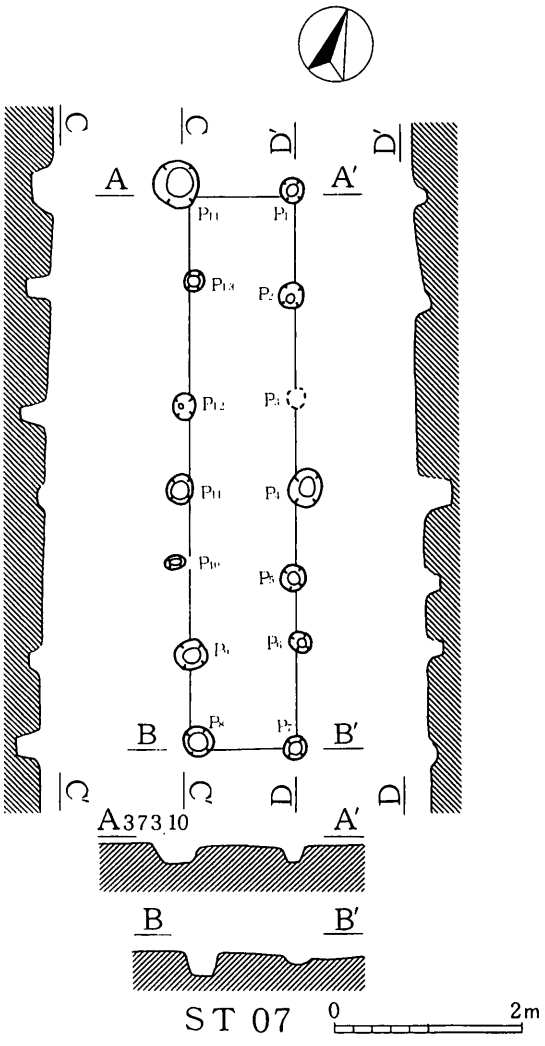
ST 04



ST 05

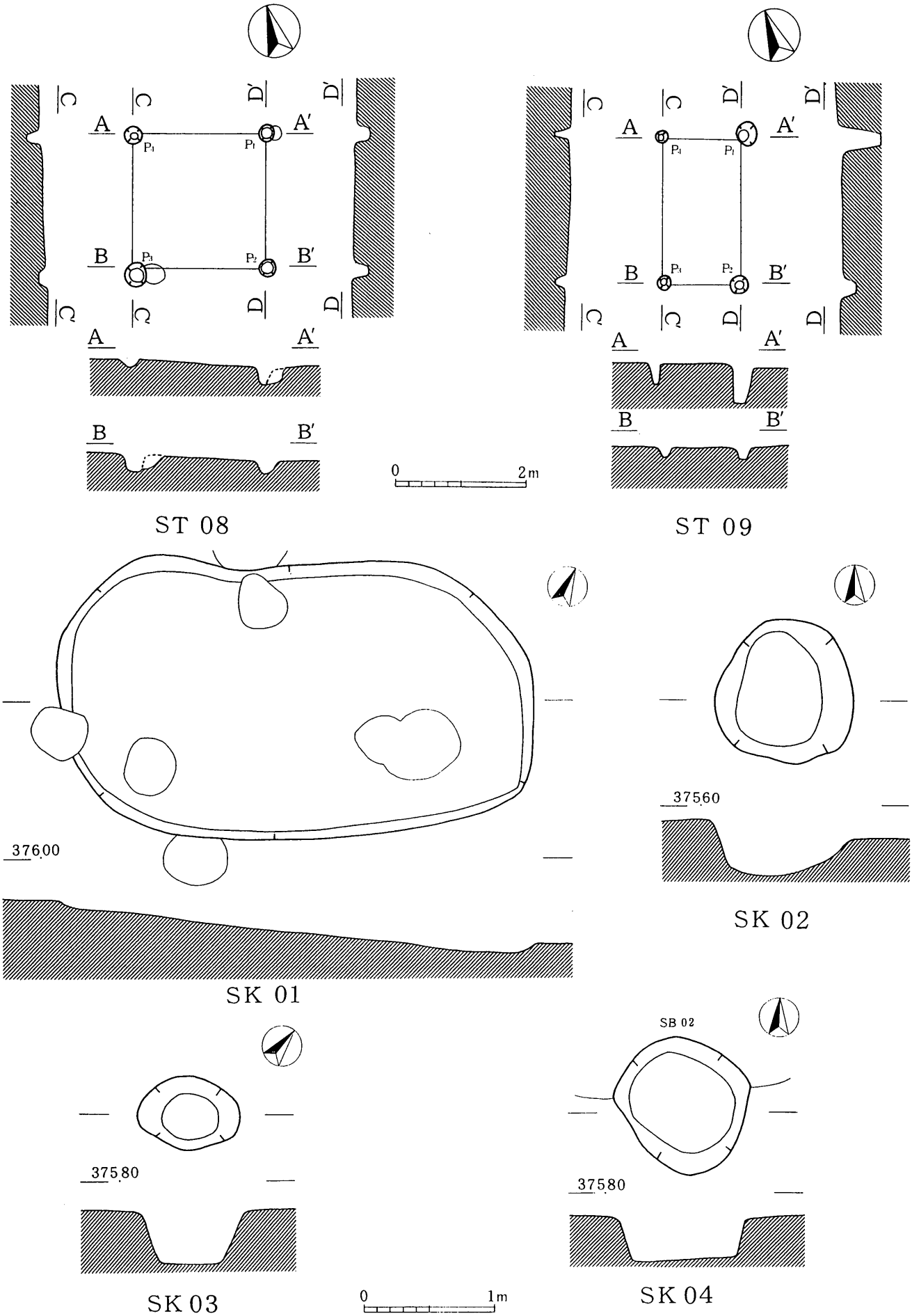


ST 06

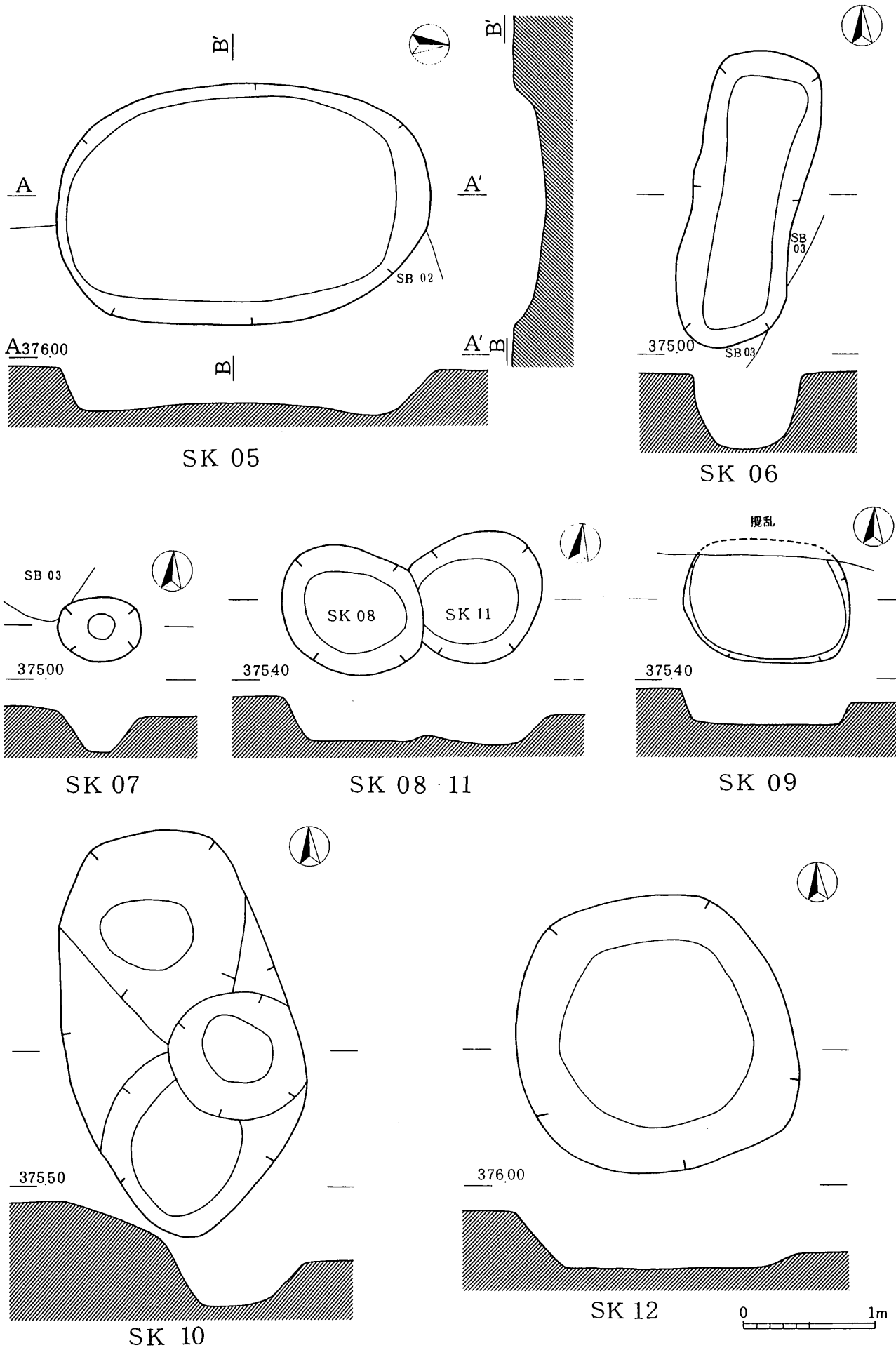


ST 07

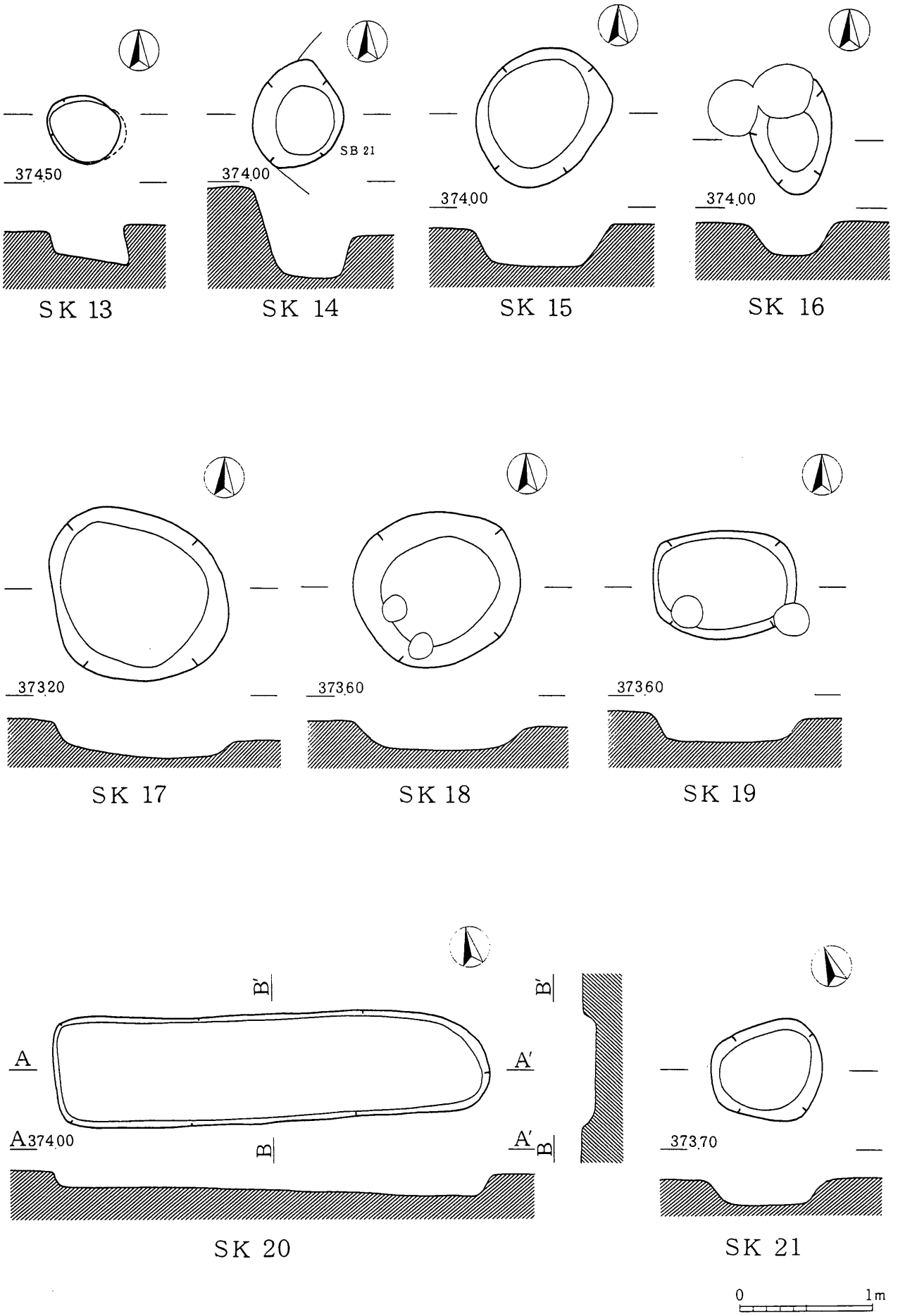
図版27　ST04・ST05・ST06・ST07



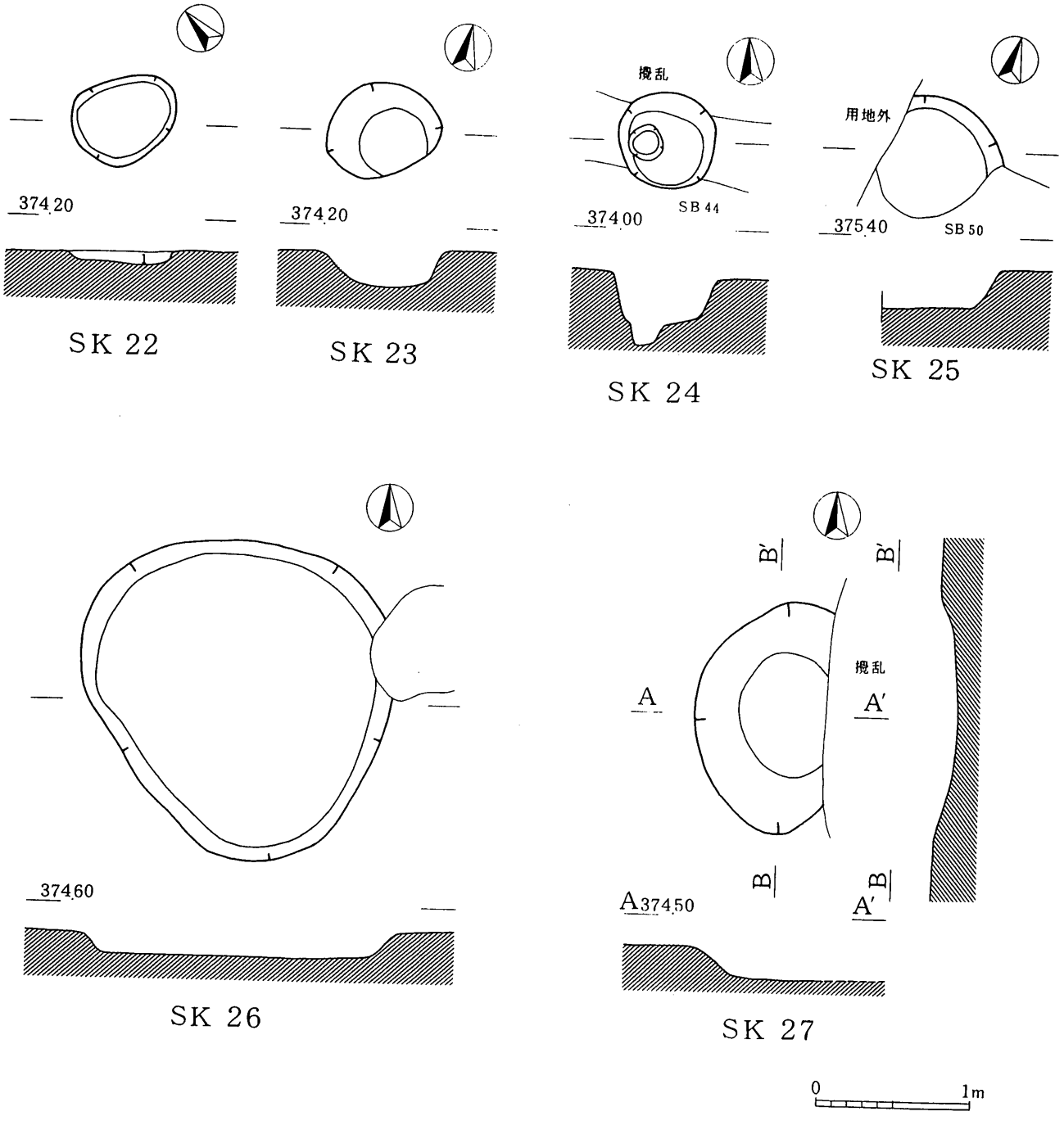
図版28　ST08・ST09・SK01～SK04



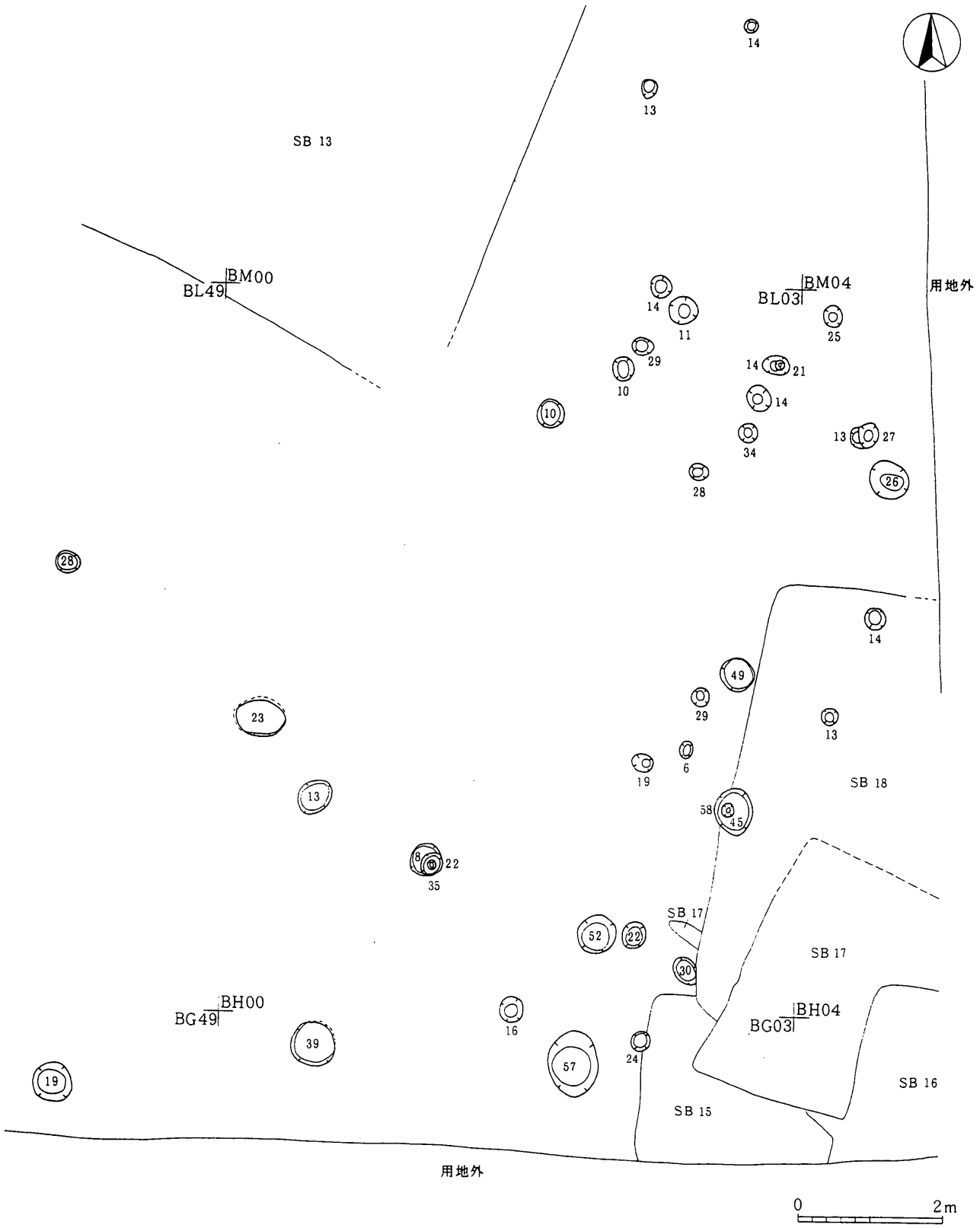
図版29　SK05～SK12



図版30　SK13～SK21

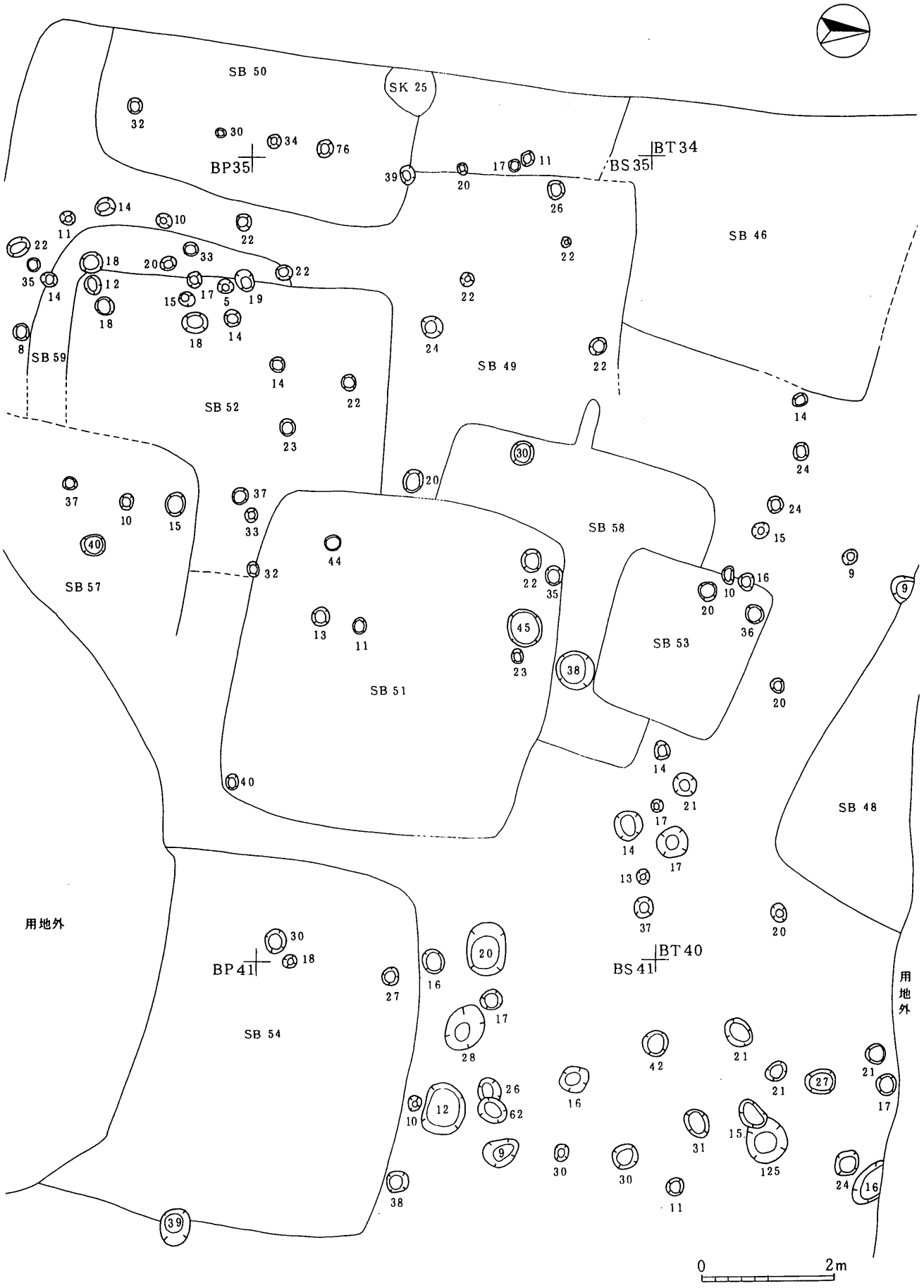


図版31　SK22～SK27

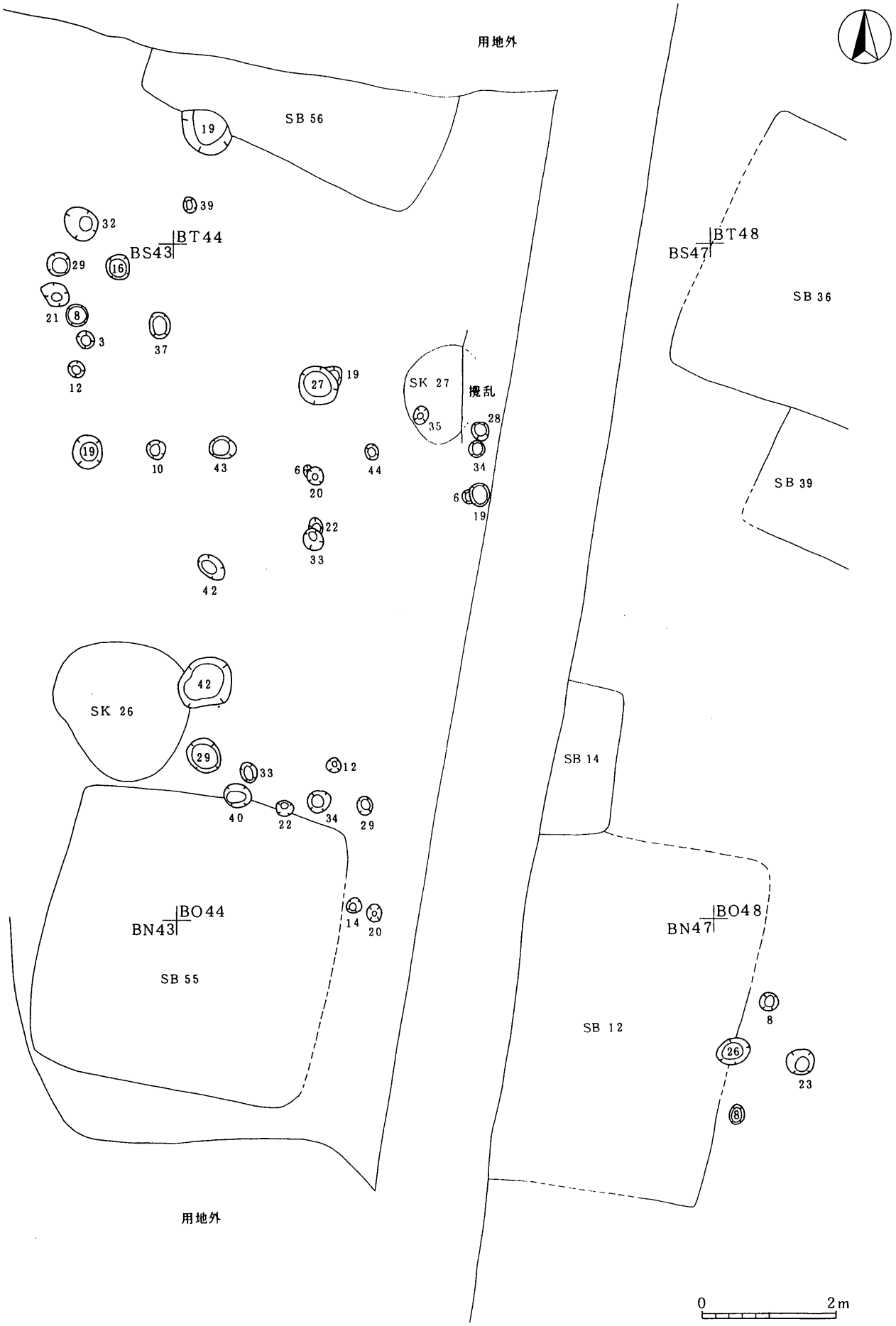


図版32　周辺ピット図1

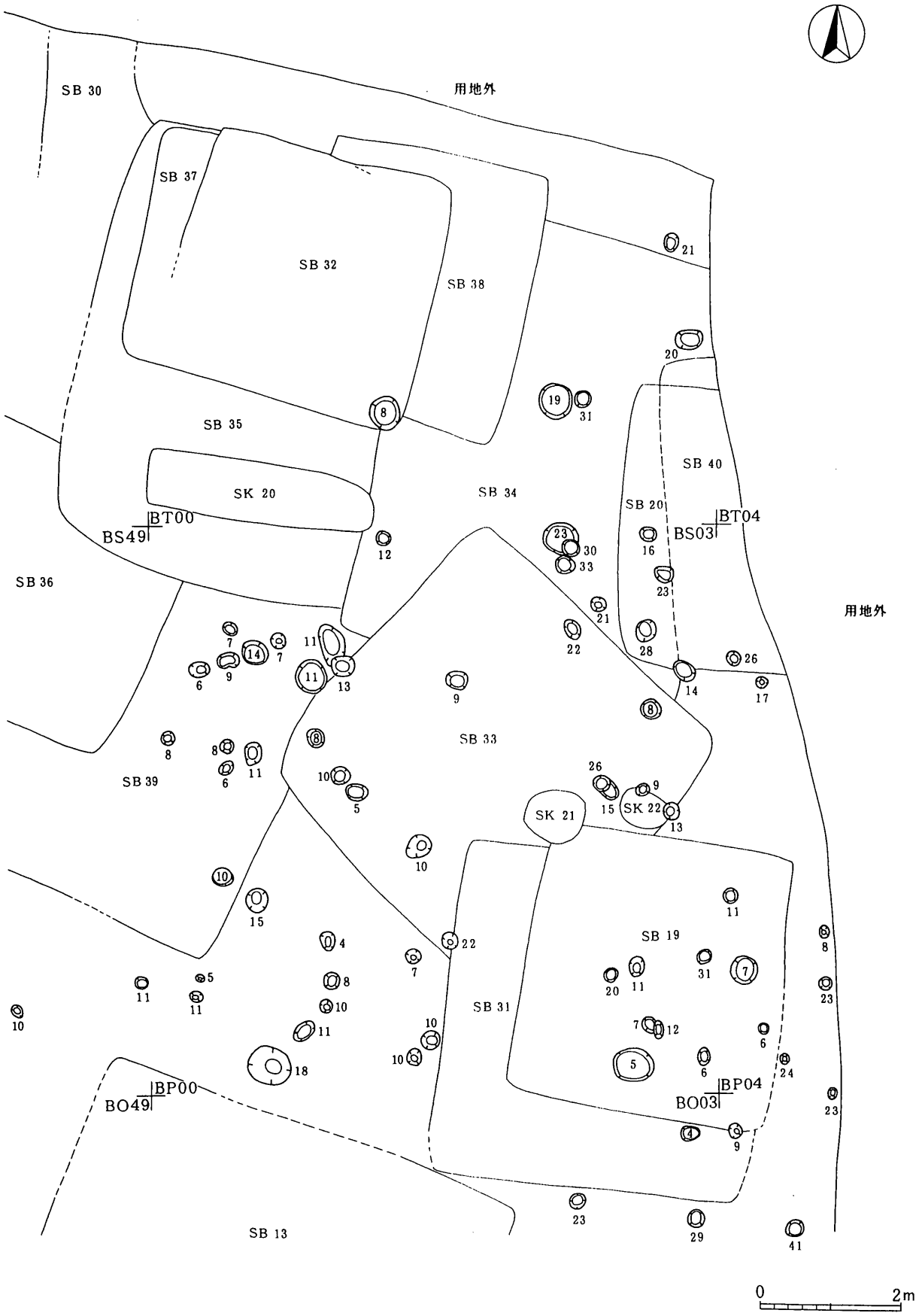
図版33　周辺ピット割付図



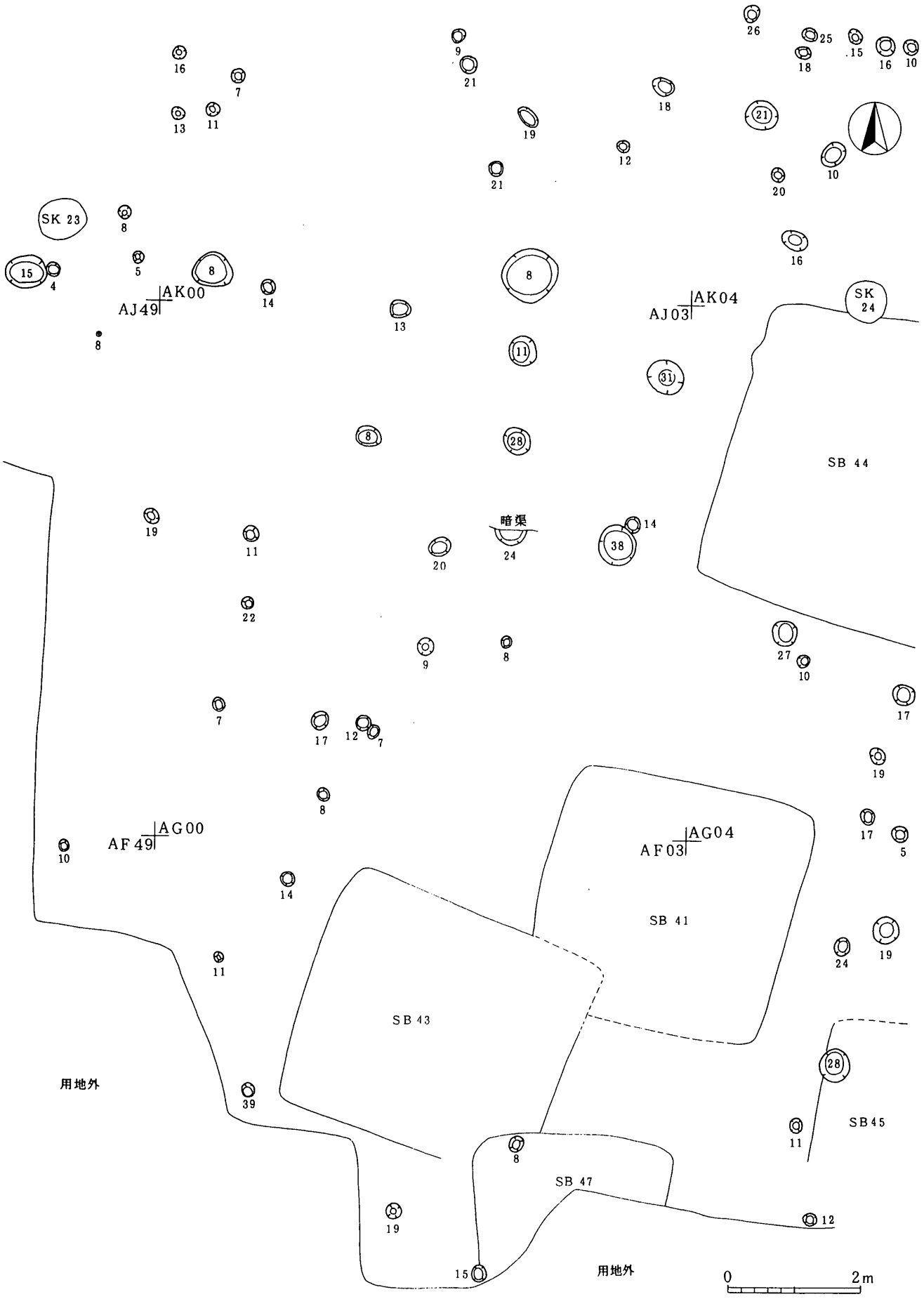
図版34　周辺ピット図2



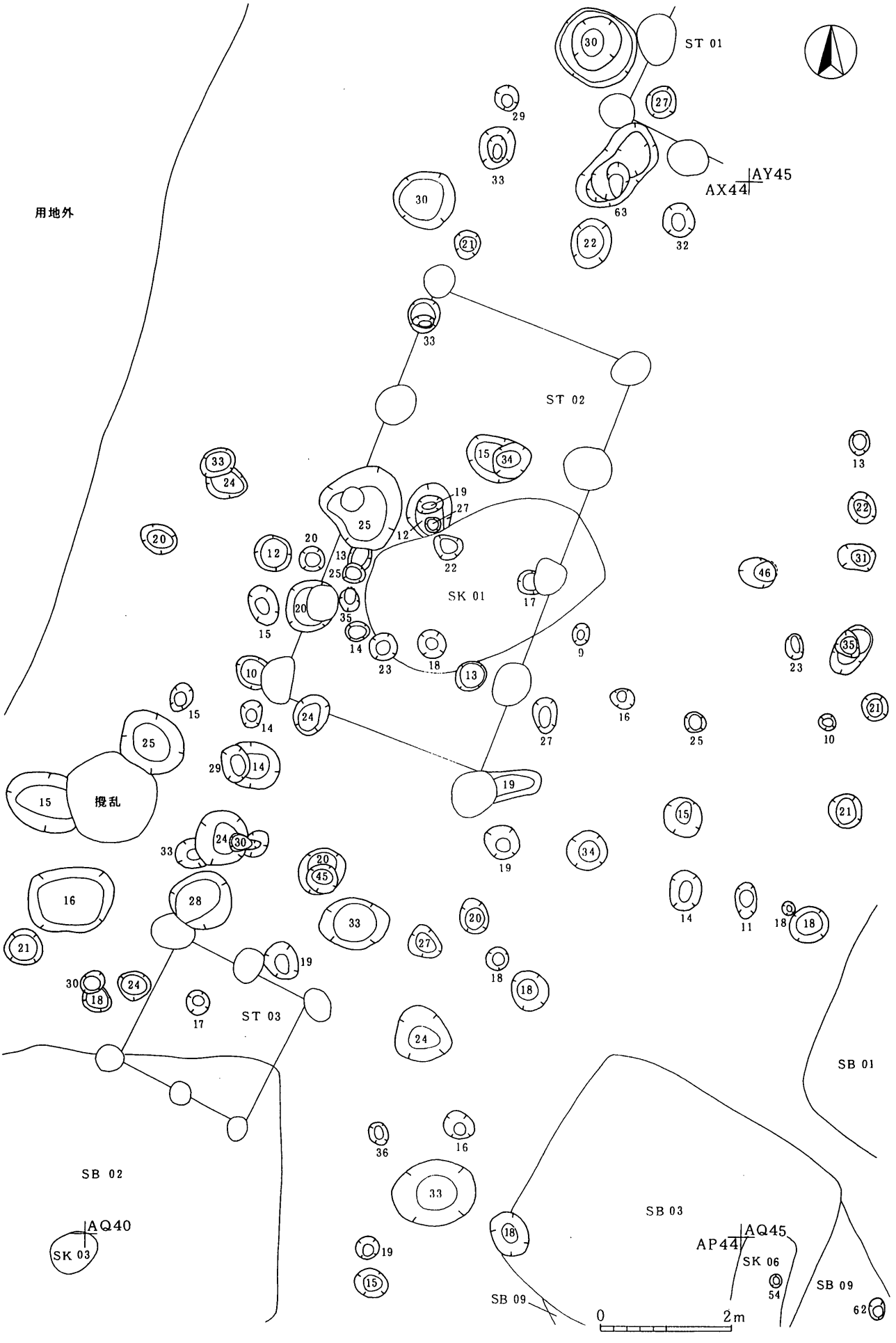
図版35　周辺ピット図3



図版36　周辺ピット図4

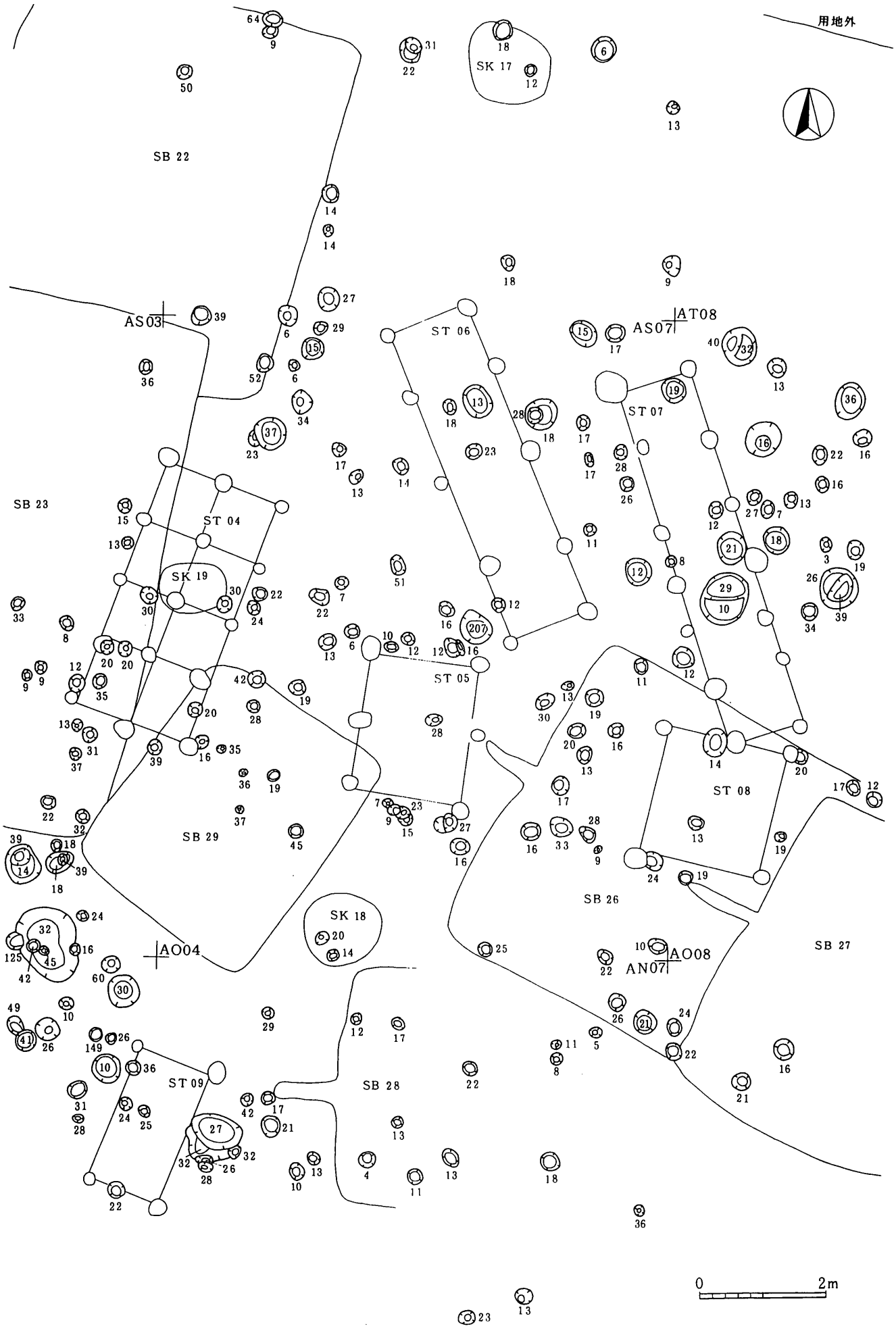


図版37　周辺ピット図5

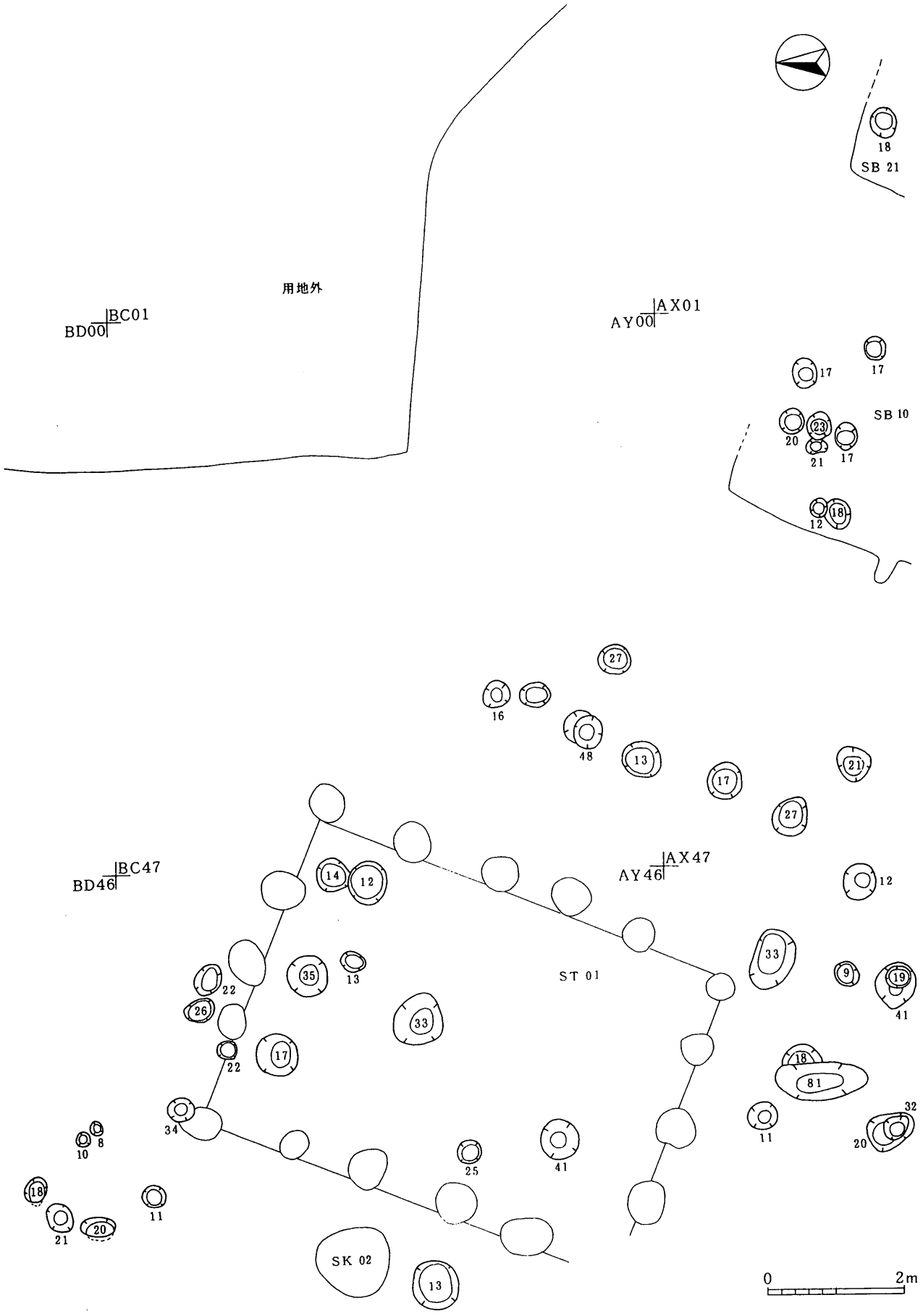


図版38　周辺ピット図6

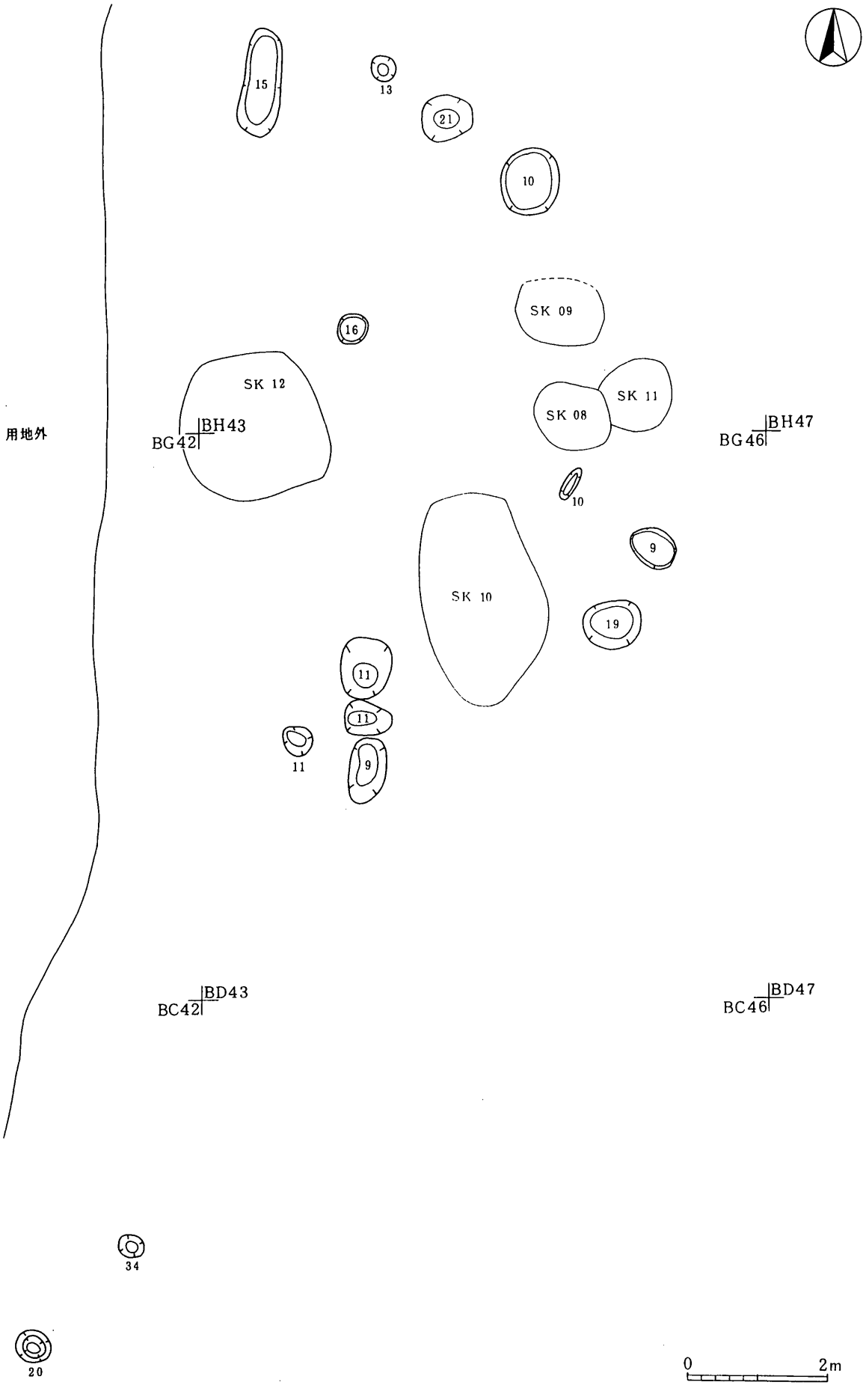
図版39　周辺ピット図7



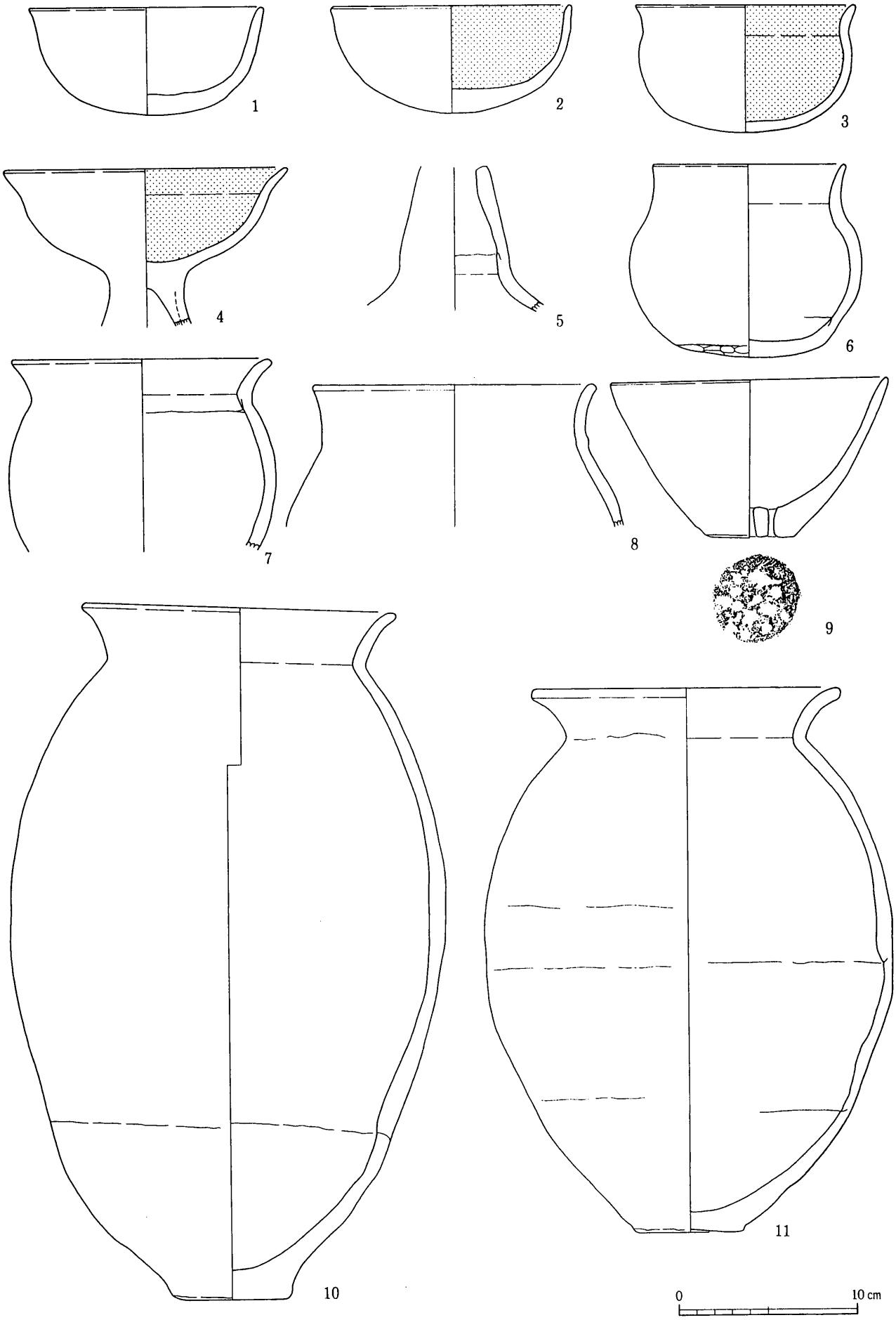
図版40　周辺ピット図8



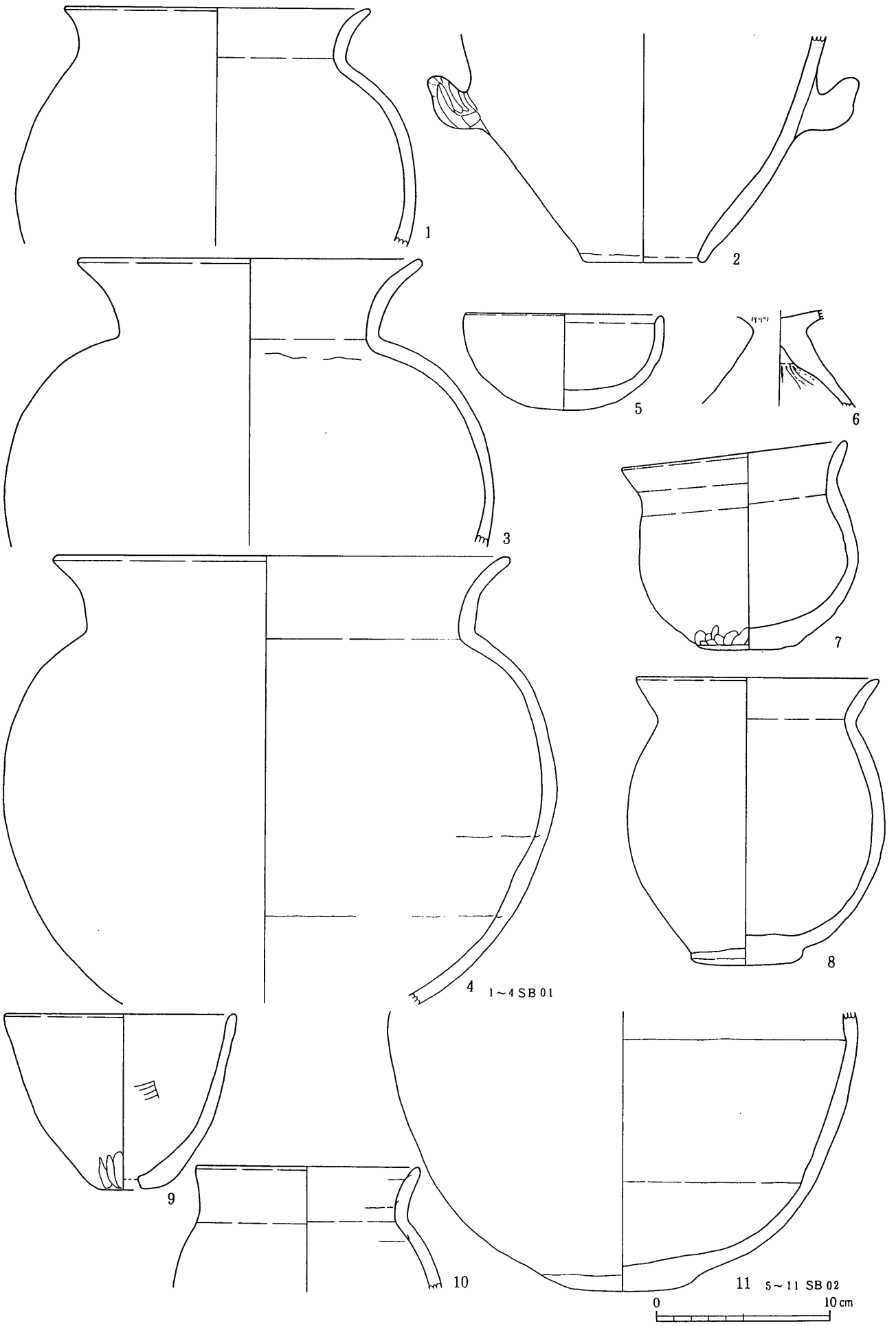
図版41　周辺ピット図９



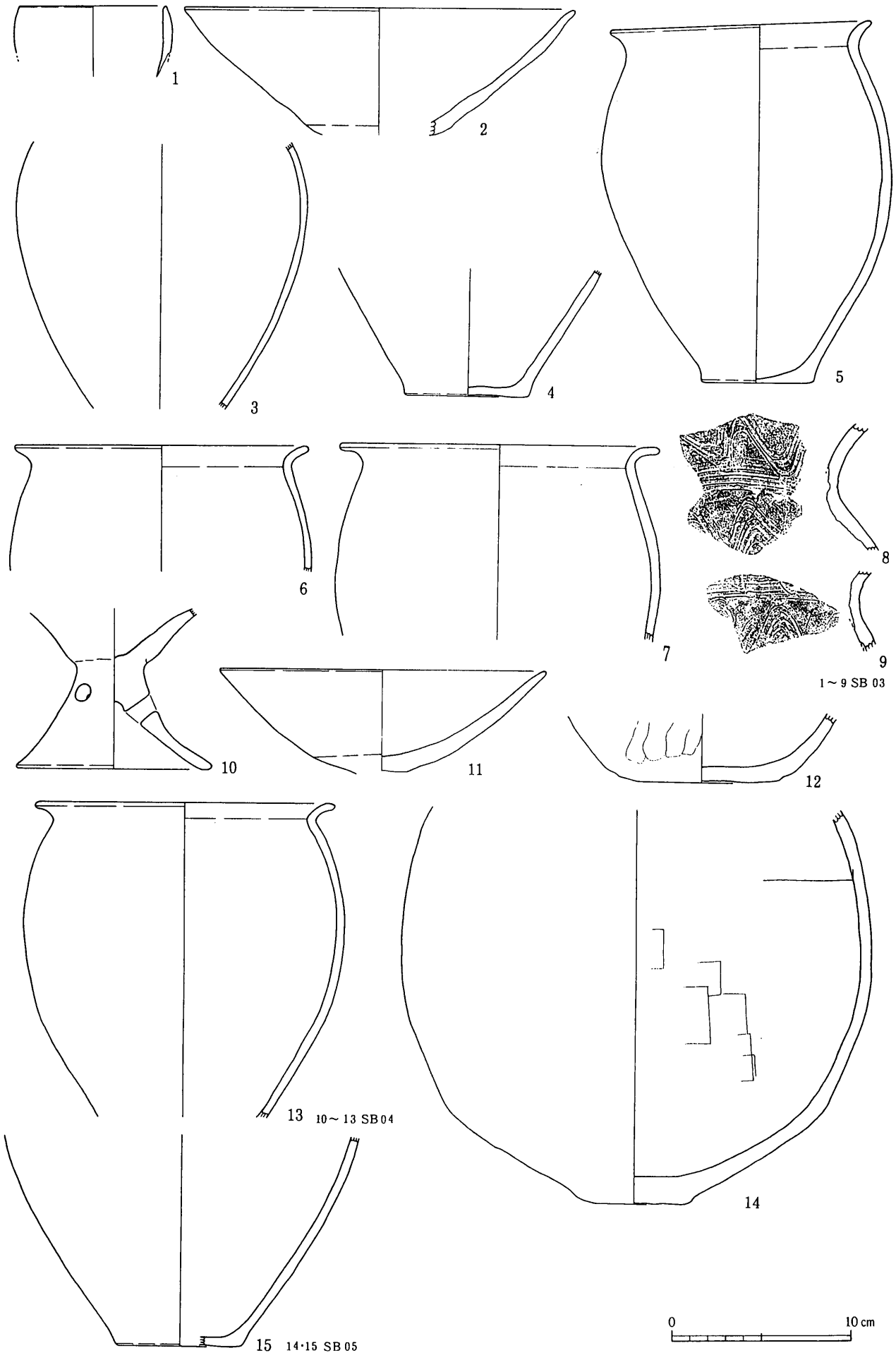
図版42　周辺ピット図10



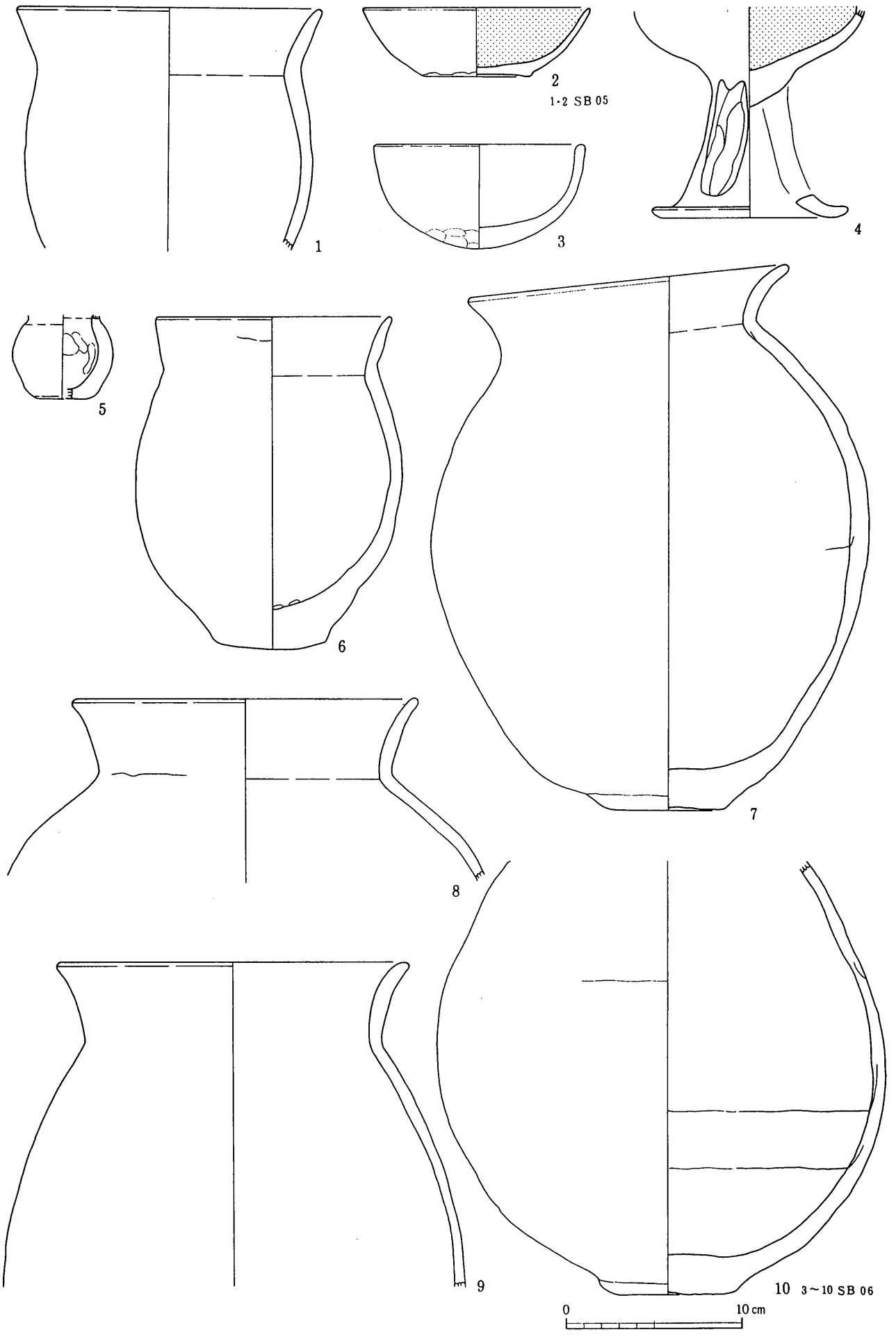
図版43　SB01 出土遺物



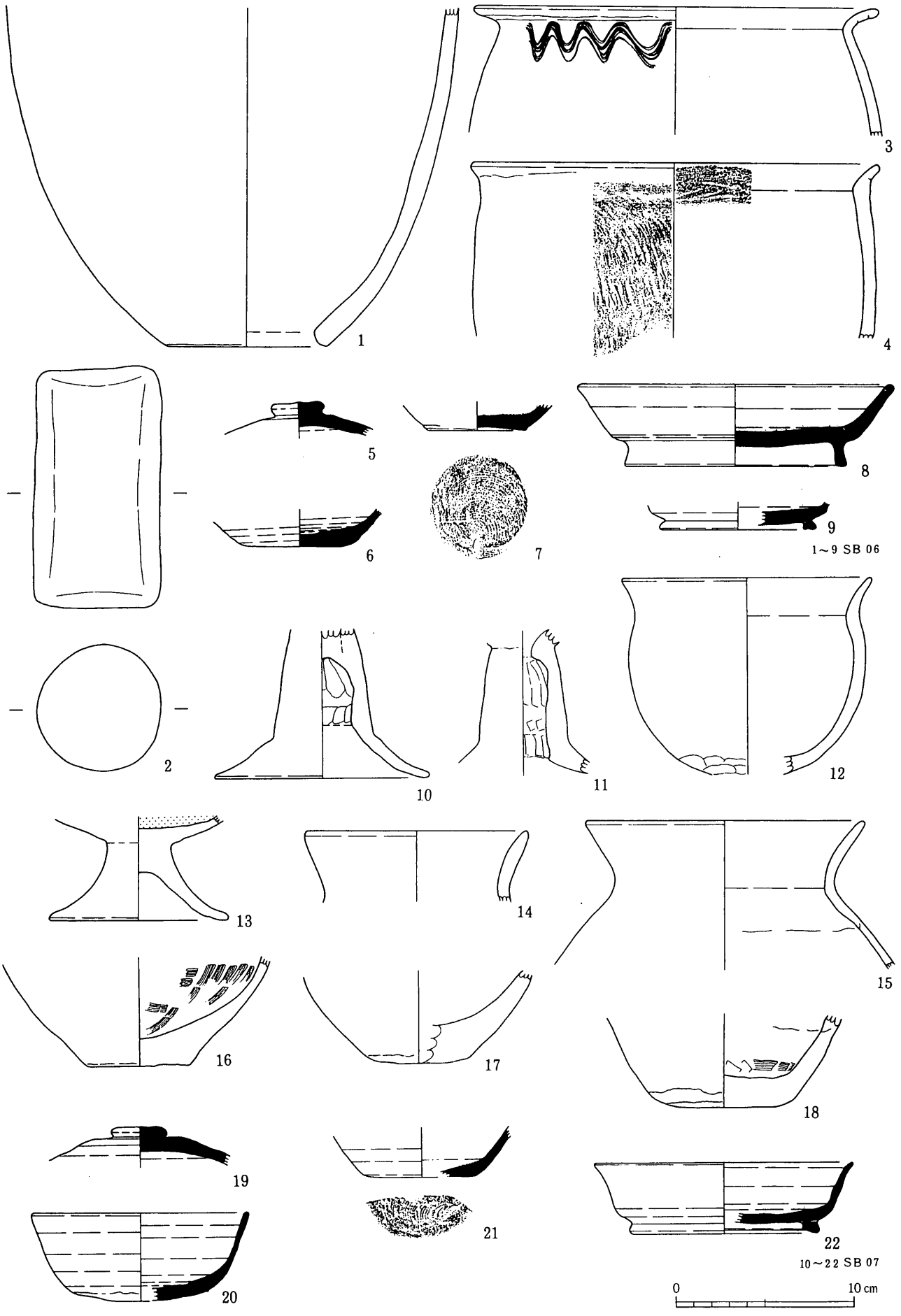
図版44　SB01・SB02 出土遺物



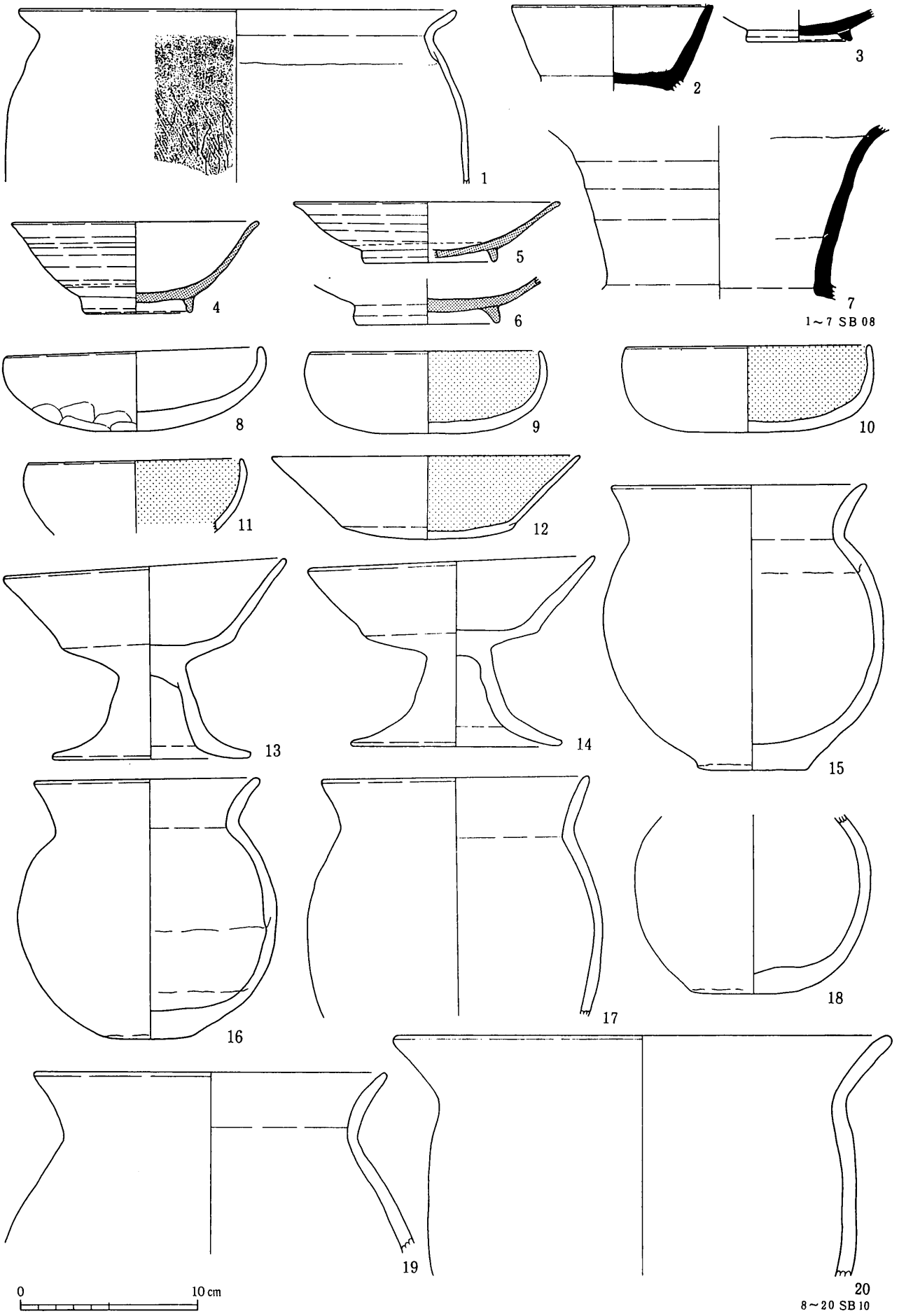
図版45　SB03・SB04・SB05 出土遺物



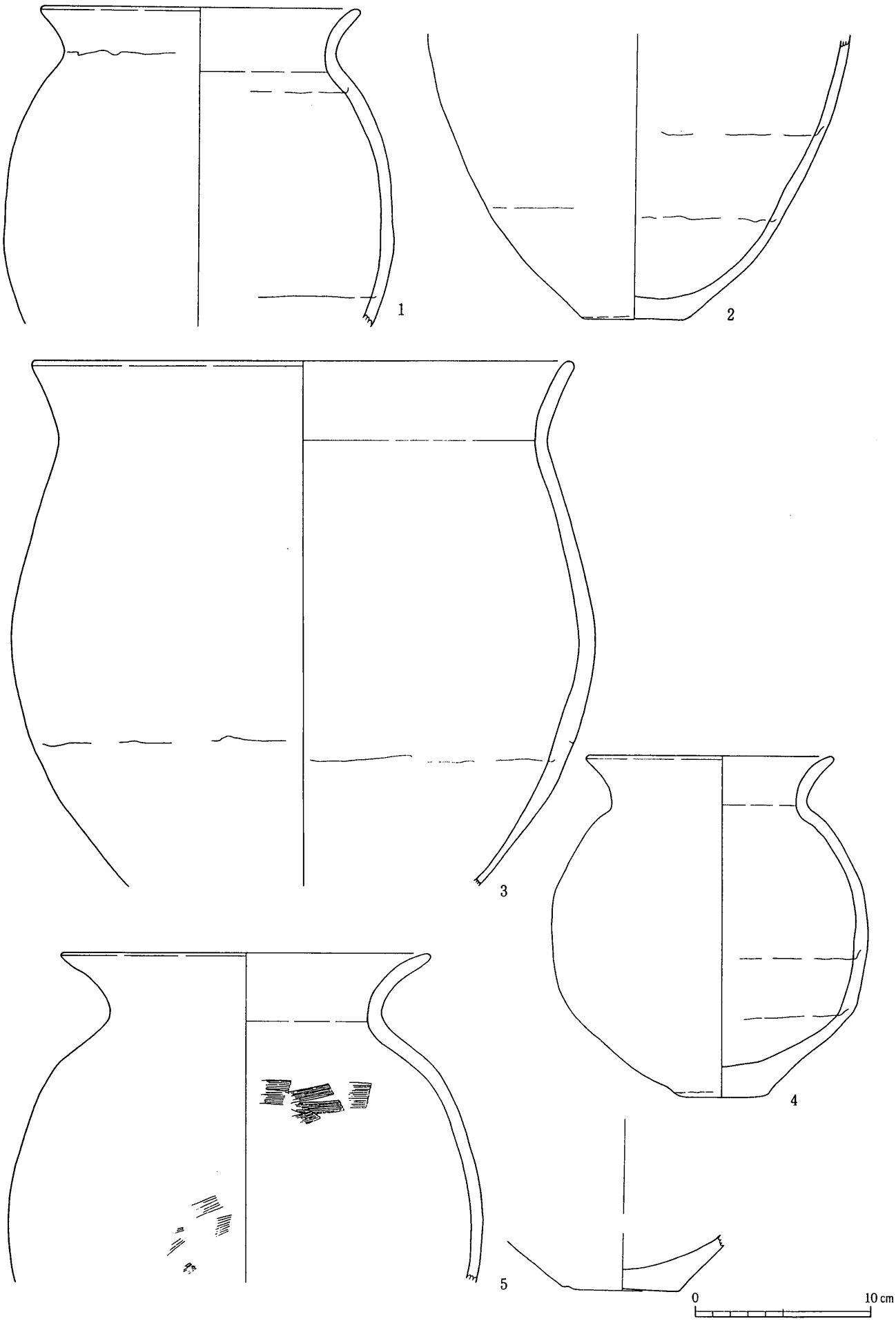
図版46　SB05・SB06 出土遺物



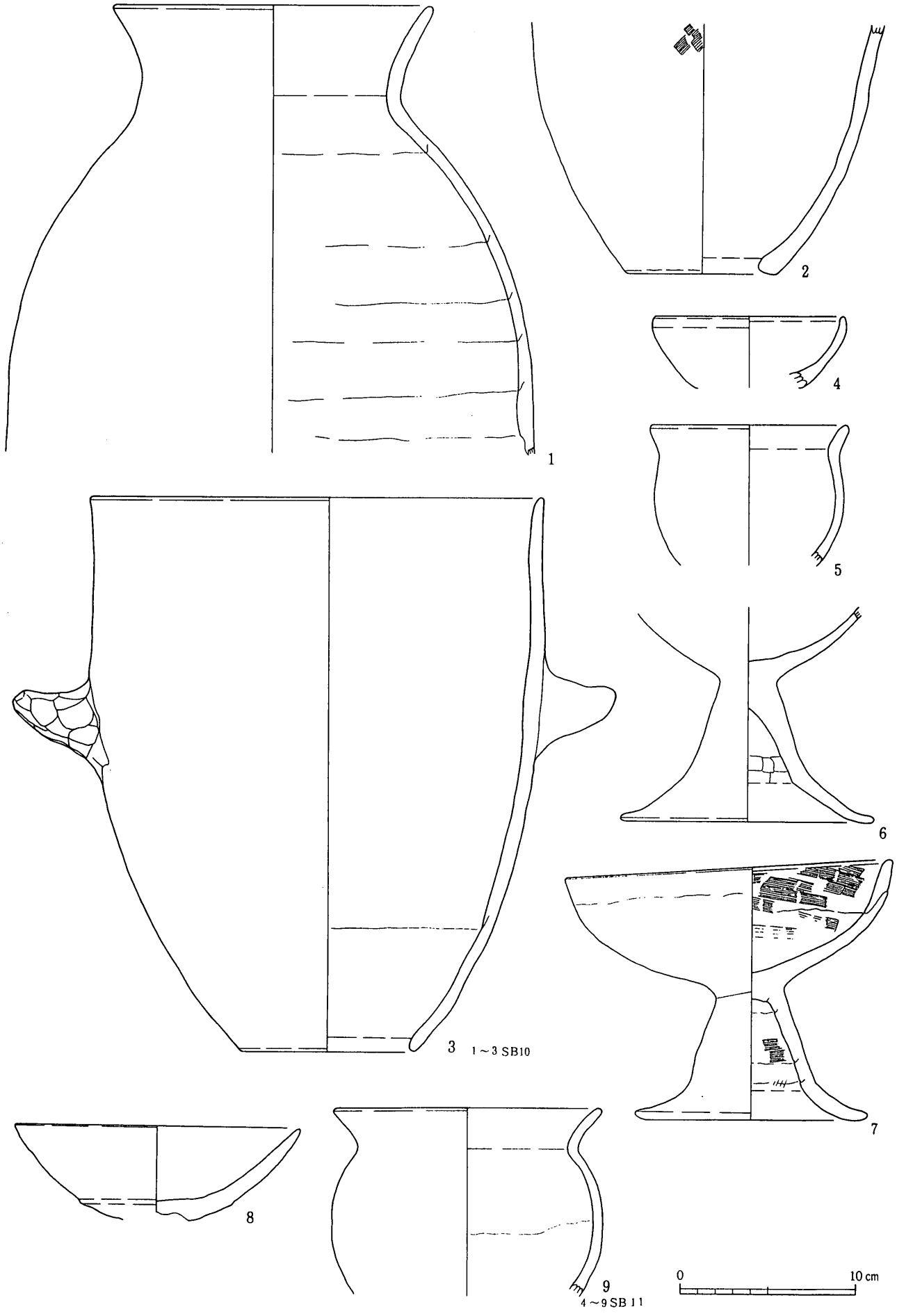
図版47　SB06・SB07 出土遺物



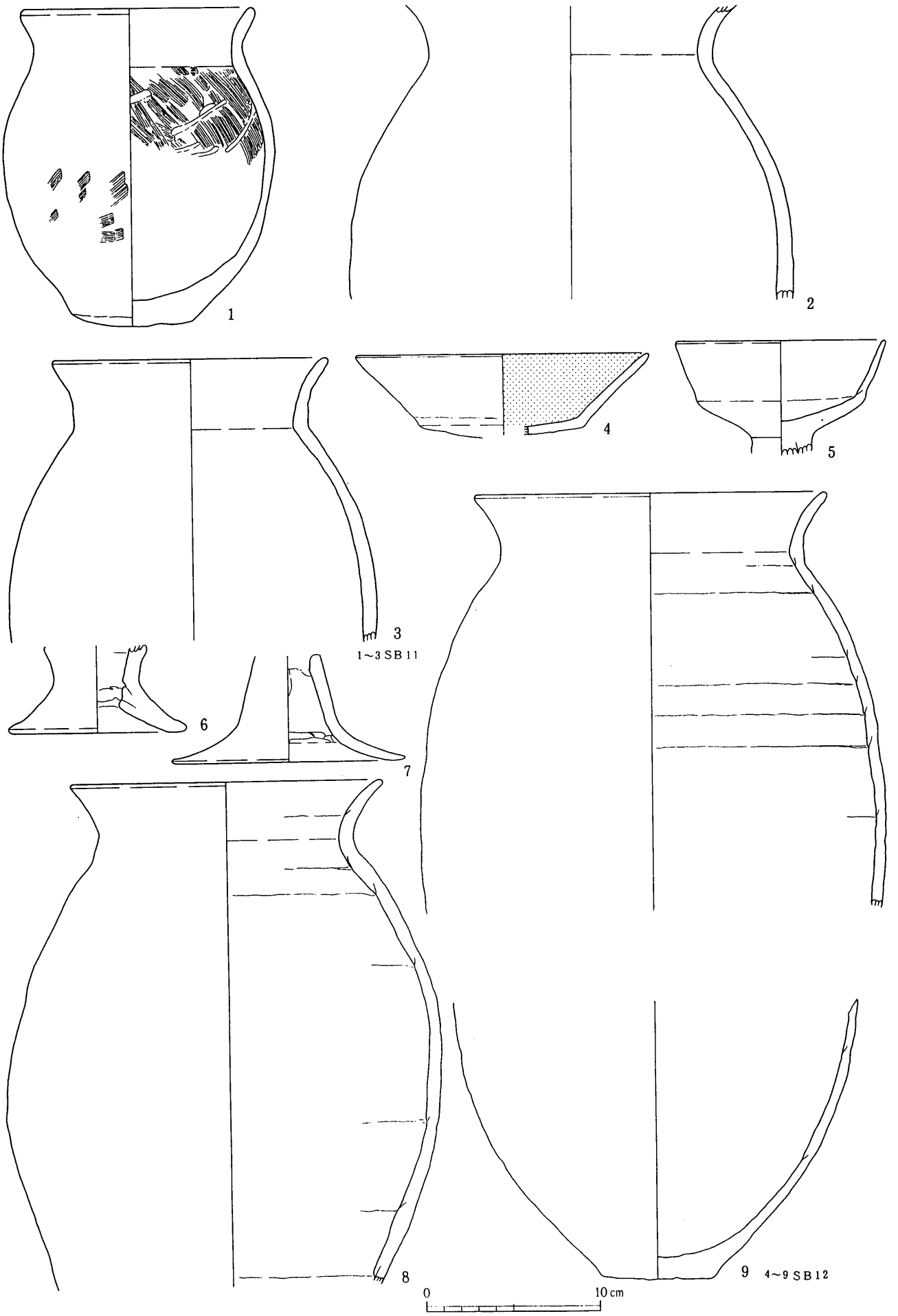
図版48　SB08・SB10 出土遺物



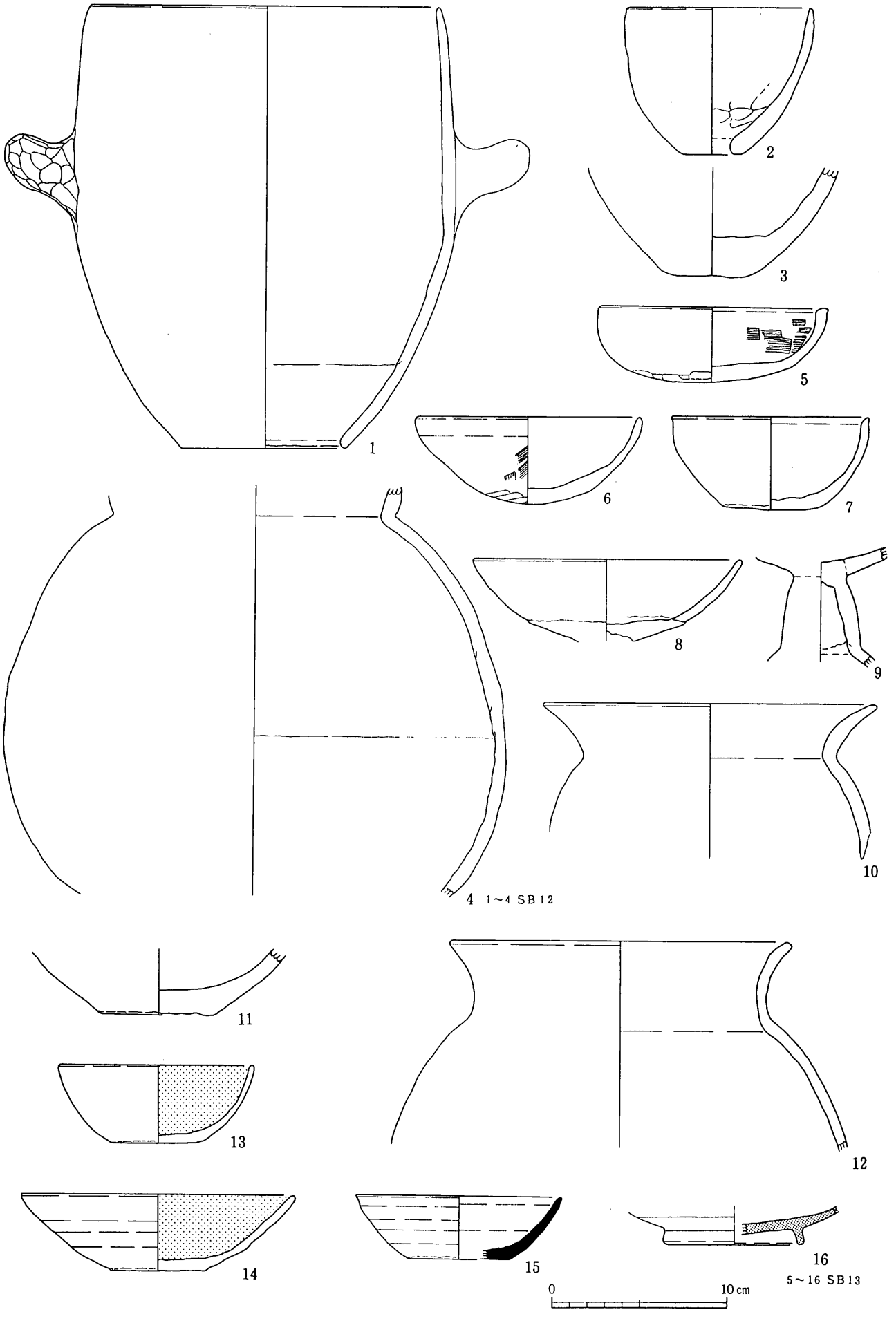
図版49　SB10 出土遺物



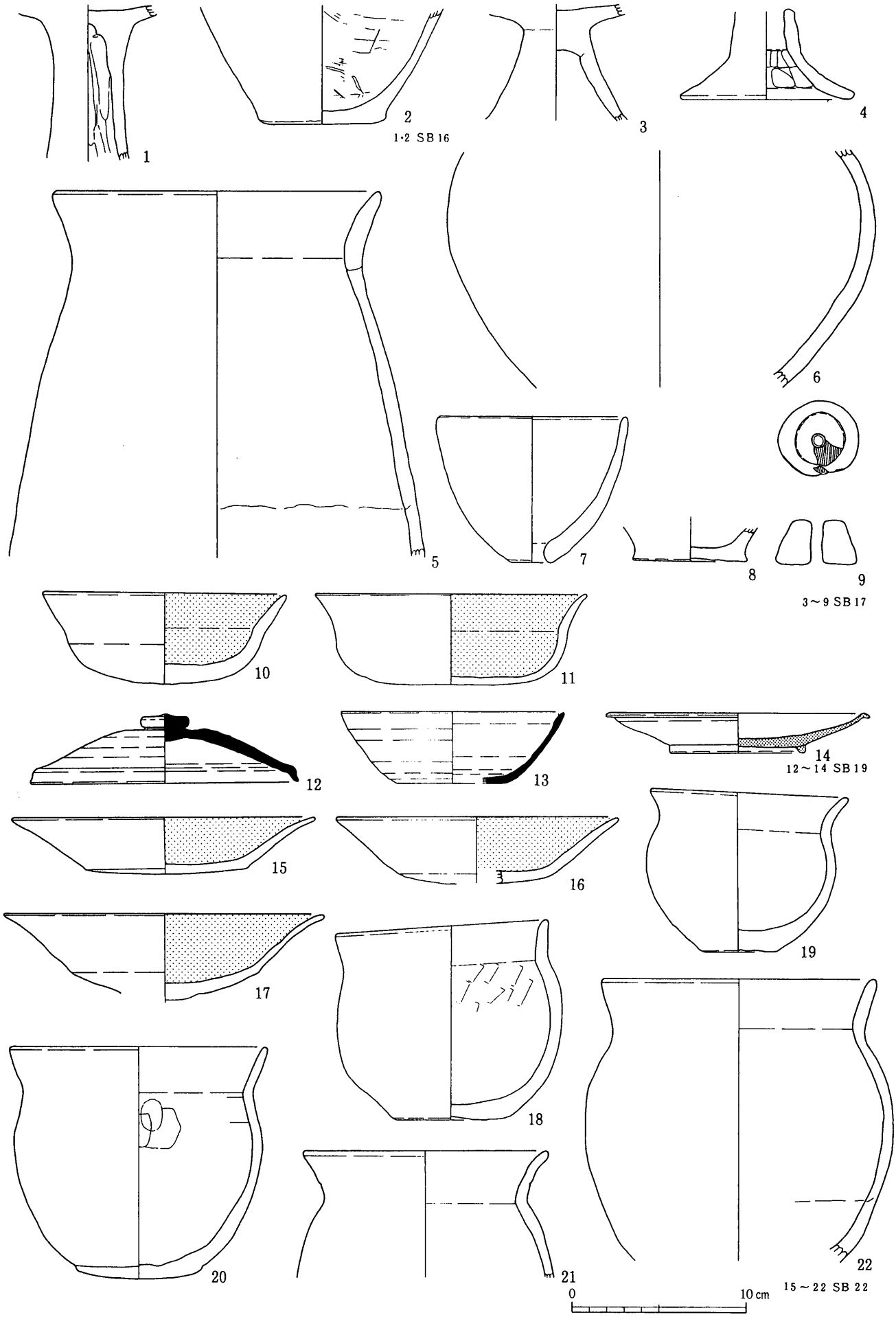
図版50　SB10・SB11 出土遺物



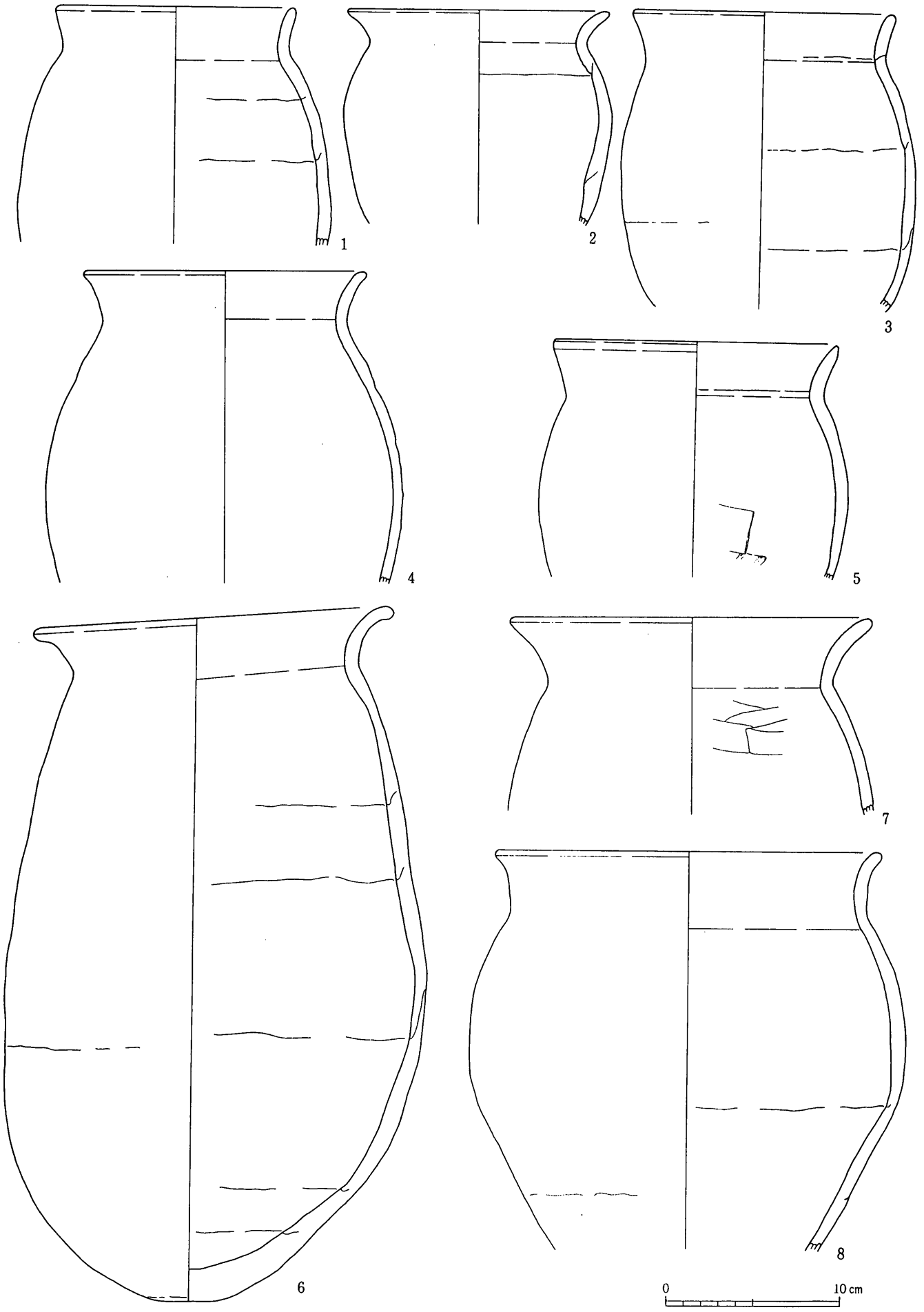
図版51　SB11・SB12 出土遺物



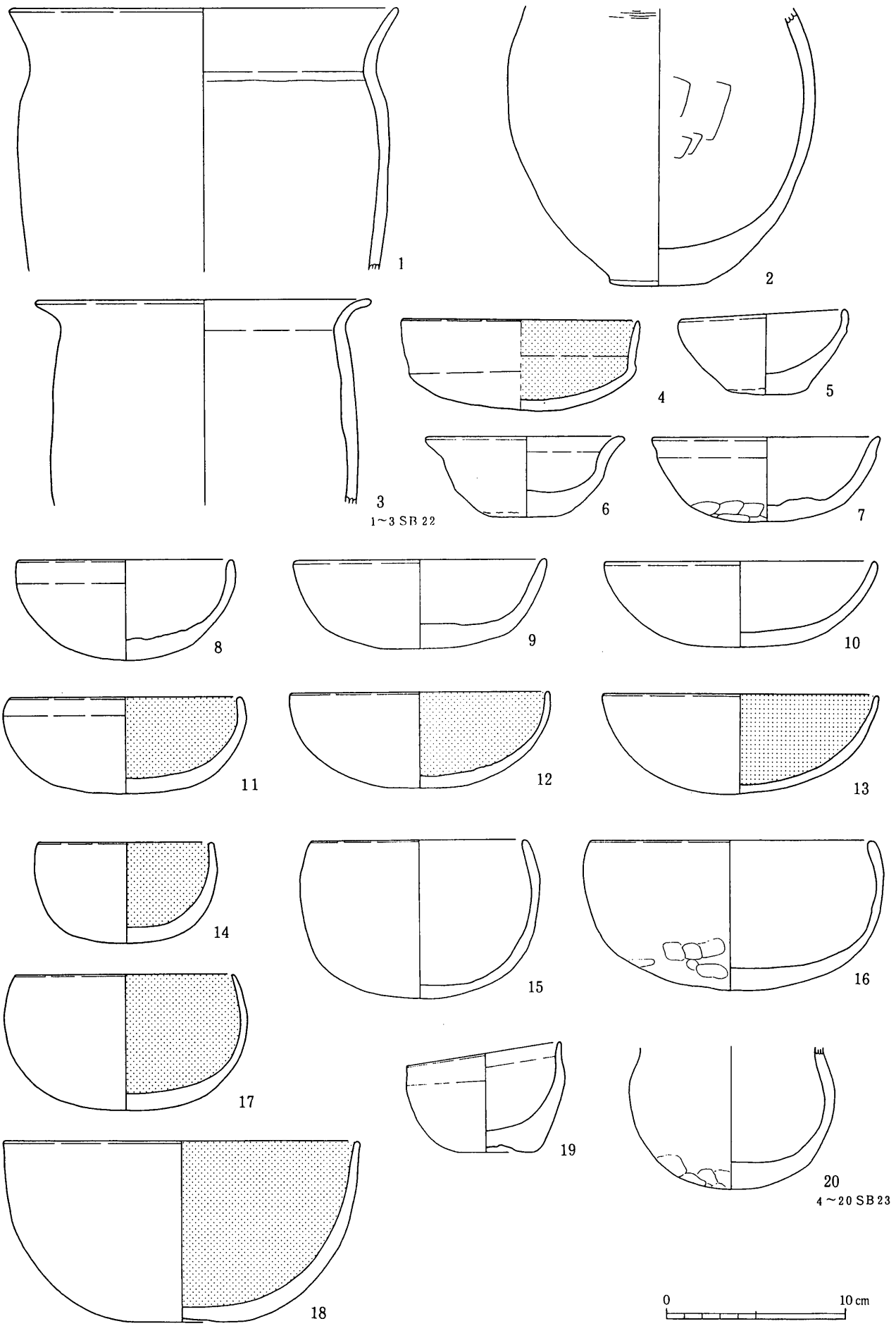
図版52　SB12・SB13 出土遺物



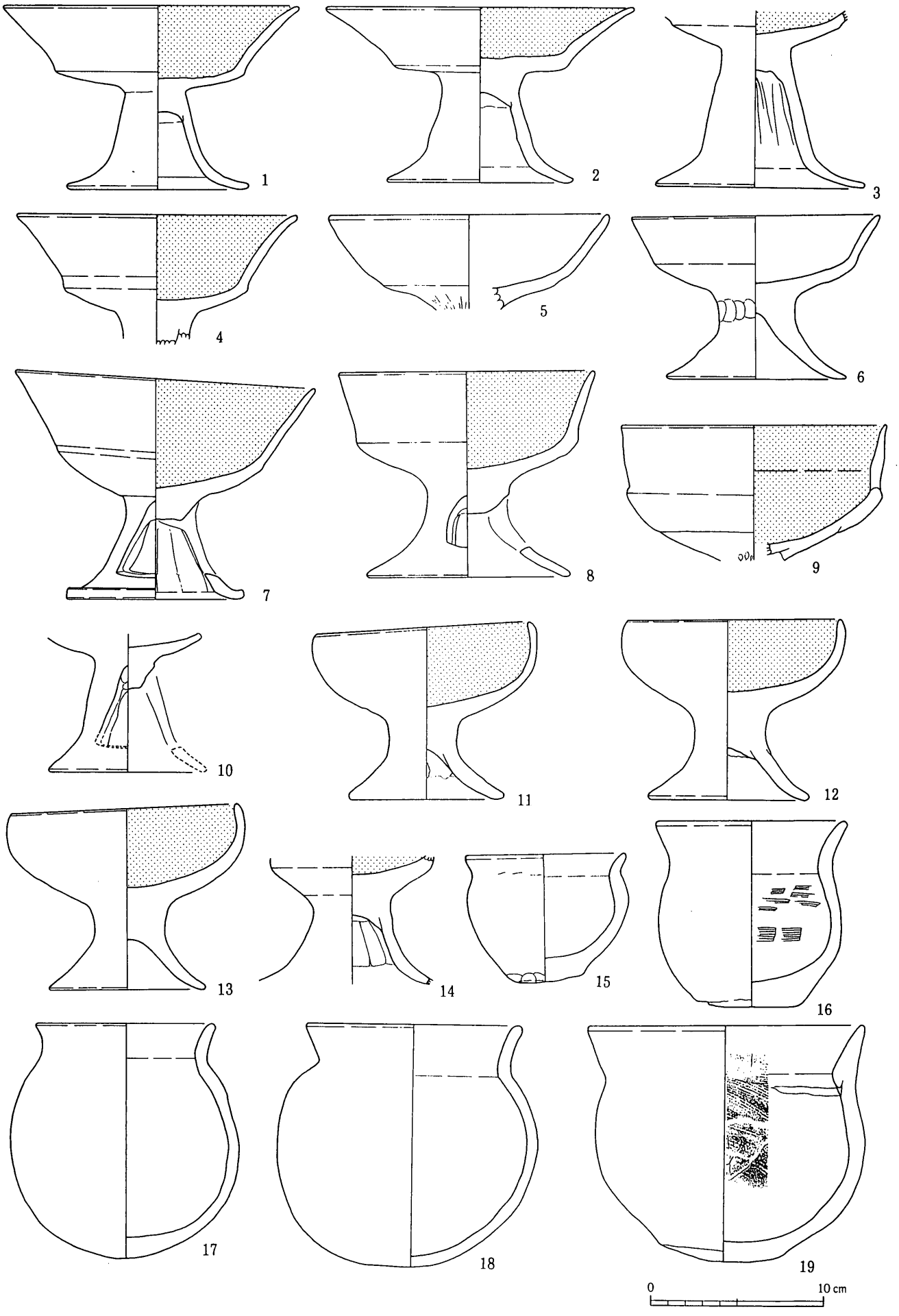
図版53　SB16～SB22 出土遺物



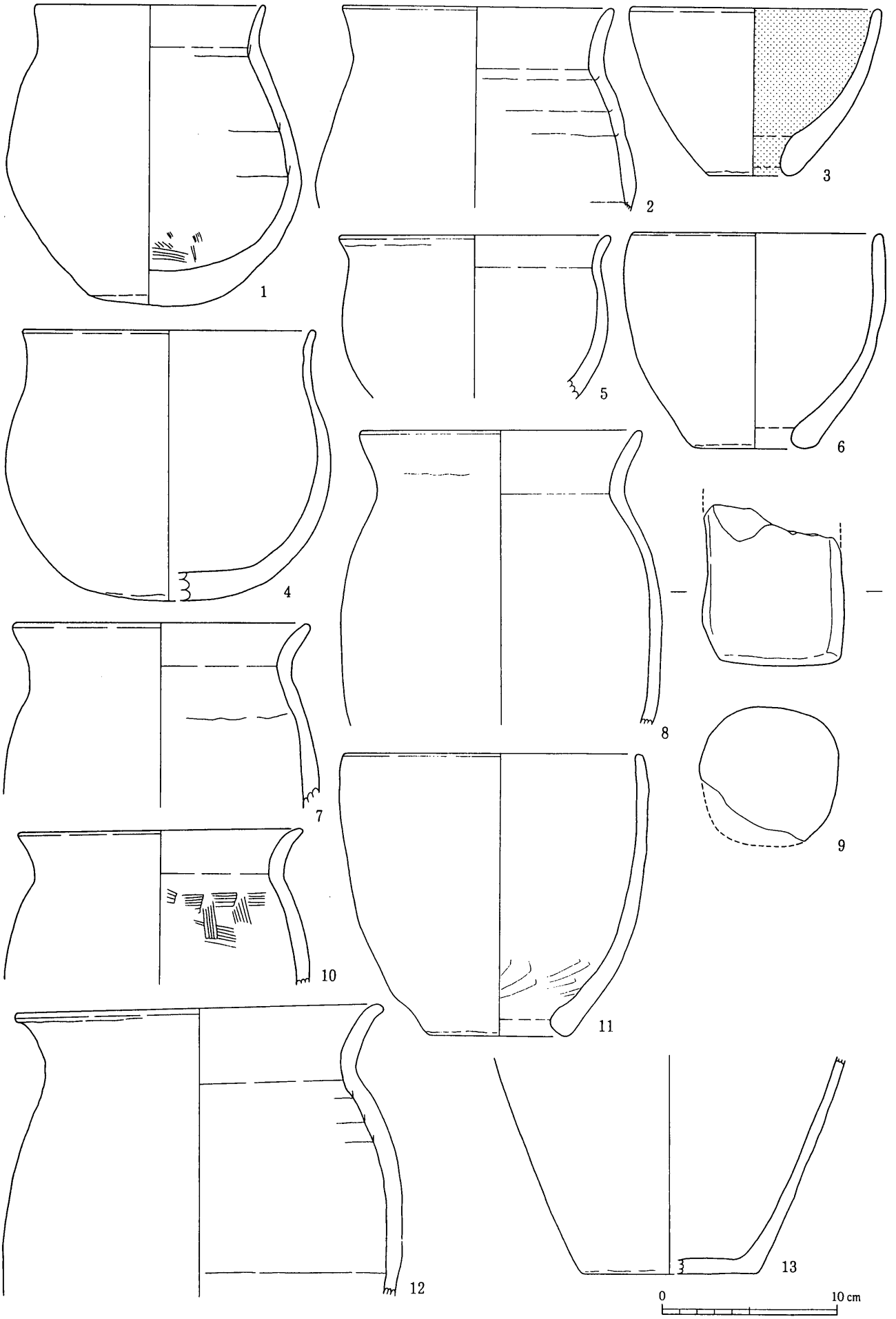
図版54　SB22 出土遺物



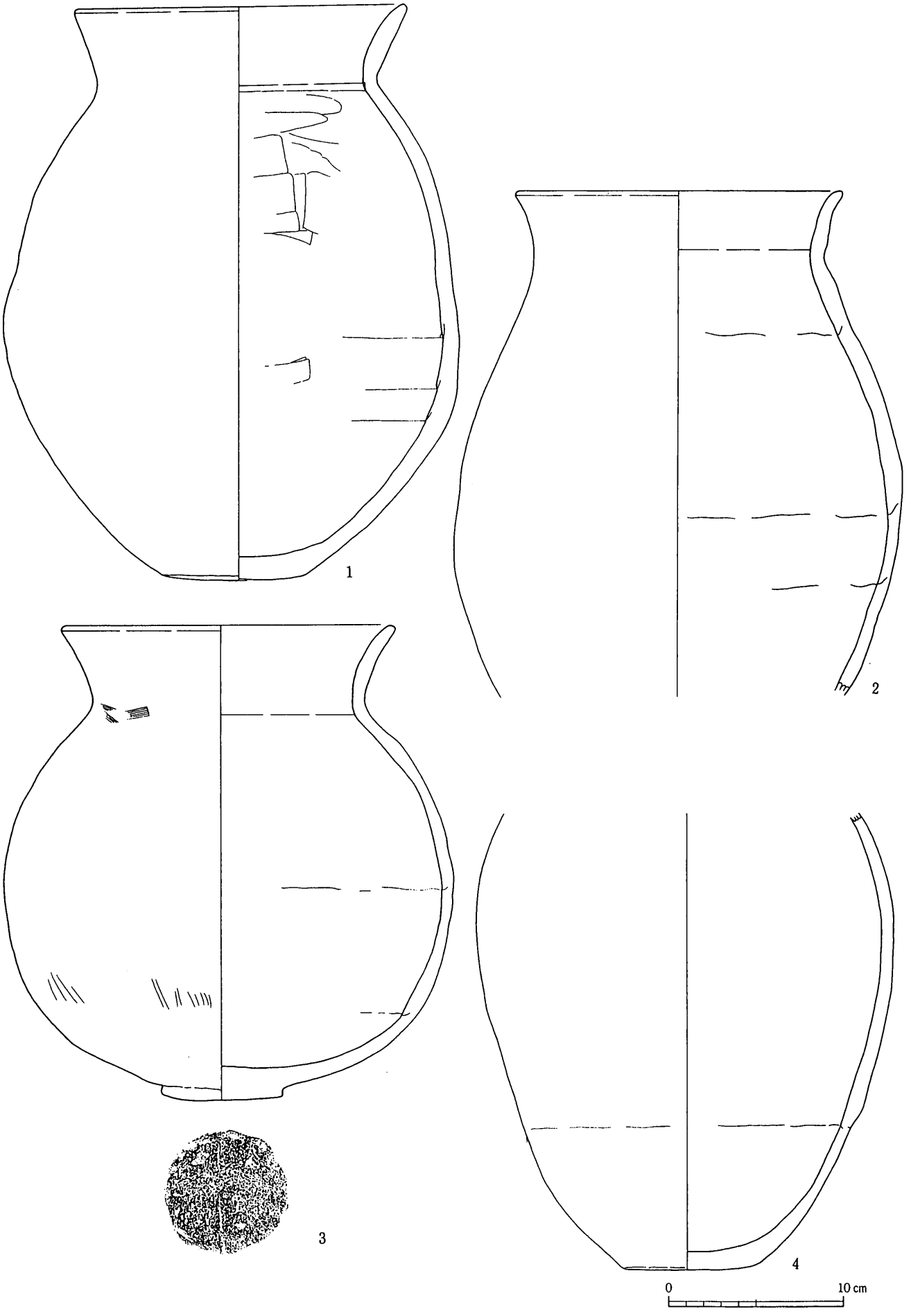
図版55　SB22・SB23 出土遺物



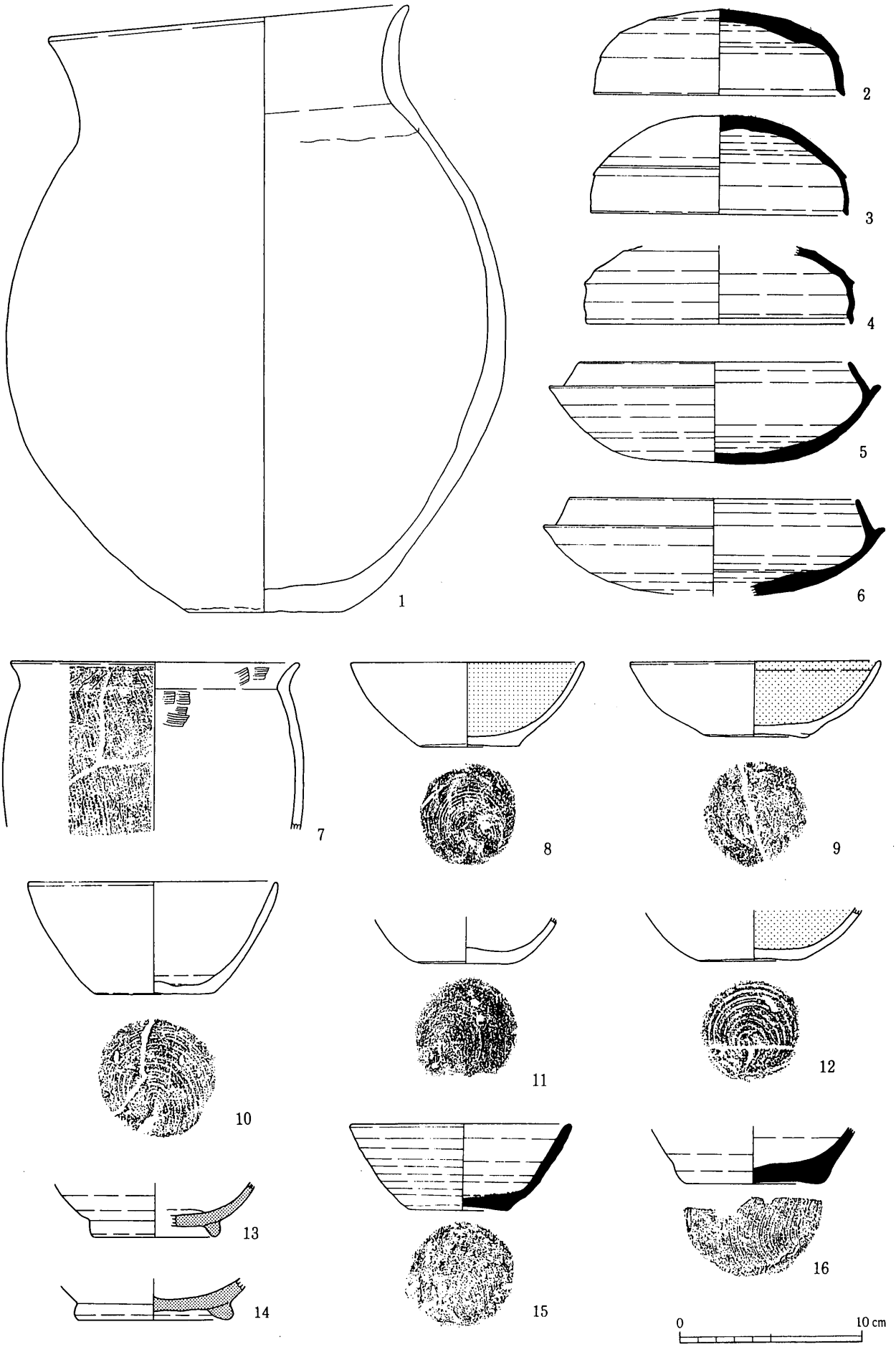
図版56　SB23 出土遺物



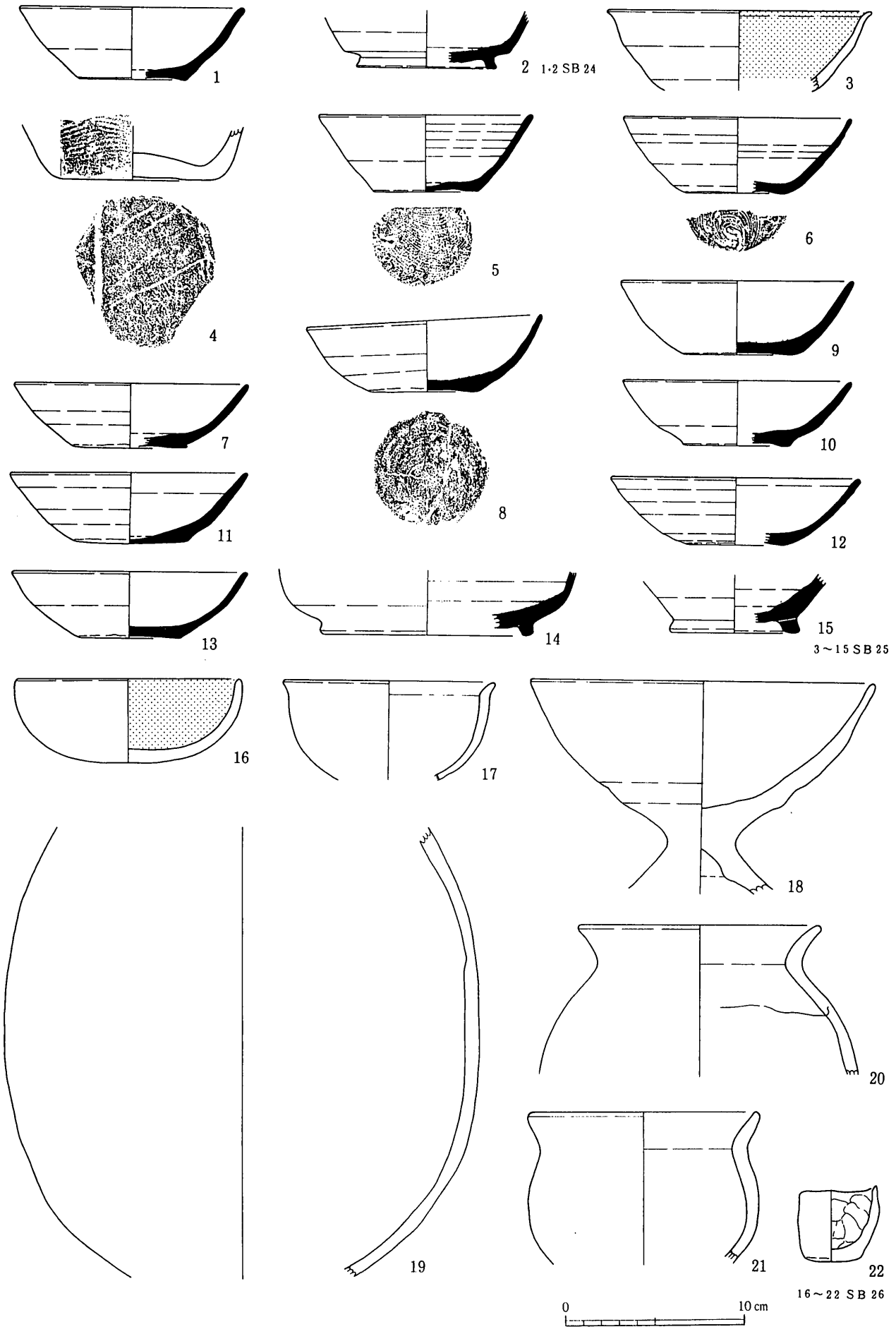
図版57　SB23 出土遺物



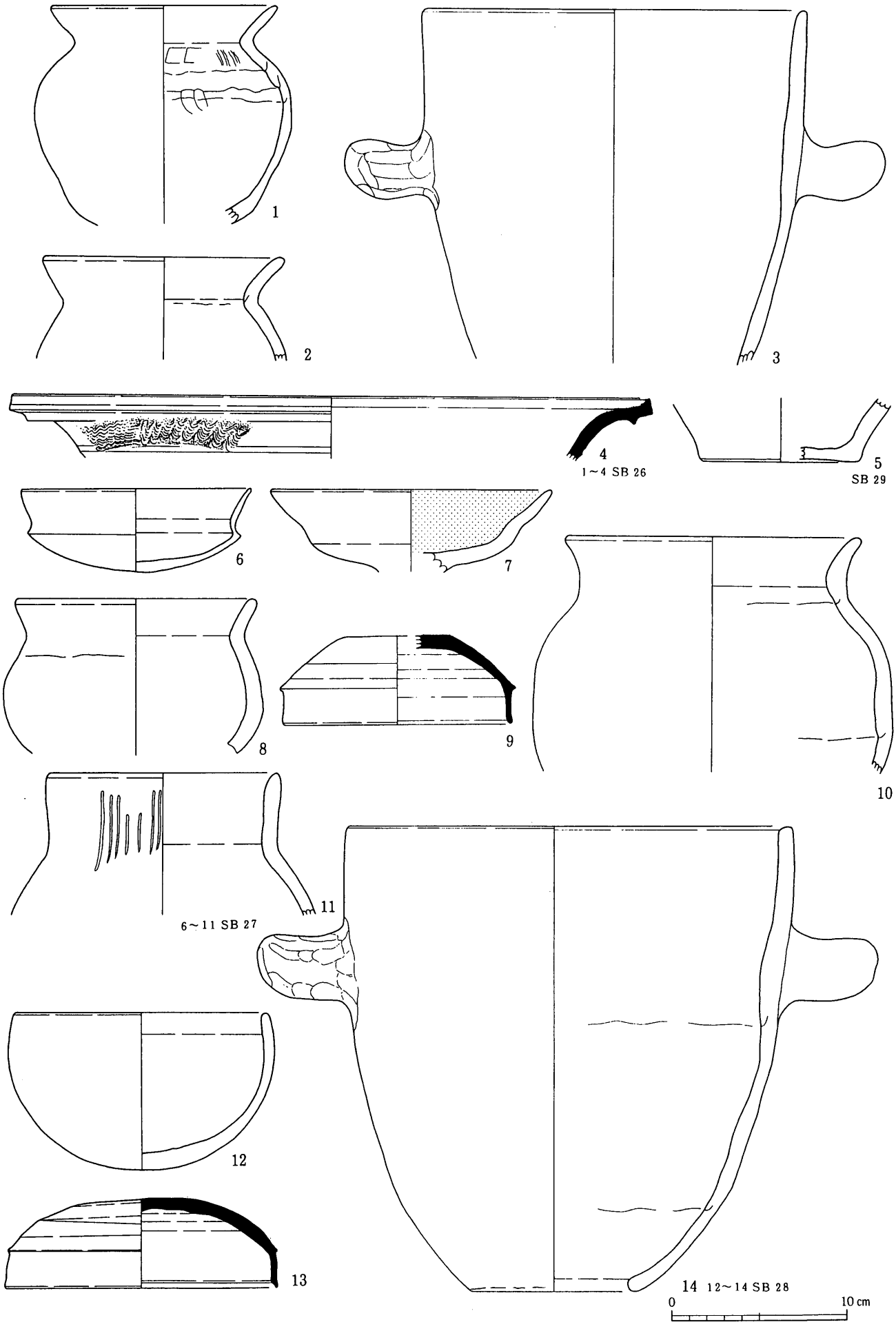
図版58　SB23 出土遺物



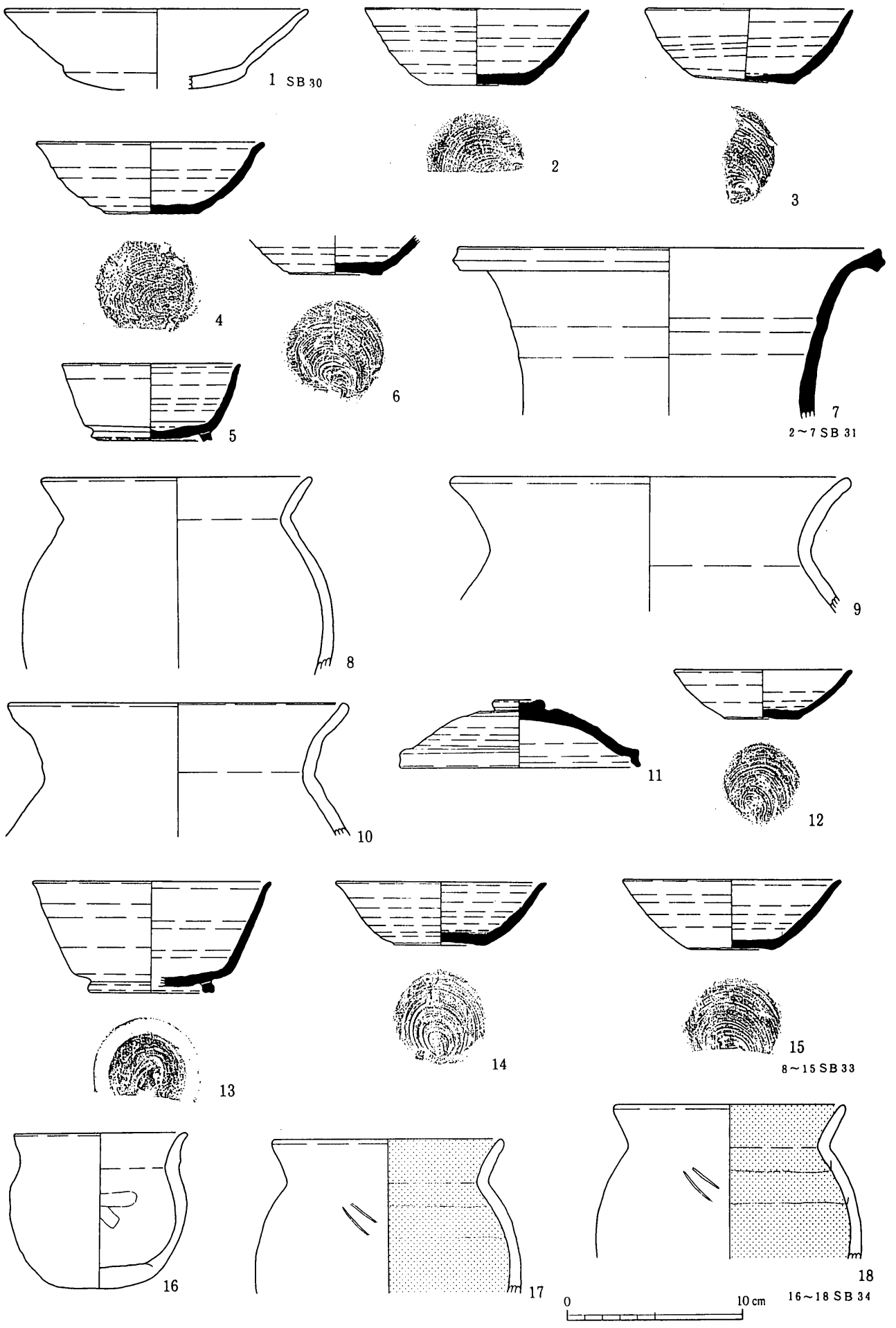
図版59　SB23 出土遺物



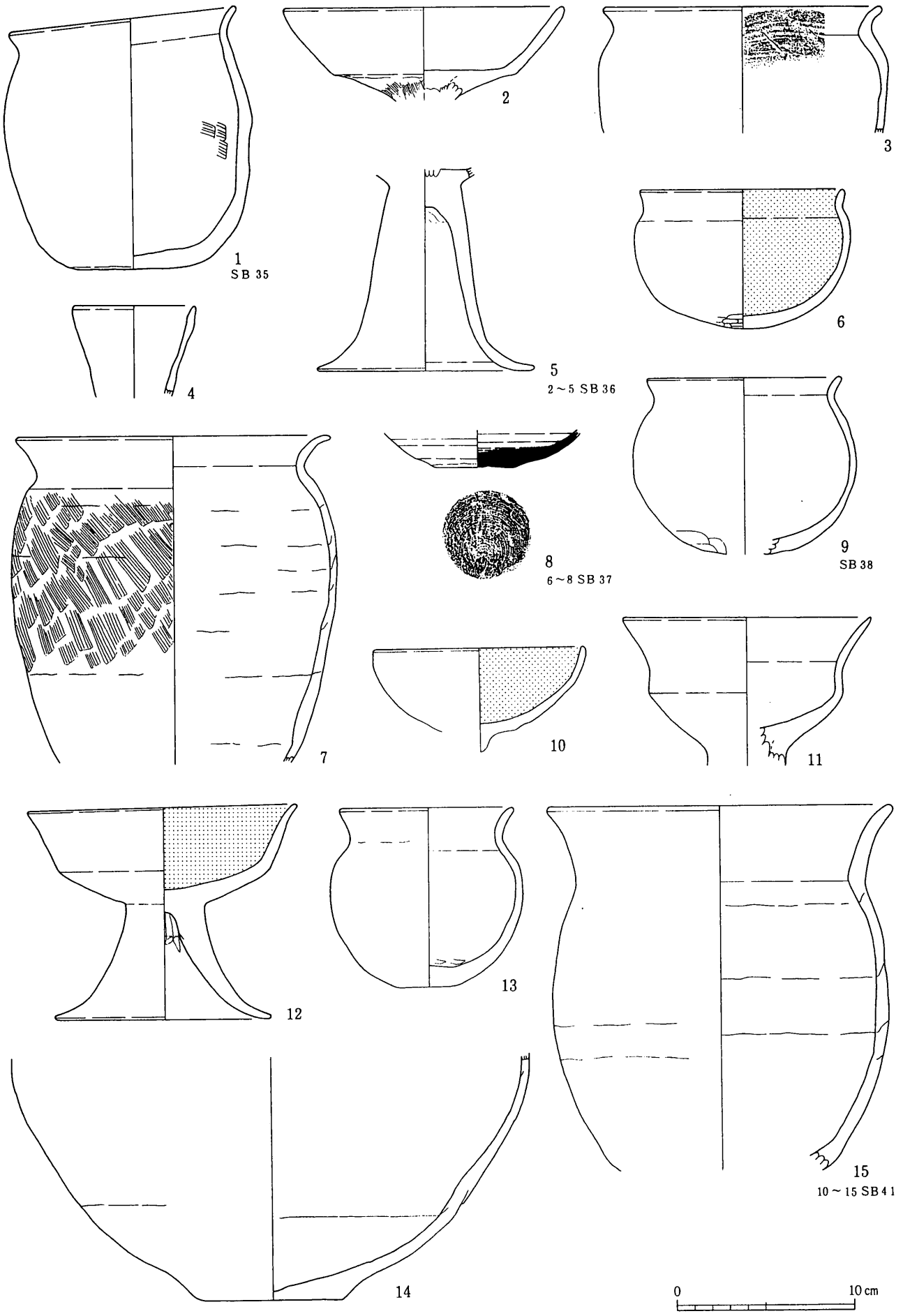
図版60　SB24・SB25・SB26 出土遺物



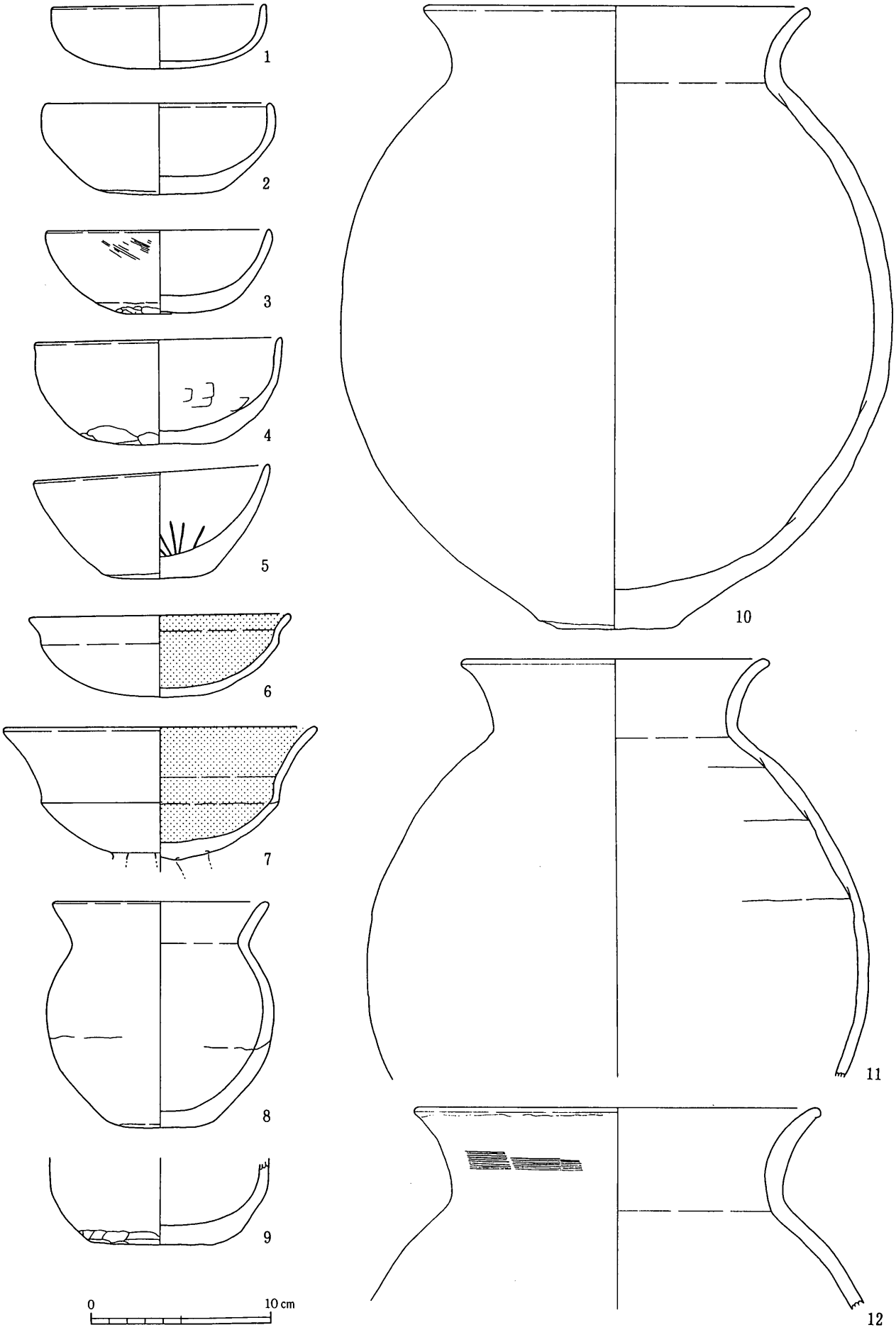
図版61　SB26～SB29 出土遺物



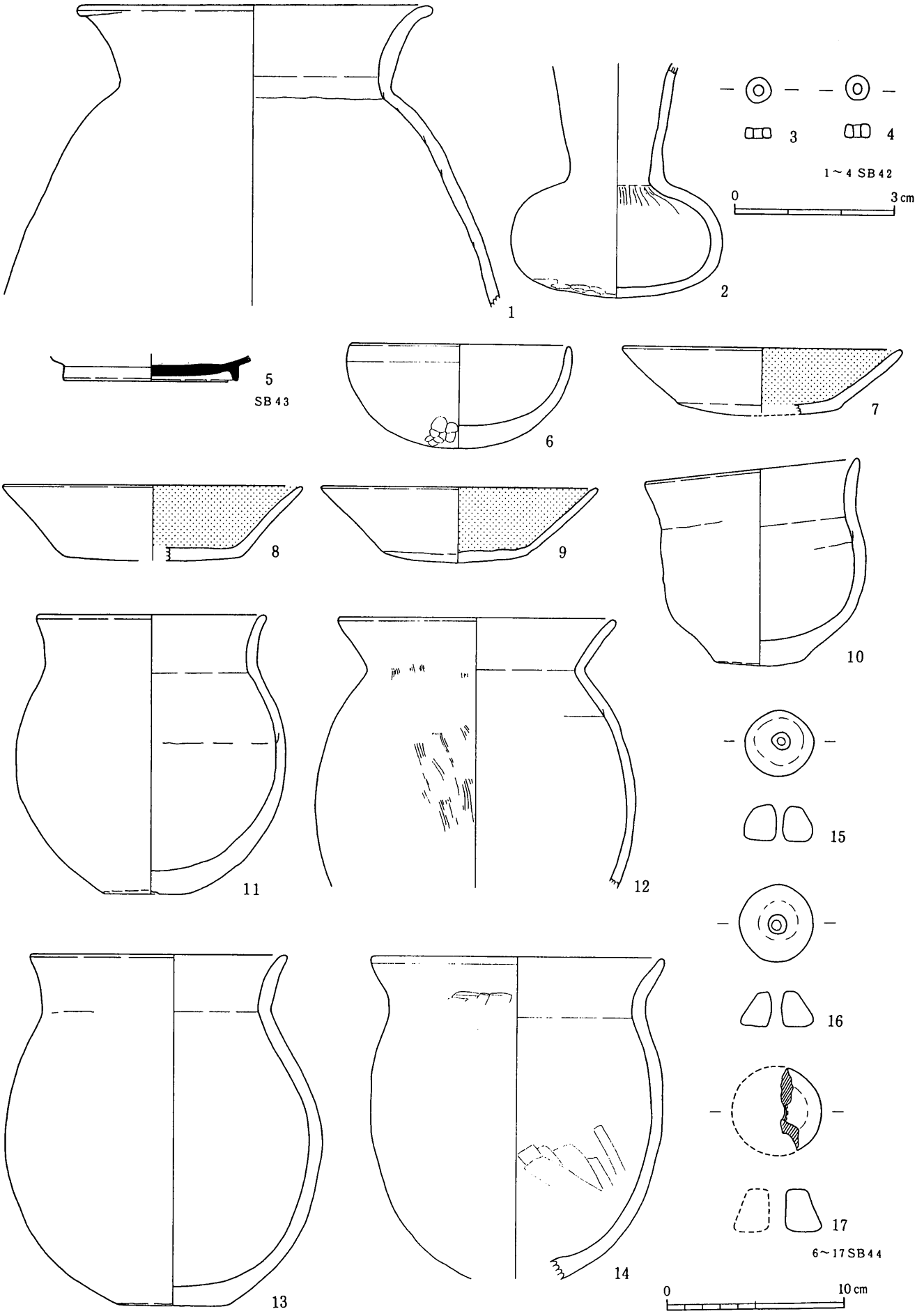
図版62　SB30・SB31・SB34 出土遺物



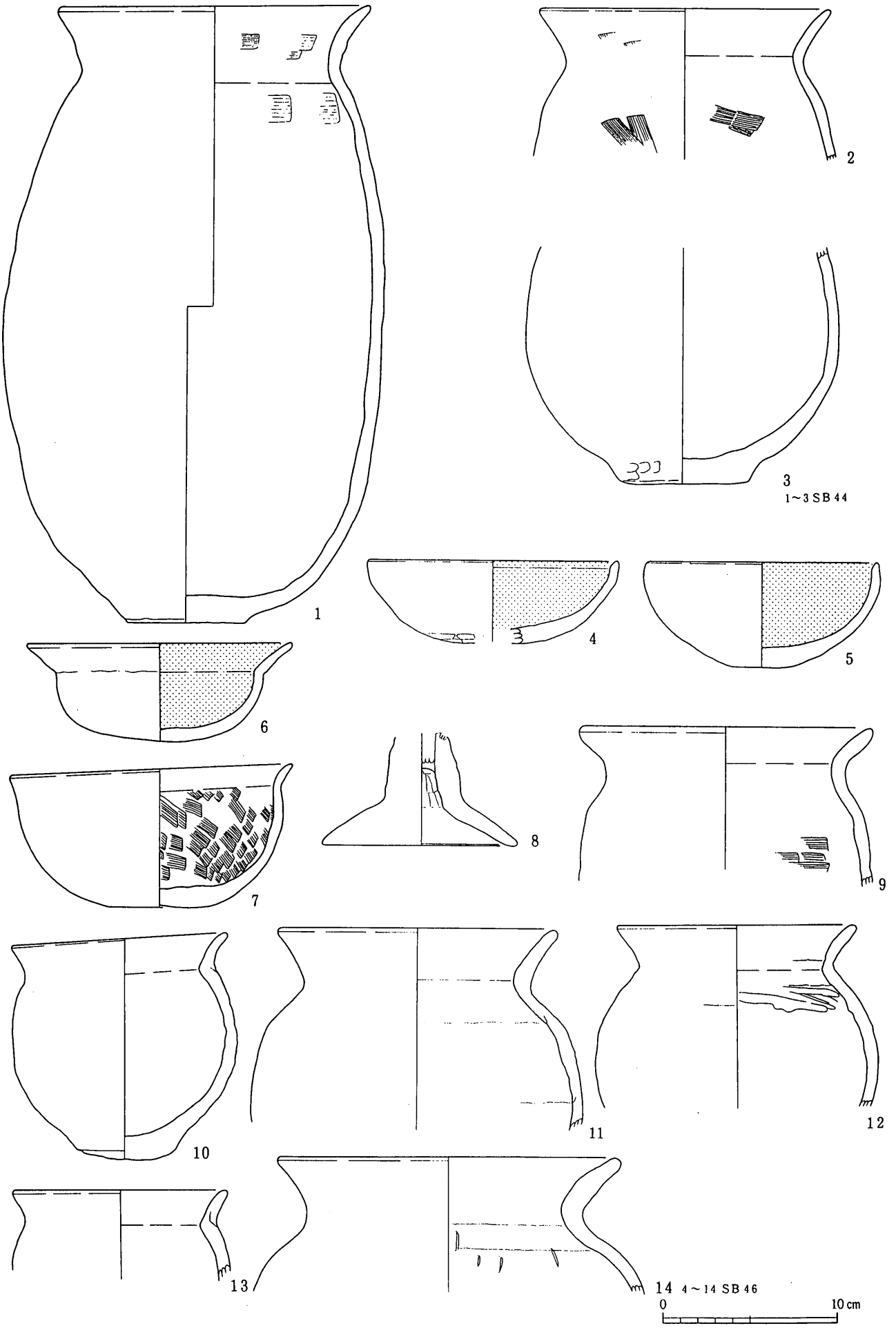
図版63　SB35～SB41 出土遺物



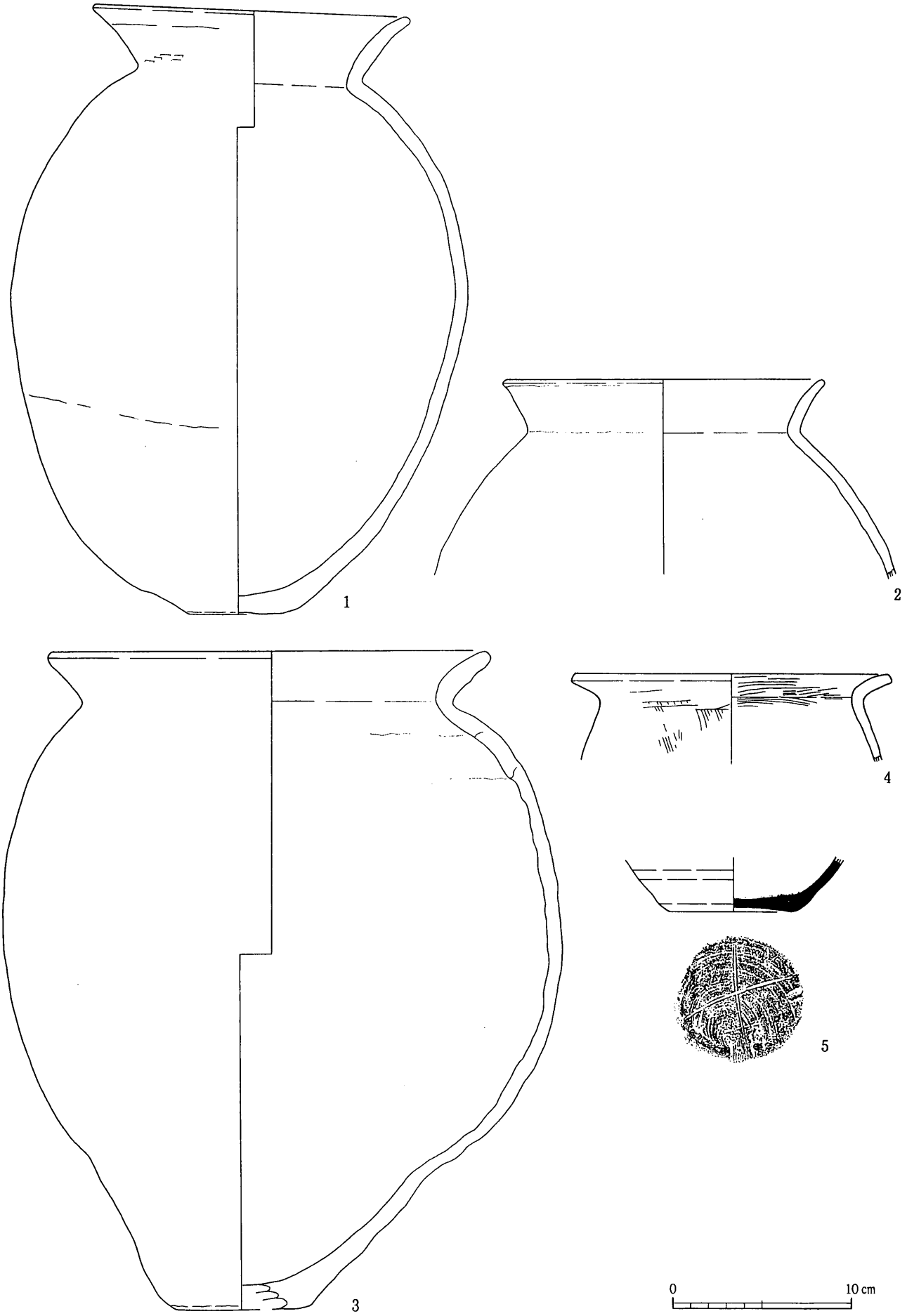
図版64　SB42 出土遺物



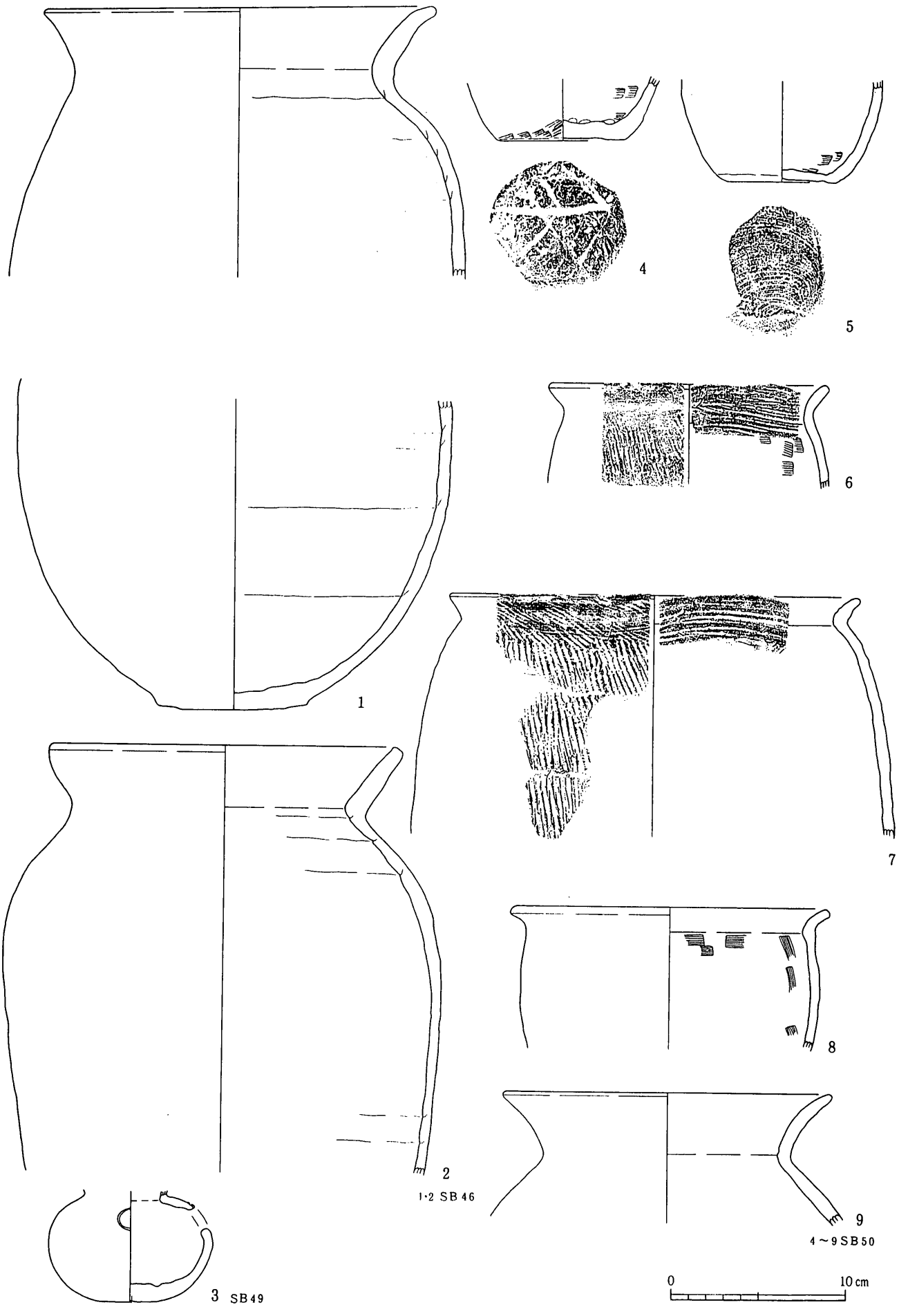
図版65　SB42・SB43・SB44 出土遺物



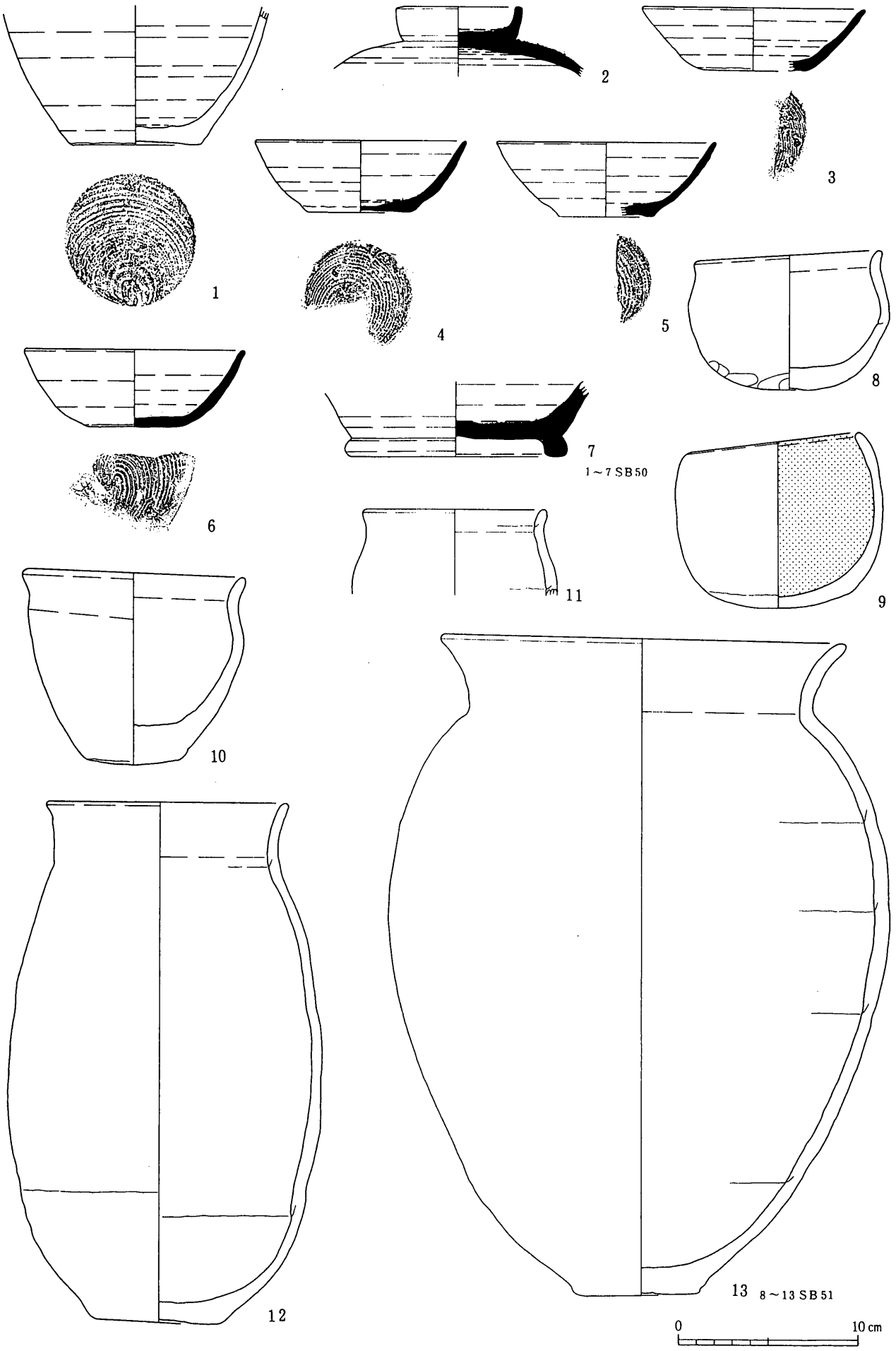
図版66　SB44・SB46 出土遺物



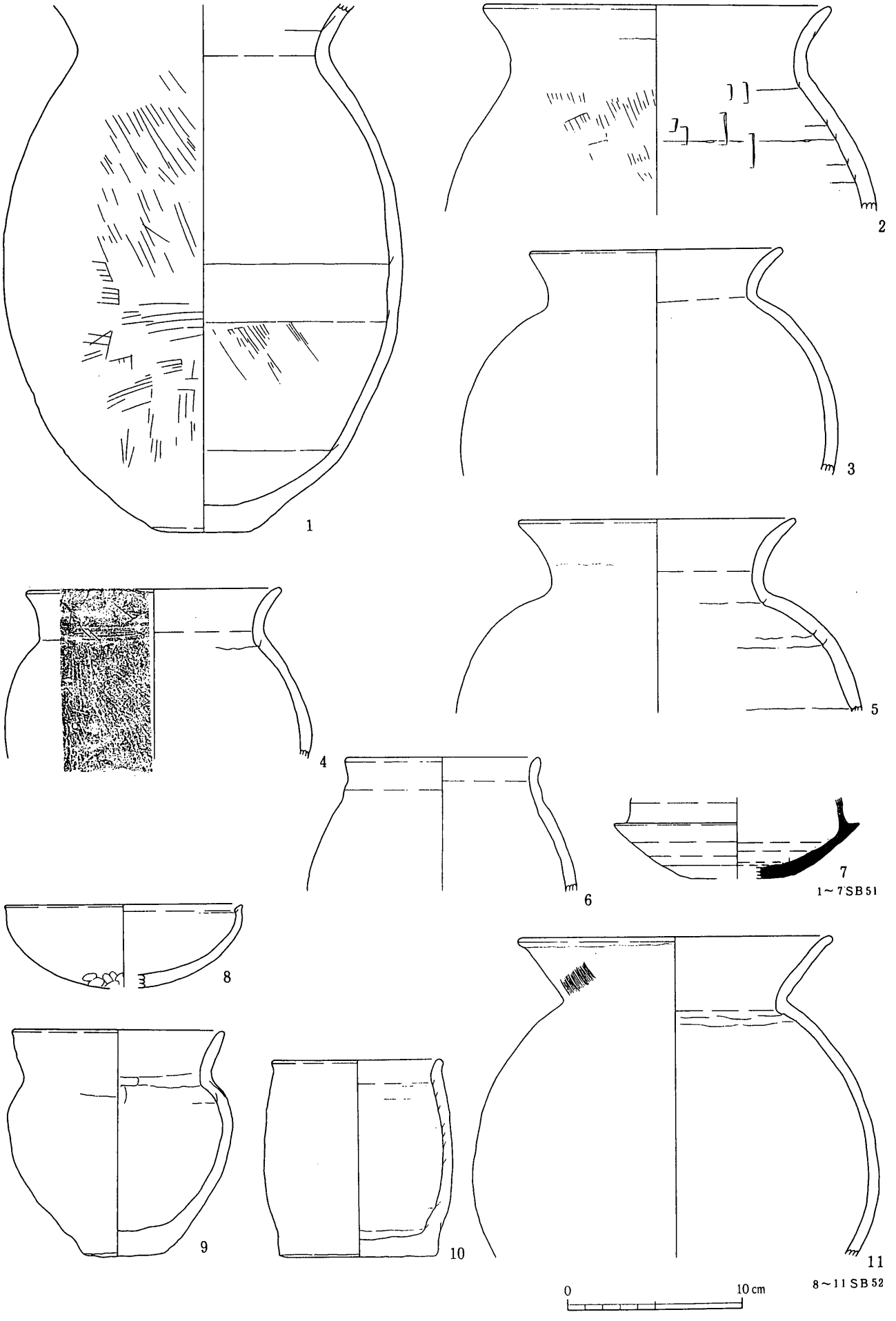
図版67　SB46 出土遺物



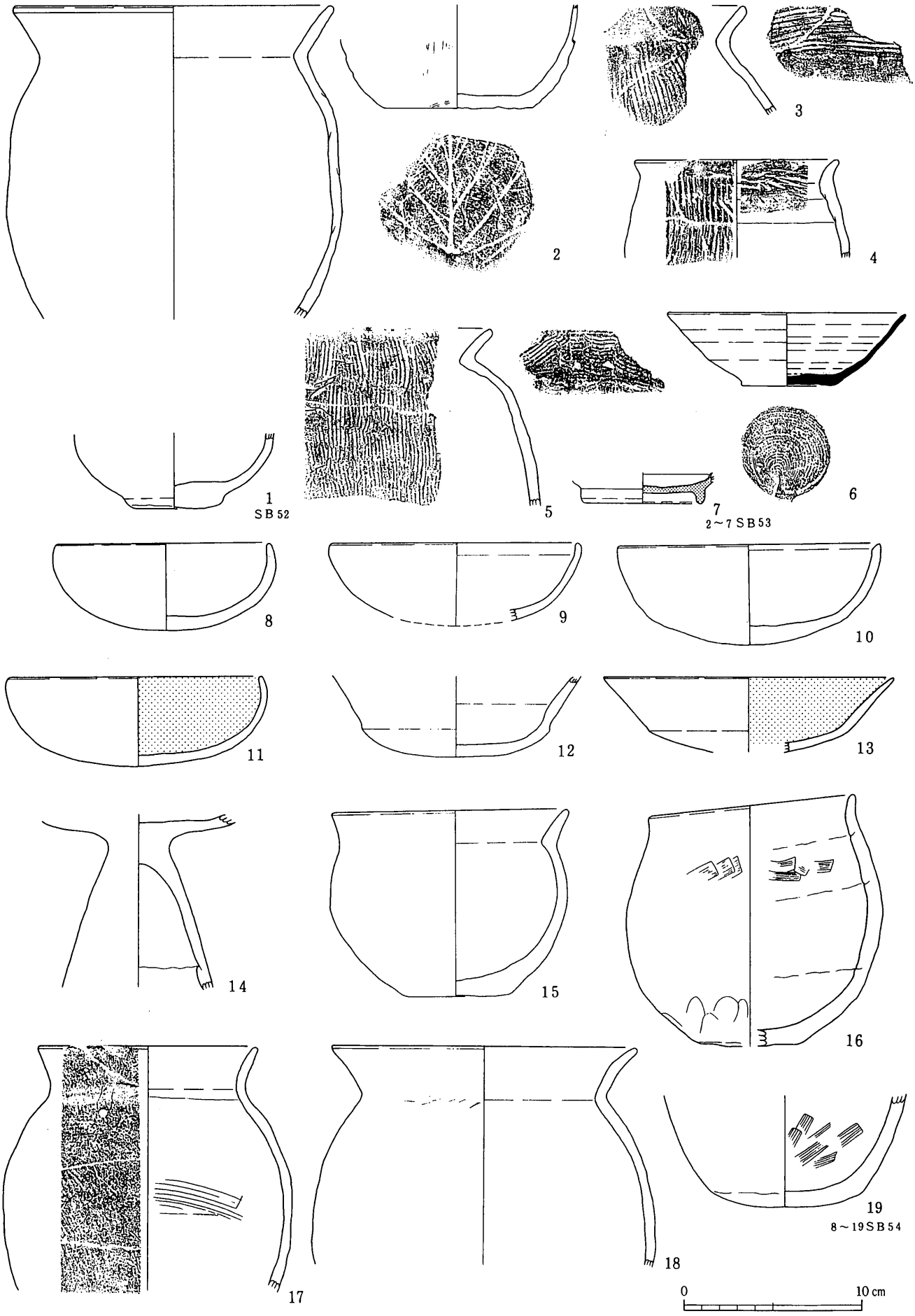
図版68　SB46・SB49・SB50 出土遺物



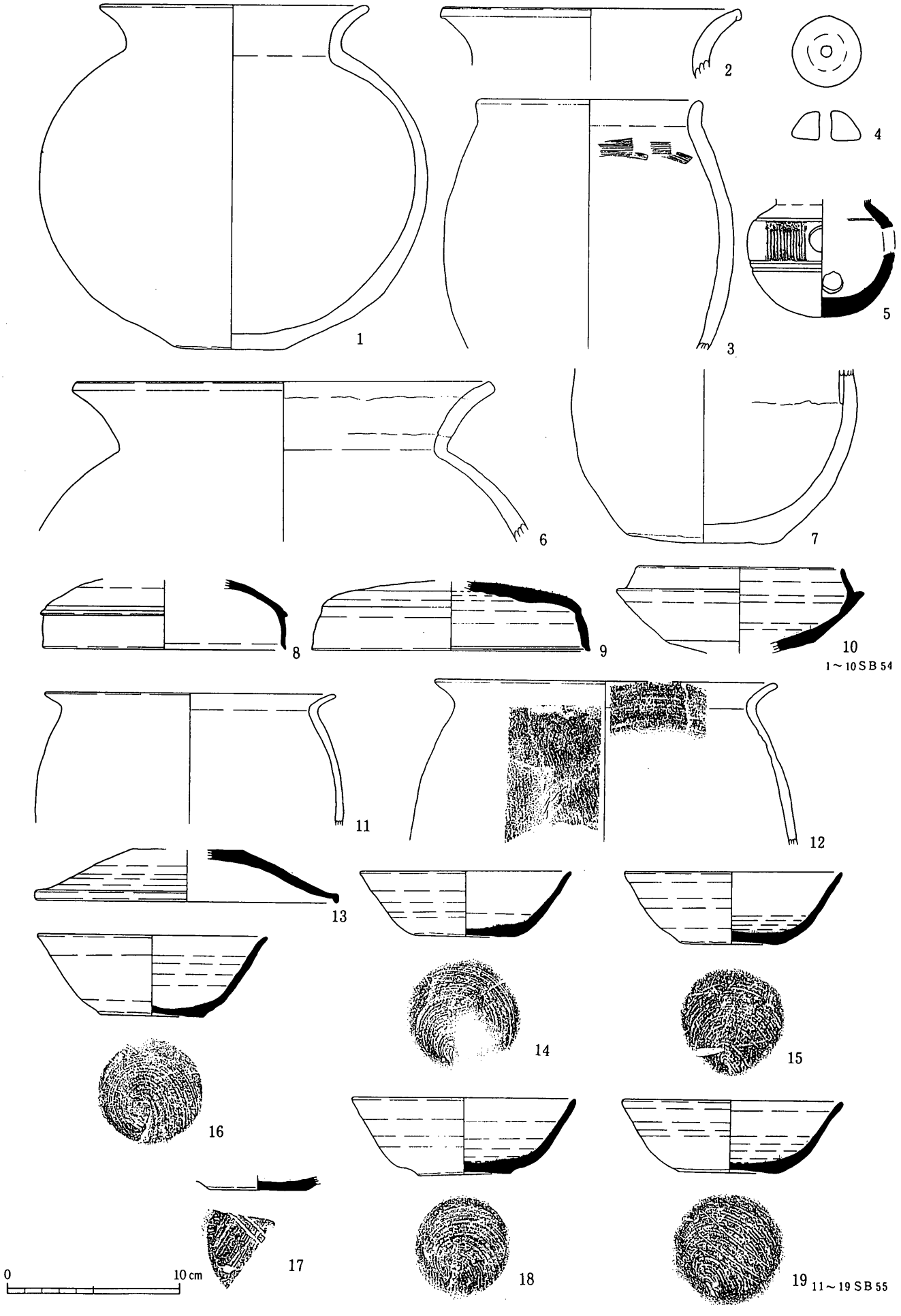
図版69　SB50・SB51 出土遺物



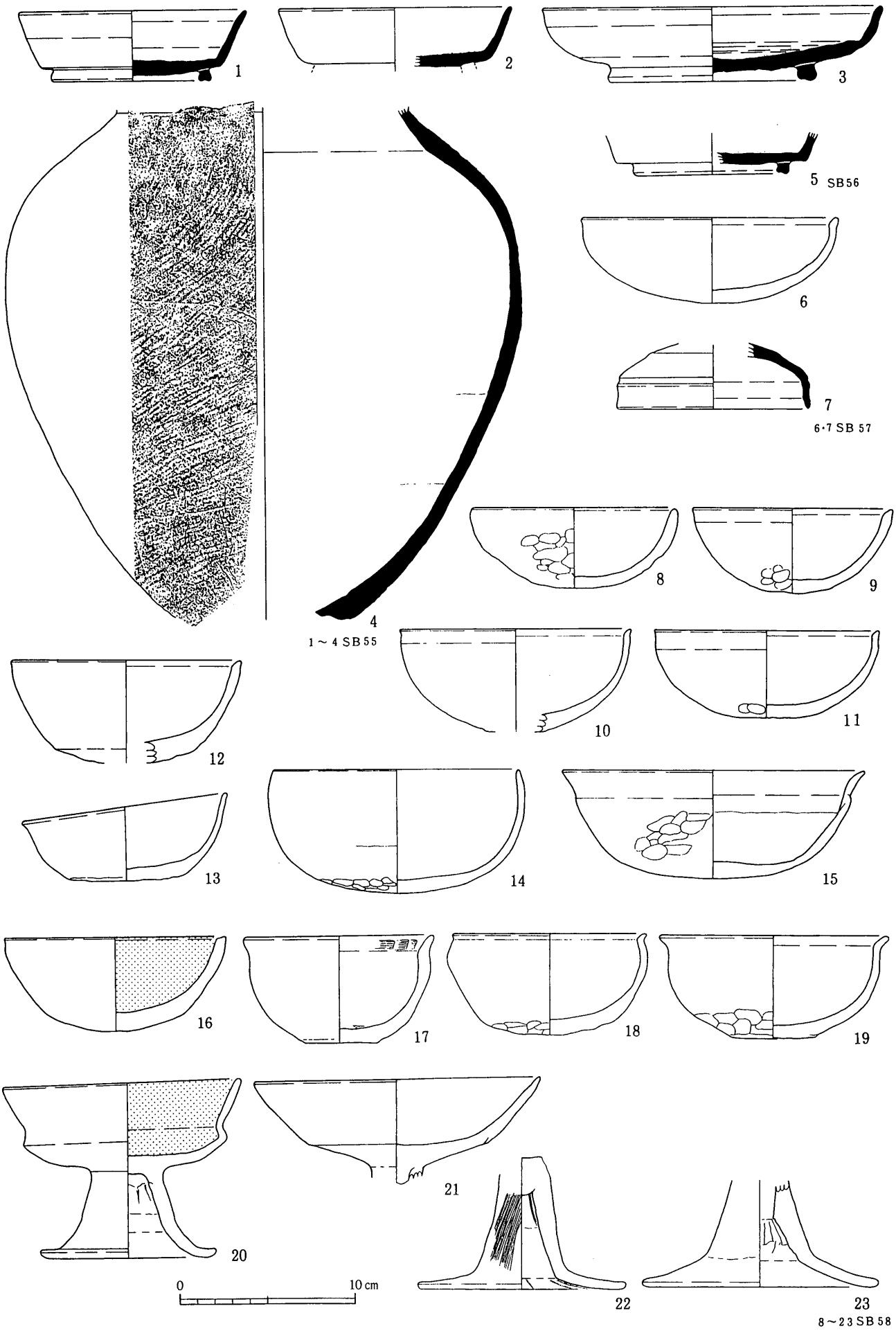
図版70　SB51・SB52 出土遺物



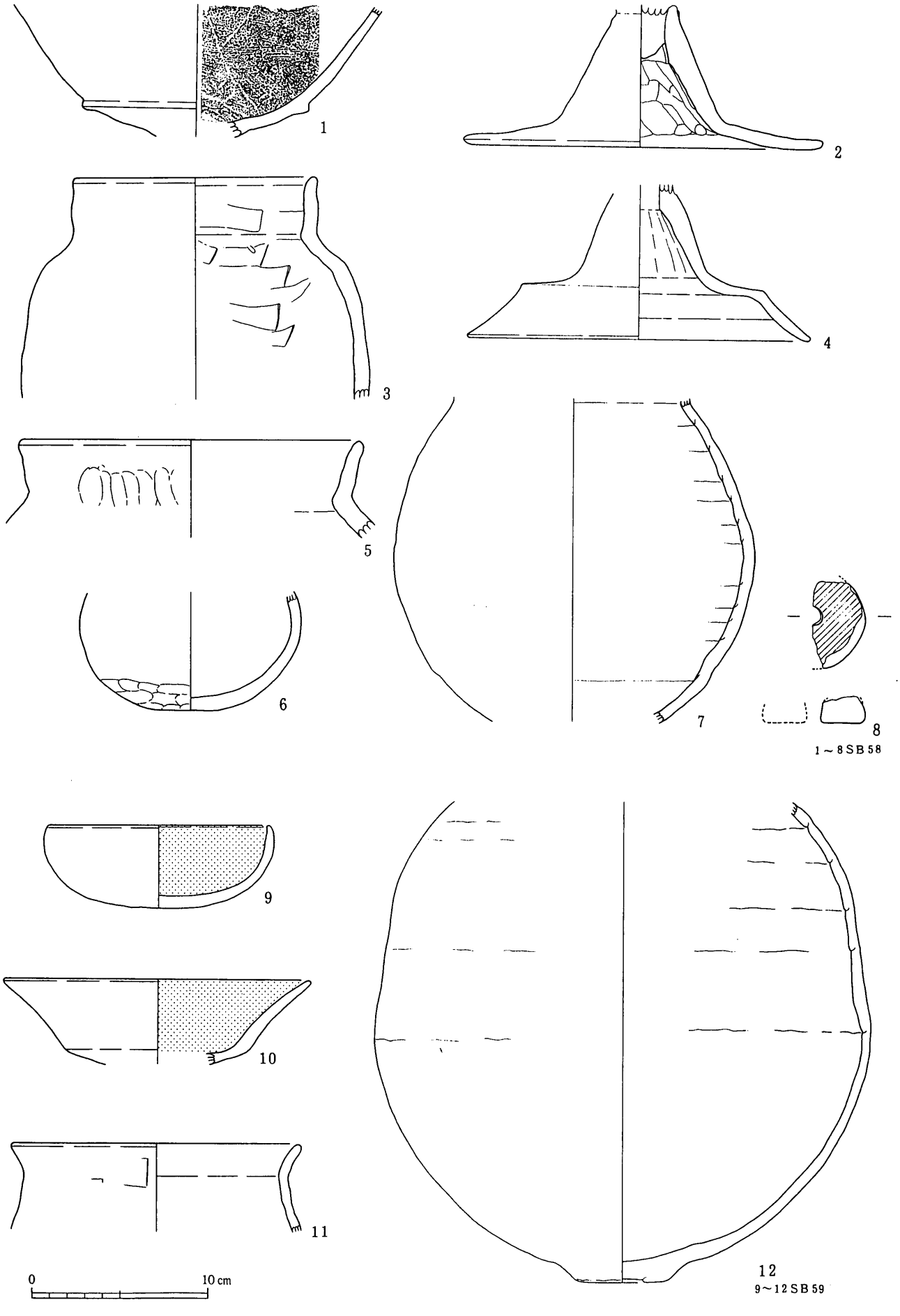
図版71　SB52・SB53・SB54 出土遺物



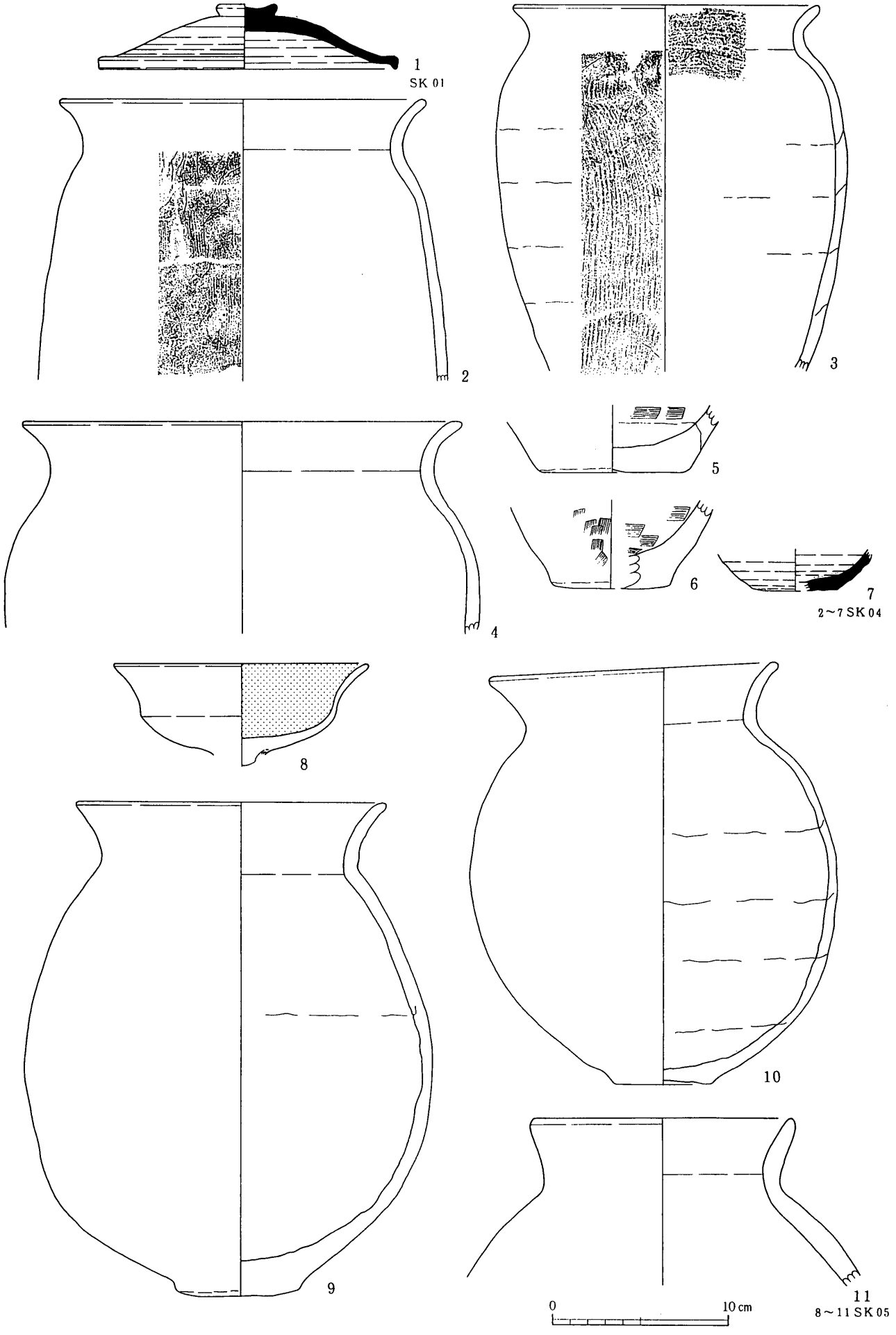
図版72　SB54・SB55 出土遺物



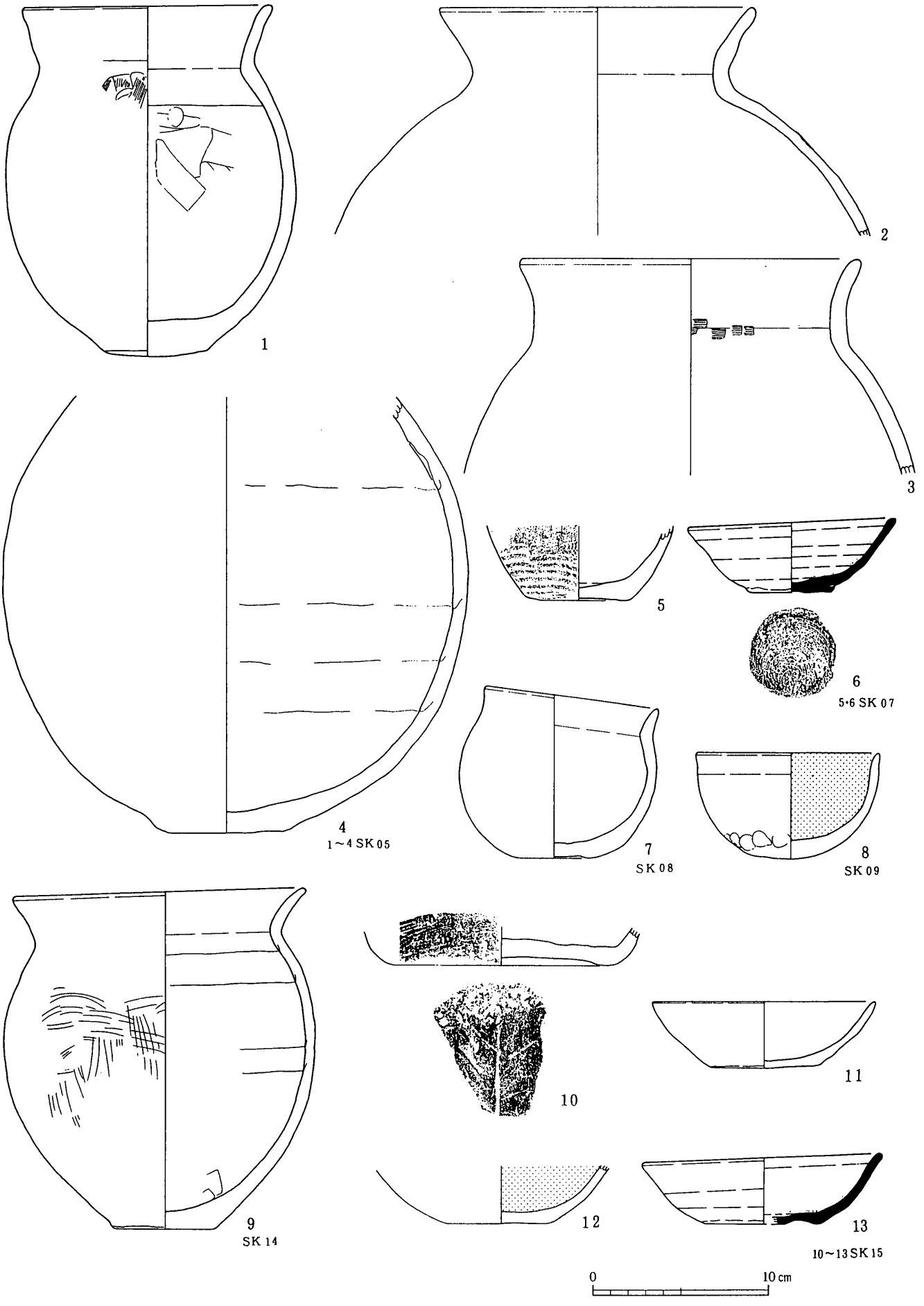
図版73　SB56～SB58 出土遺物



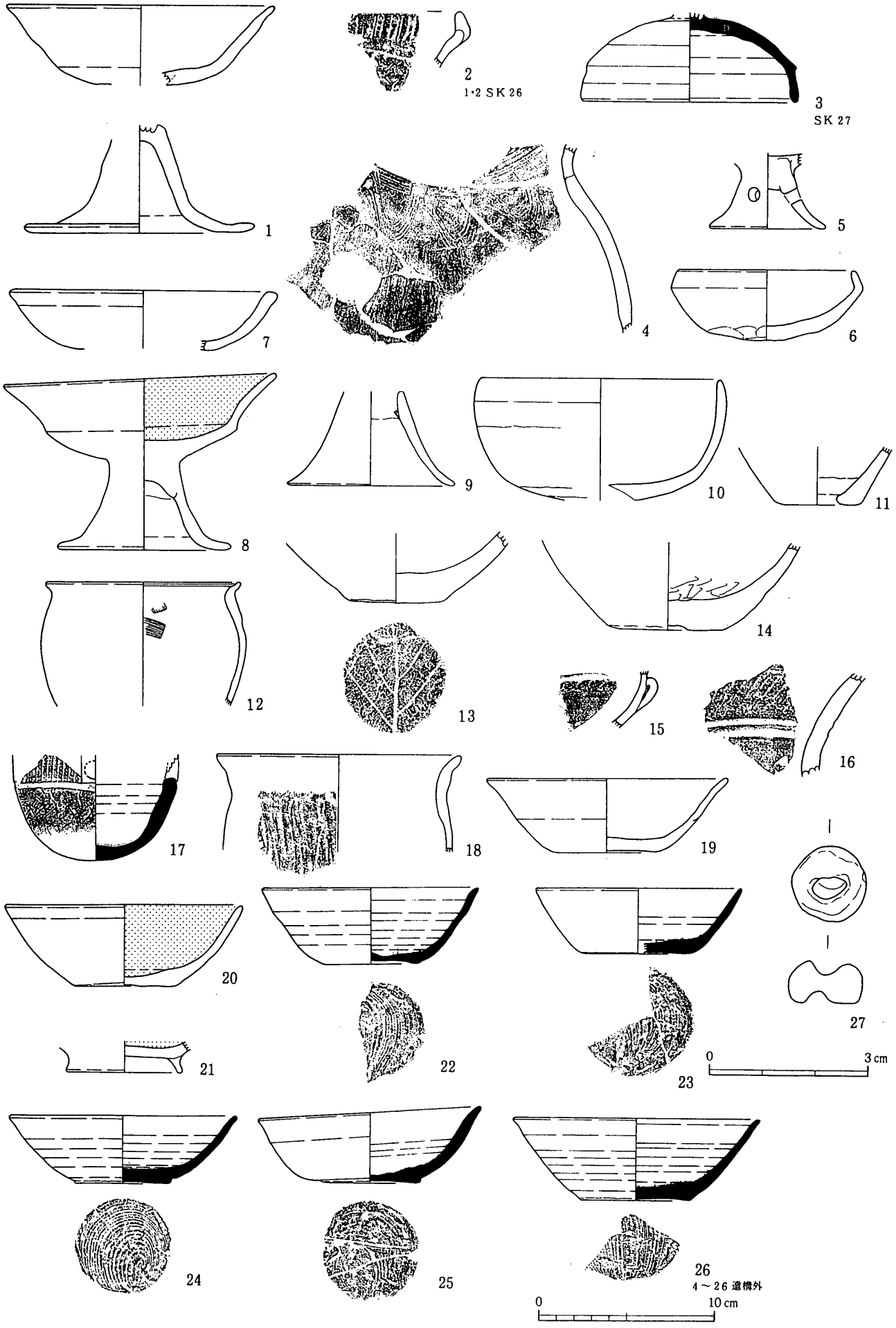
図版74　SB58・SB59 出土遺物



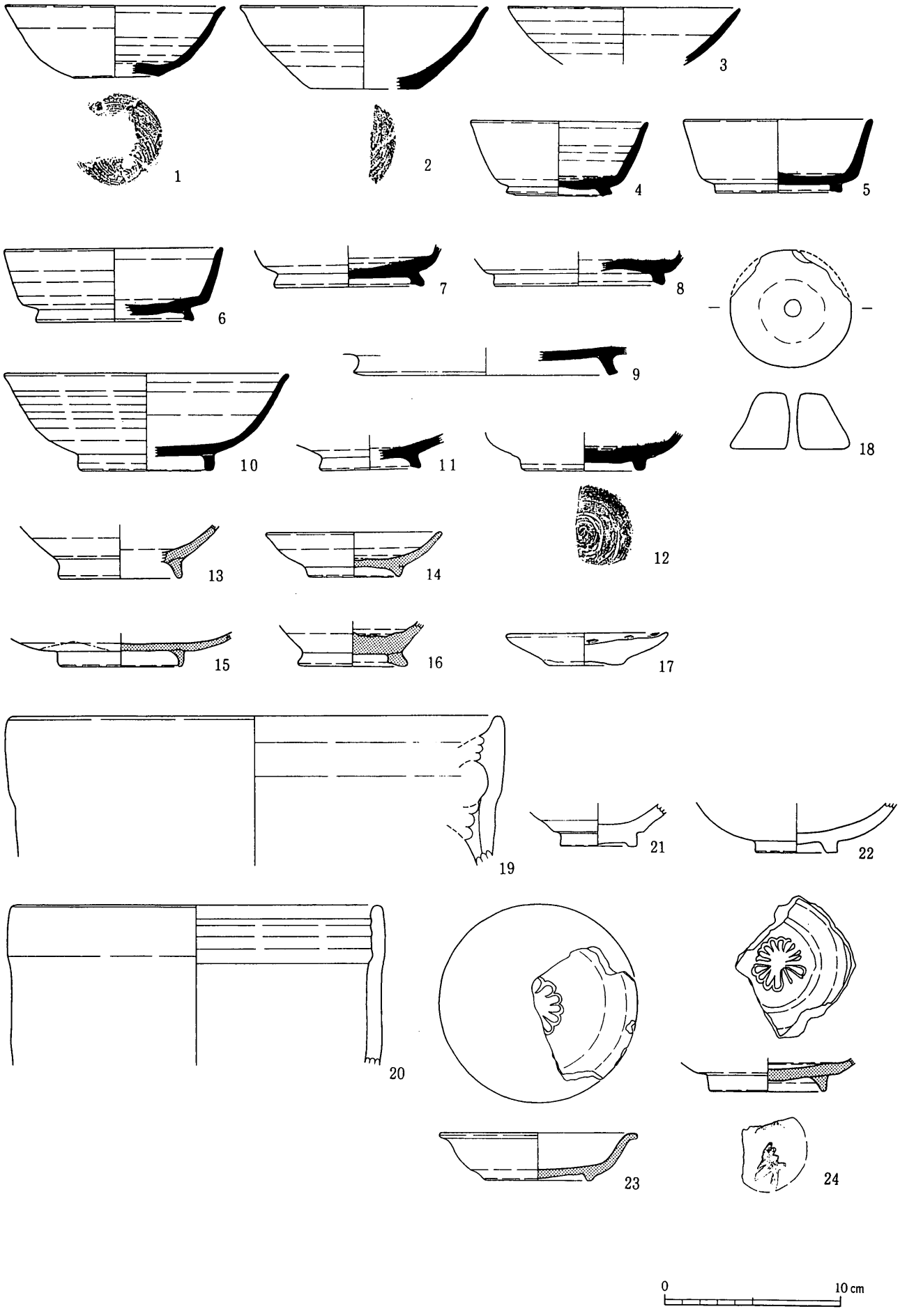
図版75　SK01～SK05 出土遺物



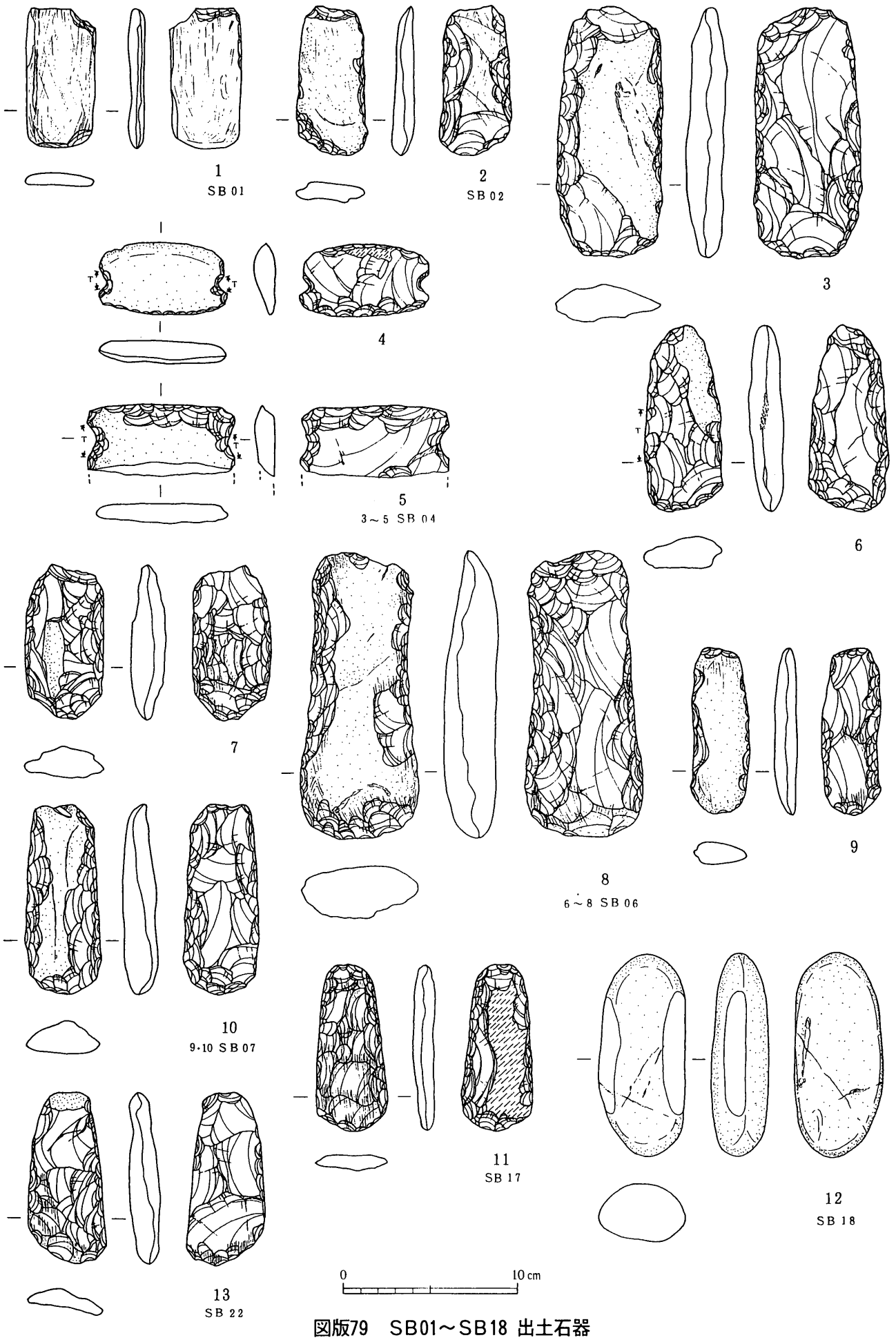
図版76　SK05～SK15 出土遺物



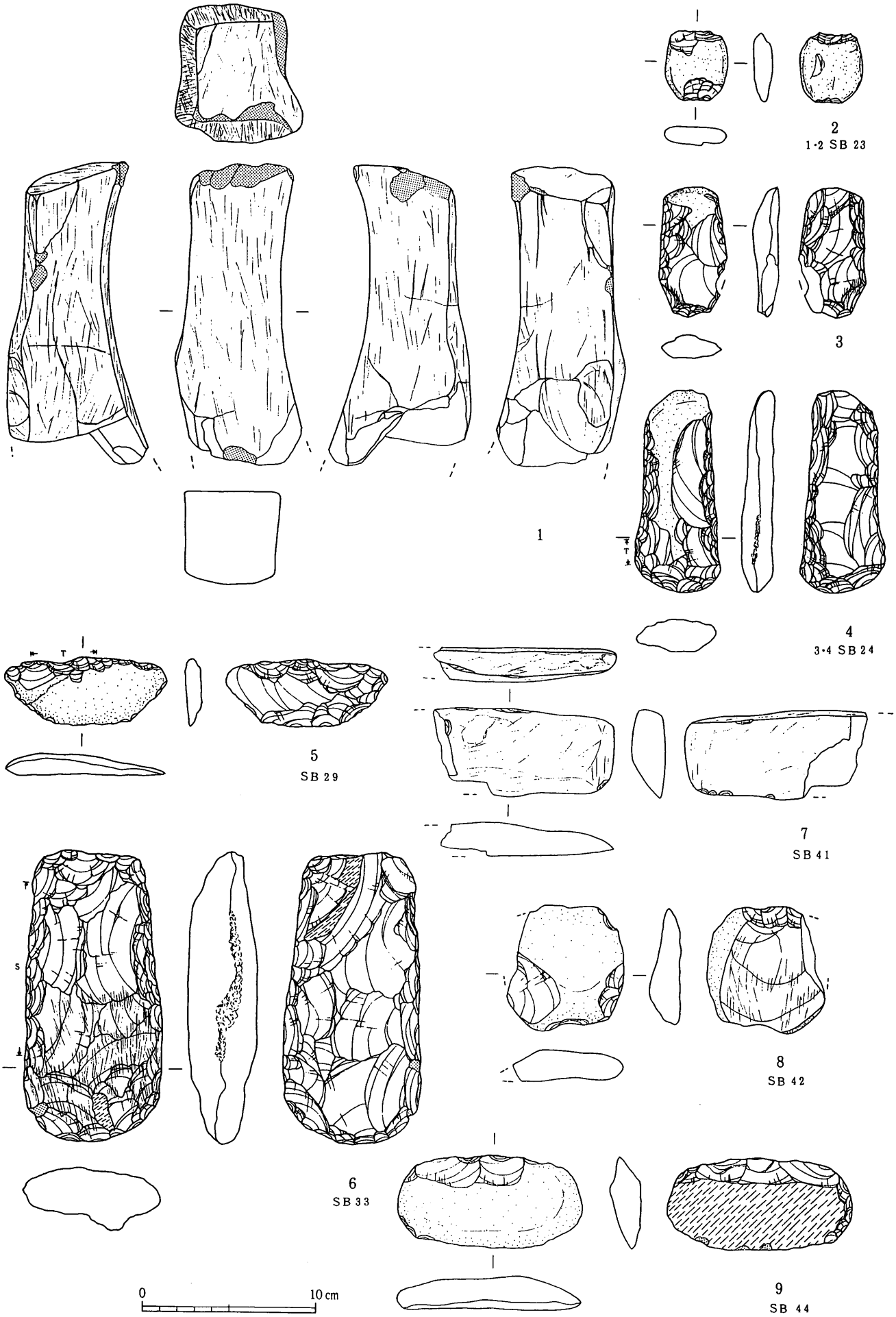
図版77　SK26・SK27 遺構外出土遺物



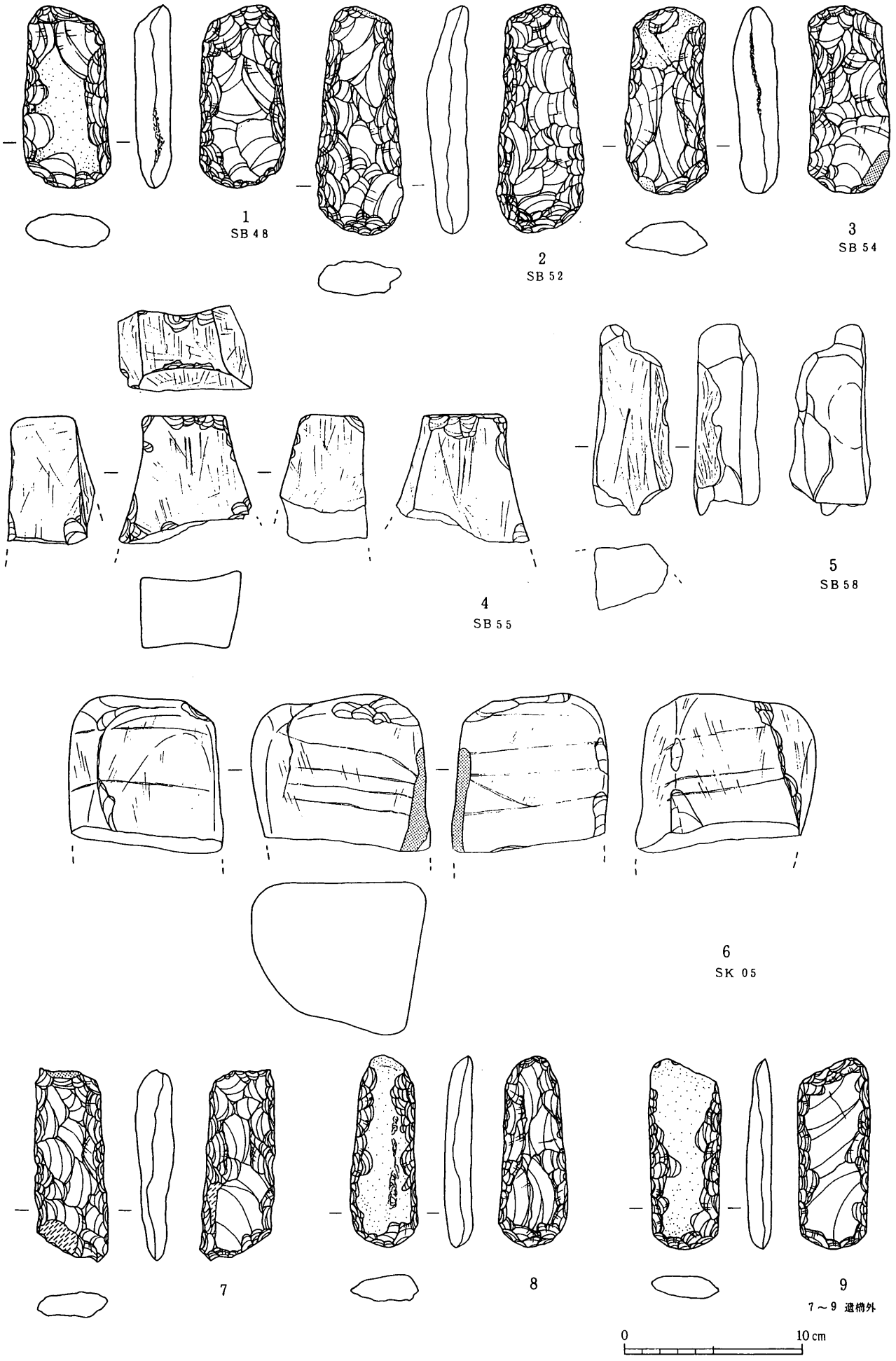
図版78　遺構外出土遺物



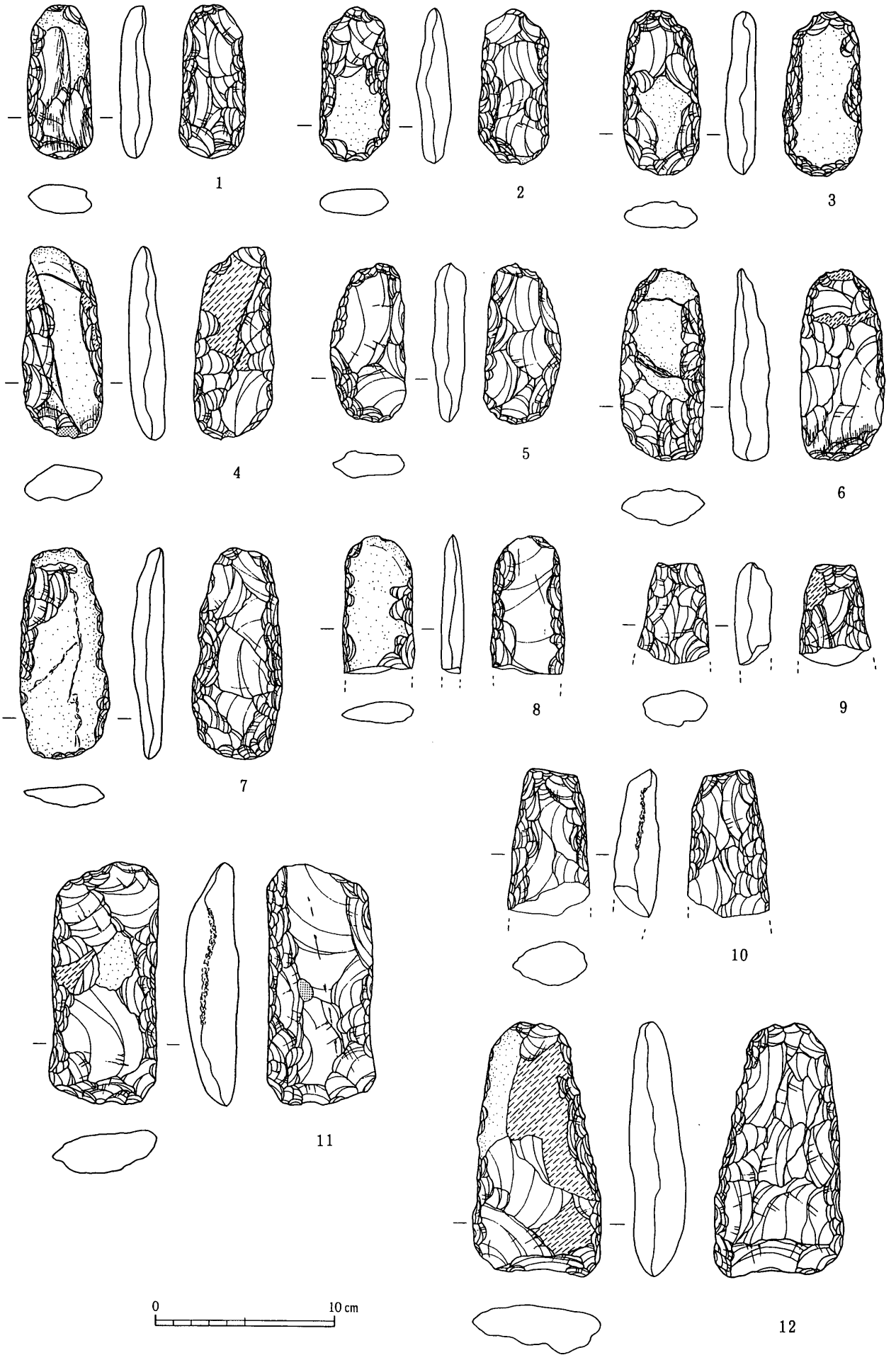
図版79　SB01～SB18 出土石器



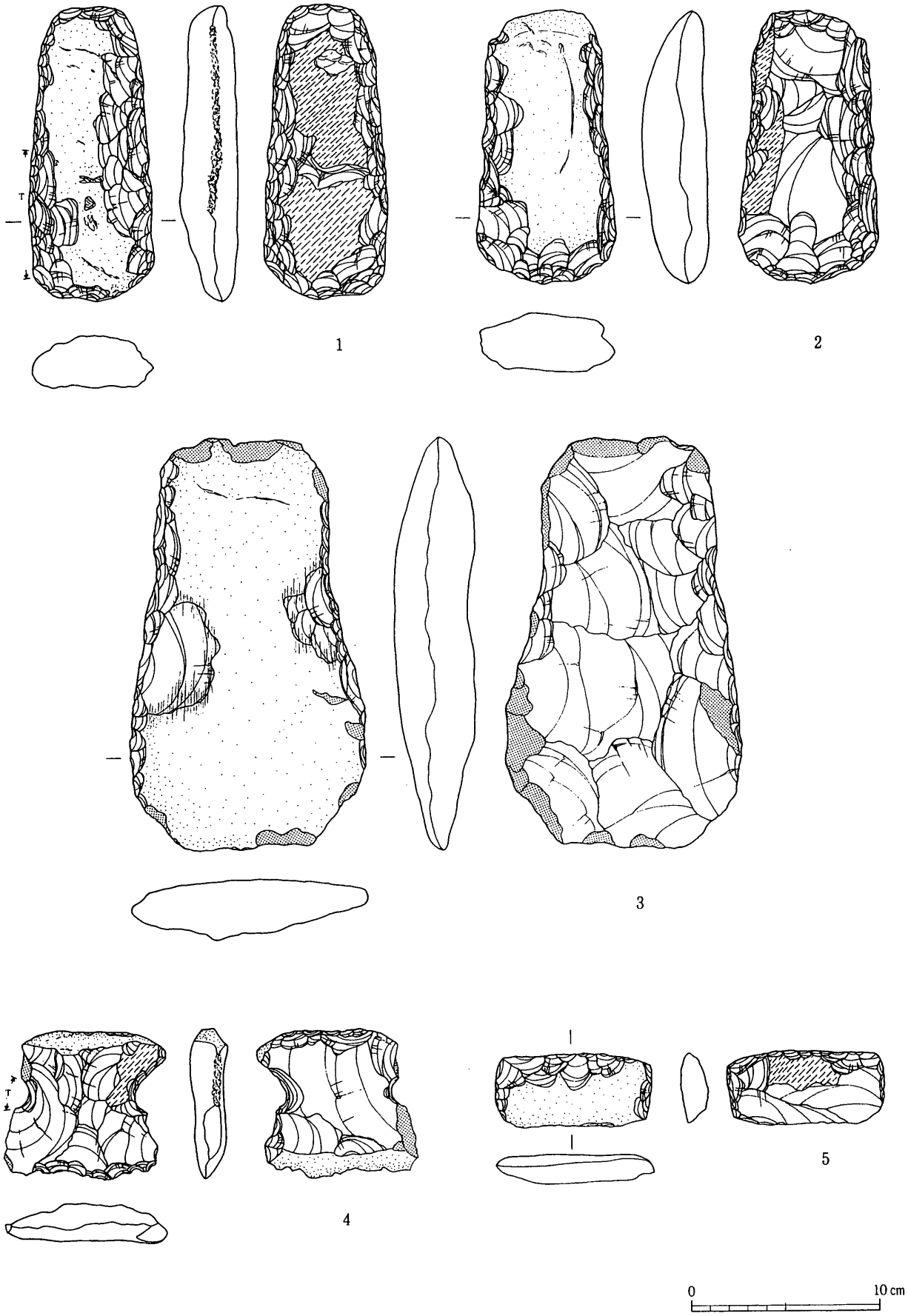
図版80　SB23～SB44 出土石器



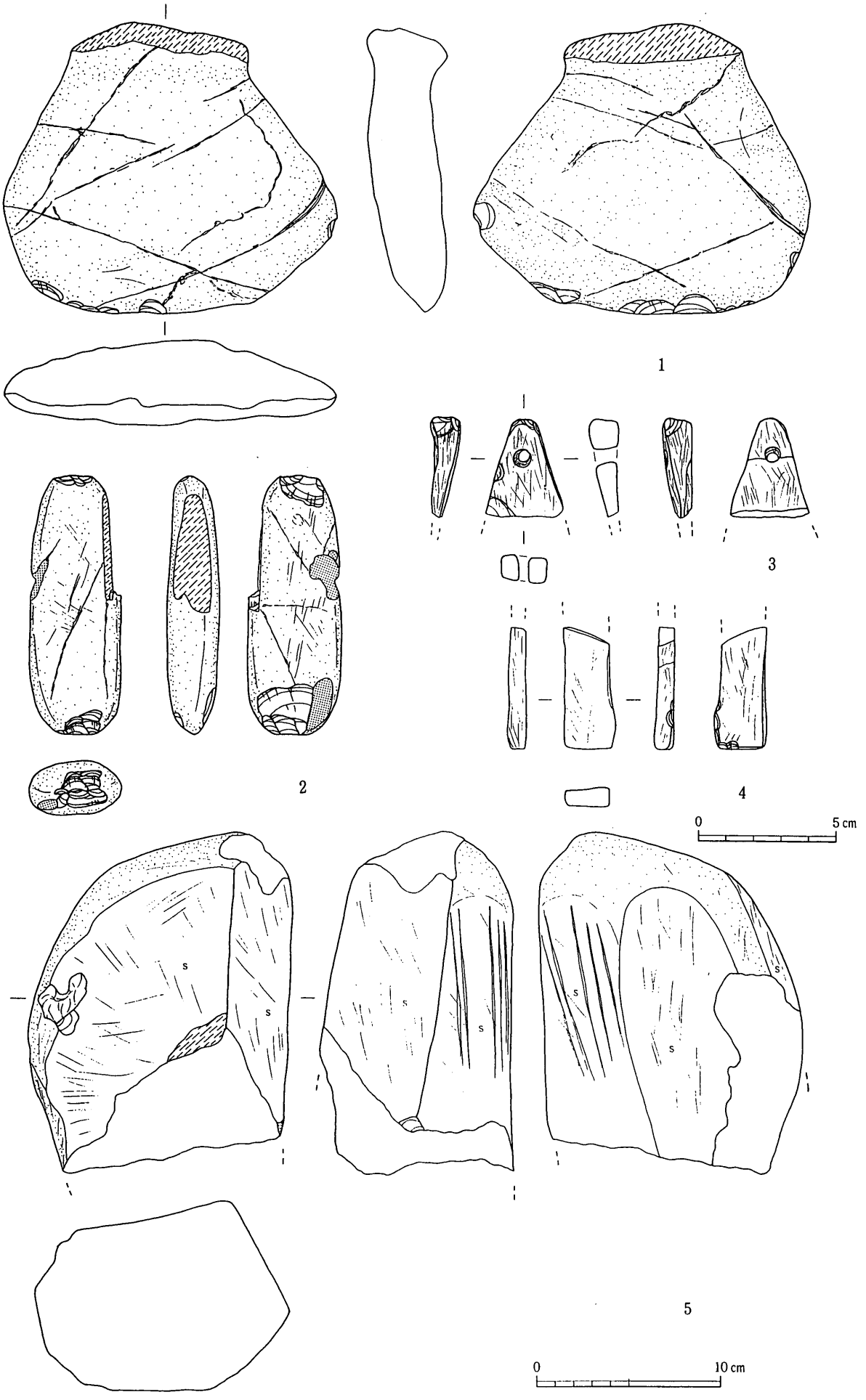
図版81　SB48～SB58・遺構外出土石器



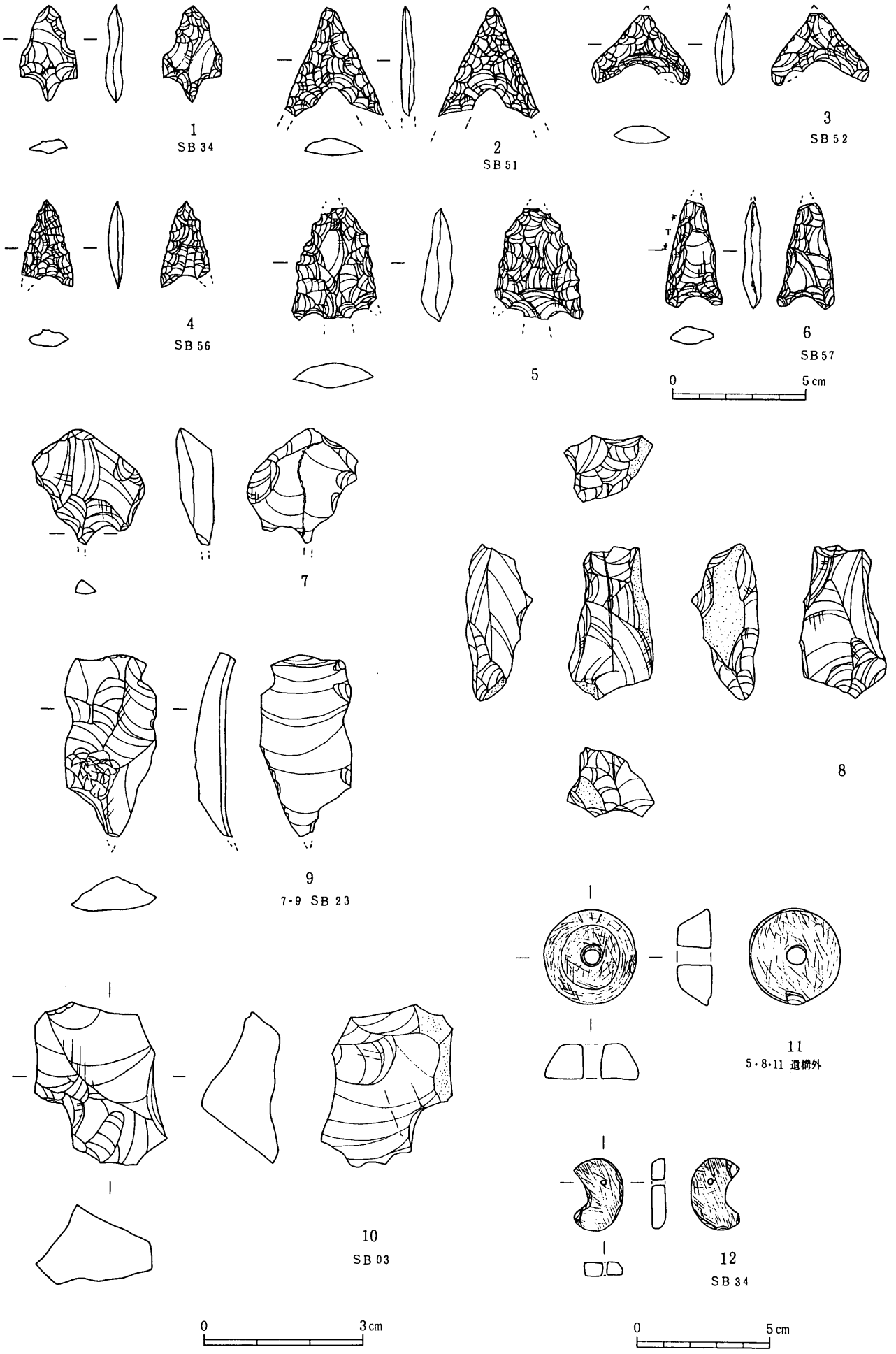
図版82　遺構外出土石器



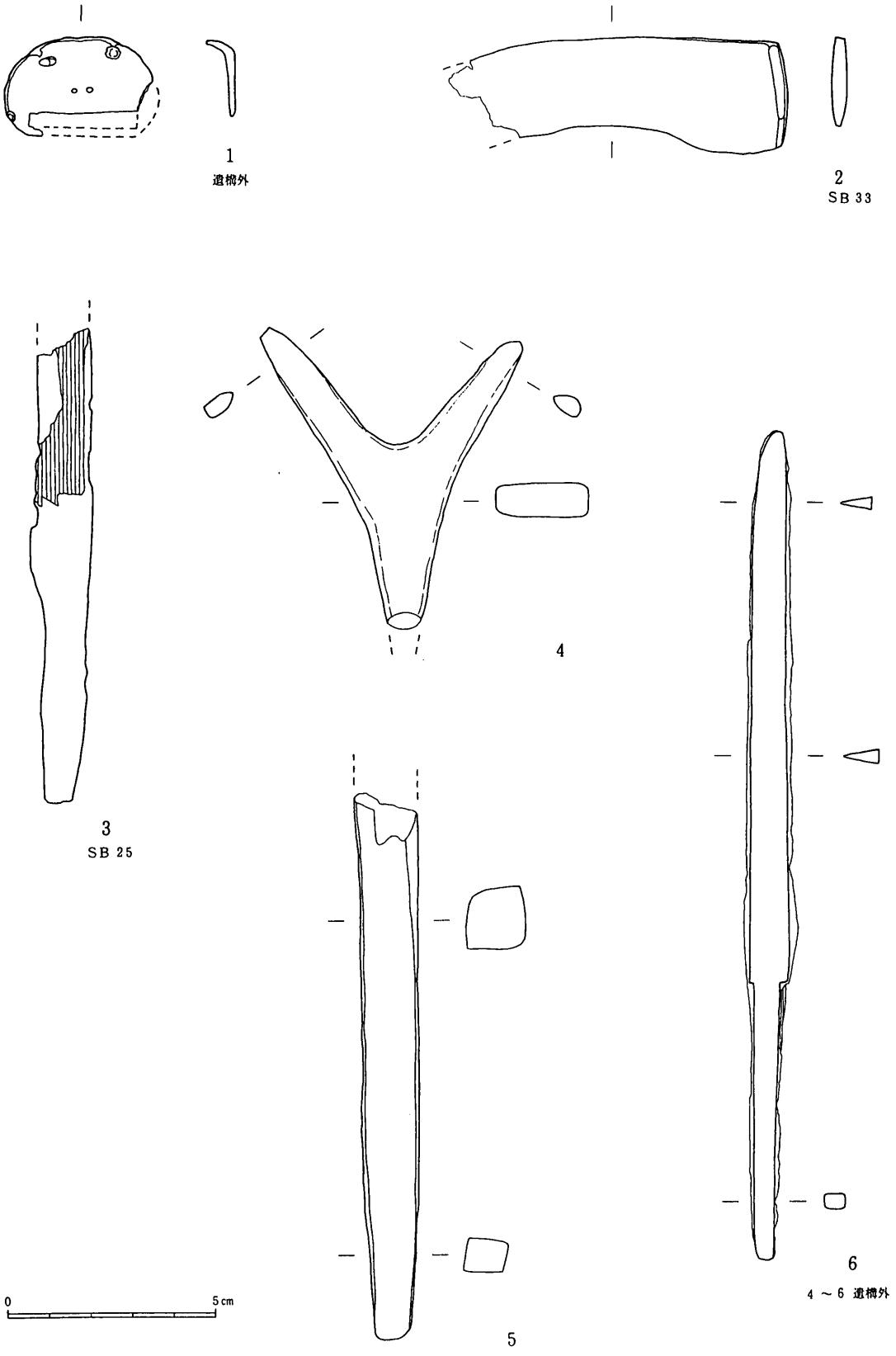
図版83　遺構外出土石器



図版84　遺構外出土石器



図版85　石鏃・剥片石器類・その他石製品



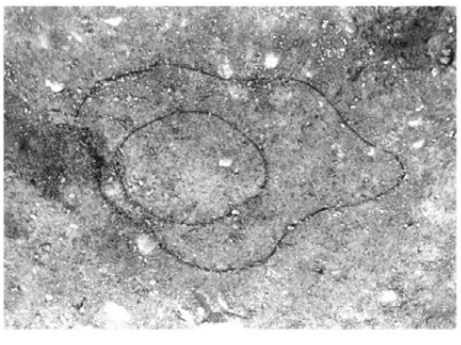
図版86　鉄 製 品

写 真 図 版

留々女遺跡全景

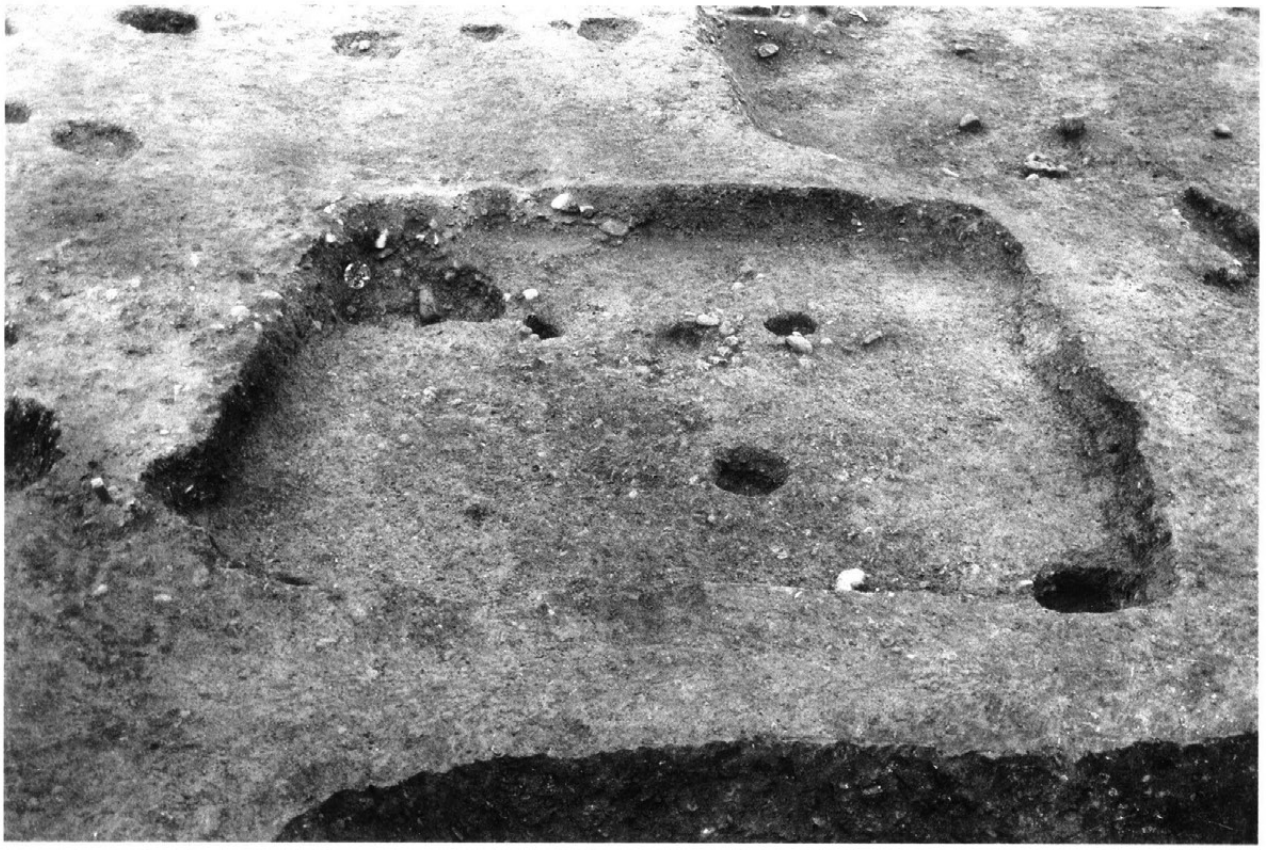
図版 2

SB01



右　SB01 カマド
左　SB02 炉

SB02

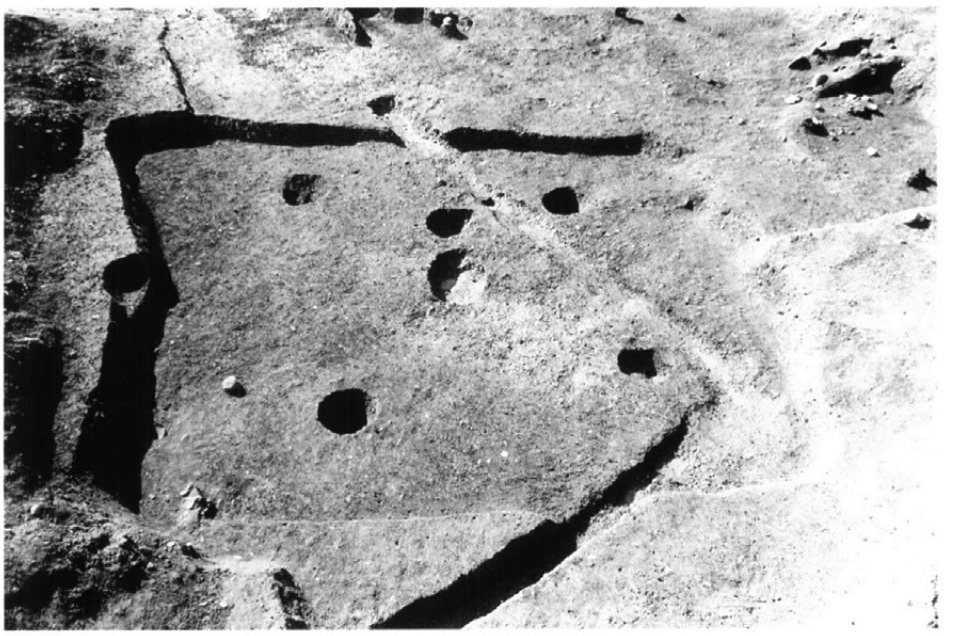


SB03

SB03 炉

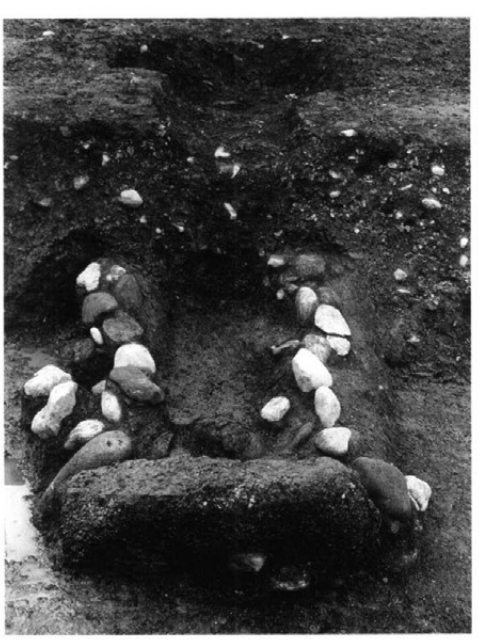
SB04

図版 4



SB05

SB06

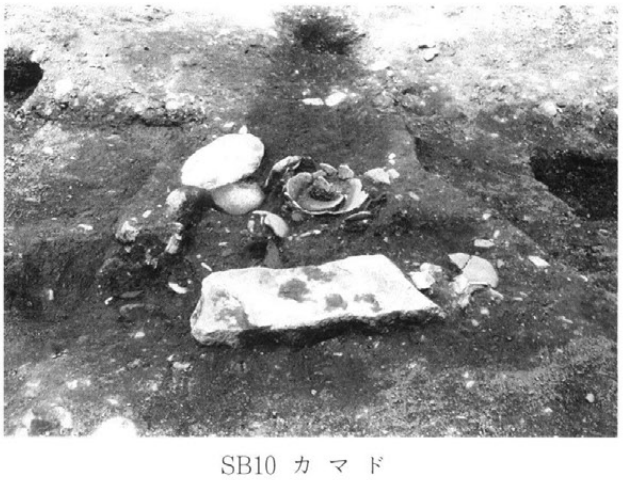


SB06 カ マ ド

SB07

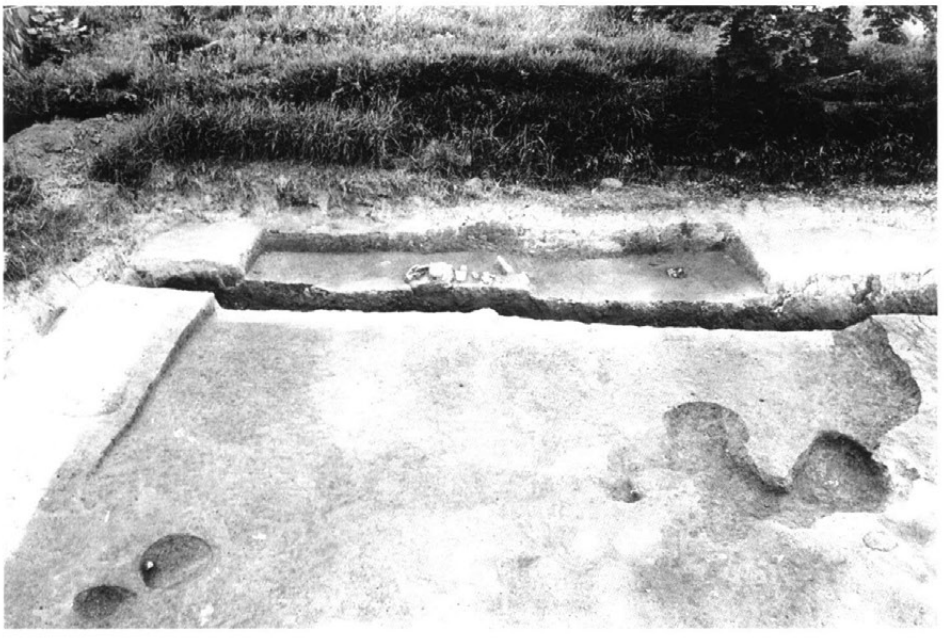
SB10

SB10 遺物出土状態



SB10 カ マ ド

図版 6

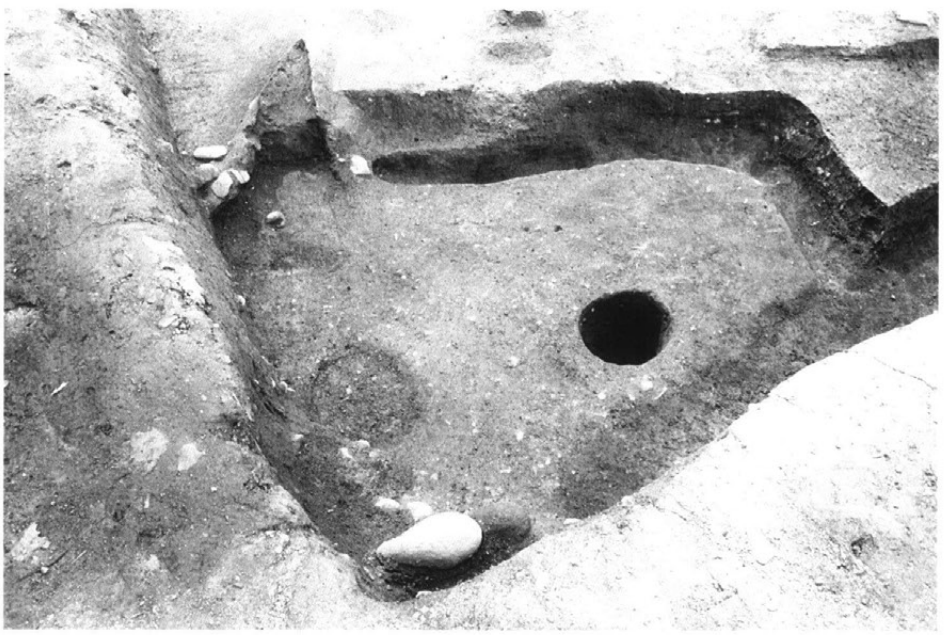


SB11

SB12

SB13

SB14



SB16

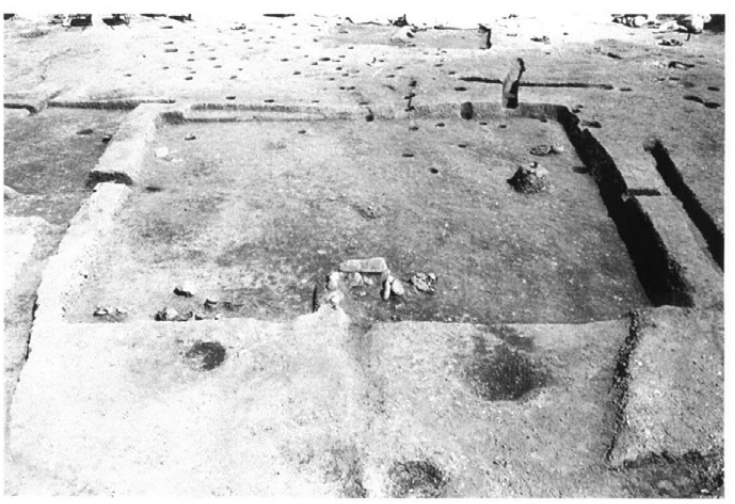
SB17

図版 8

SB22

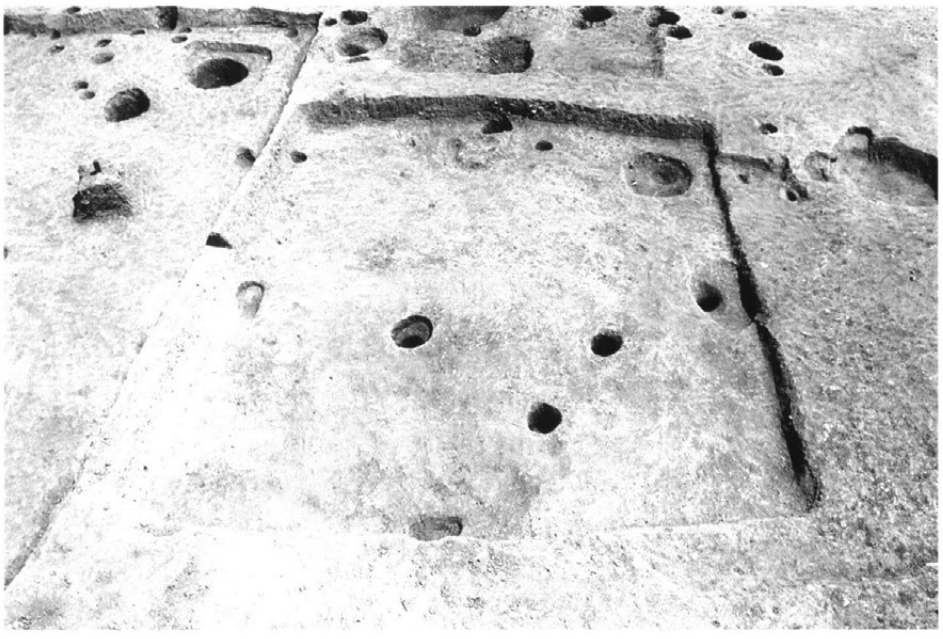
SB22 カマド遺物

SB22 カ マ ド



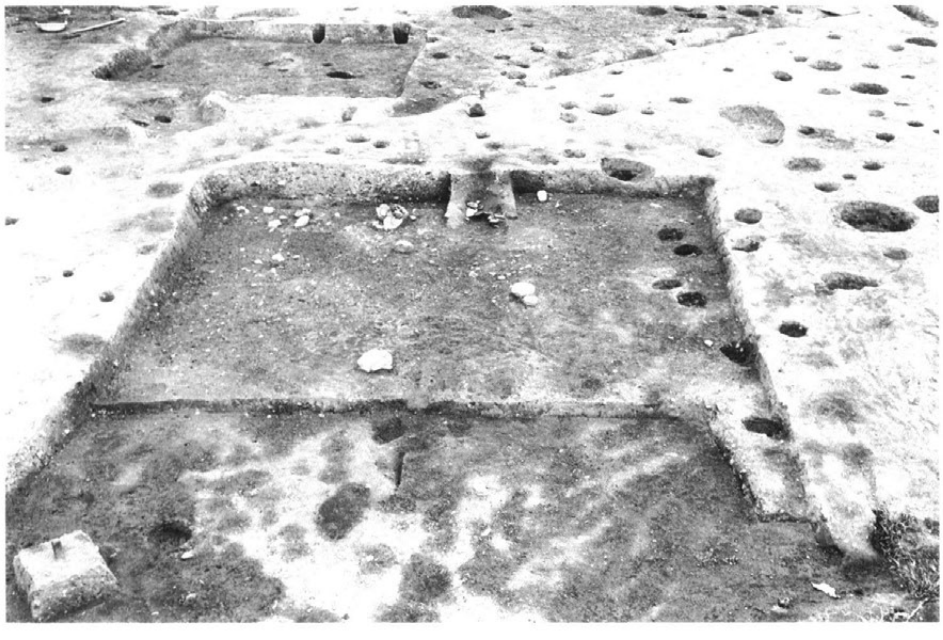
上：SB23
右：SB23（カマド側から）
左：SB23 カマド
下：SB23 遺　物

図版 10

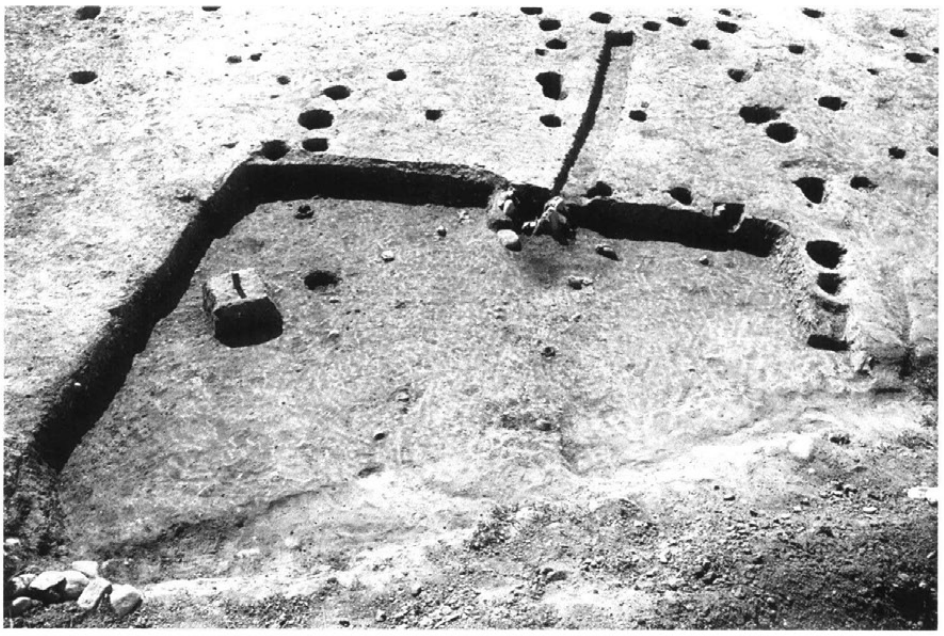


SB24

SB25



SB26



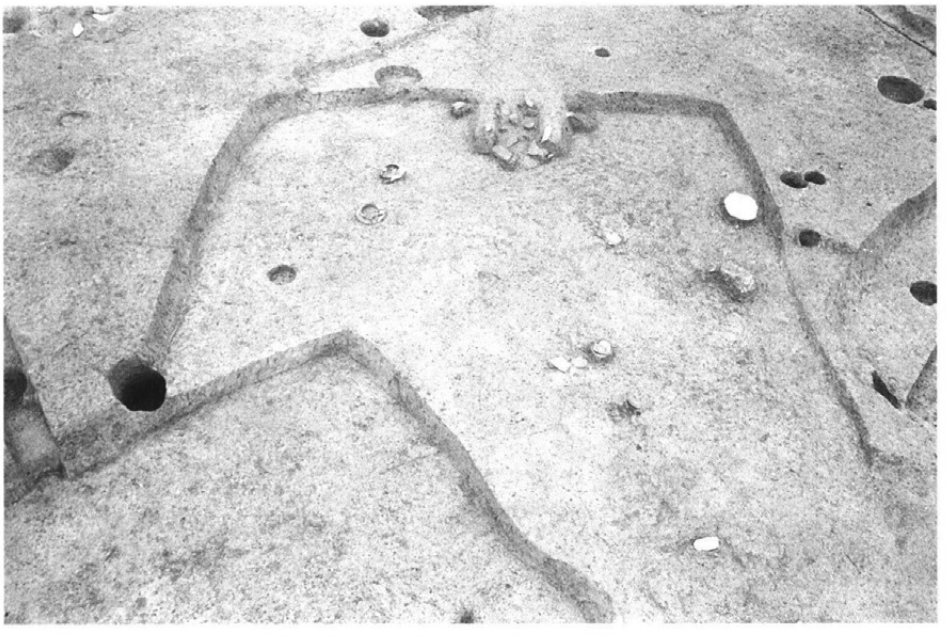
SB27

SB28

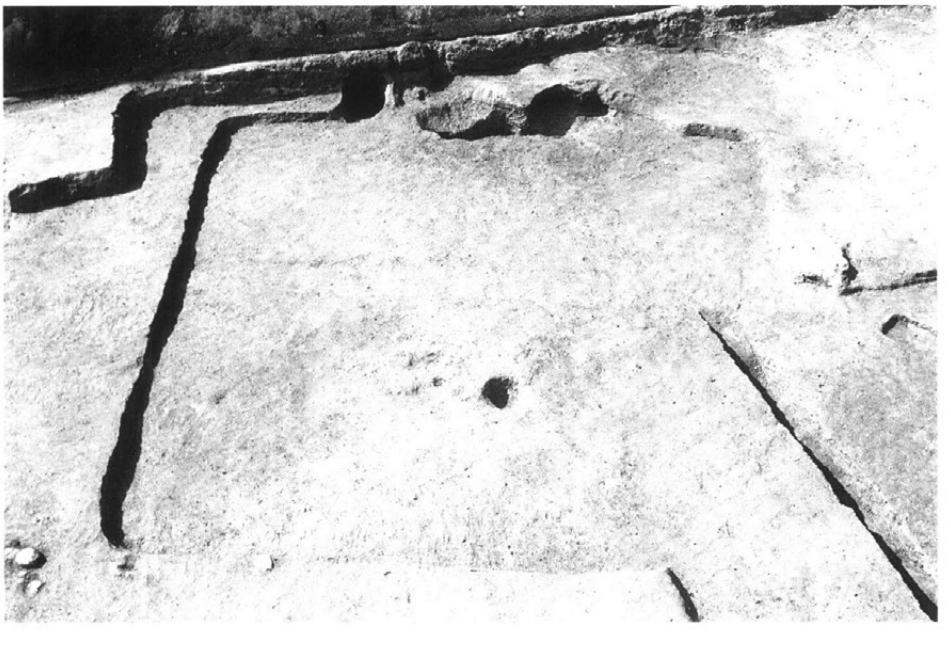
SB29

図版 12

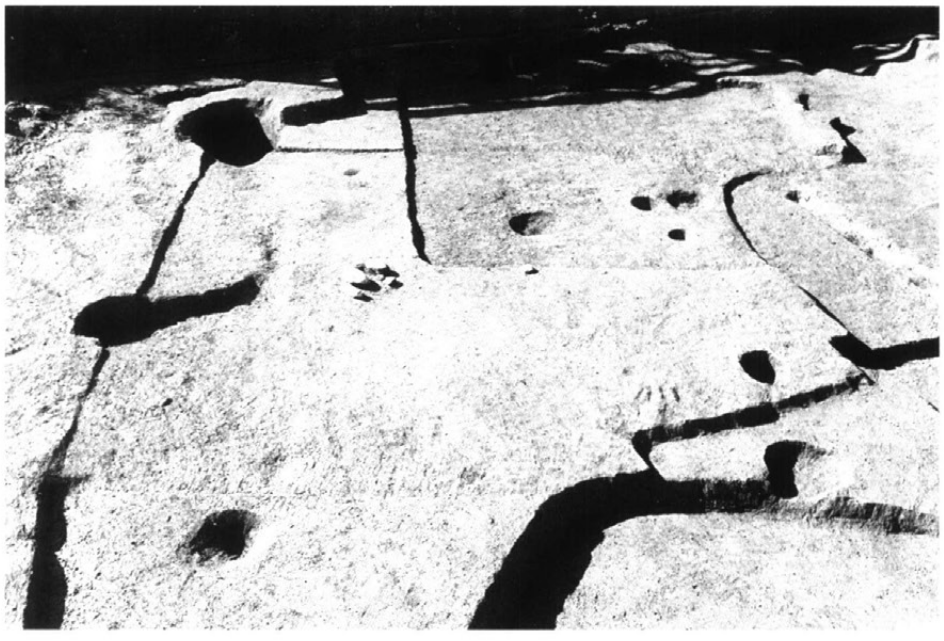
SB31



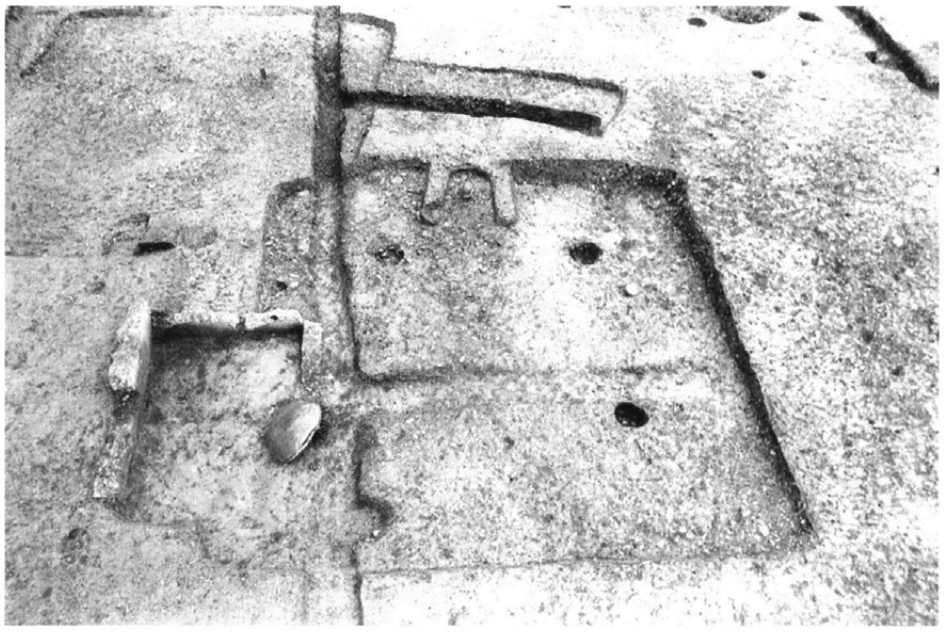
SB33



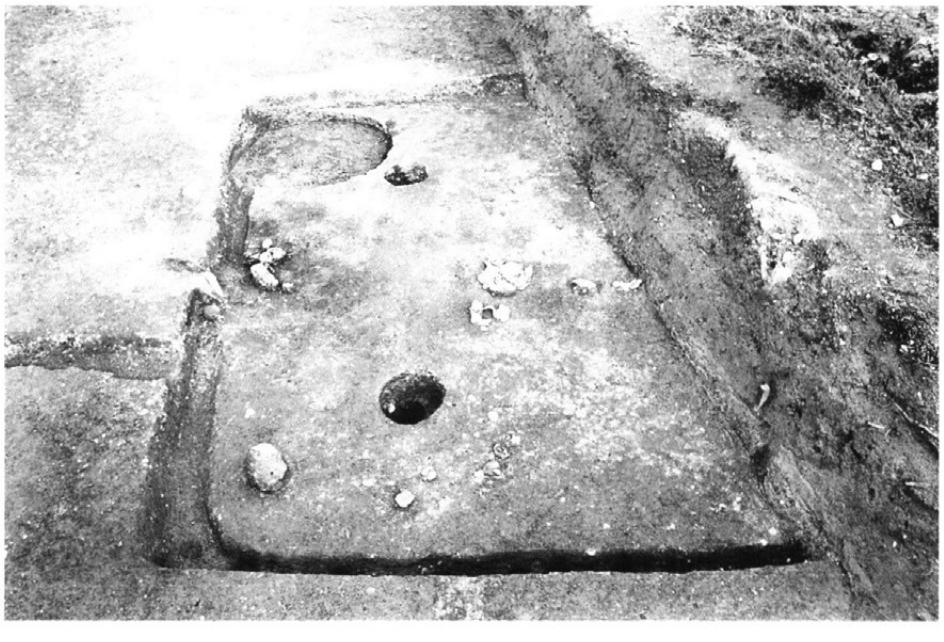
SB36



SB39

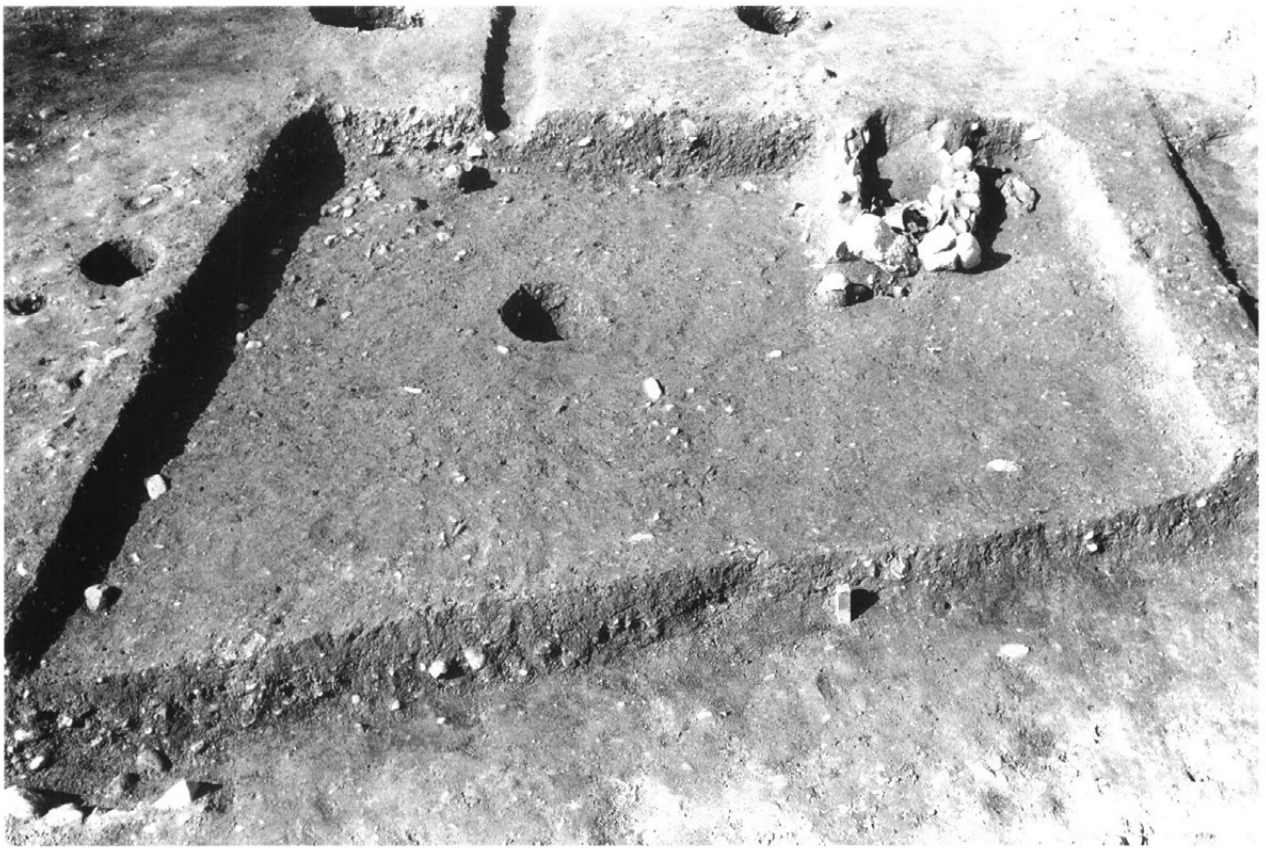


SB41

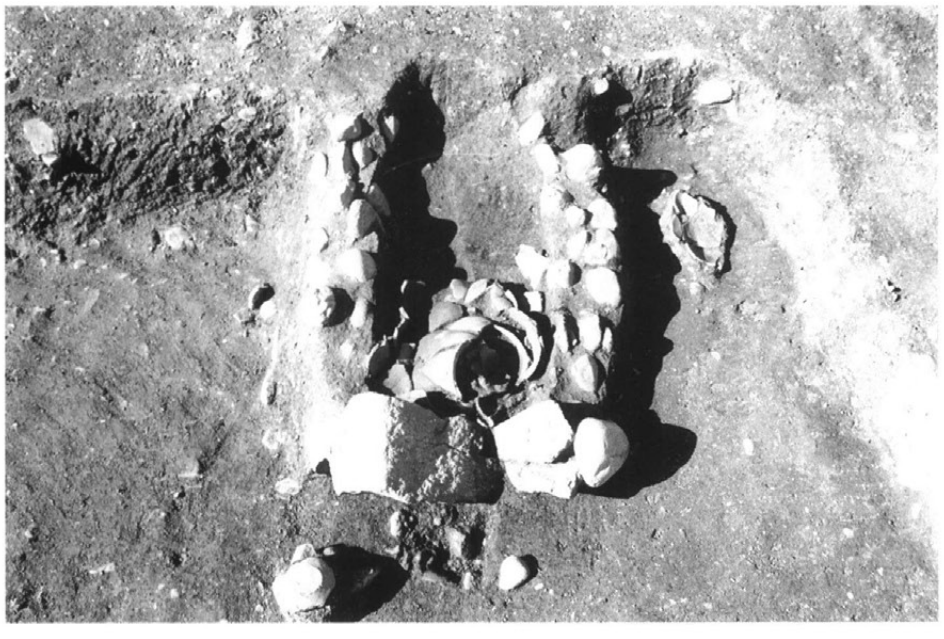


SB42

図版 14



SB44

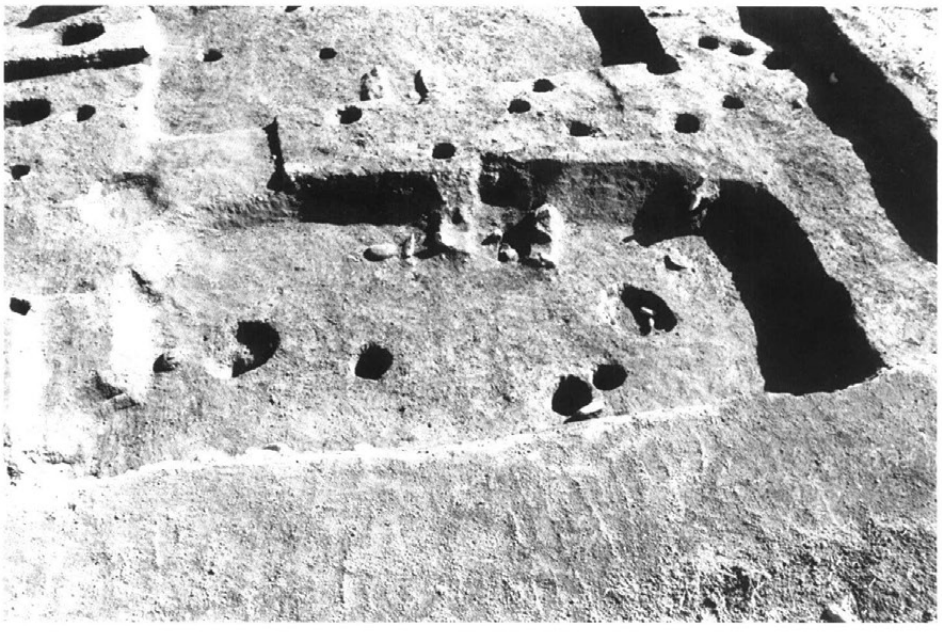


SB44 カ マ ド

左：SB44 カマド芯材
右：同　上

SB46

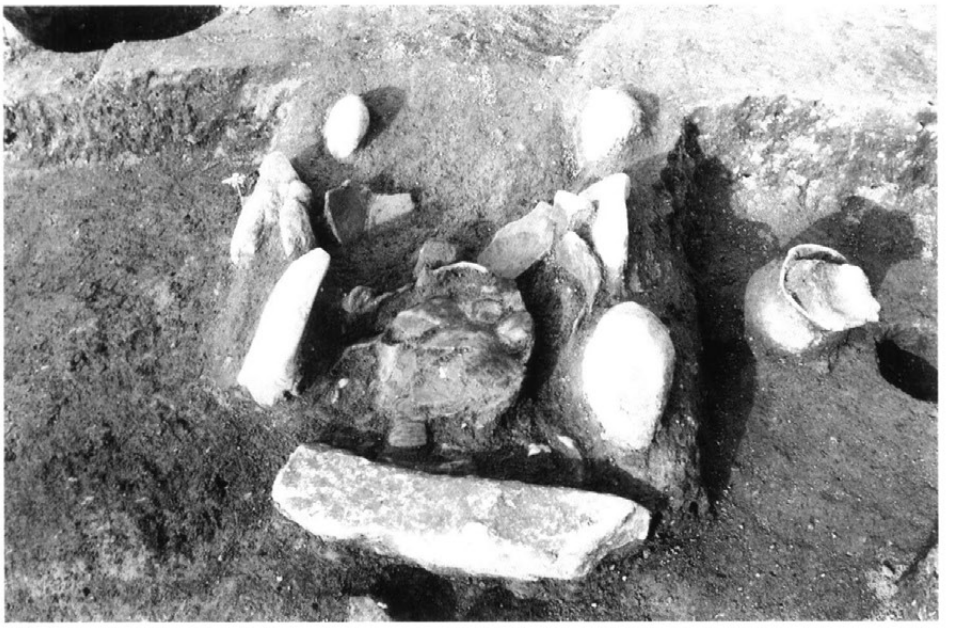
SB47



SB50

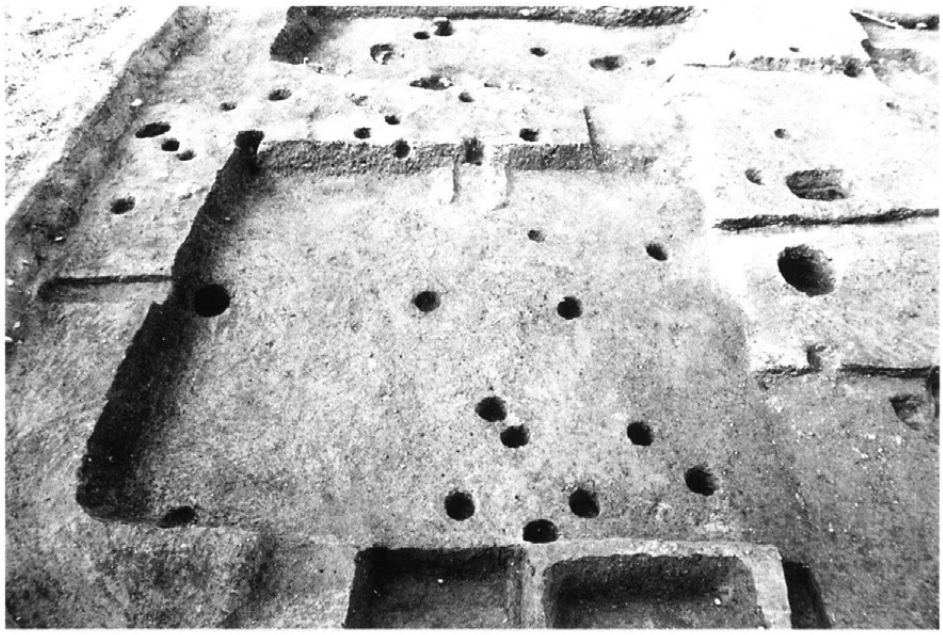
図版 16

SB51

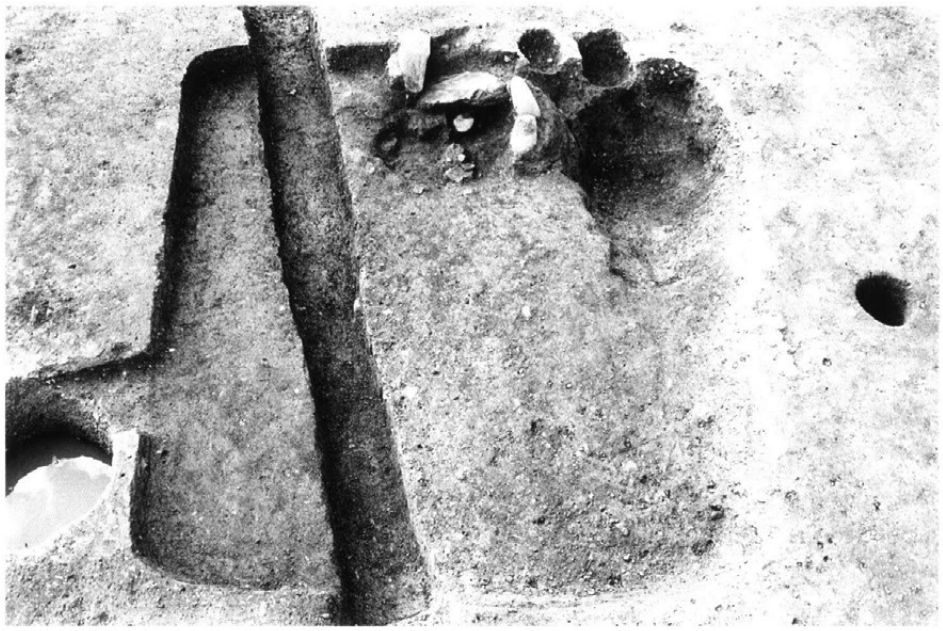


SB51 カ マ ド

左：SB51 カマド完掘
右：SB51 貯 蔵 穴



SB52

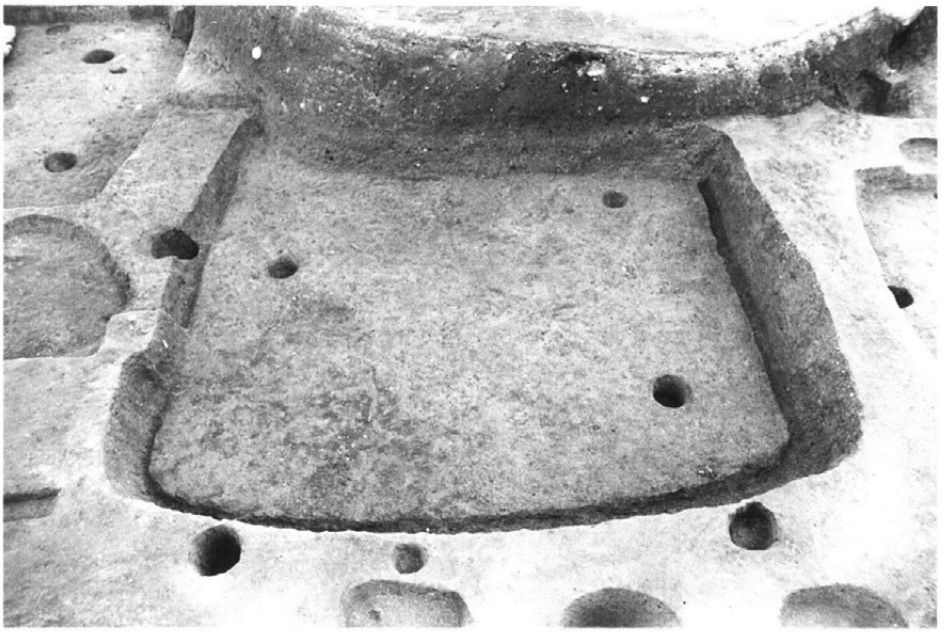


SB53

SB52 カ マ ド

SB53 カ マ ド

図版 18



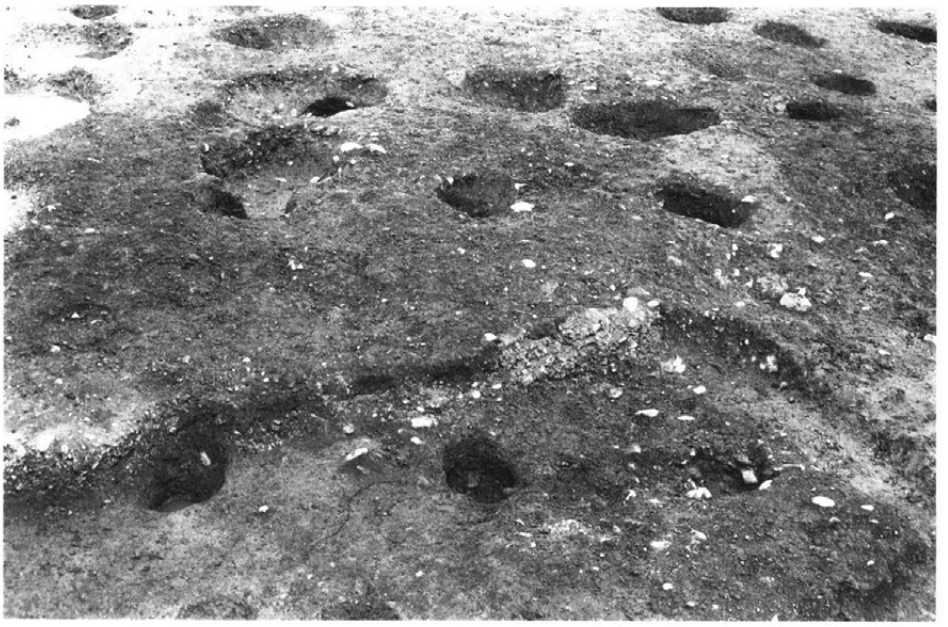
SB54

SB55

SB58

ST01

ST02



ST03

図版 20

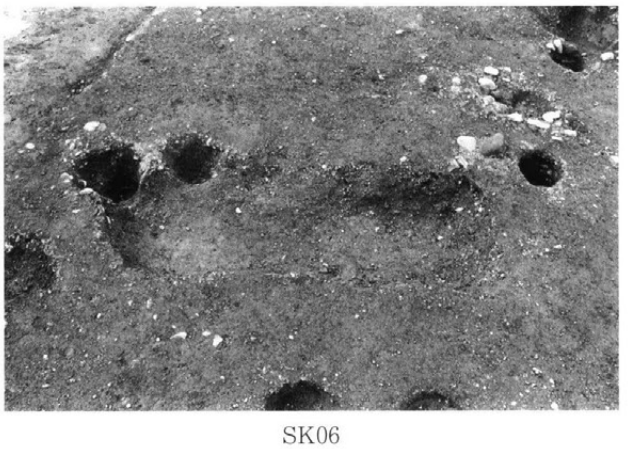
SK01

SK02

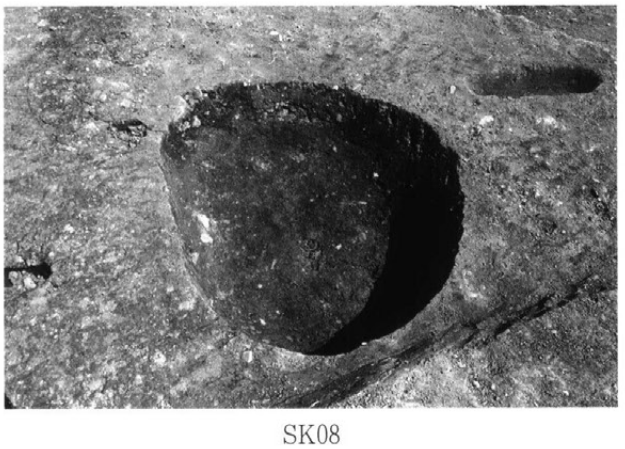
SK03

SK04

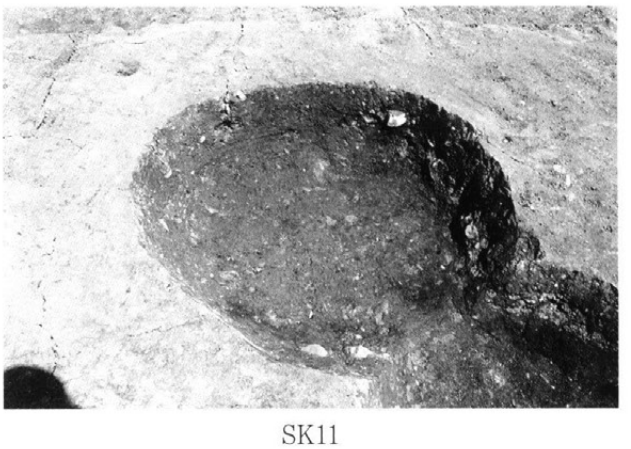
SK05



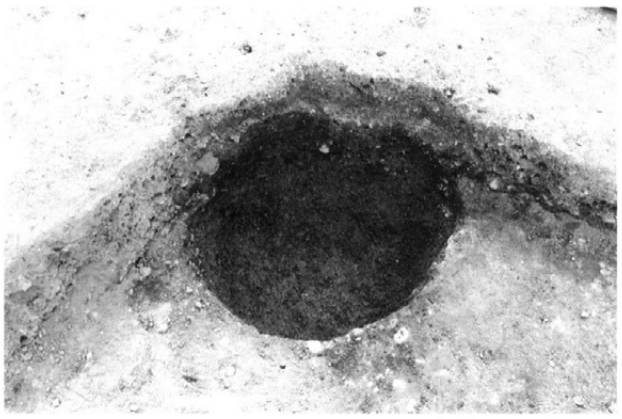
SK06



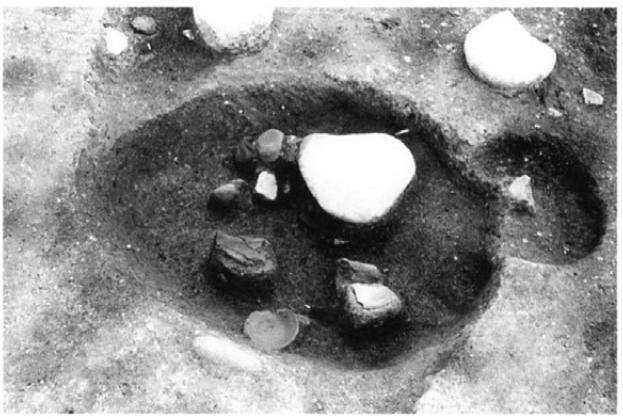
SK08



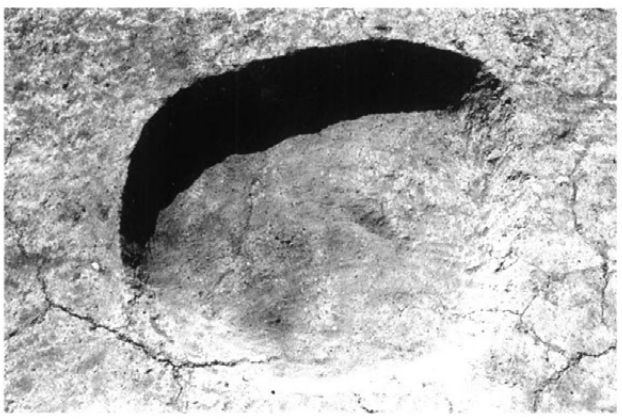
SK11



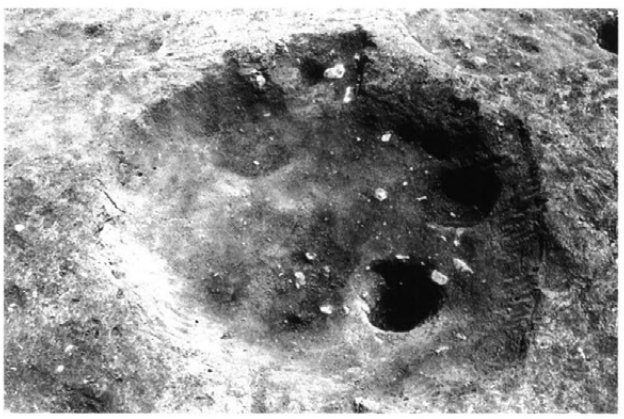
SK14



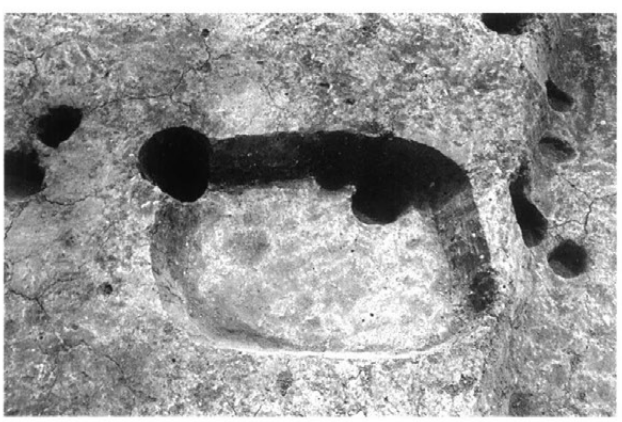
SK15



SK17



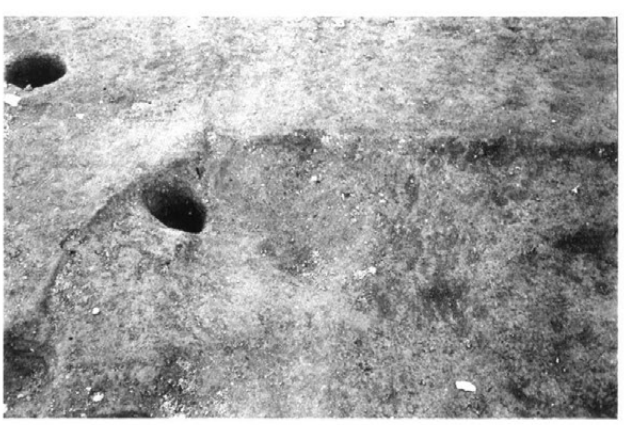
SK18



SK19

SK23

SK26

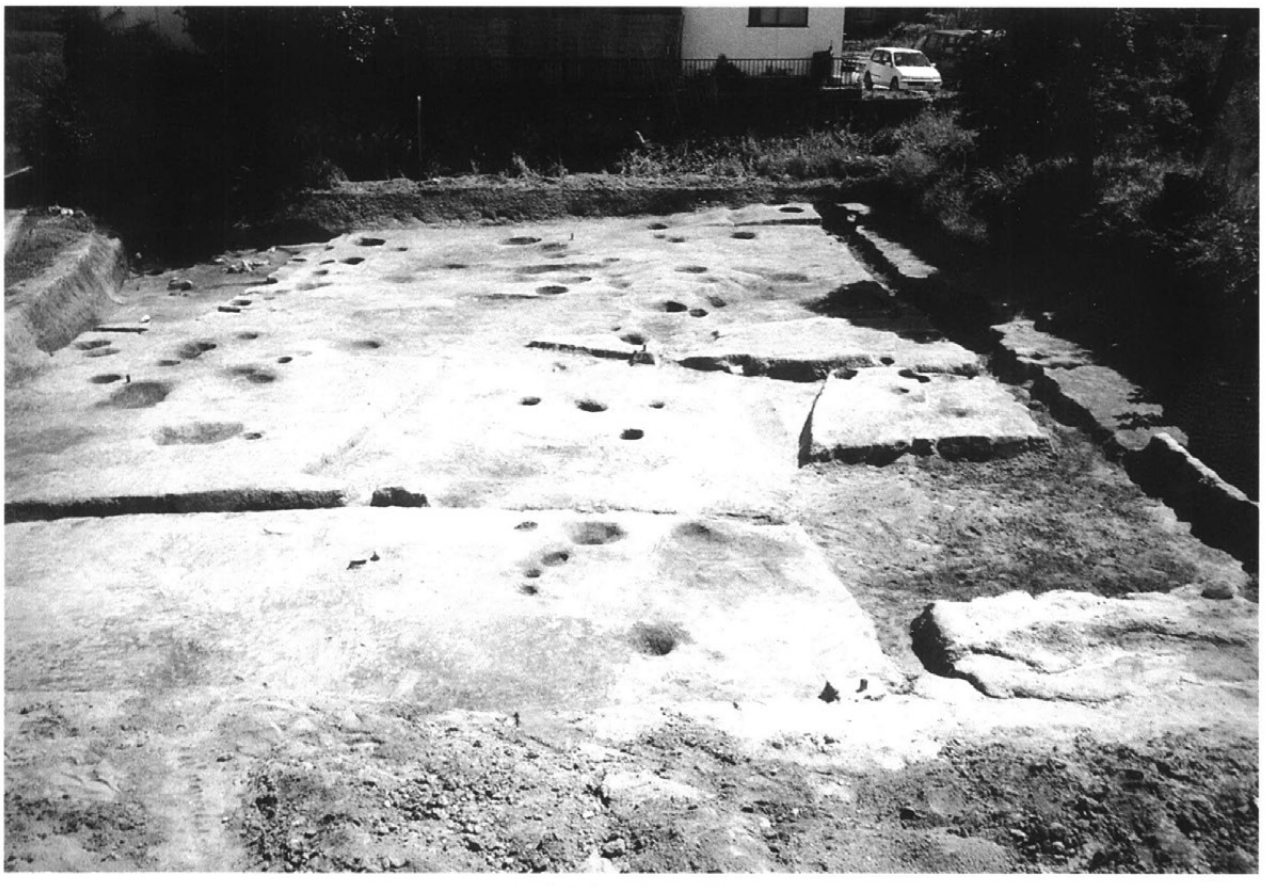


SK27

図版 22

調査区スナップ 1

調査区スナップ 2



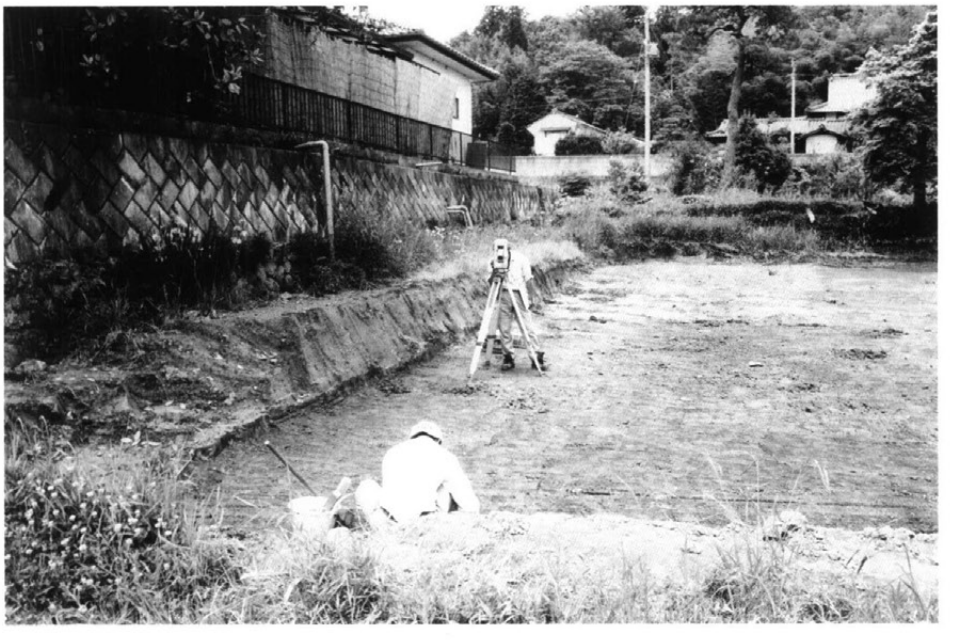
調査区スナップ 3

調査区スナップ 4

図版 24

重機作業風景

調査作業風景



基準点測量風景

留々女遺跡現況 1

留々女遺跡現況 2

SB23　出 土 遺 物

SB23　出 土 遺 物

SB01　出 土 遺 物

SB10　出 土 遺 物

SB22　出 土 遺 物

SB42　出 土 遺 物

SB44　出 土 遺 物

SB54　出 土 遺 物

SB55　出 土 遺 物

SB58　出 土 遺 物

SB02　出 土 遺 物

SB03　出 土 遺 物

SB04　出 土 遺 物

SB06　出 土 遺 物

SB06　出 土 遺 物

SB06　カ マ ド 支 脚

SB07　出 土 遺 物

SB07　時 期 外 遺 物

SB08　出 土 遺 物

SB11　出 土 遺 物

SB12　出 土 遺 物

SB13　出 土 遺 物

図版 34

SB17　出 土 遺 物

SB19　出 土 遺 物

SB23　時 期 外 遺 物

SB25　出 土 遺 物

SB26　出 土 遺 物

SB27　出 土 遺 物

SB28　出 土 遺 物

SB28　出 土 遺 物

SB31　出 土 遺 物

SB33　出 土 遺 物

SB34　出 土 遺 物

SB35　出 土 遺 物

SB37　出 土 遺 物

SB38　出 土 遺 物

SB41　出 土 遺 物

SB46　出 土 遺 物

SB46　出 土 遺 物

SB49　出 土 遺 物

SB50　出 土 遺 物

SB51　出 土 遺 物

SB51　出 土 遺 物

SB52　出 土 遺 物

SB53　出 土 遺 物

SB54　出 土 遺 物

SB57　出 土 遺 物

SB59　出 土 遺 物

SK01　出 土 遺 物

SK05　出 土 遺 物

SK07　出 土 遺 物

SK08　出 土 遺 物

SK14　出 土 遺 物

SK15　出 土 遺 物

SK27　出 土 遺 物

遺構外古墳時代遺物

遺構外平安時代遺物

遺 構 外 中 世 遺 物

遺構外出土小型器台

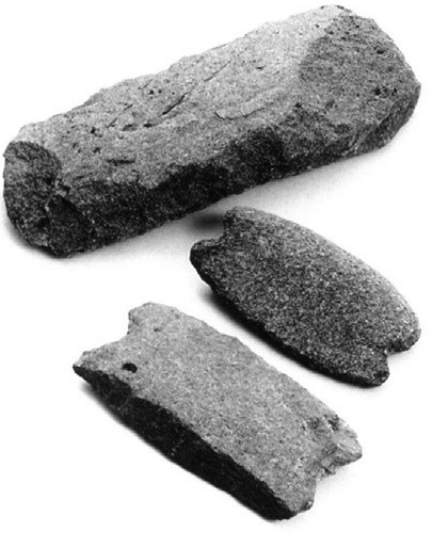
SB17　出土紡錘車

SB44　出土紡錘車

SB54　出土紡錘車

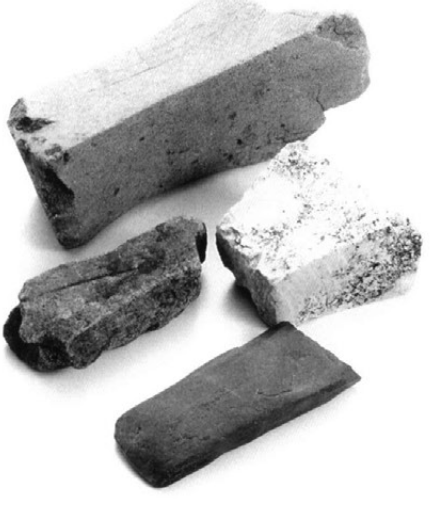
遺構外出土紡錘車

遺構外出土土製玉



SB04　出土石器

住居址出土石器



住居址出土砥石

遺構外出土砥石

住居址他出土石鏃

遺構外出土石鍬

SB34 出土石製模造品

SB42 出 土 臼 玉

SB25 出 土 刀 子

SB33 出 土 鎌

遺構外出土帯金具

遺構外出土雁股鏃

報　告　書　抄　録

ふりがな	どどめいせき
書名	留々女遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	伊藤尚志
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395-0002　長野県飯田市上郷飯沼3145番地　☎0265-53-4545
発行年月日	西暦2003年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 名所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
どどめいせき 留々女遺跡	いいだしかわじ 飯田市川路	20205	410 川 13	35度 26分 57秒	137度 48分 56秒	平成10年 9月28日 ～ 平成11年 12月22日	4,000㎡	治水対策事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
留々女遺跡	集落址	古墳時代 平安時代 中世	竪穴住居址 方形竪穴 掘立柱建物址 土坑	古墳時代 土師器・須恵器 平安時代 土師器・須恵器・灰釉陶器 中世 陶器	天竜川氾濫原際低位段階で古墳時代・平安時代の大きい集落を確認

留々女遺跡

2003年3月28日 発行

編集・発行　長野県飯田市上郷飯沼3145番地
飯田市教育委員会

印　　刷　有限会社　発　光　堂